1996年7月1日発行(毎月1日発行)通巻第二十三号 1995年3月13日第三種郵便物認可

JAPANESE ROCK NEWSMEDIA

J-ROCK magazine

8
400YEN
Volume 15
AUGUST 1996
月刊ジェイロックマガジン

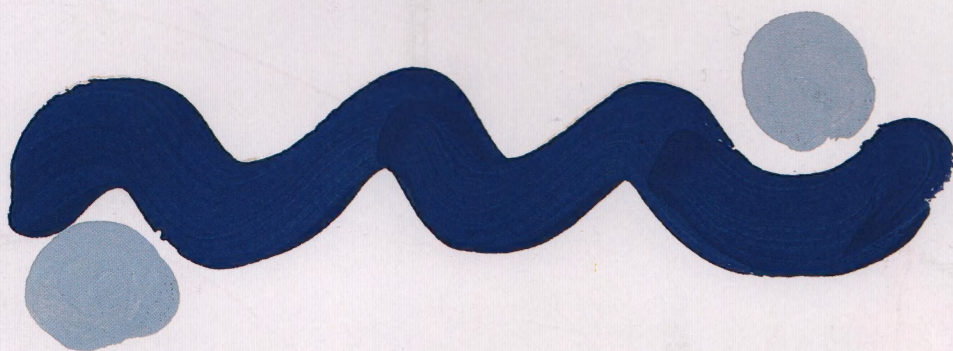
黒夢

TAK MATSUMOTO/B'z

THE YELLOW MONKEY

FEATURE：企画アルバム検証

奥田 民生
SUPER JUNKY MONKEY
FEEL SO BAD
LA'CRYMA CHRISTI
kyo
CASCADE
modern grey

GLAY
SPITZ

とにかく楽しけりゃイイ！気持ちいい音出したい！カッコいい事やりたい！
と思っている愛すべきロッカー達をサポートするレーベルとして誕生。

RELEASE SCHEDULE

第1弾!

好評発売中　GLAD all OVER／Rebirth

"Rebirth"中の"Miss Lover Days"が
音楽クイズ番組「ロックス」(関西テレビ 土曜日
25:15〜45放送)6月のマンスリーテーマとしてオン・エア中!!

第2弾!

8月発売予定　SHADOW TRAP OF MIRRORS／KISS

発売前先行通販!!
7月25日までにCD代金を指定口座へ振込んで頂くと、
発売日前までにお手元にお届けできます。

第3弾!

9月末発売予定　超大物インディーズバンド

この後も続々リリースの予定!!　第4弾はアナタかも知れない…。

サンプルカセットプレゼント!!
上記両バンドのライブ当日、会場にてアンケートにお答えして頂いた方先着100名の方にサンプルカセットを無料配布いたします!

＜通販申込方法(通販特典有り)＞

郵便局備え付けの郵便振込用紙(青色用紙)の所定の欄にあなたの住所・氏名を記入し、通信欄に次の事項を明記し、代金￥2,000+返信手数料￥500(但し、複数枚希望される場合は枚数分必要)を添えて申し込んで下さい。

通信欄記入事項　1・アーティスト名　2・タイトル名　3・希望枚数
振込先　振込口座番号：00960-9-16122　加入者名：ブレイクラッシュレコーズ

★必要事項に漏れがある場合、商品を発送できませんのでご注意願います。　★到着は、お申込み後、約10日前後となりますのでご了承下さい。

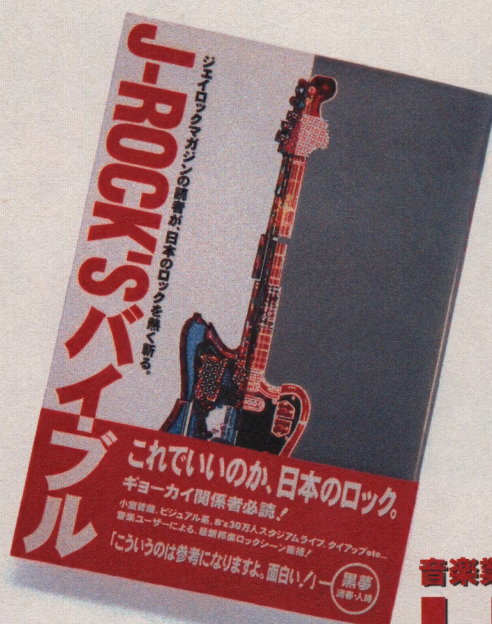
ブレイクラッシュレコーズでは今、このコンセプトに賛同できる、エネルギッシュなアーティスト(バンド、個人を問わず)を募集しております。我こそはと思われる方は下記宛まで、写真・プロフィール・デモテープ(CD、DATも可)をお送り下さい。

ブレイクラッシュレコーズ

■ 商品・アーティスト等の詳しい問い合わせ先：ブレイクラッシュレコーズ
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 7F　TEL 06-212-3435　FAX 06-213-7855

インターネットでも情報提供しています。　アクセスコード http://www.J-ROCK.COM

J-ROCK PRESENTS J-ROCK PRESENTS J-ROCK PRESENTS J-ROCK PRES

「こういうのは参考になりますよ。面白い!」黒夢

TRIBUNE 単行本化

「ジェイロック・バイブル」

好評発売中

定価1300円（税込）

◎A5判サイズ◎モノクロ ◎208頁

ISDN4-916019-01-6 C0073 P1300E

音楽業界関係者必読!!

J-ROCK'sバイブル

ジェイロックマガジンの人気コーナーTRIBUNEの単行本化。95年度('95/4~'96/3)のJロックトピックスを振り返りながら、掲載されなかった多くの過激発言を含め、フリーク達の熱い声をテーマ別に再構成。音楽ユーザーの目から見た今の邦楽シーンを示す、まったく新しい音楽本です。業界就業者の方も、きっと刺激されるはず…。

●お近くの書店にない場合は、郵便局備え付けのブルーの振込用紙に、住所・氏名・電話番号およびご希望の書名を記入の上、定価+送料（1冊につき310円）を右記口座までお振り込み下さい。 口座番号:00980-1-51829 加入者名:(株)ジェイロックマガジン社

お問い合わせ (株)ジェイロックマガジン社 〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8MACビル8F TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1731

CONTENTS

J-ROCK magazine

8 AUGUST 1996

COVER ARTIST
黒夢

COVER PHOTOGRAPHER
MAKOTO KANEHARA

EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
TOMOYUKI OHNISHI

8月号 ©ジェイロックマガジン社
1996年7月1日発行（毎月1日発行）通巻第二三号
発行：株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
PHONE:06-214-1751／FAX:06-214-1761
印刷・製本：株式会社大伸社
発行人：辻村和周　編集人：里居正裕

アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. ルーツ（ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている）
2. 実力（歌唱または演奏力がある。声に魅力がある）
3. クリエイティビティ（作詞・作曲能力に優れている）
4. パフォーマンス（カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい）
5. 生き様（芸能人、タレント化していない）

以上の5項目を有していれば、当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

黒 KUROYUME 夢

INTERVIEWER = AKIRA NISHIHARA

PHOTOGRAPHER = MAKOTO KANEHARA

STYLIST = KYOHEI OGAWA

HAIR & MAKE UP = KIKUE KAWABE

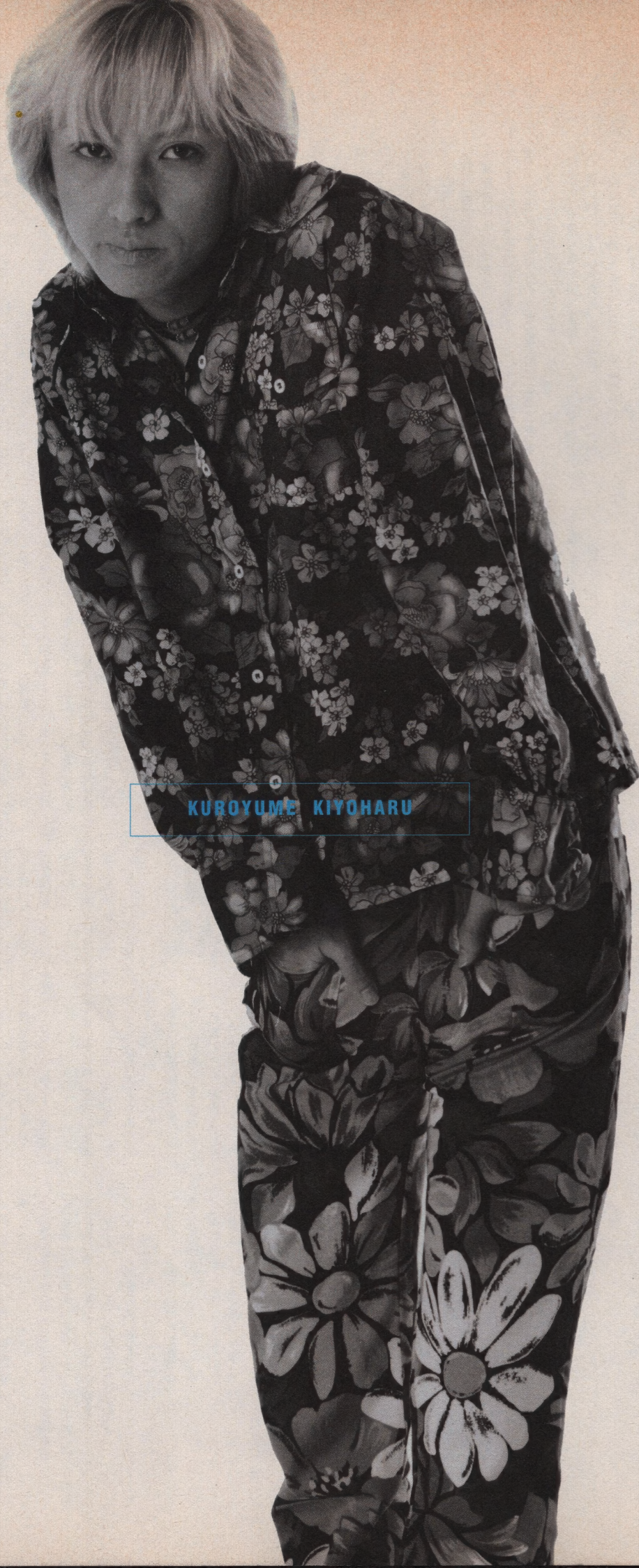
KUROYUME ARE KIYOHARU & HITOKI

自分たちを、“FAKE STAR（偽物のスター）”と呼び捨てることで、日本のロックシーンにはびこる“TRUE FAKE（ホントの偽物）”たちを皮肉いっぱいに笑い飛ばす黒夢。奴等は「そんなやり方してるクズが本物だって認められる世の中なら、俺達は偽物って呼ばれた方がなんぼかマシ」とでも言いたげだ。

無意味なお友達感覚に正面からツバを吐いてしまう“嫌悪”、どんな音楽でも自分たちがやれば黒夢の音になるって“自信”、何をやるのも一番にやりたいという“欲望”。そんな黒夢の生き方と存在は、今一番ロックというものを集約していると言えるかもしれない。

清春と人時が、最新直情型アルバム『FAKE STAR』を武器に、そのあふれる嫌悪と自信と欲望を、トゲだらけの言葉で語る。すぐに頭に来そうな自称ホンモノのあなたはぜひ感情のウォームアップを…

KUROYUME KIYOHARU

はやってたら、めちゃくちゃキャッチーなことをするのもロック

●ヒット作、『feminism』の後だけに、今回のアルバム『FAKE STAR』は制作をスタートする時に、プレッシャー…っていうと清春君は認められないかもしれないけど(笑)、胸に秘めるものがあったと思うんだけど。

清春(Vo、以下K):いやあ、やっぱりプレッシャーっていうのはありましたよ。内容はともかく、1位にならなきゃって。

●内容はともかくって、そんな(笑)。

K:あくまでも極端な話ですよ(笑)。だけど、二人ともハードにしようというのはあったし、もちろん後から売れ枚数もついてくる方がいいんだけど、シングルも三つ入ってるってことで、逆に他の内容はそんなに気にしてなかった。ただ、「『feminism』と違うものを作ろう、反対のものを作ろう」という気持ちはあったね。

●音も詞も激しい方向に行ったのは、心情的に怒りとかそういうものがあったから?

K:う〜ん、詞は怒りっていうよりも面白がってる感じ。本当に怒ってたらアイロニカル(皮肉)な部分があんまり入らなかったと思うし、超皮肉めいて露骨に書いてるんだけど、ギャグじゃなくて面白く書いたっていう感じかな。特に「BARTER」とか「FAKE STAR」とか「REASON OF MYSELF」とかはね。怒ってるのは、あんまりないね。結局怒ってるっていうのは、勝てないから怒るわけじゃない。だけど僕らはいつか必ず勝ちましょうと。そのビジョンもそんなに遠くにないものだから「ほうら、こうなった」って言える時の前準備って感じ(笑)。

●清春君は今までも思ったことズバズバ言ってるんで、それこそ敵が多いと思うんだけど、こんな詞を歌うことでさらに自分の立場が危険になるとか、そういうことは思わなかったのかなあ(笑)。

K:あまり…思わなかったっすねえ。っていうか、他のバンドと妙に仲良しでもね。例えばテレビ番組とかで一緒になった時に、先輩バンドや先に出るバンドにあいさつしに行かなきゃいけないとかいうのはヤで、絶対行かないですからね。敵というか、何かもっと広い意味でとらえられたらなあといつも思ってて。この間の大阪のイベントみたいに、宇崎竜童さんもいて、ビリーブもいて、全然知らないバンドもいてっていう中の黒夢ならいいんだけど、多少の差はあるにしても一般の子たちがとらえるバンド系とかお化粧系とかビジュアル系の中で、仲良くしても何かつまんないなあっていうか。なんかヤダなあっていうか(笑)。

●敵を作ってやろうみたいな気持ちがあるわけじゃなくて、仲良くなるために気を使って言いたいことを言わないのは健康に悪いと(笑)。

K:結局そういうことに気を使ってる人の作品とか、インタビューとか、ライブのMCとかって、上限があってすごくつまんないんですよね。見ててドキドキしないから。例えば僕らがデビューしてしばらくして髪の毛切って普通っぽくなった。で、みんなも普通っぽくなってきたりして、すごいお化粧してる人達から普通っぽい格好してる人達まで全部ひとくくりでビジュアル系ってなったとすると、またそこからはみ出るのが楽しいし。ロックってきっと、今何かがあればそれからはみ出たり壊したり、壊してまた出来ちゃったらそれを壊したりとか。あと、ドキドキするものだったりしてね。ロックってジャンルとかじゃないと思うんですよね。

●まあ、確かにロックって反体制的なものだから。

K:うん。すごいガンガンのロックがはやってたら、めちゃくちゃキャッチーなことをして「どうだあ〜」って言うのもロックだと思うんだよね。だから結果的に敵を増やしてるのは、単純につまんないからで。要は同じぐらいのタケノコが立ってて、それのつぶしあいなんてイヤだなあと。

●そんなことでつぶれてしまう黒夢だったら、そこまでのものだったというような割り切りもあるわけ？　当然そこには自信があるんだと思うんだけど。

K:っていうか(笑)僕がしゃべってること読んでむかつく人がいたら、きっとその人に当てはまってるってことなんだよね。むかつく時点で負けてることだから。むかつかれる時点でこっちが勝ってるってことだから。もうあんまり気にしないね。気にしないっていうか、慣れちゃった(笑)。

●うちの読者の中でも黒夢への反応ってすごく両極端なんだよな。

K:あんなものはロックじゃないとか?

●っていうのもあるし、やっぱり清春君が言ったように、ブチ壊していくもの、常に一番最初っていうことでやってる黒夢がロックらしいんだっていう意見もあるし。全く中途半端な意見がない。

K:それうれしいな。

●だから確かに貴重な存在だと思う(笑)。

K:そうですね。昔からよく言うけど、やっぱり毒か薬かだよね。

●それ以外にはどこまで危険を冒すかというヤジウマみたいな人達もいるかな。「もっとやれ〜!」みたいな(笑)。

K:自分達では危険と思ってないからね。表現の自由っていうのがあって、何してもいいんだなって思うし。ほら最近芸能ネタの暴露本とかよく出てるじゃないですか。あれってやられてる方には問題で、やってる方には勇気がいるのかもしれないけど、みんなが一応注目するじゃない？　売れるから話題になるわけで、裁判したら表現の自由だってことで書いた方が勝つってのと同じ。だからそんなに気にすることもないし、気にしてたら何も出来ないなあっていう。本音で書きたいことがあって書けない方が、ロックじゃないと思うからね。(Jロックマガジン7月号トリビューンのページを眺めながら) Jロックマガジンの読者には、僕がこうやって言ってることを、実際に分かってくれる子がいてうれしいよね。

KUROYUME KIYOHARU

●最近ね、今まで黒夢がやってきたメイクだとか清春君のボーカルスタイルだとかをマネるだけじゃなしに、"思ったことを言ってます"っていうポーズを売りにしようとしてる人達が出てきてることを、僕は悲劇的に感じるんだけど(笑)。

K:まあ、マネしてる当人が言うにしろ言わないにしろ、良いと思ってるからマネすると思うんだよね。僕らもマネされたらまた違う方向に行くかもしれないし。

●マネされるってことはやっぱり快感なわけ。

K:そのマネしてる人達のファンの子で、「ああ、黒夢のマネだ」とか、黒夢のファンの子が「あのバンドもいいなあ」って行くとか、マネしてるっていうのが分かってる子はいいですよ。でも、そのバンドを初めて見て、後から黒夢を見て「黒夢がマネしてる」って言われるのはイヤ。とんでもない(笑)。だからね、僕らはやりたいことやってるだけなんだけど、それで実績がなかったらホントに遠吠えだと思うんですよね。だけど、それはちゃんと一歩一歩来てるから。有言実行って感じで。

●これでやることやれてなかったら無様だもんね。

K:そうだよね(笑)。だからやっぱり不言実行か有言実行のどちらかがいいんじゃないかなと。

●じゃあ、アルバムの具体的な話を聞きたいんだけど、アルバムの曲の間にSE(サウンド・エフェクト=効果音)が結構入ってるでしょ。アルバムにストーリーやコンセプト感を持たせたかったからこういう手法を取ったのかな。

K:最初はね、人時くんが「やろう」って言い出して。で、僕はプリンスとかジグジグスパトニックとかがこういうことをやってるのを知ってたんだけど、彼はプリンスとか聴いたことがなかったんで「まあ、いいんじゃない」ってことで始まって。まあ、場面転換とか、耳休めとか、あとアルバム全体を短く感じさせるいい休憩地点っていうか。

●リズムを崩さない休憩地点って感じ。

K:あと、アルバムをブロックブロックに分けたいっていうのもあったりして。

●曲の中でもノイズの存在っていうのが耳に入ってきてね。ボーカル、ベース、ドラム、ノイズみたいな形が、ロック=ギターという既成概念を笑い飛ばしてて痛快でね(笑)。

K:っていうか、黒夢にはボーカルとベースしかいませんからね(笑)。ギターに変に味があったり、弾きまくったりするのはちょっとねえ。それじゃあ見た目と音が違いすぎるっしょ。

●もうギターなんてなくてもいいとさえ思える音だよね。

K:ギターは多分シーケンスとかサンプリングでもいけると思うし。ライブではいた方がいいなと思うくらいで、ギターのことってあんまり考えてないですもんね。お互いベースラインと歌メロ考えるじゃないですか。そこにギターってあんまり考えてないですもん。もうすき間を飾るものでしかない。あと、僕の声質もあるんですけど、ボーカルとベースだから彼がどれだけ弾きまくっても、音質的にぶつからないんですよ。もしボーカルとギターだけのユニットだったら、ボーカルとギターが戦う場合があるけど、戦わなくて

ガンガンのロックが

いい。だからそれは良かったなあって。

●さっき曲をブロックに分けたかったっていう話があったけど、それはどういう意図で?

K:曲調が合ってるとかそういうことじゃなくて、曲はトータルで13曲入ってるじゃないですか。聴いてて疲れるアルバムも良くないなあって。で、まあ一部・二部・三部じゃないですけど、やっぱ人間が集中出来る時間ってだいたい決まってるらしいんですよね。今回収録数多いし、まあいつも多いですけど。

●ちょっと心理的な計算もあると。

K:いや、計算っていうよりも、ただ単に二人で後からエディットする時に「ああ、ここはいいんじゃない」っていう程度だったけど、後から自分達で聴いてみると「あっ、短く感じるね」っていう。ライブでもこのSEを有効に使いたいね。

●曲の並びを決めるのはかなり難航したの?

K:したした。何回かやり直して。ロック的なカッコ良さも商業的な部分も、あと聴感的な部分も、一応全部考えた上で、自分達だともう客観的になれないから、周りの人に聴かせたりして選んだんですけどね。

●「SEE YOU」はシングルとしてリリースされた時に、そのタイミングもあって、卒業の歌っていうコメントがあったでしょ。僕はこのアルバムの流れで聴くと「FAKE STAR」とか「BARTER」の後なんで、卒業は卒業だけど、黒夢が頭の固いファンにさよならを言ってるようなそんな印象を勝手に持った(笑)。何か新しい意味がここにあることで出てきたなあ。

K:「SEE YOU」を出した時にねえ、「この曲を聴いてやっとふっ切れました。もうファン止めます」って手紙も来たんですよ。だからいろんなとらえられ方があるなあってことで。でもそれって面白い意見(笑)。

●「REASON OF MYSELF」って曲はレゲエタッチで、一つの新しい味って感じなんだけど、清春君はこういうレゲエとか以前あったスカとか、その手の音楽って結構好きなの。

K:いやあ、もう全然知らない。

●じゃあ、レゲエがどうのっていうのは清春君の中では関係ないわけ?

K:この曲ってテープもらった時に仮タイトルが〝レゲエ〟だったんですよ。で、単純に「レゲエなんだろうな」と思ってたんだけど(笑)、レゲエって言うと僕も人時も〝ン・チャッ・ン・チャッ〟っていうのしか知らないからね。一瞬はレゲエの曲でも聴いてみようかなっていう気もあったんですけど、僕、人のCD聴くの大嫌いで(笑)。好きなCD以外ね。レゲエっていうのは、ゼルダのサヨコさんが「上を向いて歩こう」をレゲエ調でカバーしてたじゃないですか。あれぐらいしか知らないんですよね。

「REASON OF MYSELF」にしても、「Cool Girl」にしても、人時くんは僕が歌つけるっていう前提で「これぐらいやっても大丈夫だな」っていうのを作ってくるんです。要は歌で直すっていうか、歌で黒夢になるからみたいなのをね。だから僕なりにレゲエなんだけど、曲が終わるころにはレゲエってことを忘れるぐらいな歌にしたかったんですね。

●レゲエってレイドバックした音楽っていう印象があるけど、それに「不埒(ふらち)な犠牲について迷っている」という赤裸々な苦悩の詞が乗ってる意外さが、レゲエに対するいい意味での関心のなさなのかなあと(笑)。

K:(笑)そうですね。関心っていうか、例えばレゲエってあくまでもジャマイカとかで出来た音楽なわけで、それを「自分達のものだ、本物だ」って錯覚しちゃうのは、僕の中ではダサいんだよね。他の曲もそうで、ロックンロールをやったとして、「俺が本物だ」というのはダサい。まあ、タイトルも「FAKE STAR」だし、しょせん日本人だしね。だから黒夢にとって一番大事なのって、二人の音の、ベースラインとメロディーが黒夢らしければそれでいい。最初に人時くんがレゲエ調とかロックンロール調とか持って来ても、それは材料にしかすぎなくて。だから自分達でネタふって自分達で作ってるようなもんですね。でも、「REASON OF MYSELF」は僕すごい気に入ってるよ。

●次はボーカリストとしての話を。詞は怖い者知らずでたてついてるのと、セックスソングで衝動むき出しでしょ。その影響か、ボーカルの面でも生々しさとか鋭さが増したっていうのをつくづく感じたんだけど。

K:ボーカルのレコーディングに関して言えば、「feminism」の方が断然細かいし、歌う時間もたくさんあったし。今回はロンドンでほとんど歌ったから、現地のスタジオの機材がボロかったっていうのも功を奏したってとこ。細かいパンチインが不可能だったんですよ。ブロックごとの歌い換えは出来たけど。だから例えば日本のちゃんとしたスタジオだと「ア・イ・シ・テ・ル」って別々に録っても自然に聞こえるわけですけど、ボロいからそれが出来ないんですね(笑)。まあ時間もなかったし、今回は攻撃的に行こうっていうのもあったし。何て言うのかな、悪く言えば雑ですよね。

●雑でいいでしょ(笑)。そういうところが生々しいって感じられるんだね。

K:あと、歌い方をもっと増やしたかったっていうのもある。「feminism」は声の高低を出したかったのね。高いところから低いところまでを。でも今回は歌い方の種類やニュアンスの種類みたいなのをもっと出そうって。僕の曲は別だけど、人時君に曲をもらったら、まず歌メロつける前に歌い方を考えたんだ。それから歌メロと歌詞を付けたから。例えば「FAKE STAR」なんかは僕はうなってるけど、シャウトするとこ全部ア行にしてたりね。そういうところにすごい気をつけた。まあ他の曲もそうだけど、「FAKE STAR」や「SEX SYMBOL」は今回初めてっぽい曲なんだけど、自分でもここまで出来ると思ってなかった。

●「FAKE STAR」聴いてると、こっちもノドが痛くなるよ(笑)。

K:僕も痛かったっすよ(笑)。それに、「FAKE STAR」と「夢」って同じ人とは思えないでしょ。

●「夢」の最後の低音にはゾッとした。

K:日本人はあんまり低音出ないもんね。

●ラストナンバーの「H.L.M」はいろいろ考えたんだけど、タイトルも詞もわけが分からない。

K:(笑)みんないろいろ考えてくれるんですよ。歌詞からHとLとMを抜けばちゃんとした歌詞になるんじゃないかとか、いろんな案があるんですけど(笑)。これは単純にHがハービットで歌いクセ、Lがリリックスで、Mがメロディー。それは僕のオリジナルだよっていうことで、「君たちマネはしちゃいけないよ」っていう意味もある。あと、このボーカルは仮歌なんだよね。仮歌を流してもらって何言ってるかローマ字でひろって、それを裏表逆にしただけなんですけど。

●これ何語なのかなあって頭が…(笑)。

K:これは清春語(笑)。仮歌って、自分の声のトーンとか何も考えずに無心で歌ってる時じゃないですか。だから自分の声が一番響く言葉じゃないかなあって思ってね。あと、歌詞つけるとねえ、歌詞によって悲しい歌とか楽しい歌とか激しい歌とか決定づけられちゃうけど、歌詞がないことによって何言ってるんだろうって面白さがある。例えばあるライブでこのCDのテイクの時があったり、別の日はまた違うテイクだったりって、いろんなのがあってもいいかなと思って。

●詞を見て、とりあえずアルファベットっぽいけど読めないから紙を裏から見たりして。結構みっともない光景だったかも(笑)。

K:(笑)アイデアですね。

●アルバムリリースの後はツアーだよね。やっぱりこの激しさがステージにも出てくるんでしょ。

K:そうだよね。激しいって言っても、今までいろんなコンサートやってきて、例えばガァーって動く激しさとか、一歩も動かずに気持ちが激しいとか、そういういろんな激しさを出してきたのね。激しいって言っても動き回ってるのだけが激しいじゃないと思うし、激しく最初から最後まで動き回ってればそれが普通になっちゃって激しくなくなったりするからね。そういうのを気にしつつ、ただ今回はインチキくさい激しさが出せたらなあって(笑)。とにかくとがっていたい。アルバムもそうだけどここに来て一番激しいことが出来る自分達に、自分達でドキドキするんだよね。前のアルバムはポップで、チャートも取って、次はきっともっとポップで来るだろうっていうみんなの予測がすごいイヤで。コンサートも日ごとに曲順変えたりね、その分ライティングはラフになるだろうけど。「キャーキャー」じゃなくて、「ドキドキ」させたい。

●危険を冒してるとかいろいろ言いたいこと言ったんだけど、最後に黒夢を敵視する人達に対してひと言あればどうぞ(笑)。

K:そうですね…。敵視する人は、まずここまで来なさいって感じかな。まあ、やってる音楽のクオリティーも売り上げの枚数も知名度も、並ばないと話にならないと思うんですよ。下で言われてもね。そういう人達の声って遠吠えに聞こえちゃうからね。僕らの上にもまだまだすごい人やバンドがいますけど、ここまで来たラインの人しか分からないことっていっぱいあるから。まず先輩でも後輩でもここまで来てほしいし、逆に先輩とか後輩って言葉はロックにないと思うし。だから平均年齢16歳のバンドがデビューしたとしてね、それが僕らよりも売れて僕らよりも内容の濃いことやってればその人達の勝ちで、僕らの負けだし。今どっちかっていうと、年食ったバンドより若いバンドの方が全然魅力あるし、可能性もたくさんあるじゃないですか。だからマネしてる人達には「マネし切れないから悔しいんだろ」みたいな感じですかね。

●どうやら、さらにその身を危険にさらすような質問をしてしまったようだ(笑)。

K:いやいや、でも自分では全然危険と思ってないから。確かに危険かもしれませんけど、やる方としては、見る人や聴く人をいつもドキドキさせてあげたいから。

KUROYUME HITOKI

KUROYUME HITOKI

うまいだけのバンドでは終わりたくないから

●ロンドンでの今回のアルバムの仕上げは、結構過酷なスケジュールだったっていう話を方々から聞いてるよ(笑)。無事終わった今の感想っていうのをちょっと聞かせてくれる。

人時(B、以下H):あれからもう、なんだかんだで1カ月たっちゃいましたもんね。4月の半ばにミックスダウンが終わって、そのままエディットとかがあったんで。その後マスタリングをして、ホントに完成したのは4月末だったから(笑)。その瞬間は、やり尽くしたわけじゃないんですけど、今あるアイデアとかを全部詰め込んじゃったんで「あっ、出来た!」って単純にホッとしましたよね。自分で自分を褒(ほ)めたいっていう感じかな(笑)。こんなタイトなのによく出来たなって。

●スケジュールに迫られてっていう局面もあったと思うんだけど、最後の方で煮詰まったりみたいなことはあった?

H:煮詰まりは……、常に煮詰まってたのかもしれない。今回はトータルのプロデュースを僕ら黒夢でやってるんですけど、佐久間さんを始めとする外部のプロデューサーと共同でやってる曲もあって、その曲にはやっぱりそのプロデューサーの色が出てるんで、セルフプロデュースの曲とのギャップをどうしようかなっていうのに常に悩んでたし。

●3月に大阪城ホールのイベントの時に会ったでしょ。あの時は徹夜続きで疲労困ぱいっていう雰囲気だったけど、あの後さらにきつい状態になったりしてた?

H:あの状態がほぼずっと続いて……まあ、日本では僕がその辺で辛かったというか、睡眠時間もほとんどないような状態が続いたんですけど。で、ロンドンに行ったら今度は立場が逆になったんですね。

●じゃあ、清春君は歌入れとかの面でロンドンでは大変だったと。

H:そうですね。ホントは日本で全部録って、ロンドンにはミックスをしに行くはずだったんですけど、時間的に押しちゃって。せめてバックだけでも日本で作っておかないと向こうで何にも出来ないから、残った歌を向こうで録ろうみたいなことになってね。歌詞も上がり切ってなかったし。でも、僕がレコーディングをやってる最中に、彼は彼でプロモーションをあっちこっちでやってるんで大変だったし、レコーディング自体は日本では僕がしんどくて、ロンドンでは彼がしんどかったという。

●常に煮詰まってたような感じだったという話なんだけど、そういう場合でもゴールは見えてた? 結構ゴールが見えないまま煮詰まってしまう人がいるけど。

H:先が見えないわけじゃないね。ただもう、発売日が決定してたんで、その決定に対して大丈夫かなっていう心配がまずあったけど。

●アーティストとしてはスケジュールのためにクオリティーを絶対に落としたくないっていうプライドもあるしね。

H:そうですね。切羽詰まった状態である種いいものが出来る人もいれば、逆にダメな人もいるだろうけど、僕らの場合は〝果たして余裕があっていいのかな〟ってなんとなく思うんですよね。余裕が欲しいと思うし、例えばレコーディング期間を3カ月取りますとか、好きな時にレコーディングしていいですよっていう状態にあこがれたりするけど、実際にそれをやって出来るのかなって(笑)。逆に無気力になっちゃうんじゃないかなって思ったりもするから、結構決められた中でやっちゃうのもこれはこれでありかなとは思うんですけど。でも、ここまでタイトなのは二度とイヤ(笑)。

●このレコーディングが、さっき言ってたようにスケジュールがたんまりあるようなものだったら、今回のようなアルバムにならなかったんじゃないかということも考えられるよね。

H:それは思い切りありますよ。時間があればもっと1曲1曲に対して煮詰め直すことが出来ちゃうじゃないですか。だから、それをやってるとヘタすればドツボにはまって最悪な状態になっちゃう場合もあるだろうし、逆に良くなるかもしんないけど。でも絶対に今回みたいにはならないでしょう。もっと冷静になっちゃうかもしれないね。

●僕は今回のアルバムの激しさっていうのは、スケジュール的なことでささくれ立った気分みたいなものも出てるのかなって若干思ったんだけど。

H:まあうまくて当然なのかもしれないですけど、〝上手なバンド〟アレンジとかも含めて、うまいだけのバンドでは終わりたくないから。レコーディング前にそういう話をドラムのそうるさんとしてね。だからベースに限っては〝暴れちゃおうかな〟っていうのが頭っからあったんです。まあスケジュール的な問題もあったかもしんないけど、ささくれ立ったのは逆に僕らからしてみれば良かったのかも。

KUROYUME HITOKI

●今回のアルバム制作のスタートをする地点では、前作「feminism」のブレイクの後だったということで、特別な思いみたいなのはなかった。

H:アルバム全体をセルフプロデュースしたのも初めてなんですけど、レコーディングが始まる前にアルバムのタイトルが決まったっていうのも僕らにとっては初なんですよね。だから、だいたいのコンセプトが作る前から明確にあったんです。『feminism』までっていうのは、二人が好きな曲を作って、そのまま各自で持ち寄って作っていくって感じだったんですよね。今回はそうじゃなくて、激しい感じで、動きのある曲を主に作りましょうという方向付けの話を清さんとできてね。今まではあんまりそういう話はしなかったんですよ。それが、まず一番うれしかったですね。「じゃあ、そっちに向かって行こう」っていう風になれたし。それから、『feminism』って僕らの中では全然売れたって意識ないんですね。運良く一週間1位になりましたけど。

●運良く(笑)?

H:他のビッグネームの人が出てたら絶対に無理だった。そのすき間にリリースすれば1位になれるんだっていう感覚を憶えちゃったから、今度は実力で1位を取りたいねっていう。

●トータルなプロデュースが黒夢ということで、あと佐久間さんとか、西平さんとか、是永さんがアレンジということでクレジットされてるよね。自分たちの音楽だから当然今までと責任感という意味で変わったりしないと思うんだけど、単純にやらなければならないことが圧倒的に増えたような気がするんだけど。

H:思いっ切り増えましたね。シングル「SEE YOU」が初めてのセルフプロデュースの作品で、その時に特に思い知ったな。サウンド的な部分で僕が仕切っていかなきゃいけないし、ベースのことだけを考えてらんないし。上に乗る音まで全部考えなきゃいけないって、結構煮詰まったんだよね。それで考え方が徐々に変わってきて、ギタリストとか、キーボードの人だとか、マニピュレーターとかに一回任しちゃってもいいんだなと。ニュアンスだけ伝えて、フレーズまで僕がカチッと決めつけるんじゃなくて「こういうニュアンスでお願いします」ってまず頼んじゃえばいいやって。それで判断すればいいって。それでダメだったらフレーズうんぬんとか、音うんぬんというのを指定すればいいことだから、まずその人のインスピレーションで出たものを出せばいいかなって。出してそれが良ければOKにすればいいんだろうなって、結構楽になったんで。「SEE YOU」をやってなくてアルバムのセルフに入ったら、ダメだったと思いますね、多分(笑)。

●「SEE YOU」の時に苦しんだことで、アルバムへの準備が出来たと。

H:そうですね。辛かったね、その時は。

●どんな状態だった。

H:寝てても夢の中でアレンジを考えてたりとか、知らないうちに指だけ動いてるとか(笑)。寝てるんだけど、起きてる感覚?「あれっ、指が動いてるわ」って思いながら寝てたりとか。

●ノイローゼみたいな状態だね。

H:僕って結構一つのものにのめり込むタイプなんですね。のめり込んで、飽きずにずーっと同じ事をやってるタイプだった。出来ないことってむかつくからっていうか、イライラするから。他の人に出来て、自分が出来ないっていうのがイヤだから、ある程度出来るまでのめり込むんですよね。だから、そういう部分でこういうやり方もあるんだなって。中には自分で曲げられないところもあるけど、でも人に任せてみるっていうのも、それはそれであるなって。そればっかりだとダメかもしんないけど。

●僕は今回のアルバムを聴いてて、『feminism』までの激しさと、『feminism』での深みっていうのが良い

意味でミックスされたなっていう印象があったんだけど、こういう意見には賛成できる？
H:うれしいです。歌詞的にも『feminism』ってどっちかというと奇麗な感じ、繊細っていうか。それの逆を僕らは行きたくなっちゃったんですよね。例えばギターとかキーボードとかが、ある種機械的な感じで、僕が思いっ切り暴れちゃおうみたいな。まあ、出そうと思って出せるものじゃないと思うんですけど、それが自然に出たからいいかなって。
●今回の人時君が書いている曲にはレゲエがあったりとか、幅が出てるんだけど、やっぱり激しい曲が多かったっていうのが印象としてあって。それはさっき言ってた「暴れてやろう」っていう意識が曲を書く段階でも出てるということなのかな。
H:『feminism』を出してツアーを回ってるうちに、後半になってくると曲がマンネリ化してくるんですよね。激しい曲でも、ノリの来る曲とかが決まって来ちゃってて、それがなんかイヤだなって。「それじゃあ、激しい曲を作っちゃおう」っていうのがツアーの途中から徐々に出てきた。『feminism』を作った時点では、激しい曲がイヤだったっていうか、作りたくなかったんだよね。僕の中ではおなかがいっぱいの状態だったんで、結構「かまきり」なんかもいつでも出来るよっていう解釈で作ったんで。今回は逆に激しい曲でも今までにあった激しさじゃなくて、また違った激しさでやってみたいなっていう欲求が出てきたんで、それを忠実に、っていうか赴くままに出しただけ。
●確かにベースもかなり暴れてるよね。前作『feminism』でもベースが全体を引っ張ってるとか、割と目立った存在っていう印象があったけど、今回さらに存在感がある。それは多分、テクニックがどうのじゃない、すごく印象に残るフレーズが多いってポイントでね。
H:今回意識したのは、「上手に弾いてやろう」じゃないんですね。『feminism』までは結構、もっと上手にもっと上手にって。もともとベーシストの佐久間さんがプロデュースだったのもあるし。自分の中でもっと上手にっていう欲求がすごく強かったと思うんだよね。でも今回はそうじゃなくて、伸び伸び弾いてる感じで、それが暴れてるであったり、気持ちよく弾いてるであったりって印象を与えるんだと思う。聴いた印象がこぢんまりしてなくて、胸張って歩いてる的な、そういうのが出てれば、もたついていようが突っ込んでようが、それがまず第一優先っていう部分をかなり意識したよね。
●思い切りっていうのを感じた。
H:基本的にファーストテイクが一番いいって言うじゃないですか。ノリとかも含めて。だから、それをかなり意識しましたね。でも納得いかない部分もあるから、やっていくとどんどんこぢんまりしてくるんですよね（笑）。それはなるべくそうならないように心がけたんですけど。
●ベースが生きてる。
H:周りをある種無機質にしてるんで、ベースとボーカルが生きてる。ベースっていうかリズムっていうか、リズム隊っていうか。それが生きてて、上ものが無機質。
●だからね、レコーディングでギターを弾いてる人には悪いけど、極端なことを言っちゃうとどうでもいいなみたいな感じがちょっとするよね。
H:ある種そうですよね。今回は原田喧太くんとかにもお願いして弾いてもらったりしたんですけど、そういう注文をしましたもんね。「ギターの人には申し訳ないですけど」とか言って、「味をなくして下さい」っていうのも伝えて。でも全然いやがらずに楽しんでやってくれましたから。だから、どうでもいいと言えばどうでもいいところで、装飾という部分かな。
●「FAKE STAR」なんて、〝リードギターに行くのかな〟っていうところでベースとドラムの絡みが来て、ビックリさせてくれるし、「BARTER」では、ベースがリズムを作ると同時に曲に表情をつけていってるみたいで面白い。この辺のプレイを聴いてると、もうギターはいいかなって（笑）。
H:そうですか、どうも…（笑）。
●でも、プレイにしろ曲にしろ大きな自信があるからこそ、アルバムのタイトルを〝FAKE STAR〟っていう言葉に出来たりするんだろうな。実際、僕の中で黒夢はフェイクじゃないしね。これはジョークだなって、痛烈な皮肉だなって（笑）。
H:〝FAKE STAR〟って聞いた時に、これは清春君が発案したんですけど、もうそのころって「言いたいこと言っちゃえ」みたいな、結構ピークの時期だったんだと思うんですね。作る前からもう今回の歌詞に思想的なことが増えるっていうのも分かってたし、どうしてそういう言葉をつけるのかっていう意味合いを聞いたときにすぐに分かったしね。だから単純に〝FAKE STAR〟っていうタイトルを聞いたときは、「あっ、いいかもしれない」って、その時はまだ決定してなかったんですけど。〝FAKE STAR〟が決まるまでは、「どうでもいいアルバムタイトルにしない？」っていう話をしてたんで。「タイトルはあってないようなもので、単純に意味のない言葉でもいいよ」っていう話をしてた時に、この言葉が出てきて結果的にはすごく意味のある言葉になりましたけどね（笑）。
●アルバム全体を聴くと、オープニングで人時君が作ったノイズナンバーがあって、曲間にもSEを入れてて、それに曲の中にもボーカルがあってリズムセクションがあって、そこにもノイズがセンス良く入ってるんだけど、この辺りに何か狙いみたいなところはある？
H:曲と曲のSEっていうのは、激しい曲が多いっていうのもあって1曲1曲のアクが濃くなるなっていうのがあったから、効果音的であったり、耳休めであったり、「あれ？」って思わせたりっていうのがアルバムの中にあってもいいかなって思って、キーボードの人に「こういう感じで」って頼んだんですね。最初の「Noise Low 3」っていう曲は、ホントSE的な感覚で。これはベースオンリーなんですけど、これは単純に「ベースだけで何が出来るんだろう」って考えたときに出来た曲なんですね。あとノイズっていうのは、ある種汚くしたい、ダーティーなイメージで、ただそれがハードロック的なダーティーな感じじゃなくて、もっとパンキッシュな方に行きたいっていうのがあったから、そのせいかもしれませんね。個人的にノイズ的な音が好きだから。
●詞も攻撃的だし、曲自体も攻撃的な曲が多いし、ノイズを入れることでさらに、攻撃的というよりも刺激的な感じがしてね。今回のむき出しの清春君の詞っていうのは正直なとこどんな印象？
H:ホントむき出しですね（笑）。もう笑っちゃいますよ（笑）。一番最初にシングル曲以外で出来た歌詞が「BARTER」で、その歌詞を見た時にまず笑って、最後に出来た曲が「FAKE STAR」で、それはロンドンで見たんですけど、それも思いっ切り笑えて楽しかったですね。単純にうれしかったし、ワクワクしたし、ドキドキもしたし。あと、〝この曲は深いな〟っていうのもあったり。
●清春君と人時君の関係ってね、清春君が言いたい放題みたいな感じで、人時君ってどちらかと言えば、その横でニンマリ笑いながら、彼が行き過ぎたら「ちょっと、ちょっと」って背中をたたく人なのかなっていう印象があったんだけど、実際はどうなの？
H:（笑）前は確かに「大丈夫かな」っていうのもあったけど、今は……、でも実際に僕も思ってることだから。ずっと一緒にやってて、不満に思うこともほとんど一緒だったりするし、それをポンと言った瞬間は「何じゃ～」って思うけどね。「大丈夫か～」って（笑）。そういう不安はあるけど、やっぱり逆に気持ち良かったりするじゃないですか、「あぁ、せいせいした」みたいな。そういうのもあったりして。深い思想的な部分では分からないんですけどね。でも「その通り」みたいな部分もありますね。それを横でニンマリ見てて、心の中で「もっとやれ、もっとやれ」って思いながら聞いてるときもあるし、結構楽しいです。ただけっしてそれだけじゃないと思うから、そういう部分でフォローしてるのかもしれないですけど。フォローっていうか、それだけじゃなくて他にももっと言いたいことはあるっていうか、そういうことを言ってるのかもしれないですね。
●まさに激しくなった黒夢の次のライブは、何か今までとは違うものを生むんじゃないかなと思うんだけど、どうかな。
H:今回のツアーは、ある種凝らないライブっていうか、それこそ骨と肉じゃないけど、なるべく生身にやれたらなと思って。前はやっぱりギミックとか、特殊効果とかで金テープがプシュ～ってしてたけど、そういうのをなるべくなしにして、照明もシンプルにしたいっていうのもある。あと今回は、毎回曲順を変えるんですよね。だから平均点の取れないライブかもしれないけど、良いときは百点満点をつけれるかもしれないし、悪いときは零点かもしれないし（笑）。だからその土地土地によって、最悪という土地もあれば、最高と思う土地もあるだろうしね。そのギャップが激しいツアーになるんじゃないですかね、まず。で、基本的には激しくなると思いますね。
●曲の表情一つをとっても激しくなる。
H:そうですね。ニューアルバムの収録曲は全部やるんですけど、それにあった今までの曲もピックアップしていくだろうし。ただそれだけじゃなくて、みんなが望んでいるだろうと僕らが勝手に思ってる曲も多分やるだろうしね。

KUROYUME ARE KIYOHARU & HITOKI

TOUR '96 FOR SEASON『野性の証明』

May 29th 1996 at Kobe Harborland Plaza Hall

THE YELLOW MONKEY

LIVE J-ROCK REPORT

THE YELLOW MONKE

1996年5月29日　神戸ハーバーランドプラザホール

最高のグループに乗せてまき散らされた〝毒〟が観客全員を永遠のロック少年少女に変えていく

70年代に活躍したデビッド・ボウイやT・レックスなどのグラマラスなロッカーが、強烈に発散していた〝毒気〟。10年ほど前なら日本の音楽シーンでも、そんなあやしげな空気を感じることができたが、バンドブーム以降に「市民権を得た」と言われる現在のシーンの、流行音楽とランキングを競い合う日本人ナイズされたロックソングからは、ほとんど感じることが出来なくなってしまった。それは日本のロックが進化する過程で歌謡曲やニューミュージックなどを吸収してしまい、ロックとしてとらえられる範囲が肥大したことにも原因はあるのかもしれない。

その中でザ・イエロー・モンキーは、今も〝毒気〟を噴出しながら堂々とシーンに君臨する貴重な存在である。往年のグラムロックやハードロックなどの洋楽サウンドを基調にし、自分たちが聴き親しんできた歌謡曲などのテイストが違和感なく盛り込まれた彼らのキャッチーなロックンロールは、格好だけで個性が欠落している〝○○もどき〟野郎には到底作り出すことの出来ない天然の毒々しさをみなぎらせている。そして、それはライブでプレイすることによって、何倍にも濃度を高めていくのだ。

手元の資料にある今回のツアーの日程表に「1996年、今年は全国でライブを行います!!」という宣言が書かれている。人気が高まったからといって主要都市の大きな会場だけでしかライブを行わなくなるのではなく、だからこそ全国を回って各地のホールでライブをやるんだと言わんばかりの、いかにもライブバンドらしいスピリッツが伝わってくる言葉だ。

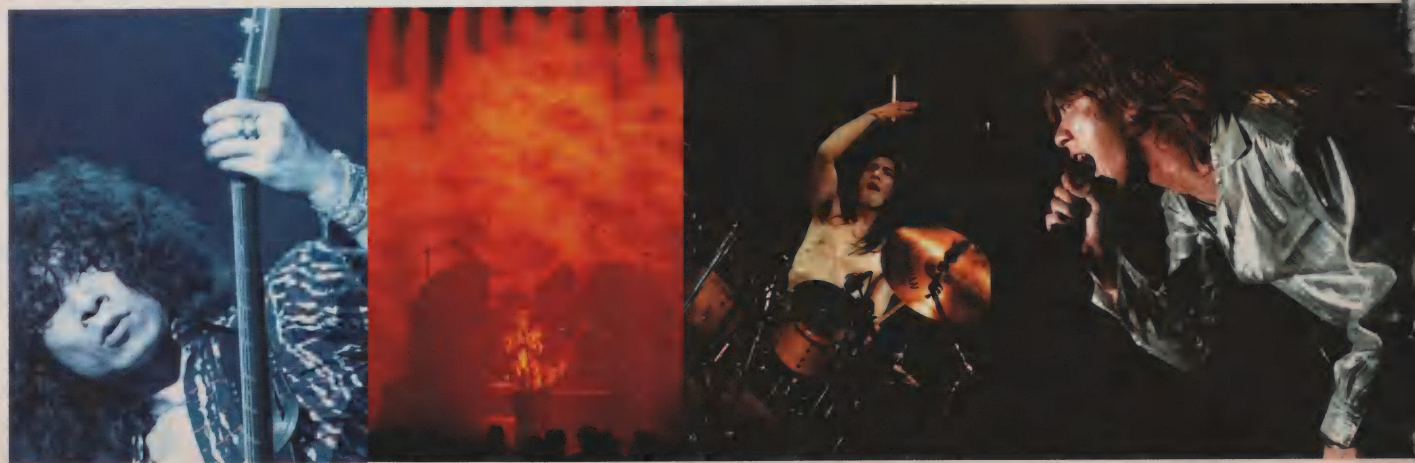
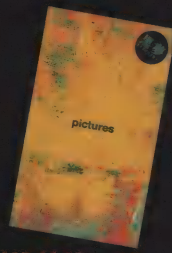
そんな気合が入った全国ツアーの9本目となった神戸国際会館ハーバーランドプラザホール。予定時刻を約5分ほど押して客電がゆっくりと落とされると、メンバーの名を愛情を込めて叫ぶかん高い声や野太い声が場内に響き渡り、マイクスタンドを照らすパープルのライトの中に吉井和哉の姿が浮かび上がった。オープニングナンバーでバンドが持つ独特の空気を会場の隅々にまで行き渡らせると、怒涛(どとう)のごとくワイルドなロックンロールを客席に浴びせかけるザ・イエロー・モンキー。まだライブは始まったばかりだというのに、いきなり〝熱狂〟以外に表現できる言葉が見当たらないほどのエキサイトしたステージングで、観客をいともたやすく自分たちのペースに乗せてしまったのである。

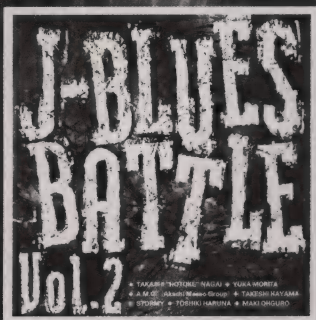
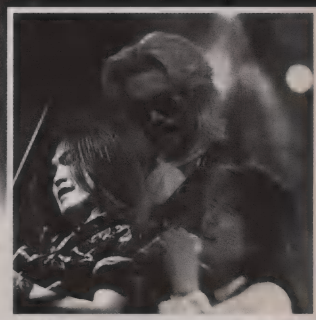
ステージに立つだけで存在感を見せつけるボーカリスト吉井。腰を低く落としながら重たいリフをかき鳴らし、猛り狂うギターを自在に操る菊地英昭。サウンドのボトムをしっかりとキープし、時には吉井とデュエットするようなベースをはじく廣瀬洋一。8ビートにこだわらず多彩なリズムワークも交え、足元の床もろとも客席全体を揺さぶるほど力強く的確なビートを繰り出すドラムス菊地英二。四人四様の強力な個性がステージ上でぶつかり合うことなく見事に調和し、メンバーの姿やバンドの存在を大きく見せる。そして、ハイセンスでダイナミックにプレイされるロックンロールは、五人目のメンバーとも言える三国義貴のキーボードが溶け込むことによって毒性がさらに強化され、サウンドの中へと引き込んだ観客をより深く陶酔させる。

冒頭にも述べたようにザ・イエロー・モンキーは、古き良き時代の洋楽のロックンロールが持っていた〝毒気〟を感じさせる貴重なバンドだ。それだけに彼らを支持するファンの年齢層も広く、客席には中高生の少年少女から「ロック＝不良」と言われていた時代を経験している年季の入ったロックフリークや、子供連れのロックファンの姿も見える。しかし、いったんライブが始まってしまえば、ステージも客席も、大人も子供もだれもがみんなロックを愛する少年少女となるのだった。それこそがロックンロールから噴出される毒が持つ最大の効用なのだ。

ノリのいいナンバーやサイケデリックなナンバーを織り交ぜ、ハイテンションで繰り広げられるライブ。吉井はメニューの随所に設けられたMCで、昨晩飲みに出かけた廣瀬が野性のイノシシとキツネに遭遇した話などを巧みな話術で語り、その都度ヒートアップした客席をしばし和ませる。終盤のMCでは彼が今朝テレビで見たという子供向け番組で、絵の具でぐちゃぐちゃになりながらも大きく広げられた紙いっぱいに空を描く子供たちの姿を見て「子供って無邪気でいいな。バカみてぇ(笑)。でも、うらやましいと思った」という話をし、そんな思いを晴らすかのようにザ・イエロー・モンキーのサウンドで場内いっぱいに澄み切った青い空を描き始めた。菊地英昭のひずんだギターが曲に浮遊感を持たせ、どこまでも広がっていく壮大なナンバーは、毒の作用で熱気を放射している客席に空を突き抜けていくようなそう快な風を送り込む。そして、再びエネルギッシュでワイルドなロックンロールが場内を駆け巡り、一気にスパートがかけられると、観客も爆発的にテンションを上げてそれに応えるのだった。

終演を告げるアナウンスが流れる中、女性ファンが懸命に叫ぶアンコールの声が聞こえる。約2時間、燃焼し続けたライブ。熱狂的に盛り上がったアンコールの最後を締めくくるナンバーの演奏が終わった時、彼女たちの再度アンコールを求める気持ちも分からないでもないが、これ以上彼らに何かを望む気持ちにはなれなかった。きっとアナウンスにせかされるように出口に向かう人たちも同じ心境だろう。「ROCK」から「ロック」への進化の過程で和製ロックンロールが失ってしまった〝毒気〟を、彼らは最高のグループに乗せてまき散らしてくれたのである。すべてのメニューを終えて去った彼らをステージに呼び戻すことが失礼だと思えるほど、僕はザ・イエロー・モンキーのロックンロールに酔いしれ、満足感にどっぷりと浸っていた。

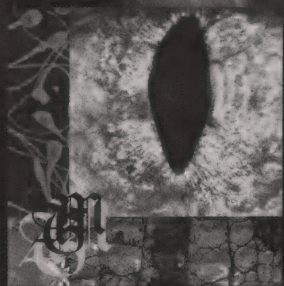
［文・石田博嗣　撮影・金原 誠］

TOSHIBA EMI
TOCT-9455 ¥3,000
Kuroyume 黒夢
最新、最低、極上のニセモノ。
HYPER NEW ALBUM
FAKE STAR ~I'M JUST A JAPANESE FAKE ROCKER~
NOW IN STORE
DISCO GRAPHY
1995.5.10 "feminism" TOCT-8897 ¥3,000
1996.4.17 "ピストル" TODT-3710 ¥1,000
1995.10.13 "BEAMS" TODT-3556 ¥1,000
1996.2.21 "SEE YOU" TODT-3657 ¥1,000
1995.9.27 "feminism PART1" VIDEO:TOVF-1228 ¥4,800/LD:TOLF-1228 ¥4,800
1995.12.13 "pictures" VIDEO:TOVF-1233 ¥3,000 LD:TOLF-1233 ¥3,000
THANKS!
Kuroyume 黒夢 1996 FAKE STAR'S CIRCUIT 追加公演決定
7/1 (月) 岐阜市民会館 ズームエンタープライズ 052-290-0909
7/14 (日) IMPホール ウドー音楽事務所 06-341-4506
7/31 (水) 横浜アリーナ ウドー横浜 045-664-6969

BLUES for THE Roots IS HERE!!

大阪発のREAL MUSIC LABEL BLUE-Z RECORDSは、
NEO BLUES ARTISTを強力にサポートしています

SUNDAY BLUES LIVEから飛び出したJ-BLUESシリーズ第2弾!!
さらなるROOTSを求めて・・・

——J-BLUES BATTLE Vol.2——

参加アーティスト

永井“ホトケ”隆 / 森田ゆか / A.M.G. /
葉山たけし / STORMY / 春名俊希 / 大黒摩季

BLCZ-0302 ¥2,000

怒涛のGROOVEを放出する
A.M.G.待望の1stAlbum RELEASE!!
「A.M.G.-Akashi Masao Group」
B，PRODUCE：明石昌夫 / Vo：千葉恭司 / G：団篤史
TV番組「Roots」ENDING THEME
「Aint Nobody To Love」他全6曲収録
BLCZ-0401 ¥1,800

SUNDAY BLUES
LIVE

6.30 WAXX
7.7 春名俊希
7.14 永井“ホトケ”隆
7.21 A.M.G.（Akashi Masao Group）
7.2 BLUES IN HEAVEN at大阪W'OHOL
出演：QUNCHO / STORMY
9.7 NEO BLUES BATTLE VOL.2
at新大阪メルパルクホール
7/14 各プレイガイドにて発売開始!!

NOW ON RELEASE：V.A.「J-BLUES BATTLE Vol.1」BLCZ-0301 ¥1,800 / 春名俊希「BLUES FEELIN」BLCZ-0101 ¥1,200 / chap chimes「GELPIN」BLCZ-0201 ¥1,200

商品・LIVE等に関するお問い合わせは： **BLUE-Z INC.**
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-18-18トポロ51ビル4F TEL 06-212-0660 FAX 06-212-6055

反省点を残しながら次のライブに反映できる…そんなツアーだった

何度か会ったことあるのに、今までインタビューという楽しいお仕事(?)を正式に一緒にしたことなかったグレイのTERUとHISASHI。「じゃあ、よろしく」とテープレコーダーをスタートさせた瞬間、その場の空気が、ちょっと動きを鈍らせる。初対面じゃあるまいし。一緒に酒飲んで僕をなぐった(?)仲じゃないかTERU! TAKUROと二人で、僕がグレイをより深く理解できるように「グレイのおもろネタ」を披露してくれたろ、HISASHI! インタビュー開始後約15分、そのいまいましい空気は目を覚ましてフラフラと動き始めた。ちょっといい調子になって来たゾ。

さて、みなさん。二人が『BEAT out!』ツアーで得た、遠慮のない自信と、海より深い反省、そして、「かかってこんかいアイドル視!」って怒とうの鼻息、トレンディドラマのテーマ曲となるニューシングル「BELOVED」について聞かせてくれます。

「こんな所で出来るんだ」って涙がこぼれる瞬間もありますよ

●まず、いろんな大きな意味を含みつつ終わった『BEAT out!』ツアーのてんまつを聞きたいな。バンドの成長がすごく実感できたんじゃないかと思うんだけど。

HISASHI(G、以下H):そうですね。『BEAT out!』っていう自信作を作った後だけに、ライブに対しても自信だけはあったんですけど、初のホールツアーということもあって何カ所かは空回りしてたと思います。でも、最終日がとってもいいライブだったんで、終わり良ければ…じゃないですけど、とてもいいツアーでしたね。

●空回りした瞬間もあったんだろうけど、ツアーは後半に向けてどんどん昇っていったような印象があるよ。僕は頭の方の3本くらいを見てて、その中でもすごく大きな変化を感じたし。

T:と言うよりも、一番最初の広島ではまだホールという感覚をつかみ切れてなかったのかもしれないです。でも、その日はその日で自分たちの満足行くライブになったし、また反省点を残しながらも次のライブに反映できるような、そんなライブが出来たと思うんですね。このツアーは毎日がそんな感じだったから、どんどんいらないものが排除されていって、それをバンドの外の人は成長って見てくれるんだと思うんですよね。あとはホールに対する勘みたいなものや、ライブに対する勘を取り戻してきたような部分もあって、本番ならではの空気の中でつかんでいったんでしょうね。

●お互いをステージで見てて、思わず指摘したくなるような成長って感じなかった?

T:HISASHIに一番驚かされたのは仙台だっけな? 特殊効果がないからってソロをやめた時には、「完全主義者なんだな」ってうならされましたね。何かが欠けるなら自分のソロすらもやめてしまう完全主義ぶりプラス「すごく自由にやってるなー」って感じ。昔だったらソロをやるのは決まってるから、百パーセントの力を出せなくても中途半端にソロをやってたかもしれないし。今回はやらないことで百パーセントのものを作り上げたというところが成長なのかなって。

H:いろんな雑誌の人とかは、「HISASHIの独創的なギターソロは…」とかって褒めてくれるんですけど。俺自身はそんなに自分のカラーを完ぺきに出してやろうっていうんじゃなくて、ただ単純に「グロリアス」でヒットしたグレイと反比例している自分を出すための手段だったんです。だからリストの中に入っている俺のソロのコーナーも、簡単に必要ないって判断が出来るんです。

●じゃあ、HISASHI君はTERU君を見ててどうだった?

H:やっぱりステージでやってる時はライバルですからね。いちいちそんなこと考えてられないですけど。「INNOCENCE」のイントロの時の照明っていうのが、絶対TERUの影が俺の前に来るんですよね。その影を見た瞬間に「こいつのバックでなら、当分うまくやっていけそうだな」って気はしましたね。「INNOC-ENCE」が、ホントに思い入れのある曲だっていうのもあるんですけど。

●影を見てそういう思いになったっていうのは、どういう?

H:その時、外からグレイを見てるような感じがしましたね。多分、一生それは無理なことなんですけど。外から見たらこういう感じなんだろうなっていう。

●TERU君に関しては、今までに全くなかったってわけじゃないけど、フロントマンである風格みたいなものを感じて。歌っていう意味でもバラードの表現力とか、結構すごいものがあるなって感じがしたしね。

T:うれしいです。

●そういう変化は、やっぱり徐々に。

T:そうですね。今の自分が、5年前東京に出たてのころにいたとしたら、きっともっと早くデビュー出来てたんじゃないかなと思って。もっと短い期間で、今の場所に立ってるんじゃないかなって気がしますけど。

●メジャーデビューしたころって、勢いはあるんだけども、ちょっと心の中に自信のなさとか、弱い部分とかがあった?

T:そのころって、そういうことを考える時間がなかったっていうか、余裕がなかった。ただ前に突き進むしかなかった。

●アルバムの音に対しても自信を持ってるし、その辺がステージでの風格につながっているのかなって。「文句があるなら、音聴いてからにしろよ」みたいなね。

H:多分みんな『BEAT out!』を作る時から、一歩引くことが出来るようになったんじゃないかな。今までだったら「メジャーシーンの第一線で活躍しなければいけない」ってことばかりが頭にあったんですけど、ちょっと出来た余裕のすき間に一歩引いて、周りを見渡すことが出来るようになったことは、かなりの成長かなと思います。

●HISASHI君は、普段のほんわかしたムードのイメージが強かっただけに、ステージでのクールな所を見ると「いったいどういう人なんだろう」って思ってしまった(笑)。

H:(笑)今回のオープニングのSEは、俺とドラムの永井利光さんで作ったんですよ。それもあって、やっぱり登場する瞬間に魔法がかかっちゃいますよね。

●普段、家でカップラーメン食べてる時とは違う自分に(笑)。

H:カップやきそばのお湯を捨ててる自分とは違うね(笑)。ひと回り、ふた回りぐらい大きくなるんですよね、自分が。

●ステージに出る前に恐怖感はない? ステージに上がった瞬間、恐怖感があったら負けだから、あくまでも上がるまでの話だけど。

T:リハーサルの時には必ず客席からステージを眺めるんですけど、そこで「こんなに広いんだ」って思った瞬間にちょっと恐怖がわき出てきて、「本当にここをいっぱいに出来るのかな」っていう不安感も出て来るんですよ。だけどリハが終わって開場して客席からガヤガヤとみんなの声が聞こえてくるとそれも治まって、だんだん「今日は大丈夫だ」っていう安心感に変わってきて。後はやっぱり周りに他のメンバーもいますからね。今回のツアーは前回の『SPEED POP』のツアーと違って、すごく楽屋の雰囲気が良かったんですよ。結構、笑顔がこぼれてたり、会話がはずんでたりね。そういう空気の中で不安や恐怖っていうのは消されていって、ステージに飛び出す寸前にはとてもいいテンションになれた。

●TERU君がリハでステージと客席を行ったり来たりしてる時は、そういうことが頭を支配してるんだね。

T:そうですね。2階席があるとこなんか2階から見てると、昔のことをすごく思い出すんですよね。「あんな小さなライブハウスでやってたのに、こんな所で出来るんだ」って、涙がこぼれる瞬間もありますよ。

●成長に比例して、ヒット曲も出て、知名度も上がってきてという中で、グレイの今までを知らない人達の中にはバンドがシンデレラストーリーを歩んできたみたいに思ってる人も多いみたいでね。ただノホホンとやってきてここまで来れるわけがないし、陰ではきっと、それこそ涙の苦労があったと思うんだけど。

T:…そうですね、辛かったのは、「〝RAIN/YOSHIKIプロデュース〟っていうバンド名にすれば…」(ジェイロックマガジン94年9月号より)っていうやつですかね(笑)。

●ハハハ。

H:いやらしいな(笑)、いやらしいな(笑)。

T:あのグレイという名前を使わずに、自分達の知名度はどれくらいなんだろうって確認するシークレットライブは、やっぱり辛くもあったし…。

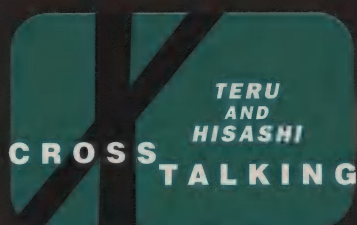
●バンドの演奏をタイトにするために、指紋がなくなるまでギター弾きましたとかっていうハードな特訓はなかった?

H:レコーディングやライブが特訓になってましたからね。それにヘタだヘタだって言われてたのは、昔からでしたからね。逆にうまいって言われてたら何もしなかっただろうし、とり

いる自信はある

あえず鼻は折られまくってましたから(笑)。
T:他の人達がどうやってるのかなんて知らないけど、俺達はきっと周りから見たらすごく苦労してるなってことを平然とやってるんだと思うんです。何の不満もなく、努力してるとすら感じないっていう。
H:あんまり苦労したって気持ちはないんですけど、取材では「よくグレイ辞めなかったね」ってよく言われるんですよね(笑)。俺達って高校のころも函館の平穏な土地でぬくぬくと育ったし、そういうことを知らなかっただけに、これが当たり前なんだと思ってた。
●甘え方を知らなかったんだ(笑)。
T:人に頼るより、まず自分で行動してみようって人間が集まってるわけですからね。
H:そうだなー。でも、音楽が仕事になるってことは、苦労とかイヤだとかじゃなくて、デビューから少ししたころはかなり微妙な問題ではありましたね。それまでだったら「魔女狩りナイト」とか言ってイベントやったり、すごく小回りの効く状態だったのが、戦略とかもあってライブが出来なくなったりね。そこら辺は考えてなかったから。自分達が甘いなって思えた所だった。

二人とも両手挙げてて 音が消えた瞬間がありました

●あんまり苦労苦労って言ってると、演歌歌手の取材みたいになるんで終わりにして(笑)。以前TAKURO君とJIRO君にライブでの数々のハプニングを話してもらって楽しんだことがあるんだけど、今回のツアーでは面白いのはなかった?
T:永井さんがケガしたっていうシリアスなのはありましたけど、笑い飛ばせるようなのはなかったかな…。
H:今回、「週末のBaby talk」で電話を使ったんですけど、ああいうシチュエーションをステージの上で作ったのは初めてだったんで、多分お

アイドルノリをやってる人達が恥ずかしくなるライブを見せて

客さんもあの場所は一番気になってたと思うんですね。それをあんな風にかわすことが出来るようになったっていうのは、かなりのハプニングじゃないですかね(笑)。

●じゃあ、TERU君の失態を話してくれたTAKURO君自身はどうなんですかね。

T:いつものことなんですけどね。「ギター弾いてるかなー」って見たら、両手を挙げてるっていうのはありますけど。ずっとHISASHIに任せてる(笑)。

H:うん。その気持ちはホントに今回よく分かりましたね(笑)。俺が分かったら元も子もないんですけどね。

T:すごいのあったよね。二人とも最高にテンションが上がったみたいで、二人とも両手挙げてて、音が消えた瞬間がありましたよ(笑)。

H:いや、そうじゃないの。あのね、これだけ素晴らしいリズム隊をグレイは持ってるから三人で大丈夫だと思って、TAKUROと意思が通じたんですよ。…言い訳です(笑)。

●でも、その自由さもロックっぽくていいよね。律儀に音を埋めてりゃいいってもんじゃないし。そんなバンド自身の懐も大きくなったツアーは、充実度も満点だっただろうから、次のライブのクオリティーには、さらにどん欲になるでしょ。

T:今回みたいにアルバムをリリースした後すぐツアーに入るって形は、初めてだったんですよ。今まではツアーをやってその後にアルバムがリリースされるって感じで、おっかなびっくりツアーを始めてたっていうのがあったんです。だから曲を聴いてもらってからライブをやって、目の前でその反応が見られたというのは、一番勉強になった所なんですよね。それぞれの曲をファンがどんな風に解釈してるのかも分かったし。だからこそ次の『BEAT out! reprise TOUR』では、その反応を生かした展開になったり、曲のライブアレンジになったりすると思うんですよ。あくまでも『BEAT out!』中心で、新曲もちらほら聴けて、会場も大きくなるしもっとショー的なライブにもなるでしょう。それともうちょっとラフになるかな? どうだろうね。

H:うん、そうだな。やっぱり『BEAT out!』ツアーであることは間違いないですからね。今はちょうどターニングポイントで休憩中っていう感じ。でも、ここで休んだことが、『reprise TOUR』のバネになると思うんですよね。もしかしたら180度ガラっと変わるかもしれないし。

●前向きなグレイだけに、前回のツアーの反省点はそれぞれが明確にとらえてると思うんだけど。良かったら話してくれる?

H:俺は客の反応に左右されたことがすごく悔しいんですよ。新潟はスタンディングライブだったんですけど、その時前列にお客さんが押し寄せて何人かが倒れてしまってライブが中断したんです。倒れてる子達がすごく心配で、そこしか見えてないし、そんなMCもするし。そんな風に動揺してしまった自分に、これからやるもっと大きなホールでは見えないところで何があるか分かんないし、それにいちいち動揺してられるか? みたいなね。もっと自分の土台をしっかりさせないとって。

●でも、そんな所を一切気にしないなんていうのも「お前それでも人間か?」という感じがするし、僕は微妙だと思うな。

T:微妙なんですけどね。だけど、そのくらいの強い意志を持っていたいなって。もしライブ中に大地震があってみんながあわてて逃げようとしている時に、俺のひと言でその動きを止めるようなね(笑)。

●すごいシチュエーション(笑)。

H:(笑)防災訓練みたいじゃねーか。

T:(笑)そういう状況でも、動揺しないでしっかりしてられるボーカリストになりたいなってこと。みんなの気持ちを俺に集中させることが出来るようなね。

●HISASHI君は?

H:今回のライブのコンセプトはありのままのグレイ、今年2月、3月のグレイを素直に見せようってことだったんですけど、逆に親切すぎたなっていうのはたまに思いましたね。アンケートなんかを見てると、お客さんがグレイに慣れちゃってるんですね。すごくいいライブっていうのが逆に親切すぎて、俺は目に余るところがあったりしましたけどね。

●親切すぎる? もうちょっとかみ砕いて話して。

H:そうですね。大好きなアイドルがヌードになったみたいな感じ。

T:(笑)分かりにくいよね。

H:…もっとベールに包まれた方が、もしかしたらスリリングで刺激的だと思う。

●自分たちがフレンドリーすぎるってこと?

H:ライブに限るんですけどね。今回はお客さんのことを考えてのコンサートだったんで、そうなったんだと思うけど。

T:シングルがみんなに受け入れられて、それだけに今回のライブは半分以上が初めてグレイを見る子だって予想出来たんですね。それでその子たちにも分かりやすいようなライブをやろうってなって、HISASHIにとってはきっとそれが目に余ったんだと思うんです。

●これは望んでることだろうけど、ヒットを飛ばせば飛ばすほど、新しいファンがどんどん流れ込んでくる。すると、客席にはアイドルノリをしてしまう人も出てくると思うんだけど。ジレンマはない?

T:ジレンマっていうか、そういうお客さんと一緒に成長するのがライブなんだろう、きっと分かってくれるだろうっていうのはあるんですよ。俺達はライブでアイドルノリをやってる人たちが恥ずかしくなるくらいのものを見せていってる自信はあるし、前回の『SPEED POP TOUR』に比べるとお互いに成長出来たと思うんですね。今回はポンポンなんか見なくなったし(笑)。あとは、電波とか雑誌とかを利用させてもらって、「一緒に成長していこう」っていうことも言ってるし。偉そうなこと言うと教育みたいなね…。

H:調教っていうんじゃないの(笑)。

●ワハハハハ。

T:調教じゃ、かわいそうすぎるよ(笑)。

H:アイドル視されることに対してのジレンマはないですけどね。そのことによって20代の人がライブに来辛いとかいうことがあれば、逆にそっちの人の方が俺は気になりますけどね。僕らだってちゃんとした音楽をそういう人の前でやってるのに、「お前らが恥ずかしがるな!」ってね(笑)。

T:たまーにアンケートに嫌みっぽく書いてるんだよね。「最近、若いファンが増えましたねー。私みたいなおばさんじゃ、もうライブに行けないかな」とかね。おいおいおいってね(笑)。

H:CDを聴いてくれてる人は、きっとコンサートに来てくれる人達よりもっと年齢の幅は広いと思うんです。そういう人も来れるようなムードとかステージもこれから作っていきたいですよね。

●少し前のグレイだったら、今の質問に対して「そういうので悩んでるんですよねー」って空気が重くなっただろうけど、調教か(笑)。

H:おやじくせー(笑)。

T:おっかなーい(笑)。

●(笑)じゃなくて、一緒に成長していくっていう反応には…。

T:成長を感じたと。

●うん。

T:俺も調教されました(笑)。

●グレイってしっかりした音楽とアイドル視っていう微妙なバランスの位置にいるから、教育じゃなくてもそれこそ頑張ってもらいたいな。

H:でも俺はね、何歳になってもアイドル視されたいとも思いますよ。やっぱり注目されるってことは、魅力があるってことですからね。だから、俺、ロックってもしかしたらアイドルなんじゃないかって、フッと思うときがありますけどね。

聴くと見るをうまく分けるともっとコンサートは楽しい

●確かにルックスも大事だし、イメージも大事だし、そこに本当の音楽がついて来てれば、それはOKだけどね。でも、そういう目で見られることで、ライブでバラードやってる最中にギャースカ騒がれたり、ソロやってるのに他のことで歓声上げられたりしたら、たまんないでしょ。

T:チョベリバですよね(笑)。最近、一番辛かったのは「Together」を歌ってて手拍子が来た時なんですよ。それも俺の反省点。手拍子をした子じゃなくて、そういう手拍子をする間も与えないような緊張感を与えられなかった自分にちょっと情けなくなったり。

●でもそこで、手拍子するなとは…。

T:言わないですね。自分のオーラでそうしたい。

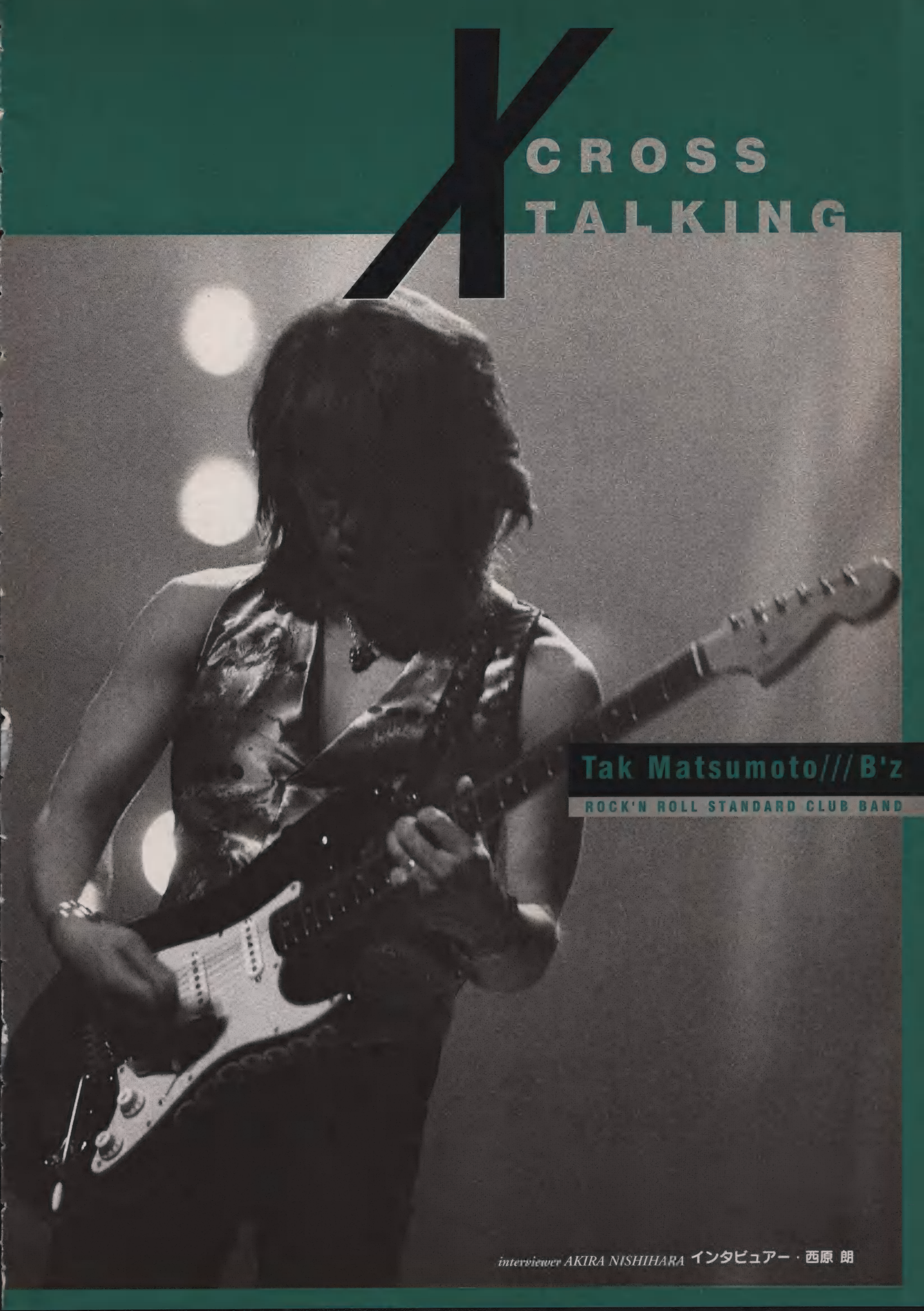
H:でも逆に面白かったですよ。たぶん俺がイメージする○○○○(編集部の老婆心)のコンサートはこんな感じだったよなって(笑)。今までだったらビジュアル系のノリっていうのが絶対あったんですよね。それが頭の上で手拍子しちゃうようなコンサートに、急に変化するのは見てて面白いですよ。いろんなノリ方があってそれは自由でいいと思うんですけど、見

J-ROCK
TERU
AND
HISASHI
CROSS
TALKING

常にハングリーさを持ってるバンドってカッコいいと思う

に来てる子と同じくらい音楽を聴きに来てる子もいると思うから、そこら辺は本当に分かってほしいですね。
T:MCの時に話しちゃう子っているじゃないですか。俺の意識の中では、ライブに来てくれてる一人ひとりに話しかけてるような意識なんですけど、そこまで伝わってないのかなっていうのがあって。
H:「聞こえない」って書いといてください。本当にだれが言ったか聞こえないし、見えないって(笑)。それを言いたいですね。
●MCで話すことで、そのMCを自分が独占してるような気になるのかな。
T:それならまだいいんですよ。俺が話してるときに「HISASHIさーん」なんて最低ですね(笑)。でもこんなことをジェイロックマガジンで言わせてもらうことで、気を悪くするより「あっ、そう思ってるんだ」って感じてくれることを祈ってるんですけど。きっと気を悪くする人もいるんだろうけど、そこは正直に自分の心でぶつかっていきたいなって思うんです。
H:その聴くと見るをうまく分けると、もっとコンサートは楽しいと思うんです。自分にとってもメンバーにとっても。そこら辺は本当に調教したいですね(笑)。
●まだ言ってるな(笑)。さらに微妙な問題になるんだけど…、『BEAT out!』の「週末のBaby talk」にジュディ・アンド・マリーのYUKIちゃんがコーラスで参加してるってことで、一部のグレイファンが彼女に対して〝敵意〟に似た感情を持ってるってうわさを耳にしてるんだけど。コンサートであの曲を演奏してる時も「えーっ、出てくるのー」なんていう嫌な空気もあってね…、すごく悲しかったし、二つのアーティストがいい音楽を作ってるのに、そういう芸能チックな認識しか出来ない一部のファンには閉口してしまった。
T:あの曲には、彼女のあのコーラスが必要だったし。これから日本のロックシーンを変えていこうっていうライバル同士が、いい音楽を作ろうってことだけなのに…。それはすごく悲しいし、何で「ああ、いい曲になったよな」くらいに思ってくれないのかなって…。
H:同じ地元から出てきたグレイとYUKIちゃんの摩擦みたいなものを楽しみたかったんですけどね。そういう方向に行くとは全然思ってなかったから。もしかしたら彼女を傷付けたのかもしれないし…。もっと活発なムーブメントみたいなものを一緒に作ろうっていうのを、その子達に言いたいですね。
T:自分達で音楽シーンを作っていこうっていう気持ちを与えたいんですよ、俺達は。俺達が世に出てることによって、それを支えてくれてる人たちも同じ時代を一緒に見つめて作り上げていって、グレイが成長していって武道館でやったら、私達も一緒にここまで来たんだっていう意識を持ってほしい。グレイだけじゃ武道館でやっても、ただのリハーサルにしかならないじゃないですか。そういう意識を持ってくれれば俺達も楽になるし助かるし。
●グレイだけをひたすら聴いて「最高」って言われるより、いろんな音楽を聴いた上で「最高」って言われたいよね。
T:そうそう。ツェッペリンとビートルズを聴いて、「だけどグレイもすごいよね」って言われれば、その人達を越えたような気分になりますからね。
●もう一つデリケートな話を。ファンやリスナーじゃなくて、登り調子のグレイを取り巻くマスコミの環境の変化に戸惑いはない? 昇ってくるにしたがって失ったものもあるでしょ。
H:グレイっていうのは台風の目なんですよ。失う人とか物っていうのは、すごい勢いで視界からなくなっちゃうくらいの勢いで進んでるんですね。だからそういう情とかがあって止まっていたら、グレイの台風が熱帯性低気圧になって消えちゃうんじゃないかなって。デビューしてから何人もの人と仕事でもプライベートでも別れてきたんですけど、そこら辺の感覚がもしかしたら鈍ってるかもしれないですね。
T:昔はそういうのを意識してて、そんな人達はあんまり親し気にはしなかったんですけど、今は「グレイって、何て経済効果があるんだろう」としか思わないですよ。そういう裏のある人でも、人間ってそういうもんだからなって思えるし。もしこれでグレイがまるっきしダメになっても、残ってくれる人がいたとしたらきっとその人は本物だと思うけど、そういう人もいなさそうだし(笑)。キツイこと言いますねー。

みんなが描く夢と俺達が描く夢が合ってくる未来じゃないかな

●空気が固まった所で、これからの話をしましょう。新曲「BELOVED」は、ドラマのテーマ曲って話だけど、結構ドラマの内容を意識したものなのかな?
T:TAKUROは、リクエストに沿って曲を書くのも結構好きだって言ってましたから、きっとそういう作り方をしてるんじゃないですかね。
●TERU君はどういう気持ちで曲と向かい合って歌った?
T:全くドラマとは関係ないところで、アルバムに入ってもおかしくないようなシングルにしたいなっていうことですかね。TAKUROはすごく優しく歌ってほしいって言ってたんですけど、逆に力強く歌いたいと思って。人に力強く訴えかけるような歌い方がしたかったんですね。曲の題材も今までとは違って、今回は愛に満ちた題材だったんで、また一歩TAKUROも成長したかなって。俺はそれに負けないくらいの歌を歌えたと思うんですよ。
●HISASHI君は?
H:このレコーディングの前って、1カ月間くらいはアルバムの曲作りなんかで、みんな結構バタバタしてたし、デモテープはあったんだけど、俺はレコーディングの当日まで曲を聴かなかったんですよ。
●それはあえてということ?
H:そうです。いつもなら前もってギターのフレーズとかも考えてたんですけど、今回はね、言ってみれば今波に乗ってるグレイが外すことが出来ないような曲を、あえてレコーディングまで聴かないでレコーディングしてみたらどうなるんだろうって。ちょっと自分に期待してたとこもあって。
●もし…みたいなリスクもあるでしょ。
H:それはもう前回の『BEAT out!』のレコーディングの時もあったんですよね。その時なんかまだ全然そういう状況に慣れてなかったから、リハーサルの時間も少なければ、アレンジも決まってないような状況で、レコーディングも深夜までかかっちゃって。でも、そんな忙しい中でもグレイは出来たんですね。だから今回も、絶対自分の中では出来ると思ってたんですよ。絶対は言い過ぎかもしれないけど…。でもやってみたら出来たっていうのは、自分に勝ったっていう感じはします。
●じゃあ、まとめましょう。最近グレイはいろいろな雑誌に登場して、結構過去のことを話してるでしょ。今回僕は「じゃあ、未来は?」って話を聞きたいんだけど(笑)。希望的観測で構わないので、これからのグレイについて話してもらえないかな。
T:それが一番難しい質問ですよね。
●結果的にうそになっても、全然問題ないから(笑)。
T:みんなグレイだったらここまで行けるだろうって確信してる場所があると思うんですよ。グレイはきっと、こういうホールが似合うとか、こういうホールでやってほしいとか、各地の人にそれぞれ夢があると思うんです。大阪だったら大阪城ホールが似合うだとかね。そういうみんなが描く夢と俺達が描く夢の焦点がだんだん合ってくるような未来なんじゃないかなって…。今まで離れてたものがだんだんクロスするようなことが、遅くても10年かからないうちにあるんじゃないかなって。
●HISASHI君はどう?
H:夢とかハングリー精神っていうのは常に持っておきたいことであって。今までにもロフト、鹿鳴館、渋公でやりたいとか、その都度、夢はあったんですけど、それが武道館っていう夢になって、それがもうすぐかなうわけで。常にハングリーさを持ってるバンドってカッコいいと思うんです。歳をとっても目の前に小さくても夢のあるバンドでいたいと思うんです。
●じゃあグレイの次の夢を楽しみに(笑)。
T:あれっ? 「最後に読者へのメッセージを」っていうのはないんですか(笑)。
●このインタビュー全体がメッセージでしょ(笑)。
T:そうですよね。あれって聞かれると困るんですよね(笑)。
H:(7月号を眺めながら)○○○○(編集部防衛本能)も読者へのメッセージはないよ。
●いや、その時はね「俺達に読者へのメッセージなんか聞くな」って言われたの(笑)。
T:えーっ、そうなんですか。よっぽど嫌なんだなー。
●冗談冗談(笑)。

X CROSS TALKING

Tak Matsumoto///B'z

ROCK'N ROLL STANDARD CLUB BAND

interviewer AKIRA NISHIHARA インタビュアー・西原 朗

B'z最高とか言うんじゃなくて、一作り手として提供したかった

B'zの松本孝弘は、そのギタープレイ、ソングライティング、プロデュースから自身のルーツをにおいとして発散する健全なロッカーだ。そんな彼が、その誕生から、今この瞬間まで語り継がれ、さらにこれから読者のみんなが、ファンキーな爺さんや婆さんになっても語り継がれているであろうハードロックのスタンダード（名曲）達をカバーし、アルバム『ROCK'N ROLL STANDARD CLUB』にまとめて発表してくれた。彼の極められたギターテクニックと恵まれたエモーションが、このフィーリングを1996年の空気によみがえらせてくれたことにひたすら感謝。

僕は、「俺はどんな音楽にも、どんなアーティストにも影響受けてねーぜ」なんて虚勢を張る、うそっぽいアーティストには辛抱ならねえ。そんなヤツの作る音楽に限って〝赤面する〟しかない全くのクローン（複製）〟だったりする。「アーティストもいつまでも純粋なロックファンでいてほしい」。そんな僕の思いをパーフェクトに満たしてくれたこのアルバムに沿って、その大切なルーツを追いながら、〝彼の今〟をさらに深く理解しようと、松本氏との会話をスタートさせた。個人的に気分はヒートしている。だって、あまりにも音楽のルーツが同じもんだから…（脚注も参照しながら読んでもらえると、この会話がより貴重なものになるかもしれない）。

B'zを始めるずっと前から自分のルーツみたいな曲をやれればって思ってたよ

●昨年、舞洲でお会いした時に、ハードロックのスタンダードナンバーのカバーをレコーディングしているって話を聞いて、仕上がりを楽しみにしてたんですよ（笑）。その待望のアルバムがリリースされたんですが、これ自体は松本さんのFMプログラムがあってこその企画だったかもしれないんですけど、自分自身の中ではこういうカバーアルバムを作りたいっていう気持ちはもっと前からあったんじゃないですか。

松本孝弘（以下M）：アルバムとか商品として出すってことはあんまり考えてなかったんですけど、自分が楽しむものとして、そういうものをちゃんとレコーディングしたいなっていうのは常に思ってましたけどね。

●そういう思いは、いつごろからありました？

M：いやぁ、いつもそんなこと思ってましたよ。自分で書いた曲じゃなくて、そういうありモノの自分のルーツみたいな曲をやれればいいなあってね。もうB'zを始めるよりずっと前からそんなこと思ってたけど、それはなかなか具体化しないじゃないですか。今こういう状況があるから具体化するってところがあるから。

●確かに、B'zの松本さんだから出来るっていうところはありますね。じゃあ、収録されてる一曲一曲について聞いていきたいんですが、まずオープニングがモントローズ（注1）の「I GOT THE FIRE」。73年にリリースされた時の日本語のタイトルは、「灼熱の大彗星」でしたよね（笑）。

M：あ〜、そうだったよね（笑）。

●この曲との出会いは？

M：これはね、高校1年の時、友達のバンドにすごい上手なバンドがいて、彼らがやってたんですよね。それでそのシングル盤を借りて知ったんですけど。

●この曲でギターを弾いてるロニー・モントローズ（注2）には、何か特別な印象ってありますか。

M：僕の印象はこの曲にしかないんですよね。アルバム自体もこの曲以外はあんまり聴かなかったし。

●松本さんのバージョンは、ギターに関してはオリジナル同様オーバーダビング（注3）なしですよね。最近音楽シーン全般に音を詰め込んでいくっていうところがあるんで、こういうレコーディングの方法って新鮮だったりするんですか。

M：そうですね。B'zでも昔はギターソロの時に絶対にバッキングギター（注4）を入れたかったんだよね。でも、何がきっかけで気がついたのか忘れたけど、曲によってバッキングあった方がいいのと、バッキングがあることでフレーズがボケてしまう場合があるってことが分かって。でね、B'zも、バッキングが入ってない曲は結構出てきましたよ。

●すき間がカッコいいってことありますよね。

M：そうですね。この曲は、とにかく原曲に忠実にってことで。

●この曲のドラムはスライの樋口さんで、オリジナルより重くてカッコいいドラムという印象ですけど、樋口さんとはかなり古くからの知り合いなんですか。

M：うん。もうすごい古いです。彼がラウドネスにいたころからですね。

●彼が今回レコーディングに参加したのは、やっぱり松本さんの方からアプローチして？

M：そうです。ちょうどそういうことやるんだけどって、一緒に飲んでる時か何かに話したんですよね。どんな曲がいいかなあとかいう話をしてた時に、樋口さんが最初に「I GOT THE FIRE」がいいんじゃないかって言って、それで僕も思い出したの。そういえば昔やったなあって。で、じゃあそれやろうかって話になって。この曲は収録曲の中で一番最初に録った曲なんですよ。

D・カヴァデールの歌を聴いて、初めてボーカルっていいなって思ったね

●次の曲はホワイト・スネイク（注5）の「FOOL FOR YOUR LOVING」。今回のカバーの中にはデイヴィッド・カヴァデール（注6）が歌っていた曲が二曲あるんですけど、結構あのボーカリストが好きだからっていう理由もあるんじゃないですか。

M：大好きですね。最後に入ってる「MISTREATED」なんかは、ギター始めたころってギターしか聴かないじゃないですか。歌なんかどうでも良くて、リフの方が大事だったり。でも、「MISTREATED」聴いて初めてボーカルっていいなと思って歌も聴くようになった。だから今でもカヴァデールは大好きだね。

●松本さんがボーカリストに求めるものって何なんでしょうね。

M：特にない（笑）。好きなタイプっていうのはあるけどね。海外のギタリストが作曲って書いてあるほとんどが、作ってるのはリフであってさ、メロディーはボーカルのヤツがフェイク（注7）しながら付けていってるケースが多いと思うんだよね。そういうフェイク・ラインとかもすごく好きだし。

●今回のアルバムで歌っているボーカリスト二人に関しては、とにかく好きなボーカリストだからということで。

M：そうですね。それに生沢さんがいなかったらこのアルバムは出来なかったからね。

●僕が何といってもうれしかったのは、久しぶりに人見元基さん（注8）の声が聴けたこと。

注釈

1 モントローズ
ロニー・モントローズというギタリストが73年に結成したアメリカンハードロックバンド。音はハードだけどスカッとそう快で胃にもたれない。松本氏はこの曲のハードロックのスリルを満載したギターパートにいかれたのでしょう。収録アルバムは『ペーパーマネー』。

2 ロニー・モントローズ
モントローズというバンドが自己の欲求を追求するために結成したバンドだという所は、バンド名を見ても明確。彼はロック好きのツボを心得ていて、ドキドキワクワクさせてくれるギターを聴かせる。

3 オーバーダビング
レコーディングの時、音を重ねて録音すること。この曲で松本氏のギターは一本しか聴こえてこないから、ギターをオーバーダビングしてないってこと。その善しあしはともかく、ライブでもこのまま曲を再現できるってことだ。

4 バッキングギター
リードギターのパートなどで、音の厚みを失わないように後ろで弾かれてるリズムギター。音のすき間があくっていうのは、少し寂しくもあるが、男気があってカッコよくもある。その判断は、この曲を聴いてからご自分で…。

5 ホワイトスネイク
ハードロック界を代表するバンド、ディープ・パープルにいたボーカリスト、デイヴィッド・カヴァデールがパープル解散後に結成したバンド。初期のサウンドは、リズム＆ブルース色が濃くて、「大人」って感じもするが、この曲が収録されたラストアルバム『スリップ・オブ・ザ・タング』あたりではブルースとポップとハードロックが巧みに融合され、B'zが『The 7th Blues』で聴かせた世界観と同質のものを感じないでもない。

6 デイヴィッド・カヴァデール
松本氏のフェイバリットボーカリストというからには、ただのボーカリストじゃない。ハードロック界屈指のボーカリスト。だれが聴いても彼の歌の熱さは分かるし、バラードでの霧のかかったような声は胸にジーンと来る。

7 フェイク
フェイクというのは基本的なメロディーラインを、自分なりにフィーリングでくずして歌うこと。海外のバンドでは歌のメロディーは作曲者が作った基本ラインにボーカリストが自分なりのセンスでメロディーを加えながら仕上げていくことが多いようだ。

8 人見元基
元ヴァウ・ワウのボーカリスト。その強力なノドから発せられる火のようなシャウトに肩を並べられるボーカリストはいまだにいないだろう。彼は現在、ミュージックビジネスに疲れて、好きな時に好きな歌を歌うという自由なスタンスで音楽と付き合っているらしい。でもロックファンとしてはもっと彼の歌が聴きたい。

9 ジェフ・ベック
70年代のロックシーンでギタリスト御三家などと数えられたギタリスト。彼のプレイは松本氏が語るように一種の指のトリックのようで、「これギターの音？」みたいなプレイが多いが、ノイズではなくちゃんと感情が入ったメロディーになっているのがすごい。ギターを技術ではなく、自分の感情で思うがままに歌い、しゃべらせているかのようだ。松本氏が「ハードロックじゃない」と語っているのは、この曲が収録されたアルバム『ギター殺人者の凱旋』から彼がジャズやロックをミックスしたサウンドを聴かせ始めたから。

10 インストゥルメンタル
ボーカルが入らない演奏のみの楽曲。松本氏の『Wanna Go Home』はオールインストゥルメンタルのアルバムでしたね。

11 コピー
ギターを始めたばかりのプレイヤーは、最初にCDを聴いて好きなギタリストのプレイをまねる（複製＝コピー）ことで上達

聴かなかったら、僕の今のスタイルはない

もっともっと引っ張りだしてほしいなあって気持ちがあるんですけど(笑)。

M:また、やりたいですよね。

●普段、稲葉さんっていう個性もパワーも表現者としてのマインドという意味でもすごいレベルのボーカリストと一緒にやってると、もう月並みなボーカリストでは納得できないでしょう(笑)。

M:そうですね。やっぱりメロディーとかってボーカリスト次第だもんね。

●その後は、ジェフ・ベック(注9)のインストゥルメンタル(注10)の「CAUSE WE'VE ENDED AS LOVERS」ですよね。ジェフ・ベックっていうのは、やっぱりコピー(注11)なんかで通って来たギタリストなんですか。

M:ええ。

●松本さんってハードロックからギターに入った人だから、ジェフ・ベックは最初とっつきにくかったんじゃないかと思うんですけど。

M:そうですね。結構トリッキーだしね。で、ハードロックじゃなかったじゃないですか。僕が最初にリアルタイムで聴いた時って『BLOW BY BLOW』とか『WIRED』だったから。あのころはクロスオーバー(注12)って言ってたんだけど。だから曲によってはっていう感じかな。

●この曲のイントロのチョーキングとボリューム奏法(注13)のフレーズを初めて聴いた時に「ああ、ギターってこういう表現もできるのか」って、すごく感動した覚えがあるんですけどね。実際カバーしてる松本さんのギターもすごく艶(つや)っぽいんですけど、こういう超繊細なプレイって松本さんは好きなんですか。

M:好きですね。やっぱり改めてやってみても、ホント難しいですよね。

●インストが続いて「INTO THE ARENA」。ギターはマイケル・シェンカー(注14)なんですけど、この人は、泣きのメロディーだとかドラマチックな構成だとかで人気のあるギタリストですよね。彼の場合アルコールとかドラッグにおぼれて人生がボロボロの時ほどいいギターを弾くんだという話をよく聞くんですけど。松本さんって、例えば精神的な問題がギタープレイに最悪を生んだり、奇跡を生んだりってことはありますか。

M:ああ、僕は、そういうことってあると思うよ。クリエイターの人ってみんなあると思うんだけど。私生活が良くなければ良くないほど、いいもん出来たりするんだよね(笑)。

●じゃあ、逆に私生活が楽だと。

M:緊張感がないからダメだね、やっぱり。順風満帆な生活してると。ソロアルバムの『WANNA GO HOME』を作ったころなんかはすごく辛い時期だったから、今でも好きだもんな、あのアルバム。

●あの時かなり辛い状態だったってことは聞きました。

M:今ああいう風に弾けないかもしれないもんねえ。

●じゃあ、ああいう作品をもう一度とか考えたら、わざと自分で辛いところに(笑)。

M:やだねえ、もう(笑)。でも、悲しいかな、そういうところあるんだよなあ、ホントに。

●やっぱり人間なんでそういう面があって当然だと思うんですけど、一方でプロフェッショナルみたいなことを考えた時にそういうジレンマっていうのは出てこないですか。

M:日常生活だとか、精神状態がよくない時ばっかりじゃ困っちゃうからね。

●そうですよね(笑)。僕、マイケル・シェンカーって生で何回か観たことあるんですけど、すごくギターを即興で歌わせる(注15)プレイヤーで、自分が弾いた音に自分で酔ってさらにどんどん音楽に没頭していくような印象があるんですよ。それはライブで松本さんを見てても感じる時があるんですけど、この人は、かなり大きな存在なんですか。

M:そうですね。マイケル・シェンカー聴かなかったら、僕の今のスタイルはないと思う。でもね僕、武道館で彼のライブ見たとき、もう絶対二度と見るのやめようと思ったんだよね。頭にあった、マイケル・シェンカー像がガラガラと崩れて、こんなにへたくそなんだと思ってね(笑)。調子も良くなかったのかもしれないけど。レコードで聴いてたスピード感とかが全

注釈

していく。ただジェフ・ベックのコピーはさぞ難しかったことだろう。

12 クロスオーバー
70年代後半にはやったジャズ、ポップス、ロックといった音楽をミックスした音楽スタイル。フュージョンとも呼ばれる。日本ではカシオペア、T-スクエア、ディメンションなどがこのジャンルのバンドだ。

13 チョーキングとボリューム奏法
チョーキングは、弦を弾いてから押さえている指で弦を押し上げることで音程を変える奏法。ボリューム奏法は弦をはじいた後でギターの音量を上げ、バイオリンのような音を出す奏法。この曲のイントロでは二つの奏法をミックスして、鳥のさえずりのような繊細な音を弾き出している。

14 マイケル・シェンカー
日本で人気の高いハードロックギタリスト。曲は彼がUFOという人気バンドを脱退した後に結成した、自身のバンド、マイケル・シェンカー・グループ(MSG)の1 stアルバム(タイトルは何と「神」)に収録されたインストナンバー。繊細な神経の持ち主である彼の心がすさんでいる時のプレイの泣きはこの世のものとは思えないほど。それゆえ日によってライブの出来に雲泥の差があったのも事実。ツアー中思いあまっての失踪騒ぎもよく耳にした。

15 即興で歌わせる
即興というのはその場の発想でメロディーを組み立てて弾くソロのこと。アドリブとも呼ばれる。ただ何でも弾けばいいというものではなく、曲のコードに合った音を選んで弾くことは必要。熟達したギタリストが感情を込めて弾くと、メロディーを弾いているというよりも、思わず歌わせているという表現を使いたくなる。即興には経験も年輪も大きくものを言うのだ。

16 リック・デリンジャー
ブルースをベースにしたギタリストで…、それ以外にはあまり印象はなく、いい曲を書いていいプロデュースをする人って感じ。この曲が収録されたアルバム「ALL AMERICAN BOY」のジャケットで彼は銀色の手袋をしてギターを弾いているが、当時は本当にライブで手袋着けて弾いていたらしい。名人芸だ。

マイケル・シェンカー

然感じられなかったから。だから僕もそう思われないように気をつけなきゃって思うんだよね(笑)。

●それは大丈夫でしょう(笑)。次のナンバーはリック・デリンジャー(注16)の「ROCK AND ROLL,HOOCHIE KOO」。この人はギタリストというより音楽を全体的に見る、プロデューサーっていう印象があるんですけど。

M:僕も彼のギター自体には、あんまり関心がなくて、キャッチーなリフとか曲にひかれたんだよね。最初はもっと原曲に近いファンクっぽい感じでいきたかったんだけど、樋口さんのあの独特な重いドラムでね、原曲とはまた全然違った感じになったから結果的に良かった(笑)。

●サビの所では、大黒摩季さんのコーラスが聴けて、これ聴いてても思ったんですけど、この人はどこで歌ってても分かる声だなあと。でも、すごくはまってる(笑)。

M:ああ、そうだよね。まあ、お嬢も気持ち良くやってくれましたよ(笑)。

●「MOVE OVER」はジャニス・ジョプリン(注17)ですよね。この曲と次のエディー・マネー(注18)の「LIFE FOR THE TAKING」はボーカルナンバーって感じなんで、ギタリスト松本さんが選んだっていうのは意外だったんですけど。

M:「MOVE OVER」は元基くんがやりたいって言ったんだよね。これと「COMMUNICATION BREAKDOWN」は、電話で頼んだ時に一番自分の歌が生かせるものを何か選曲してくれって言ったら、彼が選んだんですよ。でも、「LIFE FOR THE TAKING」を選んだのは僕ですよ。エディー・マネーもその曲しかあんまり知らないんだけど。すごい好きで、ギターソロはホント大好きでね。

●これはだれが弾いてるとか分かるんですか。

M:分かんないんだよね。でもすごくいいんだよなあ、あのギター。

ジミ・ヘンドリックスをホントにいいと思えたのは30過ぎてから

●続いてゲーリー・ムーア(注19)の「SUNSET」。インストの3曲を聴かせてもらうと、すごく表情は違うけれど、やっぱり泣きという要素が大切な感じがするんですけど、やっぱり歌がないものでは自分がギターで歌ってやろうという意識はすごくありますか。

M:大切だよね、でも歌ものでもね、8小節のソロでもそういう風に思うんだよね。人の曲にしても、泣いてるとか何かを語ってるソロが好きだね。

●このゲーリー・ムーアっていう人は、最近はブルースっていうロックの根っこ(注20)に向かうことでブレイクしたギタリストなんですが、松本さんはどうなんですか。もろブルースっていうのは、結構好きな方ですか。

M:最近は好きですよね。僕らはもともとブルースとか通ってなくて、ロックから入ってベーシックなブルースに逆に戻ってっていう感じ。大人になってから聴くようになったから、今はドロドロの感じもすごい好きだし。

●それって今だから聴けますよね。多分ギター弾きだしたころって絶対無理ですよね。

M:だからジミ・ヘンドリックス(注21)なんかでもそうだよね。最初はさあ、先輩達がみんなすごいすごいって何がすごいのか、ただメチャクチャにしか聴こえなかったもんね。だから、30過ぎてからだね、ホントにいいなあと思って聴きだしたのは。

●続いてフリー(注22)の「WISHING WELL」。弾いてるのはポール・コゾフ(注23)なんですけど、この曲が入ってた『Heartbreaker』っていうアルバムのプロデューサーって、B'zの「Real Thing shakes」をプロデュースしてるアンディ・ジョーンズ(注24)なんですよね。

M:あれもアンディなの?

●そうなんですよ。調べてて「ああっ」と思って。

M:僕がまだ高校生の時に、その『Heartbreaker』っていうアルバムが復刻版で出て1500円ぐらいで買ったんですよ。ポール・コゾフのギターのビブラートのことがよく音楽雑誌に書いてあって「聴いてみよう」と思って。今でも、CDで持ってるけど好きですよ、あれは。アンディなんだ…。

●(笑)全くの偶然なんですね。

M:それは知らなかった。すごいね、あの人!! 僕達が一生懸命聴いてた、いろんなアーティストと仕事してるもんな。

●すごいですよ(笑)。

M:余談なんだけど、アンディってさっき話に出たマイケル・シェンカーもやってんだよね。彼ってもう、最悪だって言ってたよ(笑)。まともに弾けないんだって。ソロなんか全部パンチイン・パンチアウト(注25)で、ものすごく細かくつないでいって「あんなのはロックンロールじゃねえ」とか言ってたよ(笑)。

●へえ~。それはドラッグとかでボロボロだからとか。

M:じゃなくて、制作に対してむちゃくちゃ細かいんだって。だから通してバァーっと弾いてるように聴こえるけど本当は違うって。アンディと話してると、結構夢を壊されるようなこといっぱい言うんだよね(笑)。

●聞きたくないような話ばっかり(笑)。ポール・コゾフのチョーキングとかビブラート(注26)っていうのは、松本さんがギターをマスターしていく段階で参考にした要素だったりするんですか。

M:あくまでも参考でしたけどね。少しビブラートが細かすぎるなあという風には思ってたからね。あれはあれで好きだけど。

●次はレッド・ツェッペリン(注27)の「COMMUNICATION BREAKDOWN」で、ギターはジミー・ペイジ(注28)なんですけど。この人の場合は、リフ(注29)作りの天才だとか、テクよりもセンスとか、テクよりもサウンドとか言われちゃうんですけど、松本さん自身は彼に対してどういう印象が?

M:よく分かんないんだよね。すごくいいのもあれば、何か大丈夫かなっていうのもあるし(笑)。ただやっぱりリフ作りとかはすごいですよね。カヴァデール・ペイジ(注30)なんか聴いて、本当にまだ健在だなあと思ったもんね。あれ久しぶりにすごくいいグループだなあと思った。ペイジ・プラント(注31)はあんまり良くわかんなかったけど。稲葉はすごい好きみたいだけどね。彼はプラントが好きなんだろうな(笑)。でも、ジミー・ペイジは僕あんまり通ってないんですよ。曲は通ったけど、ソロとかはあんまりコピーしたりしなかったね。

●松本さん自身は自分のことをリフを作る人間としてはどういう風に評価してるんですか。

M:う~ん、B'zでもリフもの(注32)の曲っていうのが出来たのがここ何年かだからね。それまではやっぱり歌メロ中心で、イントロはサビの部分を持ってくるとかね。そういうのを考えてたし。だから何年もそういうリフもの

17 ジャニス・ジョプリン
60年代最高の女性ロックボーカリスト。彼女の、パワフルで荒々しくて絶叫型の歌は、魂を吐き出してるかのようなすさまじさ。24歳の若さで麻薬によって本当に魂を吐き出してしまった激しい生き方を含めて、数々の女性ボーカリストに影響を与えている。収録アルバムは『パール』。さめた気持ちでは聴けないです。

18 エディー・マネー
76年に登場した、かげりのあるメロディーにハスキーな声が渋いアメリカン・ロックシンガー。日本でも数曲ヒットを飛ばした。この曲で松本氏がお気に入りの粘りのある泣きのソロを弾いているのは、無名のジミー・ライオンというギタリスト。収録アルバムは『LIFE FOR THE TAKING』。

19 ゲーリー・ムーア
アイルランド出身のすご腕ギタリスト。もともとはジャズ的なプレイで通受けする存在だっただけに、速弾きはとてつもなく速く、バラードは情感たっぷりに弾けるその技術は並外れている。彼はなぜか、松本氏がギターを弾いていた浜田麻里、85年のアルバム「RAINBOW DREAM」に「LOVE,LOVE,LOVE」という楽曲を提供している…これも何かの縁か?

20 ロックの根っこ
ゲーリー・ムーアはわがままな性格でバンドに定住できず、ソロアーティストになってから知名度を高め、近ごろはブルースのカバーアルバムで大成功した。根っこ(=ルーツ)という表現はロックの源はブルースであるという意。ポップスもソウルもジャズもその親父はブルースなのだ。

21 ジミ・ヘンドリックス
ロック界で唯一伝説と呼ばれる、天才黒人ギタリスト。彼がいなければ今のロックギターのスタイルはなかったと言えるほど、それまで月並みな楽器だったエレキギターを刺激的な楽器に変えた功績は大きい。彼もドラッグによって27歳でこの世を去った。松本氏が言うように少しロックファンとしての年季が入ってから聴くことを勧めたい。

22 フリー
68年にイギリスで結成されたブルースロックバンド。黒人が作り出したブルースを白人流に表現したことにより、その後のハードロックの基礎に大きな足跡を残した。ポール・ロジャースの憂いを帯びたボーカルとポール・コゾフの泣きのギターは特筆したい。収録アルバムは『Heartbreaker』。

23 ポール・コゾフ
フリーのリードギタリスト。ドロドロのブルースギターを白人流に洗練させたスタイルは、むせび泣くという表現がぴったりの繊細なギターを聴かせた。彼もドラッグが原因で74年、ツアー中の飛行機の中で心臓麻痺を起こして帰らぬ人となった。

24 アンディ・ジョーンズ
インタビューにあるとおり、B'zのニューシングルをプロデュースした人。レッド・ツェッペリン、ローリングストーンズ、ヴァン・ヘイレン等とのレコーディングなどで有名。洋楽ロックを聴いてきた人間にとって、B'zと彼の組み合わせは夢のようでもある。

25 パンチイン・パンチアウト
録音されている音の一部を細かく差し替えるときに使う編集技術。これはマイケルがソロを一度に弾いてしまわないで、何回も細切れに録音したものをつないで一つのソロにしているという秘話。

26 ビブラート
弦を押さえている指を上下に細かく揺らすことで、ギターの音が揺れ、歌で言うとこぶしのような効果を出す。ポール・コゾフと言えばビブラートの代名詞になるくらいの人。ただ松本氏は彼の揺れが細かすぎていまいちの様子。もっとダイナミックなビブラートが好みなのは彼のプレイを聴くと理解できる。

27 レッド・ツェッペリン
ギタリスト、ジミー・ペイジによって68年に結成されたイギリス最高のハードロックバンド。ブルースやトラディショナルフォー

って作ってなかったよね。
●ギターリフって、歌メロなんかよりも他のものに似通ってしまいやすい要素なのかなっていう気がすごくするんですよ。これだけ世の中にリフがはんらんしてると、他と違うようなリフを作ることって結構、難しいのかなあって。そういうのってクリエイターの人にとっては、苦労なんでしょうね。
M：（笑）そうですね。出来てみると「あっ、これ何かに似てる」っていうのがよくある。
●人から指摘されたらショックだったりして（笑）。
M：人のはね、あんまり気になんない。もう、だってそういうのはさあ、その人の感覚だから。似ていることが良かったりもするしさ。
●それは確かにそうですね。この「COMMUNICATION BREAKDOWN」のオープニングに入ってる瓶の栓をポンと抜く音って、人見さんが犯人らしいですね（笑）。
M：ああ。あれね、元基くんってレコーディングの時ずっとワイン飲むんだよね。飲まないと歌えないんだって。だからスタジオに来た時も、「このへんに酒屋ある？」とか言って自分で買いに行ってワインを持ってきて、録ってる間ずーっと飲んでんの。それで、「そこからもう一回！」とかってやってる時にさ、しょっちゅう栓してさ、また抜いて飲むからその音がポンポンポンポン入るの（笑）。で、それ面白いから頭に付けようって。
●やっぱり飲めば飲むほどにエンジンがかかってくるんですか。
M：みたいですよ、あの人は。ツアーの時もずっと飲んでやってたんだってね。レコーディングでも絶対飲むって。飲まないと歌えないって言ってたね。
●松本さんのアルコールとの関係はどうなんですか（笑）。
M：僕は飲んでやる時たまにあるけど、基本的にはダメだね。終わってから飲む方がいいよ。
●飲むといい方向にはいかないと。
M：うん。B'zでは飲んでやったことはまずない。ライブハウスでやる時はね、少し飲んだりする時あるけど。基本的には飲まないですね。

僕、日本のロックのカバーもやってみたいんだよね

●そして最後、ディープ・パープル（注33）の「MISTREATED」。このギタリストのリッチー・ブラックモア（注34）もすごくリフを作るのがうまい人ですよね。ブルースの要素もあるけど、クラシックの要素をうまい具合に取り入れてやってる人で、やっぱりギターソロでもリフでも印象に残るものがすごく多くて。エレキギターを始めたばかりの人は必ずコピーしましたけど、この曲も当時松本さんはコピーしたんですか。
M：だいたいですね。最後のソロが延々長いじゃないですか。あれはね、やっぱり出来なかったんですよ、昔。それで、あえて今回ちゃんと聴いてコピーをして、出来るだけ原曲と同じようにやりたいなと思って。結構似てるでしょ（笑）。
●他にも彼の曲ってコピーしました？　「ハイウェイスター」とか「スモーク・オン・ザ・ウォーター」（注35）とか？
M：そうですね、しましたよ。
●ハードロックとクラシックの関係ってどう思いますか。
M：どうなんでしょうね。うちの両親はすごいクラシック好きだったから、ディープ・パープルはすごく素直に聴いてたね。「バーン」（注36）なんか聴いてすごくいいって言ってたから。
●バッハの要素が出てるなあとか思われたんでしょうかね。
M：うちの親はバッハ系のあんまり暗めのやつは聴いてなかったけどね。
●でもそういうバックボーンがあるってことは、松本さんのギタープレイの中でもクラシックっていうのは大きな存在なんですか。
M：僕はリッチー・ブラックモアを通してとかね。そんな程度ですよ。それよりも作曲家としては結構あるかもしれない。
●「LOVE PHANTOM」のオープニングでは、ゴージャスでクラシカルなオーケストレーションとか出て来ましたもんね。
M：ああ、あれは楽しかったなあ。
●リッチー・ブラックモアって一時期ステージでギターを壊すのが売りになったじゃないですか。ああいうパフォーマンスってどう思いますか。

ク、カントリー、ファンクなどを飲み込んだその音は、ヘビーメタルロックの原型となったとも言われる。ボーカリストの一つのスタイルを作った、最高のボーカリスト、ロバート・プラントの野性的かつパワフルな成分は、B'zの稲葉氏にも確実に何かを残している。バンドはドラマー、ジョン・ボーナムの死をもって80年に解散。収録アルバムは『レッド・ツェッペリン』。

28 ジミー・ペイジ
レッド・ツェッペリンの音楽的リーダーでギタリスト。プレイヤーとしては疑問視する声もあるが、楽曲の中で編曲や音作りなど、常に音楽的実験を繰り返し、様々なロックの形を生み出した。松本氏は彼にそんなに思い入れはないようだが、そのセンスには得る物があったようだ。

29 リフ
低音の弦を使った（単音または2音の）短いフレーズの繰り返し。ハードロックナンバーの核となる要素。

30 カヴァデール・ペイジ
ジミー・ペイジがツェッペリン解散後、数年を経て93年に松本氏のフェイバリットボーカリストであるデイヴィッド・カヴァデールと結成。クオリティーの高いハードロックアルバムを発表し来日も果たしたが、アルバム一枚限りに終わった。ツェッペリンの焼き直しとか賛否両論が巻き起こったのは、注目度の高さゆえ。

31 ペイジ・プラント
ジミー・ペイジがカヴァデール・ペイジ解消後、94年にレッド・ツェッペリンのボーカリストだったロバート・プラントと結成したユニット。あくまでも再結成ではないらしいが…。松本氏はカヴァデールがいないのでいまいち関心なさそうだが、稲葉氏はお気に入りのようだ。

32 リフもの
B'zの場合は、メロディーを大切にということで、歌のメロディーから曲を作ることが多かったが、「The 7th Blues」あたりから、リフから曲を作るハードロック的なアプローチも顔をのぞかせているようだ。こうしてできた曲を〝リフもの〟と言ったりする。

33 ディープ・パープル
68年にイギリスで結成。このころ結成されたロックバンドの多くはブルース色が濃かったが、彼らはクラシックの要素をうまく取り入れ、少し知的な雰囲気も感じさせた。ひずんだオルガンとリッチー・ブラックモアの弾くギターの絡みが最大の武器だった。74年そこに3代目ボーカリストとして参加したのが、デイヴィッド・カヴァデール。その彼が松本氏の歌への関心を目覚めさせたわけだ。

34 リッチー・ブラックモア
覚えやすく、カッコいいギターリフや印象的なリードプレイの数々を世に送り出した彼はクラシック作曲家J・S・バッハやジミ・ヘンドリックスに影響を受けたギタリストだ。アルバム『紫の炎』に収録された、この「バーン」のリフも、マスターすると「ギターうまくなったかな？」なんてうれしくなる〝おいしいリフ〟だ。

35 「ハイウエイスター」とか「スモーク・オン・ザ・ウォーター」
「バーン」と同じようにギター初心者が必ずコピーすると言われていたナンバー。たくさんの人にコピーされるということは、その曲がいかに優れているかというあかしである。

36 「バーン」
「バーン」の間奏にはオルガンとギターによるバッハ的なコード進行とメロディーのソロが登場する。松本氏のご両親はこのあたりに関心を持たれたのではないだろうか。

37 ハモンドオルガン
電気オルガンの一機種。ディープ・パープルが、それまでは上品に使われていたこの音をひずませて使ったことで、ハードロック＝ハモンドオルガンというスタイルができた。B'zの「LIVE-GYM '96 spirit LOOSE」ツアーでは以前にも増してかなりの曲でこの音が活躍。サウンドにほこりっぽさを生み出している。

M:う〜ん…ああいうこと最初にやったのってジミ・ヘンドリックスでしょ。あれは、もう頭がブッ飛んじゃってるから自然に出てきた行為だと思うんだよね。で、そういう風になる時の気持ちっていうのは分からないでもないんだけど、まあリッチーぐらいからかなあ、だんだんショー的な要素になっちゃったでしょ。だから本当にそういう気持ちになってやってれば、そういうのもいいと思うんだけど、僕は普段あんまりそういう気持ちにならないから。

●例えば、ステージの上でいらだちが頂点に達してギターをたたきつけそうになったりとかはないですか?

M:投げたことありますよ。やっぱりローディーとやりとりしてて、ミスが多くて、何の時か忘れちゃったけど、投げちゃったことある(笑)。あと、渚園の時はちょっとショー的な意味合いでやりましたけど。

●ギターと若干はずれるんですが、この「MI-STREATED」では、ハモンドオルガン(注37)の音で結構いい味が出てるんですけど、今回のB'zの最新のステージでもハモンドオルガンの音が以前より耳に入ってくる気がしたんですよ。

M:やっぱりそれは増田(隆宣)くんの個性でしょうね。元々はああいう音がほしくて、増田くんに入ってもらったし。あとは今、彼がレコードに入ってなくてもここはオルガンとか自分でいろいろやってるみたいだから。

●それは今松本さんが求めてる音でもある。

M:そうですね。

●今回これだけ曲がセレクトされてるんですけども、やりたいって思ってたのにもれた曲は結構あるんですか。

M:ああ、それはありますよ。

●例えばどういう曲(笑)?

M:具体的にこれって言うよりも、僕は日本のロックのカバーもやりたいなと思うんだよね。カルメン・マキ&オズ(注38)とか紫(注39)なんかもそうだし。いい曲あるんですよね。だからああいうのも僕らは当時聴いてたから、そういうものもやってもいいなあと思ってるんですけどね。

●洋楽で言うと、グランドファンク・レイルロード(注40)とかエアロスミス(注41)なんかも聴きたいと思うんですけどね(笑)。

M:(笑)いやー、なかなか歌えるシンガーがいないんだよね。キッス(注42)とかもすごいやりたい曲たくさんあるんだけどね、なかなかそういう曲にはまるシンガーがいない。やっぱりどっちかっていうと、今回のは元基くんと生沢さんがはまりそうな曲が多いでしょ。

●確かにそれはありますね。でも、シンガーが見つかればそういう可能性も。

M:そうですね。もっと幅を広げられるからね。

●では、最後にこのアルバムは松本さん自身が楽しんだっていうのはかなり大きい要素だと思うんですけれども、それ以外にロックファンとしての松本さんからファンへのメッセージが込められているものだと思うんです。何かその辺りでコメントがあれば。

M:まあ、B'zというバックボーンがあってこういうことをしてるから、たくさんの人がこれを買って聴いてくれるっていうのはあると思うんでね。だから僕自身もそういうものを最大限に利用して、こうやってアルバム作れるんだけども。今、邦楽のロックにたくさんいいバンドもいるし、言葉が分かる邦楽の中で間に合っちゃってるんだけども、それを作ってる人達はこういうものを通ってきて出来てるわけじゃない? そしてそれ自体いい音楽なわけだから、知らないよりはたくさんいいもの知ってた方がいいじゃないですか。だからこういうものにも耳を傾けて、ああこれもいいなあ、あれもいいなあなんて思ってくれたと思いますよ。B'z最高最高って言うんじゃなくて、こういうもんもありますよっていうのを一作り手として提供してみたかったんだ。

●僕も松本さんは、B'zのギタリストでクリエイターでっていう部分がいつも頭にあったんですけれど、今回はやっぱりロックファンっていうのが前面に出てて聴いてて気持ち良かったです(笑)。

M:もう一リスナーですね(笑)。

●B'zのアルバムはもちろんなんですが、次のこういうカバーも楽しみにしてます。

38 カルメン・マキ&オズ

ジャニス・ジョプリンに多大な影響を受けた女性ボーカリスト、カルメン・マキを中心に72年に結成。ヘビーでドラマチックなハードロックサウンドを聴かせた。デビューアルバムはそれまでの日本ロック史上前例を見ない、十万枚を超えるセールスを記録し、ライブでもいち早くライティングに凝っていたというから、メジャーJロックシーンのルーツ的存在と言えるのかも。

39 紫

75年、沖縄からデビューした本格的ハードロックバンド。紫は英語でパープル。ここからもあのディープ・パープルに強く影響されたバンドであることがうかがえる。サウンドもまさにその通りで、ステージでは常にパープルのカバーも演奏していた。松本氏もやはりパープルを通して紫の音に触れたのではないだろうか。

40 グランドファンク・レイルロード

69年、アメリカで結成されたハードロックバンド。アメリカ人の気質を表すかのような、明解で脳天気なサウンドに、イギリスのレッド・ツェッペリンに対抗するアメリカンバンドと騒がれ、70年には世界一音の大きなバンドとしてギネスブックに載ることとなる。松本氏はこういうそう快なサウンドも好みのはずだ。

41 エアロスミス

超野性的ボーカリスト、スティーブン・タイラーをフィーチャーし、70年に結成された毒々しく不良っぽい音を聴かせるハードロックバンド。このイメージとサウンドが世界に向けて放ったインパクトは強力で、エアロスミスの影響を喜んで認めるバンドも数多い。ガンズ&ローゼス、そしてB'zもきっとその一つだろう。稲葉氏はフェイバリットボーカリストの中にこのタイラーを挙げるのではないだろうか。

42 キッス

72年ニューヨークでデビュー。サウンドはシンプルでキャッチーなロックンロールだが、派手なメイク(素顔は全く分からない)とステージで火を吐いたりという漫画的パフォーマンスでも人気を呼んだ。メンバーチェンジなどに紛れてメイクを落とし素顔を公開してからは、いま一つパッとせず、今年オリジナルメンバーで再びメイクをしてワールドツアーを行うらしい。松本氏はもちろん曲にひかれているのだ。

企画アルバム検証

CDショップに行くと、各アーティストのオリジナルアルバムとは別に、"企画アルバム"というものを目にすることがある。それらは、オムニバスアルバム、カバーアルバム、トリビュートアルバムなど様々な名前が付けられているが、オリジナルアルバムに比べるとほんの少し肩身が狭い。いろんな人が集まっていてだれのアルバムと断言出来ないためか、あるいは"企画アルバム"ということでレコード会社の戦略や売れるための企画ものといったマイナスイメージがチラつくためだろうか。まあ、確かに単なる戦略ものの作品も横行しているので、そんなイメージを持たれてしまうのも仕方がないが、本物の"企画アルバム"は、しっかりとその企画の意味を持っているのだ。

例えばカバーアルバムを、「アーティストが他のアーティストの曲を歌っているアルバム。オリジナルじゃないから、つまらない〜!」と思っている人もいるのではないだろうか。しかしカバーアルバムには、その選曲にアーティストのルーツがあったり、自分の得意ジャンルとは違う分野に挑戦したいというもくろみがあったりして、オリジナルアルバムとはまた違った魅力にあふれている。またリスナーには、自分の好きなアーティストがカバーすることで、全く知らなかった名曲に触れ、自身の音楽性の幅を広げるチャンスも与えられるのだ。

それぞれの企画アルバムが持つ本当の意味を知っていれば、各アルバムをまた違った趣向で聴けるはずだし、もっと楽しむことも出来るはず。さらにその企画の趣旨を知ることで、関心のなかったアーティストに目を向ける機会が生まれるかもしれない。

とにかく企画アルバムは、けっしてオリジナルアルバムに引けを取るものではない。ただし、本物とニセモノが存在し、作品は内容を問わずはんらんしているので、見極める目は養った方がいいだろう。

そこで、今回のフィーチャーは企画アルバムを大検証! 各アルバムの持つ意味から、楽しみ方、それぞれの名作、珍作までを紹介し、最後には本誌編集部で仮想企画アルバムを考えてみた。これを読めば、企画アルバムの魅力が分かり、君の音楽の楽しみ方がまた一つ増えることは間違いない。

企画・構成　ジェイロックマガジン
all direction by J-ROCK magazine
イラストレーション　山木俊幸
illustration by TOSHIYUKI YAMAKI

feature.1

Omnibus album

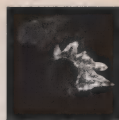
複数のアーティストの曲が一枚に収められているオムニバスアルバム。その複数のアーティストが一堂に集うというコンセプトにはいろいろなケースがある。中でも一番多いのはバンドカタログ的な意味を持つものだろう。それも最近ではインディーズバンドを集めたものが圧倒的で、存在は気になるがアルバム購入を思い切れないバンドや、まだ正式な音源をリリースしていないバンドなどを知るためには最適なアイテムだ。中には『EMERGENCY EXPRESS』のシリーズのように、収録したジキル、ガーゴイル、黒夢などのバンドがメジャー進出を果たし、マゼラン(現フェーム)、スウィート・デス(現メディア・ユース)、ロゼ・ノアール(現ソフィア)などの解散したバンドのメンバーが新たな展開を見せてくれることもあるので、そんなダイヤモンドの原石のようなバンドを探究するのもいいかもしれない。しかし、音源を出す実力を付けていないバンドが話題性だけで収録されているケースも多く、収録バンドの実力差が歴然と現れていたり、すべてがヘボバンドという最悪の駄作や、内容やコンセプトよりも営利目的が鼻につくものも目立つ。

サウンド的に同じ系統のバンドを集めたアルバムも多く、古くはラフィンノーズ、ギズムなどのパンクバンドを収録した『アウトサイダー』、Xやサーベルタイガー(X加入前のHIDEのバンド)などのヘビーメタル、ハードロックバンドを集めた『HEAVY METAL FORCE』から、最近では近藤房之助や永井隆らの大御所から春名俊希などの若手ブルース系アーティストを収め、さらに稲葉浩志や大黒摩季らが参加した『J-BLUES BATTLE』などがある。これは、自分の好きなジャンルを選りすぐって買えるので、新たに興味がわくアーティストやお気に入りとなる曲に出会えるかもしれないし、よっぽどひどい作品でなければ駄作と思うようなこともないだろう。

他にもジャンルなど関係なく単純にヒット曲を並べたものや、所属レーベルのアーティストを収録したレーベル紹介的なものや、『DANCE 2 NOISE』のようにアーティストやバンドが通常の形態で参加するのではなく趣味や実験的なサウンドを披露するもの、ギタリストなどのプレイヤーをフィーチャーしたセッション集、特定年代のシーンを振り返ったもの、「思い出の…」とタイトルに付いていそうなナツメロ集と様々なケースがある。サウンドトラックアルバムでも複数のアーティストが起用されオムニバス形式になっていることが多い。例えば人気TVアニメ番組『スラムダンク』の歴代の主題歌を集めた『スラムダンクテーマソング集』は、大黒摩季、ワンズ、ザードなどのヒット曲が一枚にパッケージされている。

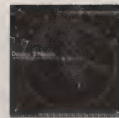
いずれにしてもオムニバスアルバムというのは、一枚でいろんなアーティストの曲が聴け、楽しむ(嘆く)ことが出来る存在であることには違いない。

[70'sウエスト・ジャパニーズ・ロック・シーン]

当時は"インディーズ"という言葉などなかったが、これは70年代の関西インディーズシーンで活躍したバンドの当時の音源を集めたオムニバスアルバムである。「このころはまだ生まれていない」という人も多いかと思うが、その後ノヴェラへと発展する"シェラザード"やすご腕ドラマー菅沼孝三(現チャゲ&アスカバンド)が在籍した"カリスマ"など伝説となったバンドが収録され、20年前のインディーズシーンのレベルの高さを物語っている。

[ALTERNATIVE SUN]

新世代のアートロックとも言えるアーティスティックで美意識を極めたサウンドや、アバンギャルドなナンバーをコレクションしたオムニバスアルバム。ロック・オブ・ロマンスや、ジル・ラヴズ、ニウロティック・ドールなどインディーズシーンにおいて、時代の流れに左右されることなく自分達の目指すサウンドを追及し続けているアーティストばかり10組がセレクトされ、彼らの放つ楽曲の強烈な世界観には、ただ圧倒されるばかり。

[J-BLUES BATTLE Vol.1]

Jブルースの中心である大阪から発信された、「The Blues is Roots of Rock」をコンセプトとしたオムニバスアルバム。稲葉浩志、だりあ&倉田冬樹、近藤房之助といったツワモノや、春名俊希やAMGの千葉恭司&団篤史などの若手アーティストらが、往年のブルースの名曲を自分流にリアレンジしてカバーしている。今年の6月には「Vol.2」も発表され、大黒摩季、永井隆、AMGといった豪華アーティストが参加。

[DANCE 2 NOISE 001]

シャフト、星野英彦のソロ、ハムレットマシーン(ISSAYのユニット)など、このアルバムでしか聴けない個性的なユニットが満載。タイトルに「001」とあるように、以後シリーズ化され、櫻井敦司のユニットやSUGIZOのソロ、hide&J&INORANという最強ユニットなどを収録し、バンドで参加したザ・マッド・カプセル・マーケッツなども、遊び心をふんだんに取り入れた実験的な曲を提供している。

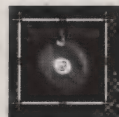
[EMERGENCY EXPRESS]

89年にリリースされたインディーズバンドのオムニバスアルバム。第一弾はデビュー前のガーゴイル、かまいたち、ジキルといった個性あふれる強力なバンドを集め、その後も毎年のように有望インディーズバンド(黒夢、アインス・フィア、シャム・シェイドなども収録)を集めては発表している。今年の4月にはプロデューサーに元ジキルのEBYを迎え、注目株のマスケラなどを収録した『EMERGENCY EXPRESS 1996』がリリースされた。

[J-NOW]

ヒットソングをコンピレーションしたオムニバスアルバム。「豪華15アーティストのヒット曲を収録した強力アルバム」とクレジットされているだけあって、黒夢の次にスチャダラパーが来て長渕剛という曲順はすごい。この手のアルバムにクオリティーを求めてはいけないが、洋楽アーティストのヒット曲を集めた同企画のアルバムが好評だからと言って、そのまま邦楽に置き換えるだけでは、ちょっと安易過ぎるのでは?

[HEAVY METAL GUITAR BATTLE]

北島健二(現フェンス・オブ・ディフェンス)を始め、B'z結成前の松本孝弘、筋少加入前の橘高文彦、ブリザード時代の松川敏也(現ツインザー)という個性派メタル系ギタリストばかり四人をコンピレーションしたオムニバスアルバム。各プレイヤーが自分の持ち味を遺憾なく発揮し、期待通りの楽曲を聴かせてくれる。特に松本のナンバーはB'zやソロとはまた違った表情を見せているのだが、残念ながらこのアルバムは現在入手困難だろう。

[ジェスターズ・ブレイン]

最近、関東や名古屋勢に押され気味で、今一つ元気が感じられない関西インディーズシーン。「最新関西ロッカーズカタログ」という文字が帯に輝いている本作は、そんな状況を打開すべくリリースされた、関西で活躍中の5バンドを収録する大阪発のオムニバスアルバムである。ソロアルバムが好評なSADIE率いるジュビリーや人気上昇中のキョウマイなど、まだまだシーンを振り回すには力不足だが、可能性を感じさせてくれる。

[TURN OVER"PEACOCK"VERSION]

いわゆる"ビジュアル系"と呼ばれるバンドを集めたオムニバスアルバム。人気バンドから発展途上バンドなど様々なバンドが参加しているものの、「練習してる?」「こんな曲を半永久的に残るCDに収録して恥ずかしくないの?」と思ってしまう連中も多く、人気バンドのために寄せ集めで作ったような印象も受ける。こう言うと面白いサウンドを聴かせるバンドがかわいそうだが、オムニバスにはこんなアルバムに出くわすこともしばしば。

[LEMONed]

XジャパンのHIDEが集めた、不良品だったもの(LEMONed)の集合が、このカタログCD。HIDE自身のソロは当然として、海外で評価が高いゼペット・ストアや元黒夢と元ストロベリー・フィールズという肩書を持つビニールなど個性豊かなバンドが収録されており、ネオアコ、インダストリアル、パンクなどサウンド的にはバラバラなのだが、そこからはHIDEの選ぶ「カッコ良さ」や「面白さ」の基準が確かに見える。

[Royal Straight Soul Ⅲ Vol.1]

ロック史上に残るスティービー・ワンダーやビートルズなどの名曲をレゲエサウンドで聴かせるという企画アルバムだが、参加メンバーがすごい。上杉昇、森友嵐士、生沢佑一、片山景嗣などの豪華なアーティストが名を連ね、このシリーズの『Vol.2』でも坂井泉水、川島だりあ、浜口司らが参加しているのだ。その『Vol.2』と『Royal Straight Soul Ⅱ』に、デビュー前の大黒摩季が参加しているのは有名な話である。

[ARIOLA MEETING 1995~MEET THE TOOLS~]

デッド・エンド、デランジェからXジャパンのTOSHI、デルジベットなどが所属するアリオラレーベルが、所属アーティストの楽曲をタイプ別に分けてリリースしたオムニバスアルバム。本作はインストゥルメンタル集でPATA、元デッド・エンドのYOUなどのナンバーを収録し、さらに吉田光、室姫深(現ブラッディー・イミテーション・ソサエティーの児島実)らのスペシャルメンバーによってレコーディングされた曲も収められている。

feature 2 cover album

あるアーティストがいろんなアーティストの曲を独自の解釈によってリアレンジし、一枚の作品として完成させたカバーアルバム。その選曲基準は自分をロックの道へと導いたアーティストの楽曲や、衝撃的な影響を受けたり、昔必死になってコピーしたという特に思い入れの強いルーツ的な曲であるというケースが多い。しかし、他にも憂歌団の『知ってるかい!?』のように畑違いのアーティストの曲で自分のキャラクターをどこまで出せるかといった挑戦や、シンガーとして歌ってみたい衝動に駆られた曲をカバーしたりと、その選曲にはいろんなもくろみが込められており、通常のオリジナルアルバムとは違った角度からそのアーティストの持つ音楽性というものが見えてくる。

例えば大槻ケンヂの『ONLY YOU』。ソロライブをやりたくて、その経費をねん出するためにソロアルバムを企画し、しかも自分で詞も曲も書きたくないという理由でカバーアルバムにしたらしい。思わず「おいおい」と突っ込みたくなる不純な動機なのだが、選ばれた曲は大槻の音楽的ルーツを浮き彫りにし、さらに闇に葬り去られているようなアンダーグラウンドの伝説的なバンドのナンバーをよみがえらせた。その上、カバーする原曲を歌ったアーティストが、レコーディングに参加し、一緒に歌っているというのだからすごいアルバムである。この大槻のアルバムに限らず、参加ミュージシャンが、カバーアルバムならではの興味深い布陣だというケースも少なくない。

また、ISSAYの『FLO-WERS』にはXジャパンのHIDE、ルナシーのSUGIZOやバクチクの櫻井&星野などの豪華な顔ぶれがバックで存在感をアピールしているのだ。そして、そこからはISSAYの交友関係や人望というのも見えてくる。これもカバーアルバムの楽しみ方の一つだろう。

c o v e r

[FLOWERS]
ISSAY

自分の書いた詞でも曲でもない、他のアーティストの作品をカバーすることによって、外側から自分を見つめたというデルジベットのISSAYのソロアルバム。ピーターの「夜と朝のあいだに」や沢田研二の「時の過ぎゆくままに」など60、70年代の歌謡曲を退廃的なロックナンバーとして再生し、彼の毒々しいまでのキャラクターが見事に生かされた、ソロアルバムと呼ぶにふさわしいカバーアルバムとして完成している。

[ONLY YOU]
大槻ケンヂ

このアルバムでは、自律神経失調症に苦しむ大槻ケンヂの心をいやした楽曲、彼が10代のころに聴いていた邦楽ロック、ニューウェイブの名曲の数々がカバーされている。インディーズブーム全盛期に活躍していたINU、じゃがたら、スターリンといった、いわばJロックのアンダーグラウンドで名を博したバンドの持つパワーと、それに負けない大槻のキャラクターのすさまじさを痛感する作品だ。

[HEART OF STONE]
近藤房之助

近藤房之助のソロデビューアルバムは、彼の愛し続けたナンバーがオンパレードのライブ盤。しかし、カバーする楽曲はブルース一辺倒というわけではなく、B.B.キングは当然ながら、ローリング・ストーンズ、ビートルズ、そしてGSのスパイダースと実にバラエティーに富んでいる。それらのルーツ音楽をソウルフルに歌い上げ、彼の持つ独特のフィーリングが伝わる生々しいライブ演奏からは、等身大の"近藤房之助"が浮かび上がってくる。

[ROCK'N ROLL STANDARD CLUB]
ROCK'N ROLL STANDARD CLUB BAND

まるでアマチュアバンドさながらに自分たちのルーツであるナンバーをコピーし、純粋にプレイヤーとしてロックンロールを楽しんでいるROCK'N ROLL STANDARD CLUB BAND。B'zの松本孝弘の呼びかけによって集まったスライの樋口宗孝、ツィンザーの生沢佑一、明石昌夫らの強者達がセッションし、自分たちが影響を受けた洋楽を現在のJロックのリスナーに継承している。

[JUKE BOX]
石田長生

単なる"思い入れ"だけでカバーするのではなく、少年期の自分の姿が投影されている曲なども選曲し、彼の履歴書とも呼べる作品に仕上がっている。例えばRCサクセションの「トランジスタラジオ」は、新しいサウンドに飢えてラジオにかじりついていた中学生時代の彼であり、ザ・バンドの「THE WEIGHT」は日本中をボロボロのバンで回っていたころの彼の姿が歌われているのだ。

[翼あるもの]
甲斐よしひろ

当時まだ未発表曲だった浜田省吾の「あばずれセブン・ティーン」やアマチュア時代のザ・モッズの「えんじ」、彼が持つ音楽性に根付いている歌謡曲のザ・ピーナッツやキング・トーンズ、そしてルーツである早川義夫や憂歌団など幅広い楽曲をカバー。甲斐バンドのライブ動員力に対してレコードセールスが伸び悩んでいた時期の作品だっただけに、彼が音楽的な方向性を再確認した重要なアルバムとなった。

feature self cover album

セルフカバーアルバムとは、過去に発表した自分の曲をリメイクしたり、他のアーティストに提供した曲を自分が歌ったりした作品のことを言い、ベストアルバム的な意味合いを持つだけでなく、そこには"曲の進化"というアーティストの意図も込められている。「曲はライブによって育つ」と言うアーティストがいるが、ライブであまりプレイされていなくても、セルフカバーされれば一度完成したアレンジを壊して新たな解釈がなされるため、曲は確実に成長を遂げるのだ。

では、アーティストは何をきっかけにセルフカバーアルバムを作るのだろうか? それにはいろんなケースがある。一番多いケースと思われるのは、バクチクの『殺シノ調べ』や現在レコーディング中のザ・マッド・カプセル・マーケッツのベストアルバムのような「昔の曲を現在の自分たちがやるとどうなるか」という実験的な試み。そして、昔の曲をアコースティックバージョンなど全く違ったスタイルにリアレンジするケース。代表曲をクラシックアレンジで聴かせる坂本龍一の『1996』もこのケースに含まれるだろう。他にはアインス・フィアの『SONG REMAINS THE SAME』やメディア・ユースの『BEAT DISC』『GROOVE DISC』のように、現在では入手困難になってしまった音源に収められていた楽曲をセルフカバーするケースなどがある。それらと少し趣が違うのが浜田省吾の『SAND CASTLE』『WAS-TED TEARS』『EDGE OF THE KNIFE』。この三枚のアルバムはそれぞれコンセプトに基いて過去のバラードを選曲、リメイクし、オリジナルアルバムと変わらない重みを持っている。

セルフカバーは、アーティスト側に成長や実績、豊富なアイデアがあってこそ初めて作品として成り立ち、それらがないアーティストがやってもバージョン違いのベストアルバムで終わってしまう。それだけセルフカバーアルバムというのは、アーティスト性の有無を問われるアルバムでもあるのだ。

s e l f c o v e r

[SONG REMAINS THE SAME]
Eins:Vier

一度、インディーズ時代に発表した曲を再びレコーディング。ライブではずっとプレイし続けてきた重要な曲なのだが、インディーズでのリリースだったため現在では入手困難な音源が収録されていたりして、ファンの熱望に応えて再び音源化された。インディーズ時代の曲をプロとなった現在の彼らがセルフカバーしただけに、バンドの成長も明確に感じ取れる。

[殺シノ調べ This is NOT Greatest Hits]
BUCK-TICK

アルバムをリリースする度に大きく変化をみせるバクチク。彼らがリリースしたセルフカバーアルバムは、シングル曲にはあまり手が加えられていないものの、それ以外の曲は「さすがバクチク」と思わせる変ぼうぶり。当時の最新アルバムに収録されていたにも関わらず、全く違う曲に思えるほどリメイクされた曲もあり、彼らが異常な速度で成長していることと、ざん新な発想を持ったバンドであることを改めて思い知らせた。

[LAUGHIN' CUNTS UP YOUR NOSE]
LAUGHIN' NOSE

昨年、約4年ぶりに再結成したラフィン・ノーズの1stアルバムは、Jロックシーンに彼らが残した「GET THE GLORY」「聖者が街にやってくる」などの不朽の名曲をセルフカバー。"再出発"の意味を込めてリメイクされた往年のナンバーは、インディーズブームを巻き起こしたころの彼らの勇姿を彷彿(ほうふつ)とさせ、商品化されたインディーズの中で衰退するパンクシーンに、ラフィンの復活を強力にアピールした。

[SONGS]
織田哲郎

ワンズの「世界中の誰よりきっと」や大黒摩季の「チョット」、ザードの「揺れる想い」などいろんなアーティストに提供した曲を、織田哲郎が自分のカラーに染め直したセルフカバーアルバム。彼が曲を提供した大黒摩季、池森秀一らがカバーされた自分の曲にコーラスで参加しているというのも興味深い。収録曲のクレジットにはビッグヒットを記録したナンバーが何曲も名を連ね、彼の傑出したソングライティングの才能を再確認させられる。

[クラシック・アベニューの飛べない鳩]
DIE IN CRIES

帯に付いている「THIS ALBUM IS NOT A BEST SELECTION」というクレジットがアルバムの内容を物語っている。このアルバムの選曲基準は"バンドの代表曲、ヒットシングル"ではなく"ライブによって成長した曲"なのだ。収録曲の中にはアレンジがほとんど変わっていない曲もあるものの、ライブで繰り返しプレイされて成長しただけあって、客席の中で体感しているような勢いを感じさせる。

[ON THE PROWL]
LOUDNESS

初代ボーカリストの二井原実(現スライ)からマイク・ヴェセーラに変わったラウドネスの二枚目となったアルバムは、バンド結成10周年を記念したベスト盤。初期の代表曲を英語バージョンにリメイクし、特に人気の高かった「DEADLY PLAYER」(原題は「MILKY WAY」)や「IN THE MIRROR」などは、二井原時代とは違った迫力を感じさせ、当時の新生ラウドネスの海外進出に向ける意気込みを伝えた。

feature 4 Soundtrack/image album

ドラマやアニメなどのTV番組や映画などのテーマソングや挿入歌を集めたアルバムのことをサウンドトラックアルバムと言う。ドラマの印象的なシーンのバックで流されていた曲を聴いただけで、そのシーンが脳裏に浮かんでしまうほど、使用される曲と映像の関係には深いものがある。そして、これが映画音楽となるともっと親密な関係となるのだ。映画という〝作られた世界〟の中で、アーティストがどれだけ持てる才能を発揮できるかに焦点が絞られるのだが、中には1本の映画の中にいろんなアーティストの曲が使用されるケースもある。

また、イメージアルバムとはサントラと違い、アーティストのイメージする情景を音楽にしたもので、アクションの『わずか1小節のラララ』(原作:くらもちふさこ)などのようにコミックスの世界を音楽に置き換えたり、物語の展開に基づいて曲を作っていくケースなどが多い。

feature 5 Remix album

既存の曲を再びマルチトラックテープからミックスダウンし直し、新しいバージョンに作り変えることをリミックスと言う。最近では原曲のボーカルだけを残して、バックのサウンドを打ち込みやオーバーダビング、サンプリングなどで再編成し、全然違うアレンジに変えてしまうケースも多い。特にテクノ、ハウス、インダストリアル系のミュージシャンは、1曲の持つ表現性を可能な限り引っ張り出すかのように、いろんなリミックスバージョンを世に送り出している。

このようなリミックス作業は、全く新しい解釈で原曲に実験的なアプローチや冒険的な遊び心を加えていくため、アーティストにハイセンスな感覚と才能、豊富なアイデアと知識が必要となってくる。また、アーティスト本人が手掛けるのではなく、コーネリアスの『96/69〈地球あやうし!!〉』のようにXジャパンのHIDEや岡村靖幸、暴力温泉芸者など他のアーティストに依頼したり、ソフトバレエのように海外のオーソリティーに託すケースもある。これは他力本願のようだが、思いも寄らないような結果を返してくれそうなアーティストを選んで依頼しているのだから、リスナーも侮れない。

しかし、リミックスアルバムはハイクオリティーな内容を誇っていても、賛否両論を巻き起こすケースがある。その例がバクチクの『シェイプレス』。海外の先鋭ミキサーが手掛けたリミックスバージョンは、まさにアンビエントミュージックで、ボーカルさえも排除され、櫻井敦司が「ニューアルバムだと思って聴いてもらった方がいい」と言ったほど、収録曲のほとんどが全く原形をとどめていない。ミックスを担当したアーティストが原曲から受けたイメージを、その曲の断片をパーツとして使って表現しており、バクチクの存在とは別の次元で曲が進化しているのだ。このようなリミックスアルバムはコアなファン以外には不評を買う危険性も秘めていると言えるだろう。

feature 6 Instrumental album

インストゥルメンタルとは歌がない曲、つまりボーカルがなく楽器だけで成り立っている楽曲のことを言う。イメージを言葉ではなく曲の展開や起伏で表現することが多いプログレッシブ・ロックや、ギタリストのソロアルバムなどにはオールインストゥルメンタルのアルバムが多い。それ以外ではもともとボーカルの入っていた曲をアーティストが新たな解釈でインストゥルメンタルにリアレンジしたり、豪華なオーケストラで演奏したりする特別なケースがほとんどだ。何年か前にはやったアーティストの代表曲をオルゴールやピアノだけで奏でたCDや、「TV MIX」や「ボイスレス・バージョン」と呼ばれるカラオケ集もこの中に含まれ、イージーリスニング(気軽にBGMとして聴ける音楽)的な感覚で楽しめるアルバムでもある。作品によってはギターなどパートが奏でる良質のメロディーや、ドラマチックな曲の展開に魅了されたりして、高いクオリティーを誇るものも少なくない。

soundtrack/image

[Merry Christmas Mr.Lowrence]
Ryuichi Sakamoto

数多くの映画音楽を手掛け、「ラスト・エンペラー」でアカデミー音楽大賞を、「シェルタリング・スカイ」ではゴールデン・グローブ賞受賞した、今や世界的なアーティストである坂本龍一。そんな彼が初めて手掛けた映画音楽は、自らも出演した「戦場のメリー・クリスマス」だ。戦争中の捕虜収容所におけるメランコリックな人間関係を美しく澄んだ音楽で表現し、映画のタイトルを耳にすれば、ラストシーンでどアップになったビートたけしの笑顔とテーマ音楽が思い出される。

[NOTHING TO REVOLUTION]
DIE IN CRIES

kyoのソロプロジェクトとしてスタートしたダイ・イン・クライズの1stアルバム。と言ってもメンバーとしてクレジットされているのはまだkyoのみで、サポートメンバーにオプティック・ナーブ(室姫深&YUKIHIROのユニット)の名はあるもののバンドとして始動したのではない。そして内容の方も曲らしきものは後に彼らの重要な曲となる「NERVOUS」だけで、後はkyoが頭の中でイメージする情景を音で表現したという実験的なもの。

remix

[FLAME REMIX]
BODY

武道館でデビューライブを飾りながら、その後突然解散してしまったボディのリミックスアルバム。リミックスとは言うもののテクノやダンスサウンドに変わってしまうのではなく、原曲を崩さずいろんなエフェクトを付加することによって曲を進化させている。アルバム『FLAME』ではサウンドの勢いにボーカルが負けていたが、ここでは勢いを失うことなくボーカルが引き出され、特に「I LOVE YOU」はクレイズファン必聴。

[THE BLUE HEARTS KING OF MIX]
盗賊団

"盗賊団"と名乗る謎の軍団。そのメンバーのクレジットにはピチカート・ファイブの小西康陽、佐久間正英、コンフュージョンのCMJKなどひと癖もふた癖もありそうな面々が名を連ねている。そんなツワモノ共によってザ・ブルーハーツのパンキッシュなナンバーが、ヒロトのボーカルとマーシーのコーラスを残し、ハイパービートのテクノサウンドへと生まれ変わっているが、原曲の持つ生々しい勢いはデジタル化されても消えていない。

[TMN CLASSIX Ⅰ]
TMN

93年に発表されたTMNのベストアルバム。このアルバムのプロデュースを手掛けた小室哲哉が「時代の流れの中で風化した音楽のように聴かれるのが許せなかった」とコメントを残しているように、収録された全曲(『Ⅱ』も同時発売されている)にリミックスが施され、最新鋭のサウンドを導入した93年スタイルとなっているのだ。この作品で聴けるサウンドアプローチは、現在のレイブサウンドへの足がかりとなったとも言える。

[SWITCH REMIX]
SCHAFT

バクチクの今井寿と元ソフトバレエの藤井麻輝による超強力ユニット、シャフト。彼らが発表した最強アルバム『SWITCH』には、ハウス、インダストリアル、テクノ、ノイズなどを吸収した近未来的サウンドがぎっしりと詰まっていた。そんなJロックという狭い枠の中で異端児扱いを受ける二人が作った破壊的サウンドを、さらに藤井がその突出した感性でリミックスし、進化させたのがこのアルバムだ。

[ALTER EGO]
SOFT BALLET

ソフトバレエのナンバーを808 Stateやキャバレー・ヴォルテールなどのトップ・アーティストがリミックス。それらは約4年の歳月を経ても全く色あせることはなく、まだまだ最新鋭サウンドと呼べるクオリティーを誇っている。そして何より楽曲にどんなざん新なミックスがなされていても、ソフトバレエの持つカラーというものは損なわれることなく、残された原曲の断片からも強力にアピールしている。

[re-make]
DIE IN CRIES

昨年7月に惜しまれつつも解散したダイ・イン・クライズのナンバーを、ドラムスだったYUKIHIROがリミックス。彼はマニピュレーターとしても活躍しているだけに、バンド的なサウンドは跡形もなく壊され、ボーカルさえも歌ではなく効果のように使用されている。そして変幻自在のリズムが強調されたクラブ系サウンドに生まれ変わったバンドのナンバーは、YUKIHIROの解散に対する理由が込められているかのようだ。

instrumental

[Wanna Go Home]
松本孝弘

松本孝弘のソロアルバムとしては二枚目となる本作。ギタリストのソロアルバムだからといってテクニカルで壮絶なプレイの応酬とは限らない。収録された楽曲からはB'zとは違うギタリストやソングライター、プロデューサーの表情を見せ、ボーカルではなく彼の操るギターがメロディーを歌い上げている。

[Symphonic Luna Sea Ⅱ]
LUNA SEA

ルナシーの楽曲をオーケストラで演奏したアルバム。ルナシー以外にもボウイやXジャパン、バクチクらの代表曲がオーケストラアレンジでCD化されている。幾度も聴き親しんだ楽曲でも、壮大なスケールでのシンフォニックなオーケストレーションで体験すると、また新鮮な感動と新たな発見がある。

[ICTL no 2]
K2C produce

ドラマのサントラだった前作「ICTL」に続く米米CLUBのインストゥルメンタルアルバム。リーダーのBONがプロデュースを手掛け、アーティスト不在のただの企画アルバムにはならず、内容的にもクオリティーの高い作品に仕上がっており、「君がいるだけで」など収録曲が持つメロディーの美しさに改めて感心させられるばかり。

[TV STYLE Ⅱ]
B'z

B'zのカラオケアルバム第二弾。彼らの代表曲を松本のギターをバックに歌い、コーラスには稲葉が加わり、しかもライブの臨場感を演出する大歓声が入っているという、B'zになりきりたい人にはうれしいアイテムだろう。それだけにイージーリスニングとして聞き流すのは難しく、いつの間にか曲に引き込まれ歌詞を口ずさんでしまう。

Tribute album

人にはそれぞれ大好きなアーティスト、影響を受けたアーティストがいると思うが、それはアーティストにとっても同じこと。特にギターを弾くきっかけになったり、曲に感動して作曲を始めたりと、現在のアーティスト自身に多大な影響を与えたフェイバリットアーティストは必ずと言ってもいいほど存在するだろう。トリビュートアルバムとは、そんなアーティストが自分のフェイバリットアーティスト(バンド)の楽曲を尊敬の思いを込めてカバーした作品集のこと。トリビュートとは、"尊敬、賞賛の言葉"という意味だ。

その構成は、やはりトリビュートされるアーティストが、それ相当の影響力や実力を持っていて多くの人に影響を与えているため、一枚のトリビュートアルバムの制作に複数のアーティストが賛同していることが多い。例えばディープ・パープルのトリビュートアルバムには、スライの二井原実、元ヴァウワウの人見元基、筋肉少女帯の橘高文彦&内田雄一郎、D.T.Rの藤本泰司など総勢22人が名を連ね、こうなると参加アーティストのセッションだけでも十分に興味を引かれてしまう。また、アーティストの意外な好みやルーツが発見できたりもする。曲の構成は、アーティストの好みによって様々で、いろんなアルバムからピックアップされて構成されることが多いが、例えばセックス・ピストルズなど一枚しか楽曲がないバンドをトリビュートする場合、その一枚をそのまま同じ曲順でカバーした例もあった。

そしてトリビュートアルバムの場合、注目されるのが、既存の楽曲がどう新たに表現されるかということ。これもアーティストによって様々だが、原曲に敬意を払いながらアーティストとして自分の個性で表現したり、全く違う曲のように大胆にアレンジしたり、数え切れないほど聴いて細部まで覚え込んでいる曲を完全にコピーしたりと興味深い。同じアーティストをトリビュートしたアルバムでも、表現するアーティストの手法によって楽曲の印象が全く違ってくるので、聴き比べてみるのもいいだろう。

最近は、特に海外でトリビュートアルバムが大流行で、売名行為で参加するアーティストも少なくなく、本来の"尊敬、賞賛"という意味を失っている作品も少なくない。以前は解散したバンドやそのアーティストが亡くなったことをきっかけに制作されるものが主流だったが、現役で活動しているアーティストのトリビュートアルバムが制作されるケースも出てきた。ただ、アーティストが影響を受けたということは、リスナーにもそれだけ多くの影響を与えているわけで、単なるカバーではなくその根底にある敬意の念を楽曲で楽しませてほしいものだ。

t r i b u t e

[Who do They think We are?]

海外のアーティストによるディープ・パープルのトリビュートアルバムは多いが、Jロックアーティストによるものは本作が初めてだろう。スライの二井原実からセッションプレイヤーでもある増田隆宣、菅沼孝三まで、名高い実力派ミュージシャンたちが参加し、素晴らしい技を振るったプレイで、ディープ・パープルへの愛情が込もったカバー曲を披露している。デーモン小暮と人見元基による迫力あるツイン・ハイトーンボーカルや、藤本泰司と元プレシャスの梶山章の二大様式美ハードロック系ギタリストによる競演など、このアルバムならではの豪華な組み合わせに妙味があり、実に楽しめる。

<ディープ・パープル>
69年にイギリスでデビュー。覚えやすくキャッチーなリフと、カッコいいけど神経質そうなソロを聴かせるギター、クラシックやジャズ要素が散りばめられたひずんだオルガン、そしてパワフルなボーカリストが織りなすパープル・サウンドは、日本のハードロックムーブメントの幕を開けた。彼らが74年初来日した際にレコーディングされたライブアルバム『ライブ・イン・ジャパン』が世界的にライブアルバムの名盤に数えられるのは、その演奏同様、迎え撃った観客の興奮が並外れたものだったあかしだ。当時、エレキギターで彼らの「ハイウェイスター」を弾けるだけでちょっとしたヒーローになれたのも、彼らの音楽の浸透度ゆえ。

[FLOWER IN THE DARK]

黒夢、ルナシーのSUGIZO、メディア・ユースのKIYOSHI、ニューヴォーグのCHIKA、現ビニールの福井祥史など、参加ミュージシャンの顔ぶれに驚かされる。インディーズ、メジャーを問わず現在のシーンで活躍中のアーティストが、オート・モッドの影響を受けた世代でもあるのだ。

10年の年月を経て復活したオート・モッドのナンバーは、けっして風化することなく退廃的な世界をリアルに描き出す。ジュネとCHIKAのツインボーカル、シャンソンを歌う清春、SUGIZOとKIYOSHIのギターバトルなど聴き所が多く、オート・モッドを知らなくても満足できるアルバムだ。

<オート・モッド>
80年6月にジュネが中心となり結成。初期のポップなグラムサウンドは、やがてデカダンな終末観が漂うダークなサウンドへと変化し、彼の持つ圧倒的な存在感とざん新で派手な演出によって独自の地位を築いていく。82年には元ボウイの布袋寅泰、高橋まこと、現バーソンズの渡辺貢という最強のラインナップでのライブアルバム『レクイエム』をリリースし、その地位を不動のものとしたが、ジュネは「停滞するロックシーンに未来はない」と解散を決意。85年11月の後楽園ホールのステージを最後にオート・モッドの活動は封印された。しかし、世紀末を迎えた95年、時代によってその封印が解かれオート・モッド1999として復活したのである。

仮想 tribute album

"企画アルバム"には、様々な種類があるが、その魅力はやはり「どんな企画にするか」そして「だれが何をやるか」である。多くのアーティストが参加する企画アルバムになると、レコード会社の関係や著作権などいろいろな問題が出てくるのは必至だが、アーティストの新たな魅力を発見できる刺激のある企画アルバムをどんどん生み出してほしい。そこで編集部でも、得意の独断と偏見で、聴いてみたい企画アルバムを考えてみた。

[デッド・エンド]
84年に大阪で結成。パンクとメタルを融合したアグレッシブなサウンドが話題となり、インディーズで発表された1stアルバム『DEAD LINE』は瞬く間に1万枚を売り切った。87年9月に『GHOST OF ROMANCE』を引っ提げてメジャーデビューを果たすが、メンバーチェンジの影響でサウンドが変化し、多くのファンを失ってしまう。スケール感が増したロックサウンドで新たなファンを急速に獲得していくが、90年1月の中野サンプラザで行われたライブを最後に突然解散してしまった。

「SPIDER IN THE BRAIN」
/ ラルク・アン・シエル
95年12月に大阪ベイサイドジェニーで行われたラルクのライブを体験した人は、この曲を聴けば彼らがプレイしている姿を思い出してしまうのではないだろうか。それだけに、もっと多くの人にラルク版デッド・エンドを披露してもらいたい。

「FRENZY」
/ クレイズ
ベースとドラムのコンビネーションが疾走感を生むこの曲は、飯田&菊地の強力なリズム隊でよりパワフルに、よりダイナミックに、よりエキサイティングにアレンジし、カバーしてもらいたい。ちなみに飯田は、ルーツにデッド・エンドの名を挙げている。

「THE AWAKENING」
/ 黒夢
時折、デッド・エンドのボーカリストを彷彿(ほうふつ)とさせる清春に、この喉を潰すかのようなナンバーを歌ってもらいたい。黒夢の二人のルーツにはデッド・エンドがあり、インディーズ時代にラルク・アン・シエルなどと一緒にセッションしていたそうだ。

「THE RED MOON CALLS INSANITY」
/ ルナシー
ダークなムードを漂わせ、ただならぬスケール感もあるこの曲を、デッド・エンドをルーツに挙げるルナシーがカバーすれば、もっとダークでワイルドな曲に仕上がるのではないだろうか。この怪奇幻想的な歌詞にRYUICHIの声は絶対にはまる。

「JUNK」
/ 筋肉少女帯
「ばらばらの肉体が〜」と始まる猟奇的な世界を歌いこなせるのは、大槻ケンヂを置いて他に見当たらない。速弾きやメローなフレーズを得意とするギタリストのタイプにも共通の部分があり、筋少がカバーするとどんなアレンジになるのか興味を引かれる。

「SO SWEET SO LONELY」
/ モダン グレイ
ギターが曲の世界を広げていき、ボーカルが聴く者を優しく包み込んでいくナンバー。この曲は大西貴美の透明感ある声で歌うともっと包容力が生まれるだろう。そして、趣向の凝らされたアレンジが期待できる。

「HYPER DESIRE」
/ メディア・ユース
キャッチーなナンバーだが、ハイセンスのアレンジがなされ、デッド・エンドの個性は全然失われていない。そんなアレンジをメディア・ユースが手掛けると、さらに曲が先鋭になるだろう。特にKIYOSHIがどんなギターのアプローチをするかに注目したい。

「SERAFINE」
/ デルジベット
ISSAYの描く世界とは違うものの、彼のキャラクターはこの曲の作り出す世界にははまるだろう。そしてデッド・エンドと全然タイプの違うプレイヤーがカバーすることによって、原曲とは違う新たに進化を遂げた世界が体験出来るはず。

「GOOD MORNING SATELLITE」
/ ヴァレンタイン D.C
存在感のあるボーカリストでなければ、カバーしても曲に飲まれてしまう。それだけにアクの強いken-ichiに歌わせたい。バンドの演奏力も確かなので、面白いアイデアが盛り込まれたナンバーにしてくれるに違いない。

[デヴィッド・ボウイ]
67年にアルバム『デヴィッド・ボウイ』でデビュー。72年にはロック史上に残る名作『ジギー・スターダスト』を発表し、メイクを施してアルバムの主人公になりきったステージングが話題を呼び、一気にスターダムへと駆け上がった。彼はその後もいろんなキャラクターを作り上げては壊していき、70年代のロックシーンを代表するスーパースターとして一時代を築き上げ、現在もプロデュース作業や映画出演など幅広く活躍している。

「SPACE ODDITY」
/ シャム シェイド
ツインボーカルのハモリが美しいこの曲は、CHACKとKAZUMAのツインボーカルと確かな演奏力で、この曲をより美しく、よりシリアスに仕上げてもらいたい。

「STARMAN」
/ フンズ
優しく突き抜けていくようなメロディーを上杉昇が力強く歌い、柴崎浩のギターでハードなアプローチを加えれば、現在のワンズサウンドのようなすごみを含んだドラマチックなナンバーになることだろう。

「ZIGGY STARDUST」
/ ザ・イエロー・モンキー
ミック・ロンソンを敬愛するザ・イエロー・モンキーにぜひカバーしてもらいたい。それも、インディーズ時代やデビュー当時ではなく現在の彼らにである。きっと"ボウイらしく"ではなく"イエモンらしい"アレンジでカバーしてくれるはず。

「SUFFRAGEETTE CITY」
/ T-ボラン
「SHAKE IT」ではじけたところを見せてくれた彼らだけに、原曲よりさらに軽快なロックンロールに、それも五味孝氏のギターアプローチが"軽さ"を感じさせないブルースロック風に仕上げてくれるのではないだろうか。

「ROCK 'N' ROLL SUICIDE」
/ ザ・ストリート・ビーツ
静から動へと移り変わりが重要な曲だけに、曲に負けないボーカリストに歌ってもらいたい。となると、この"叫び"のようなボーカルにはØKIが適任だろう。ビーツ流に、ビートを強調したロックンロールとしてカバーしてほしい。

「REBEL REBEL」
/ デルジベット
デルジベットならボウイのどの曲もはまると思うが、この曲をぜひともカバーしてほしい。バックが単調でボーカリストのキャラクターが浮かび上がる曲だけに、ISSAYのキャラクターなら曲に負けることなくうまく自分を表現することが出来るだろう。

「FAME」
/ 布袋寅泰
「FAME'90 remix」というバージョンがあるが、きっとボウイの大ファンでもある布袋ならさらに趣向が凝らされた「FAME'96 remix」を聴かせてくれるだろう。ギタリストであることにこだわらず独の解釈でカバーしてもらいたい。

「FASHION」
/ バクチク
ギターが自由奔放に暴れている…となると今井寿の手に委ねて、バクチクサウンドの中で、もっともっと自由自在に暴れさせてほしくなる。ボーカルの強いキャラクターが曲を飲んでしまうかもしれないので、どんなアレンジになるかが焦点になる。

「BLUE JEAN」
/ ビーズ
きっと彼らのルーツにボウイはないと思うが、ビーズのポップ性を生かした重厚なハードロックサウンドと、稲葉浩志の力強いシャウティングボーカルでこの曲を聴きたい。松本孝弘のギターがどう入ってくるかにも興味を引かれる。

[kiss my ass]

この作品は洋盤なのだが、あえて紹介したい。レニー・クラヴィッツ、アンスラックス、エクストリームという海外の有名アーティストに名を連ねて“Yoshiki and American Symhony Orchestra”というXジャパンのYOSHIKIのプロジェクトが参加しているのだ。このように海外の大物アーティストとJロックアーティストが一緒にアルバムを制作していくケースは、これまでも少年ナイフや布袋寅泰、山本恭司などがあったが、これからもどんどん実現させてほしいものだ。このアルバムでYOSHIKIは、メロディアスなハードロック・ナンバー「Black Diamond」を壮大なオーケストラと美しいピアノで聴かせている。

<キッス>
74年にニューヨークからデビューしたハードロックバンド。シンプルでハードでキャッチーなサウンドを聴かせたが、人前で素顔を見せない派手なメイク、SFチックなファッション、ヒールが20cmを超えるブーツなど、その容姿で世間の度肝を抜いた。ライブではさらにそのビジュアルが加速し、火は吹く、血は吐く(偽物)、ギターが煙を噴く、ギターを破壊すると、イメージはもう完全に漫画の世界。しかし、後の若いバンドたちにイメージの大切さを伝授した功績は大きかった。バンドはその後メイクを落とし素顔を公開して普通のロックバンドになって活動していたが、今年、オリジナル・メイク版キッスでのツアーをスタート、大きな話題になっている。

[EVERY BAND HAS A SHONEN KNIFE WHO LOVES THEM]

このアルバムも洋盤、しかも輸入盤なのだが、これは本誌でセレクトしている少年ナイフがトリビュートされているアルバムなのだ。総勢33組という海外のアーティストたちが、彼女たちのキュートな曲を思う存分に自分たちのカラーでリメイクしており、いかに少年ナイフが海外で支持されているかが分かる。参加アーティストの中にはソニック・ユースの名前もある。このように日本アーティストへのトリビュートアルバムが海外のアーティストによって作られることはまれで、多分この作品(現在は入手困難)と、7月にU. Kでリリースされる予定のボーイ・ジョージやチャカ・カーンらが参加するというチャゲ&アスカのトリビュートアルバムぐらいしかないだろう。

<少年ナイフ>
81年に山野直子、敦子姉妹と中谷美智子により結成された、もうベテランバンドとなる少年ナイフ。相変わらず、お世辞にもうまいとは言えない演奏なのだが、逆にそれが彼女たちのほのぼのサウンドにキュートさを与え、心地よいビート感を生んでいる。89年にロサンゼルスで初の海外ギグを決行すると、91年にはニルヴァーナと全英をツアー、92年はレディングフェスティバルに参加し、93年にアメリカを再びニルヴァーナと回るなど、ワールドワイドな活動を展開し、海外のオルタナティブ系ファンや大物アーティストからも圧倒的な支持を得ている。最近は日本を中心としたマイペースな活動を行っているようだ。

[Bohemian Symphony]

フレディー・マーキュリーが他界した数カ月後にリリースされた本作。クイーンに多大なる影響を受けたシェラザードの平山照継、永川敏郎、スターレスの中川隆雄らが参加し、彼への追悼と感謝の意を込めて自らのフェイバリットソングをシンフォニックアレンジで聴かせてくれる。メロディーが美しく、壮大なクイーンの楽曲を、オーケストラタッチで仕上げたり、キーボードの音色で流麗に織り上げたりと、原曲が持つ温もりや優しさをさらに引き出し、聴く者の心の中へと溶けるように染み渡っていく。このアルバムはフレディーへのレクイエムであり、クイーンの音楽を知らない人でもBGMとして簡単に聴き流すことは出来ないだろう。

<クイーン>
73年、イギリスからデビュー。ハードロックをベースにプログレッシブロック、クラシックなどの要素をセンス良く昇華したサウンドで一世を風靡(ふうび)した。全員がリードボーカルをとれる強みで生まれる華麗なコーラスや、マルチトラックレコーディング技術を生かしたエレキギターによるオーケストラ的なサウンドは、その後のハードロックにはっきりとした形として受け継がれている。バンドは91年、ボーカルのフレディ・マーキュリーのエイズ死によって解散を余儀なくされた。Jロックファンにはドラマーのロジャー・テイラーが彼自身のソロアルバムでXジャパンのYOSHIKIと共演したことでおなじみだろう。

[はっぴいえんどに捧ぐ]

サイズのチャカ、楠瀬誠志郎、真心ブラザーズ、すかんちなどバラエティーに富んだ顔ぶれが並び、ズビズバンズと名乗る元ボ・ガンボスのKYON、元ルースターズの下山淳、小川美潮などによるユニットまでが参加。はっぴいえんどの名曲を彼らの持ち味を生かしたアレンジで90年代のJロックシーンに華々しくよみがえらせているのだから、当然のように作品としてのクオリティーは高く、非常に面白いアルバムに仕上がっている。つげ義春の漫画が使われているジャケットがなんともノスタルジックな雰囲気を漂わせているが、聴こえてくる曲は“懐かしさ”を感じさせても“古さ”を感じさせることは絶対にない。

<はっぴいえんど>
69年に細野晴臣、大瀧詠一、松本隆、鈴木茂によって結成された、はっぴいえんど。英単語をひらがなで表記したバンド名のように、彼らはウエストコーストサウンドを日本テイストに仕上げ、日本語で歌った。当時のJロックというものは洋楽をどれだけそれっぽくカバーし、英語で歌うかというのを競い合っていた時代だったから、彼らの登場はセンセーショナルだったのである。今や作詞家として名をはせる松本の書く詞は見事なまでに自分の心理状態や街の風景を描き出し、日本語ロックの礎を築いた。約3年の活動でアルバムも3枚しか残していないが、“日本語によるロック”を音楽シーンに強くアピールし、現在のJロックの流れを作ったのである。

[J-ROCK80's]
テクノ、ニューウエイブのムーブメントで幕を開けた80年代。やがてそれはインディーズブーム、バンドブームへと進展していき、スターリンからボウイまでJロックシーンに名を残す数多くのバンドを誕生させた。それは同時に、現在の90年代に活躍するアーティストが多感な少年少女期を送った時代であり、彼らは多かれ少なかれそれらのJロッカーから影響を受けている。J-ROCK80's なくして、J-ROCK 90's は存在しないのだ。

ボウイ「ONLY YOU」
/ グレイ
勢いのあるビートナンバーで、当時の中高生のあこがれの的だったボウイ。TERUも代表作『BEAT EMOTION』をよく聴いたそうだが、収録曲である疾走感あふれるサウンドと軽やかな歌声が心地よいビートポップナンバー「ONLY YOU」をぜひグレイに。今の彼らの手にかかれば、ギターを前面に出した生々しいビートロックナンバーになるはず。

RCサクセション「雨あがりの夜空に」
/ 幻覚アレルギー
梶井が影響されたバンドというのが、ストレートなロックンロールを聴かせたRCサクセション。そこで彼らには、ぜひギターのチャボの存在感あるギターリフで幕を開ける「雨上がりの夜空に」をカバーしてもらいたい。ロックンロールの王道を行くJロックのスタンダードナンバーが、幻覚特有のひずみでどんな風に汚されていくのかが聴きものだ。

忌野清志郎+坂本龍一「い・け・な・いルージュ・マジック」
/ ザ・マッド・カプセル・マーケッツ
YMOのメンバーだった坂本龍一とRCサクセションの忌野清志郎の企画シングル曲。KYONOが日本人のロックで初めてカッコいいと思ったというこの曲を、YMOの影響を受けているメンバーが多いマッドならではのセンスで、原曲が分からないくらいグシャグシャのハイブリッドサウンドにしてもらおう。そんな愛情表現もここではアリだ。

ザ・ブルーハーツ「リンダリンダ」
/ スピッツ
ストレートでシンプルなサウンドと詞が人気だったザ・ブルーハーツ。マサムネは「追っかけになろうかと思った」ほど好きだったようだが、その思い入れはスピッツサウンドのストレートさに少なからず反映されている。元々パンクバンドとして結成されたスピッツだから、パンクサウンドが勢いよくぶつかってくる「リンダ リンダ」で初心を発揮!

ガスタンク「NIGHT SIGHT LIGHT」
/ ラルク・アン・シエル
メタルとパンクを融合した強じんなサウンドと、BAKIの叫ぶような歌声が文句無しにカッコ良かったガスタンク。そのボーカルに大きく影響を受けて歌いだしたというhydeが、こう音のように迫ってくる「NIGHT SIGHT LIGHT」のすさまじいサウンドの中で、猛るように歌う姿を想像しただけでもゾクゾクしてしまう。

ARB「さらば相棒」
/ ジュン・スカイ・ウォーカーズ
メンバー全員がフェイバリットアーティストとして挙げるARB。彼らはめんたいロックやバンドブームの基礎を作り上げ、そのストレートで硬派なスピリッツやサウンドから、男性ファンの支持が高かった。宮田のノビのあるボーカルと力強い演奏を生かすために、重厚なバラード「さらば相棒」を選んだ。きっとARBとは違ったかなしさを放つことだろう。

甲斐バンド「安奈」
/ ミスターチルドレン
分厚いロックサウンドとメッセージ性を持ったストレートな詞で、独自のバンド性を誇った甲斐バンド。桜井和寿は彼らをフェイバリットアーティストとして挙げているが、彼のハスキーで説得力のある歌声と存在感は、「安奈」のメローでセンチメンタルなメロディーを優しく歌い上げ、自分達のカラーに染まった90年代の歌として聴かせてくれるはず。

44マグナム「I'm On Fire」
/ クレイズ
ヘビーメタルムーブメントを担った44マグナム。彼らにあこがれた瀧川と菊地はバンドのローディーをしていたそうだ。そこで、伝授されたテクニックとフィーリングをはらんだプレイで「I'm On Fire」を表現してほしい。師匠同様、勢いあるギターとド迫力なドラミングで、よりワイルドでダイナミックなメタルサウンドを届けてくれるだろう。

[ビートルズ]
62年、イギリスのリバプールからデビュー。8年間の活動で、現在も名曲として語り継がれる数々のヒット曲を産み、ポップス、ハードロック、グランジ、インダストリアル、etc。現存するロックミュージックの様々なスタイルの基礎を作り上げた。
先日、80年凶弾に倒れたジョン・レノンの残したデモテープを彼以外の3人が仕上げた楽曲「フリー・アズ・ア・バード」をリリース、疑似再結成を実現し物議をかもした。

「Blackbird」
/ TERU (グレイ)
「ビートルズをカバーするんだったら『Blackbird』だな。あの曲、好きなんですよね」と語ったTERU本人の言葉から。アコースティックギターだけをバックにしたシンプルだけど優しいこの曲は、彼のストレートな歌にはぴったりかもしれない。ギターとボーカルの二人でできるので、これは彼にソロで歌ってもらうとしよう。

「OB-LA-DI, OB-LA-DA」
/ トモフスキー
「ビートルズなんてあんまり聴いたことなかったんだけど、今回のツアーで移動中の車の中で『ホワイトアルバム』っていうのを聴いて気に入っちゃってね」。この時、彼の頭の中はずいぶん遅れてやってきたビートルズ・ブームだったようだ。彼には、アルバム中のレゲエをベースにして陽気でユーモアあふれる、おもちゃ箱みたいなこの曲がピッタリじゃないかな。

「REVOLUTION 9」
/ バクチク
ビートルズの曲の中で最も衝撃的で難解なこの曲。「革命」とか「暴力」をテーマにした、曲と言うよりも音のコラージュだ。悲鳴、TVのアナウンス、赤ん坊の声、群衆のシュプレヒコール、訳の分からない逆回転サウンド、ノイズなどで“音による悪夢”を表現している。“ポップ”も“アバンギャルド”も超越したバクチクには、このテのカバーを頼もう。

「HEY JUDE」
/ チャゲ & アスカ
アルバム『Code Name.1 Brother Sun』に収録された「ある晴れた金曜日の朝」の曲や編曲で、ビートルズ音楽への愛情を表現したASKA。詞の中でも、次に生まれたらビートルズの一人に生まれ変わりたいと言ってるくらいだから、参加してもらいましょう。徐々に盛り上がる、優しさよりも力強さが印象的な、このバラード。最後の延々続く「ラーラーラー」ってリフレインを熱いハーモニーで歌ってる二人の絵まで見えて来る。

「GOLDEN SLUMBERS」
/ グレイ
「この曲の頭のね、“ONCE,THERE WAS A WAY ~”っていうところを聴くと、もう涙がでちゃいますね」と語ったグレイのTAKURO。バンドとしてはこいつをやってもらおう。この曲はどうもだれかの子守歌をベースにポール・マッカートニーが作曲したものらしく、確かに心の琴線に触れる名バラードだ。何を隠そう、TAKUROは筋金入りのバラードマニアなのだ。

「THE LONG AND WINDING ROAD」
/ X ジャパン
X ジャパンは、ハードで過激なナンバーと、ドラマチックで叙情的なピアノ・バラードという対極をなす強力な武器を持っているバンド。ビートルズの名曲の中にもピアノとオーケストラをフィーチャーした曲があるので、クラシックの香りのするバラードを彼らに。YOSHIKIにはクラシカルなピアノプレイと、オーケストラアレンジでエックスの濃い色を出してもらおう。TOSHIのハイトーンボーカルも必ず生きる曲だと思う。

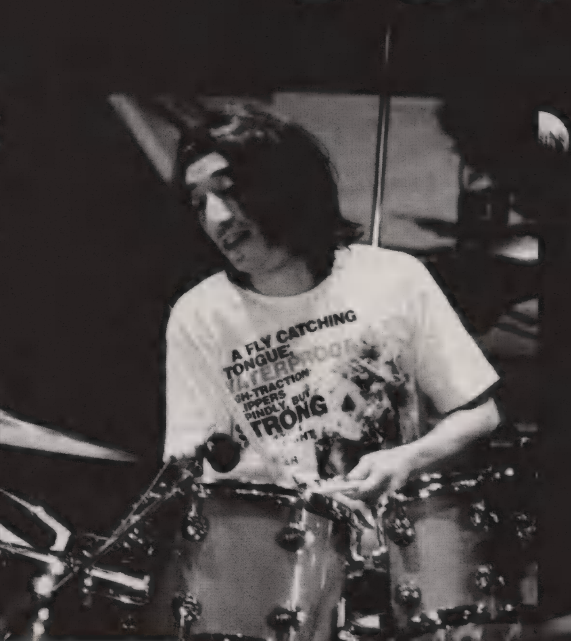
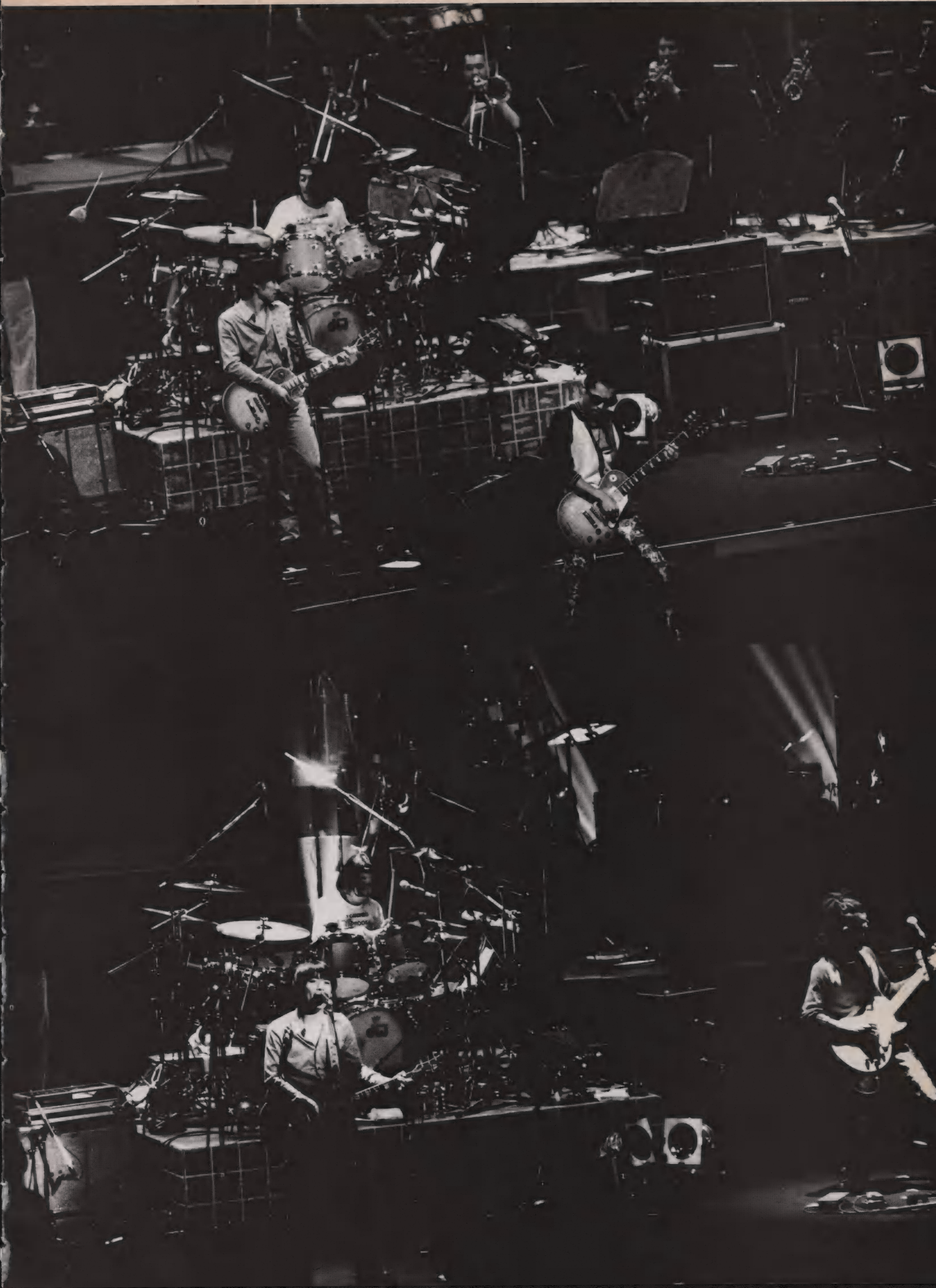
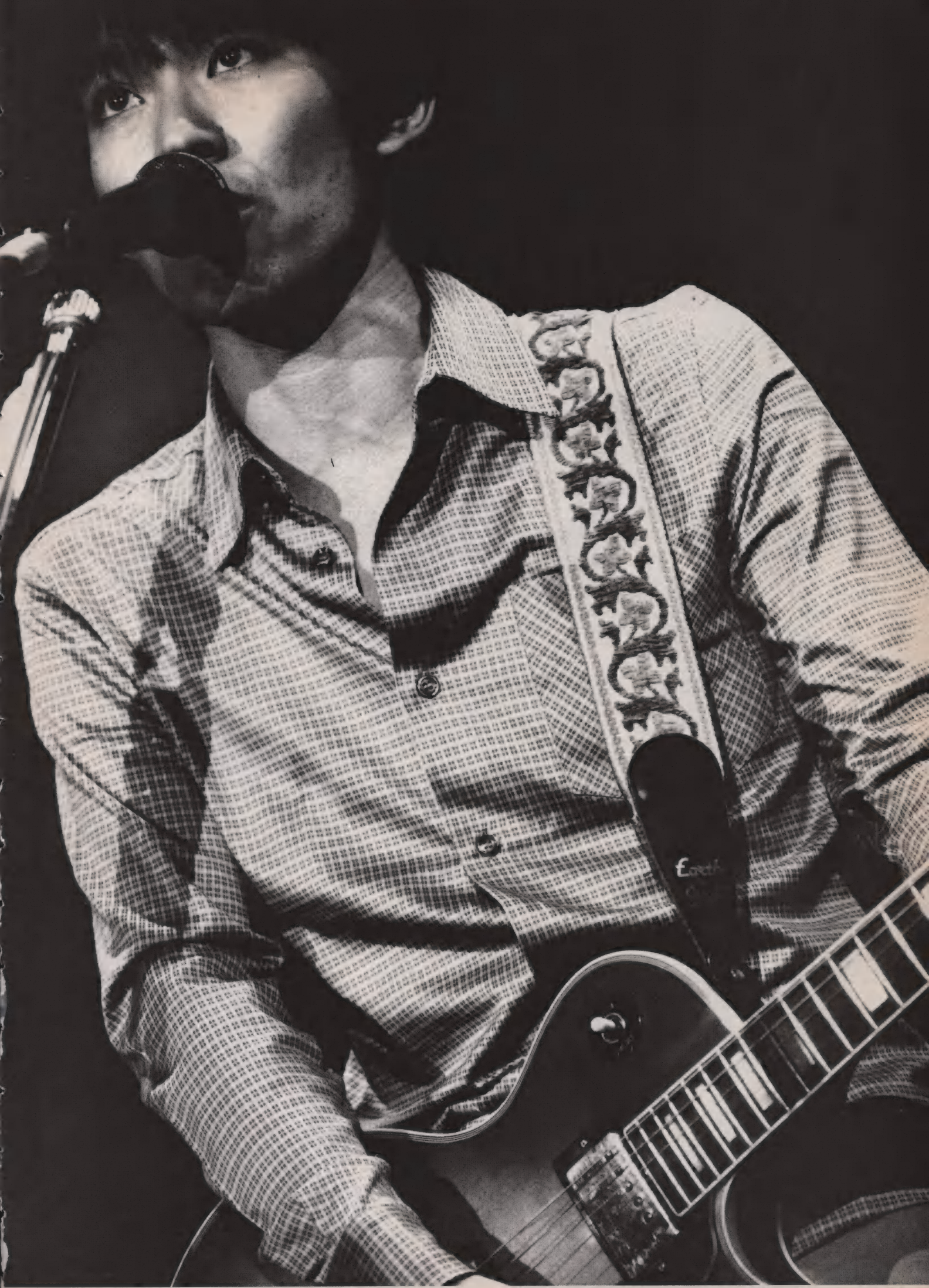
「GET BACK」
/ 大黒摩季
95年2月26日、大阪グランカフェでのクンチョーのステージに大黒が突然飛び入りで登場したのは、語り草となっているが、このステージで彼女が歌ったのがこのタイトなロックナンバー。彼女の張りのある声がオリジナルとは違う“元気さ”を生んで、場内はヒートした。あの元気な「GET BACK」をもう一度。

「HELTER SKELTER」
/ オリジナル・ラヴ
オリジナル・ラヴの田島貴男のロックとの出会いは、小学校6年のころのビートルズ、それも彼らの中で最もヘビーなこの曲だったという。現在のヘビメタのルーツになったとまで言われる、この曲の威圧感は、彼にロックのカッコ良さを教えたのかもしれない。大人のムード漂う現在のオリジナル・ラヴが、この曲をどう料理するのか興味は尽きない。

Jamboree Tour Limited '96
『カゲロウの集い』

SPITZ

LIVE
J-ROCK
REPORT

1996年5月24日　大阪フェスティバルホール

微妙でさりげないスピッツサウンドの主張
彼らがスピッツであり続ける理由がそこにある

スピッツというバンドのイメージは、この1年ですっかり世間に定着した。肝心の音楽よりイメージばかりが先行するバンドもあるが、スピッツはラジオからバンバン流れるヒット曲しか知らない人達と、昔からのコアなファンとが抱くそれに大差がなく、「さわやか」とか「可愛い」とか「ふにゃふにゃしてる」とか…ほぼゆがみのない印象が浸透している。これは彼らが自分達の大切にしているものを大切に表現してきたからだろう。ほんわかムードのメンバー四人は特に強力なキャラクターの持ち主ではないし、「僕らは音楽で勝負してるんです!」といきり立っている様子もないが、音楽をやる上で最も大切でいて忘れがちな「自分がいいと思うものをそのままに表現する」ということをしっかりとやってきた。そして、それは"夕暮れと夜の境目の一瞬"のような、ものすごく微妙でさりげない主張としてスピッツの音楽の中に潜んでいて、私はここに彼らなりのロックの本質があると思っている。

ストリングス&ホーンセクションを迎えたスペシャル・コンサートの今夜、そんなスピッツの主張はいつもよりちょっぴり明快だった。

定刻を少し過ぎて、明るいステージにメンバーが手を振りながら登場した。ドラムのカウントで始まった1曲目は「恋は夕暮れ」。ホーンが勢いよく鳴り響くイントロから、会場には歓喜の声が飛び交っている。フェスティバルホールという場所と、ストリングス&ホーンを迎えてのライブと聞いて、何となく仰々しい静かな内容を想像していたが、ステージからあふれる音の中は自由に気持ち良く泳ぎ回る観客でいっぱいだ。

軽快なリズムとホーンの絡みをアクセントに「ドルフィン・ラヴ」を聴かせ、「ルナルナ」で甘く可愛い世界を作り出して、ちょっと切なく寂しげな「夏が終わる」へ。客席を覆っていく、つかめそうでつかめない不思議な質感を持ったマサムネの歌声。田村と崎山の生み出す安定したリズムはメロディーラインを際立たせ、テツヤのギターはよりスピッツ色を深めていく。そんなメンバー四人の後ろには、彼らのプロデューサーであり今日は指揮者である笹路正徳氏、ストリングス十人にホーンが六人、パーカッションが一人と、総勢十八人のオーケストラ。「やっぱり人数には勝てないんじゃないか、バンドが飲まれちゃうんじゃないか」などと余計な心配も頭をよぎったが、今日の彼らの役割はスピッツが持つプリズムに様々な光を差し込む…そんな感じだ。その光を受け止めた四人が、屈折させ色を変えて届けるのは、何物でもないスピッツサウンド。このライブが行われた意味も、ここに一つありそうだ。

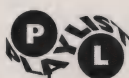
「ちょっと陽気な感じで行ってみたいと思います」というマサムネの言葉で始まった「僕の天使マリ」。黄色いライトの中、軽やかにバイオリンのソロが走り、はじけたボーカル、そしてタイトでキレのいいリズムが追いかけ合って、そのスピードがどんどん増していくようだ。他のストリングス&ホーンのメンバーは楽器を演奏する手を手拍子に変え、その上ウェーブまで披露。ここで観客のテンションも一気に上昇し、マサムネの声もサウンドもそんな観客に比例するような輝きを見せる。それは「ベビーフェイス」や「迷子の兵隊」へと続いたが、「Y」では一転して、テツヤの静かなアルペジオとストリングスの柔らかなハーモニーがボーカルと重なってシンフォニックな世界を作りだし、低く薄い雲のようにゆっくりと客席に押し寄せた。

前回の長いツアーでも毎回MCの内容を変えたらしいが、今日もマサムネはたわいのない最近の出来事を思いつくままに話している。ネコの話からウサギの話へ、イヌの話から自分の子供のころの話へとどんどん転がっていった後、アコースティックセットでストリングスと披露したのは、1stアルバムから懐かしい「うめぼし」。日暮れのようなオレンジのライトの中、バイオリンのやさしい音とノスタルジックなギターが、「うめぼし食べた～い」と歌うマサムネの声と見事に溶け合う。"うめぼし"という言葉のコミカルなイメージとは全く違った輝きと、スピッツのどこか懐かしいメロディーが持っている新鮮な輝きに、共通するものを感じずにはいられない。「チェリー」から始まった終盤も、彼らは自分達のペースで自分達の音楽を観客とめいっぱいに楽しみ、「黒い翼」で本編の幕を閉じた。

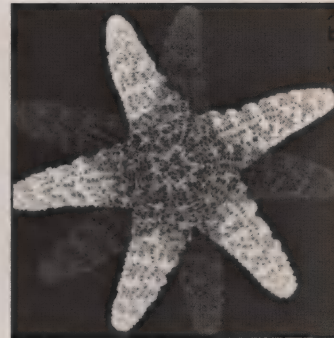
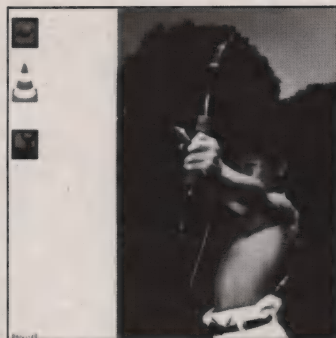
スピッツの音楽に感じてきた主張は、マサムネの生み出す独特な詞とメロディー、そして個性的なボーカルよりも、それを最もストレートに聴かせるバンドサウンドに潜んでいる。確かにマサムネの存在は大きいし、サウンドは特別アクが強いわけでも頑丈なわけでもないけれど、そこにはちょっとでもバランスが崩れたり傷つけると光を放てなくなる彼らだけのプリズムがあって、微妙でさりげない「スピッツの音楽」の主張として輝いているのだ。

今日のライブでは、オーケストラが光をたくさん差し込み、スピッツも多彩な輝きを放ったが、どんな光が差し込まれても彼らが持つプリズムの主張は変わらないし、だれにも変えることは出来ない。ただ、色のバリエーションだけが、これからも無限に増え続けていくばかりである。

[文・山田純子　撮影・高木昭仁]

PLAYLIST

1 恋は夕暮れ
2 魔女旅に出る
3 ドルフィン・ラヴ
4 ルナルナ
5 夏が終わる
6 僕の天使マリ
7 ベビーフェイス
8 迷子の兵隊
9 Y
10 うめぼし
11 田舎の生活
12 チェリー
13 ラズベリー
14 海ねこ
15 裸のままで
16 黒い翼

encore 1 空も飛べるはず

encore 2 チェリー

featuring SPITZ
COLLECTION

ALBUMS

1 スピッツ
2 名前をつけてやる
3 惑星のかけら
4 Crispy!
5 空の飛び方
6 ハチミツ
7 チェリー
8 オーロラになれなかった人のために

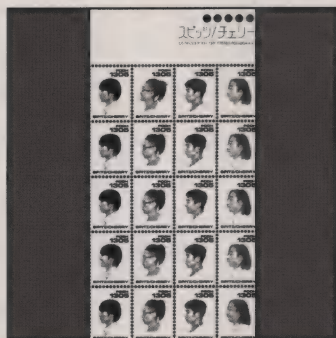
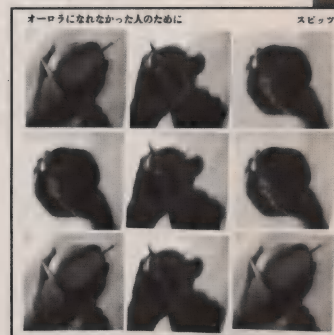
NEW SINGLE

ALBUMS

MINI ALBUM

SPITZ'S ALBUMS, SINGLE AND MINI ALBUM

TEXT by MIKI AOKI

4月にリリースされた新曲「チェリー」のセールスも好調、近ごろ何かと気になる存在のトンガリ君達、スピッツ。デビュー5年目を迎え、ようやく彼らが創り出す独自性がリスナーに受け入れられ始めた。ここ1年の間にJロック&ポップスシーンを揺るがすヒット曲を次々と生み出し、一気に人気は頂点へ。この期に及んで、ヒットシングルや最新アルバム『ハチミツ』しか聴いたことがない、と言う音楽ファンはちょっと損してるかも。これから一緒に奥深いスピッツ・ワールドを探検してみよう。

【バンド・ヒストリー】

96年はスピッツ誕生10周年という節目の年だ。初々しいティーンエイジャーだったメンバー達も、今では30歳の大台が目の前に控えている。彼らのサクセス・ストーリーの始まりは86年にさかのぼる。大学進学のため、草野マサムネ(Vo)は福岡から、幼なじみの田村明浩(B)と三輪テツヤ(G)は静岡から、崎山龍男(Ds)は栃木からそれぞれ上京。まずは草野と田村が同じ大学内で出会い、意気投合。60〜70年代ハードロックのコピー主体のバンドを経て、ザ・スピッツと名乗るパンクバンドを結成した。

しかしコレは長くは続かず、自然消滅。そして翌87年の夏、田村が草野に三輪を紹介し、スピッツの活動が再浮上。後に崎山が加入、新宿JAM、渋谷ラ・ママで定期的にライブ活動を行うようになった。ブルーハーツを思わせるビートパンクを聴かせ、観客と一緒に跳びはねていたという。コンスタントな活動は続き、88年11月には自主制作のソノシートを発表。89年からのスピッツはアコースティック色を強め、現在のようなサウンドスタイルが確立された。同年4月には自主制作カセット『ハッピーデイ』を発表、メンバーの手作業でダビングを重ね、なんと2000本の売り上げを記録。マイペースな活動ながら徐々に評価を得、7月には新宿ロフトで初のワンマンライブを敢行。また、インディーズ系バンドを集めたオムニバス・ライブイベントへの参加で初めての全国ツア

featuring
SPITZ

ーも経験するなど、バンドは良い転機を迎えた。

90年3月にアルバム『ヒバリのこころ』をインディーズレーベルから発表、業界でちょっとした話題となる。殺到したメジャーレーベルのオファーの中から、彼らは慎重に所属事務所とレコード会社を決定し、同年10月に1stアルバムのレコーディングを開始、デビューへのカウントダウンが始まった。そして91年3月25日、シングル「ヒバリのこころ」とアルバム『スピッツ』を同時リリース、メジャーデビューを飾る。その後シングル、アルバムも順調に発表し続け、ライブツアーも行うが、人気は今一つ盛り上がらず、苦戦を強いられた。しかしデビューから3年たった94年ごろからは、ライブのチケットがソールドアウトになるなど、確実にバンドの運気も上昇。そして95年ビッグヒットを記録したシングル「ロビンソン」のリリースで、スピッツ人気が大ブレイクしたのは記憶に新しい。

【アルバム・ヒストリー】

メジャーシーンに産声を上げた1stアルバム『スピッツ』(91年3月)。ハードで勢いのついたパンキッシュなサウンドに乗っかった草野の繊細なボーカルが完全にミスマッチ。しかし、なんか新鮮。なんか気になる。サウンドが激しかろうが、しっとりしていようが、基本的にサラリと、シュールな詞の世界を表現する草野の個性がにじみでている。M-③「ビー玉」とか、M-⑪「うめぼし」というタイトルにくすぐられる人は絶対ハマる。基本的には歌を聴かせるバンドだが、シンプルなサウンドの中にも面白さを発見できる。例えばハードロック・スタイルのM-⑤「月に帰る」は、作曲とギターを手掛けた三輪の面目躍如といったところ。曲の後半はサイケなサウンドで盛り上がる。「うめぼし」はアコースティックギターの弾き語りでフォーク調の曲だが、生のストリングスとクラリネットが詞の感情を高めている。1stアルバムのくせに自然体で飾り気がなく、トボけた味わいがスピッツらしい。

デビューの年にもう1枚『名前をつけてやる』(91年11月)をリリース。凡打の後は当然、安打を狙うものだ。しかし…スピッツは1st以上に力の抜けた、柔らかなアコースティックサウンド主体のアルバムを送り込んだ。そんな調子なので歌にもサウンドにも戦意が全く感じられない。セールスのために必死な周りの音楽シーンはどうであれ、独自のほんわかワールドを貫くあたりがクセモノだ。サウンド面では音楽的な視野が広がりスタイルも多様に。ワウギターのカッティングがファンキーなM-⑤「ミーコとギター」、微妙にはねるグルーブが心地いいシャッフルリズムの曲など新しいキャラクターも登場。詩集に音楽も付けました、という風合いが他のバンドには出せない味だろう。

草野以外のメンバーはちょっと小休止のミニアルバム『オーロラになれなかった人のために』(92年4月)。スピッツの核である草野ワールドを虫メガネでズームアップしたかのような5曲入りアルバム。1st、2ndでもチラッとネタを小出しにしていた、アコースティックなスピッツと、オーケストラが融合するサウンドがフルに楽しめる。M-①「魔法」はオープニング向けのでっかいアレンジ。ストリングスとホーンが織りなすサウンドはビートルズの「サージェント・ペパーズ…」辺りの雰囲気を目指しているみたい。その他の曲にも、ポップな色彩が見えたり、クラシカルなストリングスを聴かせてくれるなど、〝スピッツ〟というフィールド上でかくれんぼして遊んでる音楽たちが、この中にいる。

3rdアルバム『惑星のかけら』(92年9月)は、スピッツの作品の中でも一番ハードでロック色が濃い。メンバーそれぞれが大好きなロックのスタイルを持ち寄り、思いっ切りぶちまけた。そのサウンドの指向も60〜70年代ブリティッシュロック周辺にスポットが当たっている様子。また、アップテンポで軽快なカントリー&ウエスタン調のM-③「僕の天使マリ」や、クールなビート感がアシッドジャズっぽいM-⑥「シュラフ」、パンクとサーフサウンドが混ざりあったM-⑧「波のり」などなど、今までの彼らとはひと味違う世界も加わった。

一転してポップ路線のサウンドにまとまった4thアルバム『Crispy!』(93年9月)。ついにメジャーアーティストらしく、リスナー拡大のための戦略を頭に入れ、共同プロデューサーに笹路正徳氏(過去にプリンセス・プリンセスを手掛けたこともある)を迎えて作られた。キーボード、ストリングス、ブラス等の音色をぜいたくに加えたアレンジで、スピッツ特有のサウンド・ワールドを広げたと言えるが、今までの独特の素朴さは陰に隠れてしまったよう。しかし、草野の曲づくりのセンスはかなりの進化を遂げ、印象に残るメロディーも多くなっている。聴きやすいサウンドといい歌を引っ提げて、リスナーの側に歩み寄ったのに、世間の風はまだ冷ややかだったようだ。

再び笹路氏とのコンビで作られた5thアルバム『空の飛び方』(94年9月)。前作のような過剰なサウンドプロデュースは姿を消し、バンドサウンドが復活。メンバー四人が出す音を最優先し、大切に扱われていた。枚数を重ねるごとに成長する演奏力とアイデアを生かして、シンプルだが深みの感じられるアレンジに仕上がっている。M-③「空も飛べるはず」は最近ドラマの主題歌になりヒットしたが、改めて聴くと、楽曲の良さに気づく。草野の曲からは、初期のころのダラリとした雰囲気も、前作での気負いも消え、素直にいいモノを生み出そうとするパワーが伝わってきた。

もはや、何も言うことはない。6thアルバム『ハチミツ』(95年9月)はいきなりビッグヒットとなった先行シングル「ロビンソン」(同年4月)、続いてリリースされた「涙がキラリ☆」(同年7月)も収録、笹路氏とスピッツの二人三脚も3作目を数え、強い信頼関係の下に生み出された会心作。アルバム全体のイメージは、初期〜中期の3rdアルバム位までの雰囲気に戻ったかのようだ。久々にサウンドが吹(ほ)えるM-⑥「トンガリ'95」は、彼らのルーツであるパンクナンバー。デビューから5年間、基本的な音楽性を変えずに喜ばしい結果を勝ち得たメンバー達の自信がみなぎる力強い演奏が印象的だった。その他にも、スピッツ流の70年代歌謡曲風サウンドやチープなフォーク(昔は四畳半フォークと呼ばれていた)など、いい歌が勢ぞろい。

【サウンド・アナライズ】

ヒット曲のみを聴いただけでは見えてこなかったスピッツの魅力を、身近なモノに当てはめて例えるなら、〝無農薬野菜〟がピッタリだと思う。売れてやろうという欲も下心も害もなく、ルックス、サウンドも、至ってナチュラル。根っこに土が付いたまま、スーパーの野菜売り場の片隅でひっそりと売られている、あの感じ。だから人気がはじけるまでは、ファンにとって宝物のような存在だったに違いない。しかし純粋に楽曲のクオリティーがリスナーに受け入れられてヒットした、という結果は、セールス戦略を重視する、日本の音楽業界の生態系をいい意味で崩してくれた。

ちょっと甘ずっぱくて、かわいげがあって、懐かしいサウンドは、メンバー四人の絶妙なコンビネーションによって生み出されている。草野の個性にひかれてどこまでもついてゆくメンバーの結束の固さがサウンドに聴き取れた。そして曲を書き歌う、草野の感性も興味深い。彼はなかなかの詩人である。視点をぼやけさせ、間接的な言葉でふんわり表現するのがうまい。つい行間を読んで、色んなことを空想してしまう。素朴だけど印象に残るメロディーのセンスも抜群だ。メジャー系のメロディーなのにふっと物悲しくなったり、言葉をはめ込むのが困難だと変拍子を使い、おかしなリズム感を出したりと、面白い。

プロデューサーの腕がアーティストのヒットを握っている昨今、スピッツに関わった笹路氏の働きはまるで子供の自転車に付いている補助輪のように、さりげなく彼らを独り立ちへ導いているのが評価できる。今が旬、なんて言われるけれど、スピッツはいつまでもスタンスを変えず、マイペースに『愛される音楽』を聴かせてくれる存在であってほしい。

Kaikan Dai Hall

奥田民生

奥田民生 CONCERT TOUR 1996『イージュー★ライダー』 May 24th 1996 at Osaka Kouseinenkin

TAMIO OKUDA

自分らしさにこだわる以上、奥田民生はきっと10年後も歌い続けている

「奥田民生はロックな男だ」。こう書くと、「激しいギターが入っているからとかいう、上っ面だけでアーティストをありモノの枠に押し込めようとしてんじゃねーのか」と、露骨に嫌な顔をする人も多いことだろうが、僕が感じているのは、伝わってくるそのスピリッツや音楽への向き合い方がロックそのものだということ。アンコールも終わり、客電のともった会場でライブの余韻に浸っている僕は、腹の底からどくどくと沸き上がってくる熱さや満足感とロックをイコールで結び付けていた。

1996年5月24日、大阪厚生年金会館大ホール。これから始まる時に向けて膨らみつつある小さな期待達がざわざわと場内の空気を揺らしている。

客電が落ち、スリリングな時の訪れを悟った客席から沸き上がった歓声は、SEとしてテレビドラマ『古畑任三郎』のテーマが流れだすとクスクス笑いに変わる。セオリー通りなら興奮に満ちた絶叫の渦巻く所だが…。笑いに迎えられるオープニングもいいもんだ。会場に漂う空気の心地よさ、そいつに、すっかり無防備になった心にふんわりしたイントロが響き渡る。オープニングナンバーは「コーヒー」だ。「コーヒーで一息」なんて歌声で、らしすぎる先制パンチ。一度地に足を着けたオーディエンスを、「休みが必要だ」と叫ぶ民生の歌声が揺さぶり始めると、会場のボルテージはハッキリ分かるぐらいに高くなっていく。ブルーのライトを一身に集めながらギターをかき鳴らしている民生は眉間（みけん）にしわを寄せ、もはや隠すことのないやる気をたぎらせたロッカーの顔になっていた。

「人の息子」で、奥田民生、ギターの長田進、ベースの根岸孝旨がステージ前方に飛び出して、そのプレイを存分に聴かせた後、「今日は男の子が多いですね」と民生がつぶやくと客席のあちらこちらから、野太い声が上がった。開場前余り見かけなかった野郎共も確実に数を増し、意気を上げているのに、ニンマリさせられる。

この後届けられたのは新曲「イージュー★ライダー」。始めて耳にするこの曲は、フォークロックっぽい肌触りで、全力疾走でもなく、のんべんだらりでもなく、しっかり歩く、30代の男のまんまの姿が投影されていて、心の中に新風を吹き込み、何かをそっと残していくよう。変に飾ったりせず、等身大の自分を歌で表現する。これが民生のロックだ。

ヘビーでドンヨリしたサウンドの「たばこのみ」で一度スローダウンしたライブは中盤へ。ベースの跳ねるようなグルーブとピアノの音色、そして軽いタッチのドラムでの大人びた「ルパン三世主題歌Ⅱ」のカバーでは「ワルサーP38～」なんて歌声に、子どものころ、この曲を聴いて理由もなくもの悲しくなった記憶がよみがえった。続くアンニュイな空気をまき散らす「厳しいので有る」。ブラシスティックに持ち変えた古田のドラムと、音数が少ないがゆえに一音一音の真剣さが伝わってくる演奏にしばし感動させられる。

9曲目は奥田民生がプロデュースを手掛けた女の子二人組パフィーがゲストとして登場、彼はちょっと後ろに下がった所でキーボードとバックコーラスをとる。そして、今回もバックを務めるドクター・ストレンジ・ラブの曲「Another Fairy Tale」では、一人のギタリストとしてギターをかきならし、"歌う民生"とはちょっと違う一面を披露する。

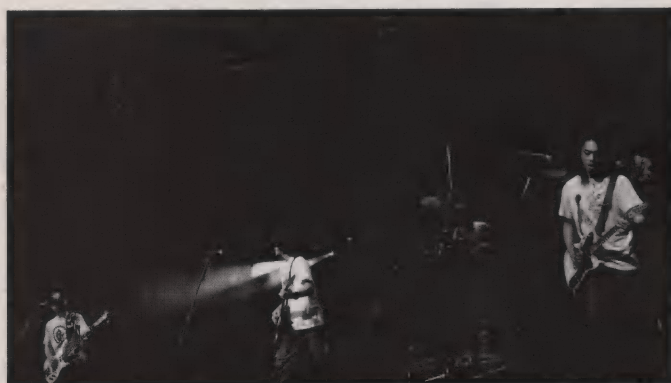
一転して「BEEF」から加速し始めたライブは、「ルート2」まで、たたみかけるかのようにパワフルでアグレッシブなロックを一気に吐き出す。暴れ回るギターサウンド、ヘビーなリズムと素直に交じり合って、曲の世界を広げる民生の声。そこからは自身の声とメロディーとの相性へのこだわりがひしひしと伝わってくる。表面的な肌触りや詞の内容だとか、ストレートに訴えかけてくるタイプとは違った民生の曲は、彼が歌ってこそ、その奥深いテイストがにじみ出て来て、感性に訴える。

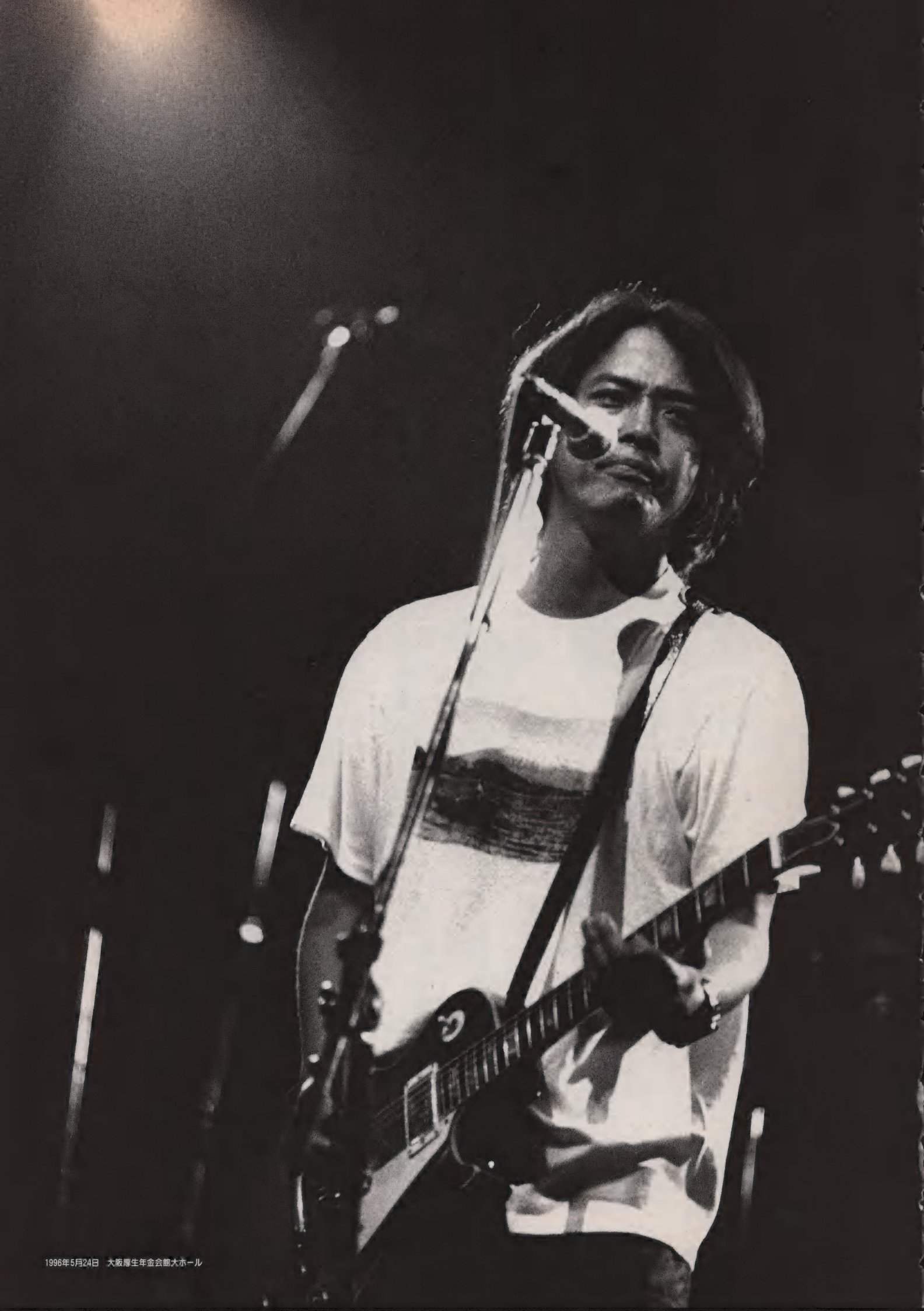
オープニング、お世辞にも流暢（りゅうちょう）とは言えないMC…、ステージを構成するパーツの一つ一つからも感じる"らしさ"へのこだわりが組み合わさって"民生がやってこそカッコいい"ライブを作り上げているのだ。ロックをやるのに理由を求めるなんてヤボなことだけど、もし、彼に歌い続けることの理由があるとすれば「奥田民生じゃないとダメだから」それが答えなんだと思えてしまう。そして本編最後となった「悩んで学んで」のちょっとテンポを落とした、熱く叫ぶ彼の歌声を聴きながら、いつも休養しているイメージの民生だけど、きっと5年後も、10年後もマイペースで歌い続けているんだろうなと、僕は一人にやけていた。

アンコールの声に、再び古畑任三郎のテーマが流れ、黒のツアーTシャツに着替えたメンバーが登場する。曲はアルバム『30』のオープニングナンバー「人間2」。そして最後はユニコーン時代の曲「すばらしい日々」でライブは幕を下ろした。

あくまでマイペースで何より楽しそうに演奏する奥田民生。彼のライブは、観せる派手さはなくとも体の欲しているものを十分に満たしてくれる。それは、大がかりなステージセットと演出で、ショーアップされたライブと比べると得られる爆発力という点では引けをとるかもしれないが、心に残ることでは一歩も二歩も抜きん出ているのだ。

ライブが終わってから一週間。ロックの良質な部分を十分にたん能できた満足感は少しも色あせることなく、こだわりを痛いほど感じたあのサウンドは今も心の中で響き続けている。そして、この心地よさこそが、極上のロックに触れたあかしに違いない。

［文・大西智之　撮影・佐藤潤一］

1	コーヒー
2	愛のために
3	トリコになりました
4	人の息子
5	イージュー★ライダー
6	たばこのみ
7	ルパン三世主題歌Ⅱ
8	厳しいので有る
9	アジアの純真
10	Another Fairy Tale
11	Hey! Mountain
12	息子
13	BEEF
14	MADONNA de R.
15	愛する人よ
16	ルート2
17	悩んで　学んで
encore	
1	人間2
2	すばらしい日々

1996年5月24日　大阪厚生年金会館大ホール

SUPER JUNKY MONKEY

アルバム『地球寄生人』発売記念ツアー
HOLY MOTHER OF MEATLOAF VOL.4

アルバム『地球寄生人』は彼女たちのライブイメージを進化させる

いつもとは少し異なる雰囲気が漂う、開演前の会場。ここ数年、ステージ前を陣取る観客は女性が当たり前とさえ思っていたが、それが男性の集団になっていることに奇妙な新鮮さを覚える。なんだかそれだけで、これからいつもと違う楽しみが待ってるようでワクワクしてしまう。そのワクワクを運んでくるスーパー・ジャンキー・モンキーは、最新アルバム『地球寄生人』で、これまで以上に多彩な音楽性を見せ、新たな魅力を放っていた。それは何種にも属さないこの世でただ一本の大木に強烈な形や色をした新種のつぼみを付けたような、バリエーションの豊富さ。そのつぼみがいよいよライブによって花咲こうとしているのだ。私の頭の中で駆け巡る期待は、パンパンに膨れ上がった風船のように今にも破裂しそう。

スーパー・ジャンキーのツアーではおなじみの対バンライブ。ここ大阪クラブクアトロでも同様に2バンドが登場し、まずはそれらの熱く激しいライブが怒とうのごとく披露された。汗の臭いと熱気が充満する中、待つこと数分……。

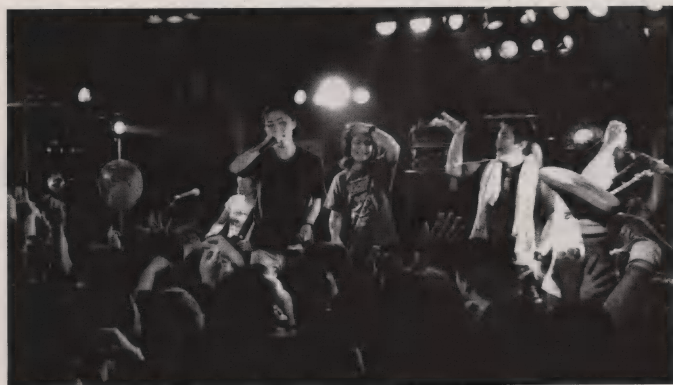
やがて、客電が落とされBGMがフェイドアウトすると、客席から思い思いの歓声が飛び、同時に我こそはとステージ前方になだれ込む。瞬く間に一寸のすき間もない人口密集地帯がそこに出来上がった。

KE-KO、しのぶ、まつだっっ!!の三人がまずステージに現れ、アルバム『地球寄生人』の1曲目「Introduction」のインストゥルメンタル・ナンバーを重々しくも神々しい趣で放ち、ライブの始まりを告げた。少し時間をおいて姿を見せた睦は、まるで三人が発する音の空間の中に身を委ねようとしているのか、身体を優雅に揺らしながら、時には瞳を閉じる。その様子は神聖な儀式のようにも見え、観ているこちらを不思議な安ど感に包む。そんな睦の存在は、シャープに迫るまつだっっ!!のドラム、豪快にはじくしのぶのベース、そして野太いKE-KOのギターに支えられ、「THE WORDS」で強力なダイナマイトになった。小柄な身体のどこからこんなパワーが出てくるのか不思議なくらい力の込もったボーカルは、聴く者の脳天を爆破。無表情で絶えず遠くを凝視しながら歌う彼女、その瞳にはとてつもないエネルギーを感じられる。

まだ2曲目だというのに観客のテンションは一気に加速。たちまちステージ上がって客席に飛ぶダイバーが続出、ステージ前方に密集する頭の上に身体を預け、まるで海に仰向けになって浮かんでいるようだ。〝大丈夫かな?〟という心配が頭をよぎったが、何度もダイブが繰り返される様子を見て、〝大丈夫だ!〟と確信。それほど彼らの身体には力が充満しているのだ。

睦の前に立てられた二本のマイクを交互に使い分けることで「うっ!」「あっ!」という、うめき声が左右別々のスピーカーから聴こえるという珍しい趣向で届けられた、彼女たちとしては異色のスタイルを放つ「誤解」。重くディープな雰囲気を漂わせるビートと怖さをかき立てるギター。そこに発狂したように、うめき声を挟みながら低音で歌うボーカルがさらに威圧する。が、やがてその空気を怒りに変えるようにサウンドと声が激しく暴れ出し、エンディング。睦が「『誤解』、理解できた?」と聴衆に確かめるほど、衝撃的で難解なナンバーだった。

アルバム同様「行くで〜」の雄叫びではじけた、数秒間の短くも刺激的なインパクトを持つ「Our Universe」に続いて、地をはうように重厚なビートに荒れ狂うギターが重なる超ごう音サウンドと、女性とは思えないすさまじい迫力で襲ってくるボーカルが生むヘビーなナンバー「Start With Makin' A Fire」。観客はその痛烈な音の渦中に飲まれたように揺れ動く。そんな彼らに一撃をくらわせる怒とうのハードコアナンバー「記憶の捏造」で、マイクをスタンドから外し、ステージ中を動き回ったり狂ったように踊りながら歌う睦。まるで意識を失ったかのようにもうろうとした表情でギターを弾くKE-KO。観客も狂ったように飛びはね、足下から伝わる振動はまるで会場の床をぶち抜くほどの勢いで迫る。目まぐるしく表情が変わる楽曲に観客は、感じるままに自由なリアクションをステージに返した。そこには暗黙の了解で成り立っているルールがあり、無茶なことをしでかす危険な観客は一人もいないのだ。

終盤に突入すると、ハードロックとファンクがミックスされたナンバー「BUCKIN' THE BOLTS」で、数人の観客がステージに上がりメンバーに混じって踊りだしたり、しのぶと一緒にコーラスをした後、客席に落ちるようにダイブしていく愉快な場面も。本編ラストは、ラップで歌う睦のボーカルに、KE-KOのまるでセサミストリート(アメリカの子供向け教育番組)に出てくる人形のような声が重なるコミカルなナンバー「Parasitic People」で締めくくられた。

〝暴れるライブ〟というイメージがあるスーパー・ジャンキー・モンキーのライブ。中途半端な気持ちで暴れるとケガをしてしまいそうだ。しかし今日は、ただ暴れるためだけのものではなく、もっと身体で感じるライブの気持ち良さを実感できたのである。アルバム『地球寄生人』で聴かせた新種のつぼみは、ステージで華麗に花咲いた。そして、どの曲でも自然に楽しんでいる観客を見ていると、ライブ自体がどんどん進化していることもうかがえた。このバンドには、まだまだ新種のつぼみが隠されているに違いない。

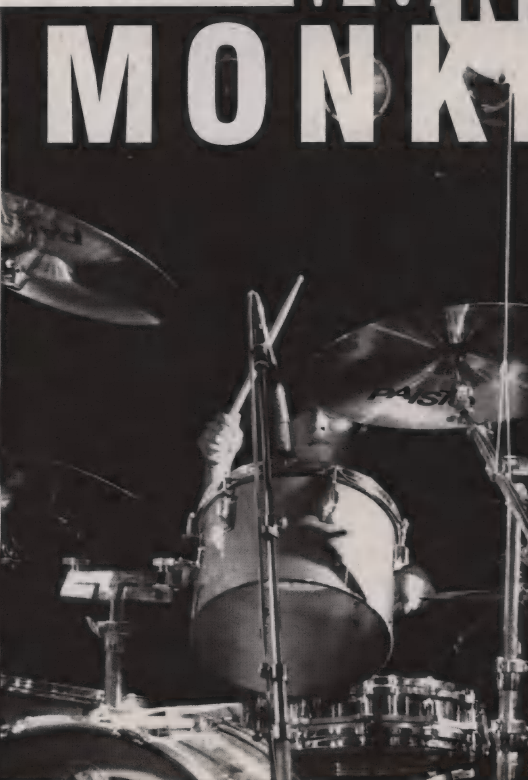
[文・村田圭子　撮影・浅野順子]

PLAYLIST

1 Introduction -宇宙の創造物-
2 The Words
3 If
4 誤解
5 Our Universe
6 Start With Makin' A Fire
7 Telepathy
8 記憶の捏造
9 See Me. Feel Me
10 BUCKIN' THE BOLTS
11 Parasitic People/地球寄生人

encore
1 あいえとう
2 SUPER JUNKY MONKEYのテーマ
3 DECIDE

SUPER JUNKY MONKEY

1996年5月29日　大阪クラブクワトロ

FEEL SO BAD

LIVE JUMPIN' BUTT Ver.3 "IN TRANCE"

せめぎ合うF・S・Bとオーディエンスの熱いエネルギー

気合の入った野郎や少女達がひしめき合う1階フロアは、SEが流れただけで一気にテンションを上げ、まだメンバーが登場していないのに、それに合わせて声を発したりと異常なまでの盛り上がりを見せている。一体感？ そんな生やさしいものではない。もっと一人ひとりが密接した力強さ…これから始まるライブで、自分の持てる全エネルギーの発散だけを目的としたヤツらの頼もしい団結力を感じるのだ。

SEが鳴り止むとギターを手に登場しただりあが、ステージの中央にどっしりと構えてリフを刻むと、客席からの歓声がかけ声に変わる。そして、倉田冬樹がベースに、大橋雅人がドラムにスタンバイし演奏を始めると、山口"PON"昌人がマイクを持って現れ「俺たちは天下のフィール・ソー・ナイス～」と、がなるように歌い出した。まるでハードコアパンクのようなパワーと勢いを大音量でぶちまけるパートチェンジしたフィール・ソー・バッド(彼らは"フィール・ソー・ナイス"と呼んでいる)。客席をあおるだけあおるといつものF・S・Bにチェンジし、最新アルバム「IN TRANCE」の1曲目でもある「F・S・B」のごう音を放った。本領を発揮した彼らのサウンドを受けたオーディエンスは、ラップ調のボーカルにけり上げられるようにテンションを上昇させていく。

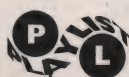
初っぱなから疾走感と重量感を兼ね備えたハードロックナンバーでぐいぐい押すF・S・B。すさまじい破壊力を見せるPONのハイパードラムとずっしりと重たく低音域でうねる大橋のベースが絡み合い、その上に冬樹の分厚いリフとだりあのエネルギッシュなボーカルが乗る。そんな強烈なサウンドが音の野獣となって客席に襲いかかり、オーディエンスも強じんなパワーを放出し応戦する。始まったばかりだというのに1階フロアではすでに壮絶な両者のエネルギーの死闘が繰り広げられ、2階の関係者席で観戦している僕のところまで生温かい波が押し寄せて来るのだった。

中盤に入るとF・S・B流サイケデリックナンバー「UTOPIAN AND REALIST」で、トランス状態へと誘い込むようなルーズな冬樹のギターと、下半身を揺さぶるようなビートでオーディエンスを音に酔わせ、大橋のベースソロへとつなぐ。PONも加勢した彼のソロタイムは、フレーズをスキャットで口ずさみながらのプレイや力強いチョッパーを披露。一方、PONのソロタイムは、テクニック、パワー、スケールを凝縮したようなドラミングで、オーディエンスからのかけ声も入り、「大阪、帰って来たぞ～」「大好き、愛しているぞ」と声を返して、彼の人間性までもが伝わって来るホットなソロタイムだった。

このライブでの唯一"静"の時間であるバラード。だりあが母の日の話題から「三年半ぐらい前に…親が子供に望む生き方っていうのは、いつも元気いっぱいで輝いた笑顔で生きてくれることだと気付いた…」と語り、「AM8:58」を迎える。大橋の12弦ギターと冬樹のガットギターの音色が織り重なるイントロダクションが響き、水を打ったように静まり返る場内。だりあは我が子に対する母親の思いをつづった歌詞に感情を込めて歌うが、その声にはいつものような彼女らしさがない。弱々しく微妙に震えている。そして、二番に差し掛かったところで、とうとう声を詰まらせてしまった。それでも何とか震える声で歌おうとする彼女に「頑張れー」と声援を送り、一緒に歌い出すオーディエンス。しゃくりあげながらも歌うだりあと合唱する彼らの歌声が場内に響く。この感動的なシーンは、ステージと客席を密着させ、より深い信頼関係を結んだようだ。

中盤から終盤への懸け橋のように始まった冬樹のギターソロ。豪快なサウンドの中で繊細なソロを聴かせる彼のソロタイムは、ガットギターでバッハの調べをつま弾き、場内をいったん静めると、今度はエレクトリックギターで速弾きやタッピングを織り交ぜたテクニカルなプレイを惜しげもなく見せつけた。その存在感が圧倒的に場内を制する中、「バリバリ最強NO・1」のクラシック音楽調のサビがSEとして流れ出す。パワーメタルと子供向けソング、クラシックなどを調合しポップテイストに仕上げた、まさにF・S・B流アニメソングだ(彼らは"ヘビー・童謡・オーケストラ・スラッシュ・ソング"と呼んでいる)。この曲が主題歌となったアニメ番組はTVオンエアされているものの、CDとしてまだ発売されていない。しかし、F・S・Bの魅力をふんだんに取り入れたミクスチャーサウンドは、オーディエンスを自分たちのペースに引き込むに十分な威力を発揮し、エンディングに向けてスパートがかけられた。重低音で下腹を攻撃してくるPON&大橋の強力なリズムセクション。ジミ・ヘンドリックスなどを彷彿(ほうふつ)とさせる変幻自在のプレイを聴かせる冬樹のギターワーク。腰を落としマイクを握る手のひじを突き上げ、闘志をみなぎらせたスタイルで歌うだりあのボーカル。四人の高揚したテンションから、重厚なロックサウンドを全身全霊で放ち、オーディエンスから返ってくるエネルギーを浴びる快楽をたん能していることが伝わってくる。そしてオーディエンスに、最初から最後までハイテンションでF・S・Bと一緒にロックをしたという満足感を残すのだった。

歌メロばかりに神経を使った軟弱なサウンドがまかり通る現在のJロックシーンの中で、F・S・Bはパワーとグルーブを大切にしている数少ないバンドだ。最近のアルバムを聴き比べると彼らのポリシーであるグルーブの威力が、ライブによって磨かれ、増幅していることがうかがえる。…となると彼らがこのツアーを終え、各地で受け取ったオーディエンスからのパワーとさらに鍛え上げられたグルーブが、次のアルバムに封じ込められると、今まで以上に脳天をグラグラさせられる作品になるはずだ。ライブ終了後、最新アルバムがリリースされたばかりだというのに、僕はそんなことを考えて心臓をバクバクさせていた。

[文・樹音檸檬　撮影・金原 誠]

1. F・S・B
2. 勝負だ!!
3. THEME OF D.K.
4. いつも心にFIRE
5. ポルシェをくれるまでは
6. したたかになれ
7. UTOPIAN AND REALIST
   ～BASS SOLO
8. IN TRANCE
   ～DRUM SOLO
9. FUCKIN'権力
10. AM8:58
11. 悲しみに逢いたくて
    ～GUITAR SOLO
12. バリバリ最強NO.1
13. ANIMAL
14. ハマッテシマッタ
15. 口唇に銃を押しあてて
16. BACK YARD RAISE MAN

encore

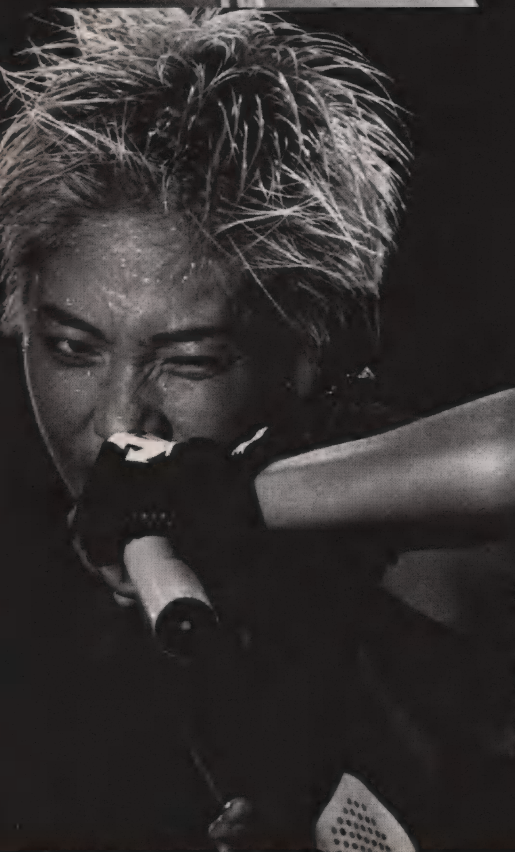
1. 大好きQUEEN
2. TOP OF THE WORLD

encore

3. 極悪非道な罪人たちよ

1996年5月18日　大阪ウォーホール

LA'CRYMA CHRISTI

LIVE J-ROCK REPORT

1996年5月11日　大阪ミューズホール

1. S.E.A.
2. POISON RAIN
3. カリブで生まれた月
4. 新曲
5. DRUM SOLO
6. 7色のピアス
7. 新曲
8. 偏西風
9. A.S.I.A.
10. ひび割れた鏡に映った私を殺した後…
11. White Period.
12. Slam's Eye
13. Forest
14. Warm Snow

encore

E1 新曲

一つのストーリーを持ったサウンドが聴く者の中で映像へと生まれ変わる

ステージに引かれていた幕が中央からゆっくりと開き、モスグリーンのライトの中にメンバーの影が浮かび上がった。ステージ前を陣取る少女達の叫ぶ声を優しく静めるように、オープニングナンバー「S.E.A.」のイントロダクションがフロア全体に染み渡っていく。スリリングな二本のギターが絡み、心地よいビートと存在感のあるベースが独特のグルーブを生むが、やがてTAKAの歌うミステリアスなメロディーを引き立てるように穏やかなサウンドへと変わる。動から静、そして静から動へと展開する複雑でち密な楽曲が、聴く者を一気に自分たちの世界に引き込むのではなく、徐々に心の中を自分たちの色に染めていく。

地元大阪のインディーズファンはもちろんのこと、全国的に注目されているラクリマ・クリスティは、"ビジュアル系"と呼ばれる連中と同じようにあやしげなメイクを施したバンドだ。しかし彼らは、地道なライブ活動とファンの口コミだけでその存在をシーンに浸透させた。サウンドよりビジュアルに引かれライブに集まってくる女性ファンも多いが、会場のフロアを見回すと男性客の数もけっして少なくない。しかも、この日のチケットはソールドアウト、約四百人を動員している。まさしく現在の彼らの勢いと、シーンからの注目度が形となって表れていると言えるだろう。オールスタンディングとなったスペースには、開演前からただならぬ熱気が漂い、バンドに向けられた期待の大きさが、ひしめき合う観客一人ひとりの上昇し始めた体温からも感じられる。

しかし、残念なことにそんな観客の高まった期待が暴走してしまった。2曲目の「POISON RAIN」の演奏中に血相を変えたスタッフがステージに現れ、手をクロスしライブを中断させると、ステージ前の高密度な聴衆の中から次々とぐったりとした少女がスタッフに抱えられ運び出された。「ラクリマのライブは失神者が出るほどデンジャラスなのだろうか？」。そんな疑問が僕の中で芽生える。確かにハードロックをベースとしたノリのいいナンバーもあるが、観客が暴れ狂うような激しいサウンドではない。こんな事件が発生した原因が何なのかを、一部の観客に考えてもらいたいものだ。

約10分ほどしてメンバーが再びステージに現れライブ再開。中断による緊迫した空気がフロアを制していたが、TAKAのキャラクターが伝わるMCで雰囲気を和ませると、淡いムードを持った「カリブで生まれた月」で再び自分たちの世界を作り出した。HIROとKOJIのタイプの違う二本のギターが織りなして生まれる浮遊感が、楽曲の持つ幻想的なイメージを鮮やかに彩り、SHUSEの奏でるベースがメロディーを引き立たせる。数分前にライブが中断してしまったことを忘れさせるほど、どんどん楽曲の中へと観客を包み込み、胸の奥底から温かい光が生まれてくるような感覚を与えるのだった。

ライブ中盤ではLEVINのドラムソロが用意されていた。彼はラクリマ特有の複雑な楽曲の中で的確なリズムを刻むドラマーだけに、どんなソロタイムを見せてくれるか興味津々だったが、テクニカルなプレイや、迫力あるドラミングの披露ではなく、ステージの一番後ろにいるドラマーにスポットを当ててファンを喜ばせただけのような印象があったのは心残り。しかし、ドラムソロからつながるようにプレイされた「7色のピアス」は、アメリカンハードロック・テイストの中にも、しっかりと自分たちのカラーを打ち出しており、ラクリマの音楽性の広さや柔軟さを痛感させられる。さらに「偏西風」から「White Period.」への流れでは、彼らの楽曲の良さを改めて思い知らされた。まるで一つのストーリーを持つかのようなサウンドのドラマチックな展開の中で、ボーカルが曲のイメージを言葉で表現することによって、聴く者の中で音が映像へと生まれ変わる。そして今夜の壮大な物語は、HIROのボトルネックを使ったルーズなギターに導かれるように始まる「Warm Snow」によってエピローグを迎えた。

この日のライブは正直言って百パーセント満足できるものではなかった。僕は彼らを「インディーズのバンドなんだから…」という目で見たくない。それだけに、指摘したくなる点も目に付いたのだろう。しかし、それと同時に彼らの将来性に期待が持て、テクニックや楽曲の素晴らしさ、オリジナリティーを実感できたことも言っておきたい。冒頭にも述べたようにラクリマ・クリスティは、インディーズはもちろんメジャーシーンからも注目され、サウンドに対しても高い評価を受けている。ただ、今の状態で満足していては、結局「実力のあるインディーズバンド」で終わってしまう。急上昇する周囲からの注目度と、バンドの成長度がまだかみ合っていないのも事実だ。だからこそ、それをいいプレッシャーとして、数多くのライブを経験してどんどん成長していってもらいたい。そんな彼らの今後に僕は多大な期待を寄せている。

［文・毛刈松佳　撮影・佐藤潤一］

artist news

featuring nice artists!!

CUT UP 101

SELECT ARTIST 101

ICE、Eins:Vier、ACTION、AMG、THE YELLOW MONKEY、石田長生、忌野清志郎、Valentine D.C.、X JAPAN、大黒摩季、奥田民生、小沢健二、ORIGINAL LOVE、GARGOYLE、甲斐よしひろ、筋肉少女帯、久保田利伸、栗林誠一郎、GLAY、CRAZE、黒夢、QUNCHO~、幻覚アレルギー、cornelius、米米CLUB、近藤房之助、ZARD、斉藤和義、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ&ザ・ロケッツ、sheen、シェラザード、塩次伸二、SION、SIAM SHADE、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER(S)、少年ナイフ、SUPER JUNKY MONKEY、THE STREET BEATS、SPARKS GO GO、SPITZ、SPAED、SLY、妹尾隆一郎、SOUL FLOWER UNION、Char、CHAGE&ASKA、Chap Chimes、CHARA、TWINZER、D.T.R、DEEP、T-BOLAN、DEEN、DER ZIBET、DOG FIGHT、TOMOVSKY、DREAMS COME TRUE、永井隆、長渕剛、nuvo:gu、NOKKO、PERSONZ、HYPERMVNIA、↑THE HIGH-LOWS↓、BOW WOW、BUCK-TICK、浜田省吾、浜田麻里、PAMELAH、B'z、PIZZICATO FIVE、BIG LIFE、氷室京介、FEEL SO BAD、FIX、BLOODY IMITATION SOCIETY、BLANKEY JET CITY、布袋寅泰、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、MANISH、Mr.Children、media youth、modern grey、THE MODS、矢沢永吉、山岸潤史、憂歌団、LOUDNESS、LA'CRYMA CHRISTI、RUFFIANS、LAUGHIN' NOSE、L'Arc~en~Ciel、LUNA SEA、渡辺美里、WANDS

(ニュースは96年6月現在)

CUT UP 101

artist news
featuring nice artists!!

1 ICE

8月21日、日本武道館で行われる「JT スーパーサウンド'96」(with ACRI&BIG HORNS BEE、シャ乱Q、JUDY AND MARY他)に出演。10月5日には大阪城野外音楽堂でのライブも決定している。現在は、ニューアルバムのレコーディング中。

2 Eins:Vier

ニューシングル「after」が好評の中、早くも次のシングルとアルバムのレコーディングに突入。レギュラーパーソナリティーを務めるラジオ番組、Kiss-FM「MIDNIGHT KISS PARTⅡ～SING YOUR LIFE」(毎週月曜・深夜1:00～)、FM-NACK5「THE ROCK ARENA」(毎週火曜・深夜3:00～)もオンエア中だ。

3 ACTION

NOVELAやBOW WOWと、9月8日神戸チキンジョージ、15日東京日清パワーステーションでライブを行う。

4 AMG

ミニアルバム「AMG」が好評の中、7月21日に大阪グラン・カフェでライブを行う。また、6月7日にリリースされたコンピレーションアルバム「J-BLUES BATTLE Vol.2」では、「Train Kept A Rollin'」を披露している。ファン必聴だ!

5 THE YELLOW MONKEY

7月10日にニューシングル「SPARK」をリリース。絶好調のコンサートツアーは、7月1日東京北とぴあさくらホール、2日大宮ソニックシティ、4日高松市民会館、5日松山市民会館、7日高知県民文化ホール、8日徳島市文化センター、10日広島郵便貯金ホール、11日岡山市民会館、13日八王子市民会館、17日名古屋国際会議場センチュリーホール、20・21日NHKホール、24・25日大阪厚生年金会館、27日長野県県民文化会館、30日静岡市民文化会館で行われる。

6 石田長生

7月にファンクラブ会員と海外ツアー(マレーシア)の予定。7月15日京都RAG「人の気も知らNIGHT!」(ゲスト:中島らもバンド)、27日大阪ビーハウス(ソロ)でライブを行う。

7 忌野清志郎

Little Screaming Revueとして、7月21日神戸チキンジョージ、25日福岡市民会館「ROCKだぜ」、28日大阪万博記念公園「Meet The World Beat'96」、8月25日札幌芸術の森「Good Stock'96」のイベントに出演。9月7日には日比谷野外音楽堂でワンマンライブを行う。

8 Valentine D.C.

8月4日京都ミューズホール、6日渋谷オン・エア・ウエスト、10日市川CLUB GIOでライブを行う。チケット発売は、7月7日。現在は、ニューシングルのレコーディング中だ。

9 X JAPAN

7月8日には、X JAPANのシングル「Forever Love」がリリース。また、hideがニューシングル「MISERY」を発表。アルバム制作も進行中らしく、ツアーも予定されている。9月8日には千葉マリンスタジアムで「LEMONed PRESENTS "hide indian summer special"」も行われる。

10 大黒摩季

7月8日にNHKアトランタオリンピック放送のテーマソングになっているシングル「熱くなれ」をリリース。この曲のカップリング「そして」も、同放送のイメージソングだ。

11 奥田民生

6月21日にニューシングル「イージュー★ライダー」がリリースされた。この曲は日産ウイングロードCFのイメージソングだ。先日全国ツアーが好評を得て終了したが、夏は7月27日鳥取夢みなと博会場予定地周辺「ガッツな息子がキラリ☆」(with ウルフルズ、スピッツ)、28日大阪万博記念公演もみじ川芝生広場「Meet The World Beat'96」、8月3日石川県森林公園「KIT POP HILL '96」(with JUDY AND MARY、ウルフルズ他)、8日富士急ハイランドコニファーフォレスト「SOUND CONIFER229」(with エレファントカシマシ、ブレイグス他)のイベントに出演する。

12 小沢健二

7月29日リリース予定のミニアルバム「球体の奏でる音楽」をレコーディング中。全新曲で7曲を収録予定だ。

13 ORIGINAL LOVE

7月19日にニューアルバム「Desire」をリリース。コンサートツアーは、同23日市川市文化会館よりスタートする。9月29日群馬県民会館、10月1日府中の森芸術劇場どりーむホール、2日神奈川県民ホール、4日浦和市文化センター、9・10日大阪厚生年金会館、14日北海道厚生年金会館、16日アクトシティー浜松、18・19日愛知勤労会館、29日熊本市民会館、30・31日福岡市民会館、11月2日宮崎市民文化ホール、5日倉敷市民会館、6日広島厚生年金会館、10日松本文化会館、12日新潟県民会館、14日石川厚生年金会館、21日岩手県民会館、23・24日宮城県民会館。

14 GARGOYLE

6月21日に、ベストアルバム「borderless」がリリースされた。8月7日は新宿リキッドルームで行われるイベントに出演。8月30・31日は、新潟O-DOでワンマンライブを行う。

15 甲斐よしひろ

6月28・29・30日、7月12・13・14日に東京日清パワーステーションにて、ゲストをもりだくさんに迎え「ロッキュメントⅡ」を行う。7月24日には、彼のプロデュースによる甲斐バンドのアルバム「Big Night」をリリース。8月10・11日にはPop・STOCK東京ビッグサイト・国際展示場東6ホールにてライブ「Big Night」を行う。ファンにはたまらない夏だ!

cutup 1

cutup 2

cutup 3

cutup 4

cutup 5

cutup 6

cutup 7

cutup 8

cutup 9

cutup 10

cutup 11

cutup 12

cutup 13

cutup 14

cutup 15

artist news
featuring nice artists!!

cutup 26

cutup 22

cutup 19

cutup 17

cutup 16

cut up 27

cutup 23

cutup 20

cutup 18

cutup 28

cutup 24

cutup 21

cutup 29

cutup 25

cutup 30

16 筋肉少女帯

大槻ケンヂがソロライブ『いい日だねー、今日は誰のブカブカを聞く? TOUR1』を、7月7・8日吉祥寺MANDA-LA2、13日池袋文芸座で行う。8月7日には、シングル「ブカブカ」のリリースも決定。8月29・30日には、東京日清パワーステーションで『いい日だねー、今日は誰のブカブカを聞く? TOUR2』も行われる。

17 久保田利伸

全国ツアー『オィーッス!』が決定。9月13・14日福岡国際センター、17・18日広島サンプラザ、21・22・23日国立代々木競技場第一体育館、26・27日真駒内アイスアリーナ、10月1日静岡産業館ツインメッセ静岡北館、16・17日仙台市体育館、29・30日名古屋レインボーホール、11月2・3日神戸ワールド記念ホール、6・7日大阪城ホールで行われる。

18 栗林誠一郎

ソロアルバムのレコーディング中。

19 GLAY

ニューシングル「BELOVED」を8月7日にリリース。この曲は、7月5日スタートのドラマ「ひと夏のプロポーズ」(金曜・21:00~)の主題歌だ。カップリングは「Together」のニューバージョン。またチケットが即日ソールドアウトになったコンサートツアー「TOUR "BEAT out! reprise"」の追加公演が、9月9日日本武道館に決定! チケット発売は、7月21日だ。

20 CRAZE

7月24日にニューシングル「to me. to you」をリリース。9月には再びシングル、10月にはアルバムをリリース予定だ。また、7月29日には大阪厚生年金会館で行われるイベント『W'OMIX NIGHT SPECIAL~ROCK of AGE vol.1~』に出演。ライブツアー『~CRAZE CLUB CIRCUIT '96~GET THE F☆☆K OUT』は、8月5日名古屋ダイアモンドホール、7日福岡スカラエスパシオ、9・10日大阪IMPホール、12・13日赤坂BLITZ、21日新潟PHASE、23日札幌ファクトリーホールで行われる。

21 黒夢

オリコン初登場1位を飾ったニューアルバム『FAKE STAR』を引っ提げて、『FAKE STAR'S CIRCUIT』を展開中。6月27日岡山市民文化ホール、7月1日岐阜市民会館(追加公演)、3日浜松市福祉文化会館、4日市川市文化会館、5日前橋市民文化会館、9日熊本県立劇場演劇ホール、12日鹿児島市民文化ホール、13日福岡電気ホール、14日大阪IMPホール(追加公演)、16・17日大阪厚生年金会館、18日大宮ソニックシティ、22日金沢市文化ホール、24日新潟テルサ、25日長野県県民文化会館、27日名古屋市公会堂、31日横浜アリーナ(追加公演)、8月17日沖縄コンベンション劇場。

22 QUNCHO

新作『Q』のリリースが8月7日に決定! ライブは、6月27日高円寺ジロキチ、7月2日大阪ウォーホール、3日鳥取5ベニーズ、4日米子アンフェルナンデスにて行われる。

23 幻覚アレルギー

『BOLLOCKS TO EVERYONE 1996』のアンコールライブを、7月2・3日新宿ロフトで行う。9月には『DANCE MACABRA SHOW』と題した小サーキットツアーが決定。9月14日京都ミューズホール、15日大阪ウォーホール、22日市川CLUB GIO、23日熊谷VOGUEで行われ、チケットは7月20日に一斉発売となる。

24 cornelius

リミックス集『96/69<地球あやうし!!>』が好評。岡村靖幸、スチャダラパー、hideなどがリミックスした作品は、ファンならずとも一聴の価値あり。

25 米米CLUB

8月31日全国公開の映画『ACRI』を監督したボーカルの石井竜也が、この映画のためにACRIというユニットを結成! ゲストにchar、有賀啓雄を迎え、映画のテーマミュージックや劇中曲などを担当する。8月1日にシングル、21日にアルバム、31日にサントラをそれぞれリリース。charは石井の10年来の友人、有賀は米米CLUBの最新作『H2O』のプロデューサーだ。

26 近藤房之助

7月1日に大阪ウォーホール5周年記念ライブに"近藤房之助&Deepest Pocket"として出演。ニューアルバムは8月にリリース予定だ。

27 ZARD

7thアルバム『TODAY IS ANOTHER DAY』を7月8日にリリース予定。作詞家、ボーカリスト坂井泉水が描く多彩な恋愛感情の世界が、より躍動的なビートに乗せて展開される。タイトル曲の「Today is another day」、FIELD OF VIEWに詞を提供し、ドラマ『輝く季節の中で』のオンエアでも話題となった「君がいたから」などを収録。

28 斉藤和義

6月30日新宿リキッドルームにてライブを行う。7月17日には、神戸チキンジョージでのザ・ストリート・スライダースのイベントに、24日には福岡市民会館で行われるイベント『ROCKだぜ!』に出演する。現在は、8月末にリリース予定のシングルを制作中だ。

29 坂本龍一

ピアノ、バイオリン、チェロというトリオ編成で自身の曲をカバーした新作『1996』を引っ提げて、全国ツアー『WORLD TOUR "1996"』を行う。8月19日石川厚生年金会館、22日愛知厚生年金会館、24日神奈川県民ホール、25日大宮ソニックシティホール、27~29日Bunkamuraオーチャードホール、31日・9月1日大阪フェスティバルホール。

30 サザンオールスターズ

6月25日にシングル「太陽は罪な奴」を、7月20日に4年ぶりのアルバム『Young Love』をリリース。ツアー『ザ・ガールズ万座ビーチ』は、8月4日つま恋多目的広場、8月10・11日西武ライオンズ球場、17・18日真駒内オープンスタジアム、24・25日海の中道海浜公園野外劇場、9月6・7日ナゴヤ球場、15・16日阪神甲子園球場、21・22日横浜スタジアム、10月2・3日宜野湾市海浜公園野外劇場。

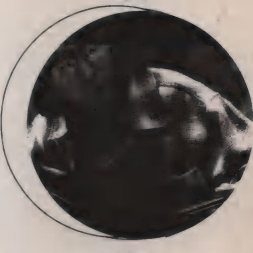
CUT UP 101

cutup 45

cutup 43

cutup 40

cutup 36

cutup 31

cutup 44

cutup 41

cutup 37

cutup 32

cutup 42

cutup 38

cutup 33

cutup 39

cutup 34

cutup 35

43 THE STREET BEATS

ツアー終了後は、ちょっと早めの夏休み。今後の活動のパワーを蓄う。

44 SPARKS GO GO

7月24日福岡市民会館『ROCKだぜ!』(with The Space Cowboys、宮本浩次他)、8月3日石川県森林公園『KIT POP HILL '96』(withウルフルズ、コンチネンタルブレックファスト他)、8日富士急ハイランドコニファーフォレスト『SOUND CONIFER229』(withエレファントカシマシ、ブレイグス他)のイベントに出演する。また、8月5、12、19日には東京日清パワーステーションで、ウィークリーライブ『NOW&ZEN』を行う(チケット発売は7月7日)。現在メンバーは曲作り中で、ボーカルの八熊慎一は、Puffyのデビューアルバムにも1曲提供しているそうだ。要チェック!

45 SPITZ

7月7日に予約分のみの完全限定発売であるアナログ盤『チェリー / 空も飛べるはず』をリリース。夏は、各地のイベントに精力的に出演する。7月27日鳥取境港市夢みなと博会場予定地周辺『ガッツな息子がキラリ☆』(with奥田民生、ウルフルズ)、8月4日真駒内オープンスタジアム『HOKKAIDO ROCK CIRCUIT '96』(with ウルフルズ、GREAT3、SMILE、MOON CHILD)、11日仙台みちのく湖畔公園『PARK ROCK 1996』(ワンマン)、18日福岡海の中道海浜公園野外劇場『THE GREAT JAMBOREE '96 IN UMINAKA お太陽サマ上々!!』(ワンマン)、24日名古屋商科大学内ラグビー場『NEW KIDS ON THE ROCKS』(with エレファントカシマシ、CASCADE、RAZZ MA TAZZ、thee michelle gun elephant、The JUICE、宮本浩次、ISIS他)、31日香川県志度町野外音楽広場テアトロン『THE GREAT JAMBOREE '96 IN SHIDO "瀬戸内夕焼け兄弟"』(ワンマン)。

39 JUDY AND MARY

各地で行われる夏のイベントに出演する。7月28日大阪万博記念公園もみじ川芝生広場『MEET THE WORLD BEAT'96』、8月3日石川県森林公園『KIT POP HILL'96』、4日福島県楢葉町天神岬スポーツ公園『COMING POP'96』、10日仙台みちのく杜の湖畔公園『PARK ROCK 1996』、17日マリンメッセ福岡『好きだ!博多だ!イベントだ!』、18日宮崎シーガイアイベントスクエア『SEGAIA SUMMER楽園音楽祭'96』、21日日本武道館『JT SUPER SOUND'96』。

40 JUN SKY WALKER(S)

ニューシングル『愛しい人よ』に続いて、7月1日ニューアルバム『EXIT』をリリース。7月13日日比谷野外音楽堂、17日大阪サンケイホール、18日愛知県勤労会館にて、『EXIT』と題した東名阪ツアーも行われる。

41 少年ナイフ

6月21日にシングル『WONDER WINE』をリリースした。アルバムは8月にリリースの予定で、プロデューサーはオルタナティブシーンの鬼才ロブ・ブラザーズだ!

42 SUPER JUNKY MONKEY

最新アルバム『地球寄生人』が『PARASITIC PEOPLE』として7月23日に全米リリースの予定。ライブは、6月28日下北沢シェルター、30日渋谷ラ・ママ、7月1日新宿リキッドルームで行われる。

35 シェラザード

9月8日神戸チキンジョージ、15日東京日清パワーステーションで、NOVELAがライブを行う。

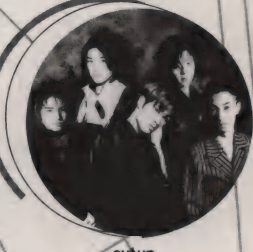
36 塩次伸二

6月30日山梨ギブソンハウス、7月11日横浜ブルースカフェ、19日高円寺ジロキチ、25日大阪ベイサイドジェニー、27日高円寺ジロキチでライブを行う。

37 SION

ツアー終了後は、オフ。

38 SIAM SHADE

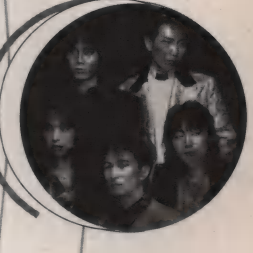
7月29日に大阪厚生年金会館で行われるイベント『W'OMIX NIGHT SPECIAL～ROCK of AGE vol.1～』に出演。また、秋のツアーが決定した。9月6日広島並木ジャンクションを皮切りに、同8日博多徒楽夢Be-1、9日熊本ジャンゴ、12日新潟O-DO、13日長野J、15日富山市民プラザ3Fマルチスタジオ、16日金沢VANVAN V4、20日函館金森ホール、22日札幌ペニーレーン24、24日仙台ビーブベースメントシアター、29日名古屋ダイアモンドホール、10月1日大阪IMPホール、2日神戸チキンジョージ、8・9日赤坂BLITZで行われる。

32 ZYYG

7月29日に大阪厚生年金会館で行われるイベント『W'OMIX NIGHT SPECIAL～ROCK of AGE vol.1～』(with CRAZE、SIAM SHADE、The Space Cowboys)に出演。8月1日市川CLUB GIO、4日前橋club FLEEZ、5日横浜CLUB24ではライブも決定している。7月末には、3曲入りマキシシングルをリリース予定だ。要チェック!

33 シーナ&ザ・ロケッツ

新作のレコーディングに入る予定。

34 sheen

9月にシングルをリリース予定。現在は、そのレコーディング中らしい。

31 佐野元春

7月1日に『フルーツ』というタイトルのニューアルバム&ビデオをリリース。全国ツアーは、9月8日戸田市文化会館を皮切りに同11日グリーンホール相模大野、13日宇都宮市文化会館、18日大宮ソニックシティ、19日府中の森芸術劇場、21日よこすか芸術劇場、28日市川市文化会館、30日京都会館、10月1日神戸文化ホール、3・4日大阪フェスティバルホール他、11月27日長野県民文化会館まで全国を回る。

artist news
featuring nice artists!!

52 Chap Chimes

レコーディング中。彼らしくマイペースに進行しているようだ。

53 CHARA

映画『スワロウ・テイル』に登場するYEN TOWN BAND（エンタウンバンド）としてシングル「Swallowtail Butterfly～あいのうた～」をリリース。YEN TOWN BANDとしてのアルバムも夏から秋にかけてリリースされる予定だ。久しぶりの音楽活動に注目！

54 TWINZER

7月26日博多DRUM Be-1、28日大阪クラブクアトロ、31日渋谷オン・エア・ウエストで行われる「LIVE AXEL#1 "STRANGE BLUE"」のメンバーが発表になった。ベース明石昌夫、キーボード増田隆宣、ドラム黒瀬蛙ー、そしてギターにD.T.Rの藤本泰司の参加が決定。ライブでは、技量、表現力ともに兼ね備えたこのバンドが一体となって、ロックの神髄を聴かせてくれるはず。また同時に秋に発売予定の新作のレコーディングも行っている。

55 D.T.R

ギターの藤本泰司がTWINZERのライブサーキットに参加。7月26日博多DRUM Be-1、28日大阪クラブクアトロ、31日渋谷オン・エア・ウエストで行われる。久しぶりに彼のギターが聴ける！

56 DEEP

未定。

57 T-BOLAN

次作に向けてのデモ作り&レコーディング中。

58 DEEN

7月上旬に10枚目のシングル「SUNSHINE ON SUMMER TIME」をリリースする。この曲はタイトル通り思いっきりそう快な夏ソング。パワフルなイントロに導かれて待ち切れない夏への期待感を一気に歌い上げている。またクラブツアー「LIVE JOY Break-1」が決定。9月19日札幌ファクトリーホール、24日福岡クロッシングホール、26日大阪IMPホール、27日名古屋クラブダイアモンド、10月5日赤坂BLITZで行われる。

59 DER ZIBET

次の活動に向けて充電中。心配されていたベーシストのHALは、ほぼ完治したそうだ。

46 SPAED

メンバー全員スタジオにこもり、3rdアルバムに向けてのヘッドアレンジを継続中。四人の入念な作業が続いており、新作はかなり期待出来るものになりそうだ。

47 SLY

6月21日にライブビデオ『LIVE"Dreams of Dust"』をリリースした。3rdアルバムも完成間近だ。

48 妹尾隆一郎

6月28日新宿クラブワイリアー、29日高円寺ジロキチ、7月1日大阪アナザードリーム、2日神戸・楽屋、3日京都ムーン、11日横浜ブルースカフェ、18日青山エラグ、20日札幌ベッシーホール、21日高円寺ジロキチ、22日大阪アナザードリーム、24日京都ムーン、25日大阪ベイサイドジェニー、27日マリンピアくろいでライブを行う。神戸・楽屋、大阪アナザードリーム、京都ムーンを結んでの彼のプロデュースによるブルースプロジェクトが始まった。詳しくは各店まで。

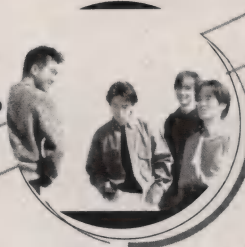
49 SOUL FLOWER UNION

シングル「向い風」を7月21日にリリース。ソウル・フラワー・ユニオンとしては、7月13日神戸チキンジョージでワンマンライブを行う。また、ソウル・フラワー・モノノケ・サミットとしては、6月30日有明コロシアム『琉球フェスティバル'96』、7月7日福岡GAYA『ACOUSTIC LIVE in GAYA '96』、14日京都円山公園音楽堂『宵々山コンサート '96』に出演する。

50 Char

『Lightning Blues Guitar Tour』も無事終わり、9月にリリース予定のミニアルバムのための創作活動中。また、サイケデリックスのドラマー、ジム・コープリーがポール・ロジャースのツアーメンバーとなり、来日公演を行う。7月6日札幌道新ホール、8日東京厚生年金会館、9日名古屋ボトムライン、10日大阪IMPホール、12日川崎クラブチッタ。

51 CHAGE&ASKA

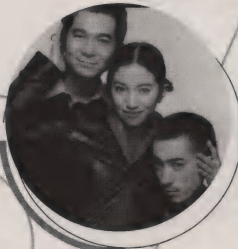
7月8日イギリスで、彼らの楽曲のカバーコンピレーションアルバムが発売される。インエクセスのマイケル・ハッチェンス、ボーイ・ジョージ、チャカ・カーンなど世界のトップアーティスト達が参加し、加えて本人達も「The River」「Castles In The Air」(原曲「On your Mark」)を新録して収録。また、このアルバムの発売を記念して、ロンドンで「MTVアンプラグド」に出演した。これは東洋人として初めての快挙だ。

CUT UP 101

cutup 67

cutup 60

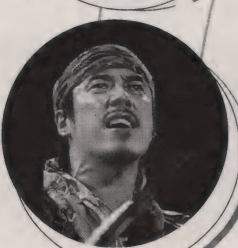
cutup 68

cutup 61

cutup 69

cutup 62

cutup 70

cutup 63

cutup 71

cutup 64

cutup 72

cutup 65

cutup 73

cutup 66

69 ▲THE HIGH-LOWS▼

6月24日にシングル「相談天国」をリリースした。今夏は、7月28日大阪万博記念公園もみじ川芝生広場『MEET THE WORLD BEAT'96』、8月29日名古屋センチュリーホール『R&R JAPAN』(with ブランキー・ジェット・シティ、ザ・ストリート・スライダース)のイベントに出演。火花の散るライブが期待出来そうだ。9月と10月にはシングル、11月にはアルバムをリリース予定で、その後はツアーも予定されている。

70 BOW WOW

7月21日に2ndアルバム「BOW WOW#2 LED BY THE SUN」をリリース。8月5日名古屋クラブクアトロ、6日大阪クラブクアトロ、8日渋谷クラブクアトロでは、ドラマーがオリジナルメンバー新美俊宏に交代後、初のライブも決定している。どんなロックサウンドを聴かせてくれるのか期待しよう。

71 BUCK-TICK

全国ツアー『CHAOS』のリハーサルもいよいよ大詰め。7月4日川口リリアメインホールを皮切りに、7月6日松戸森のホール21、8日金沢観光会館、9日長野県県民文化会館、13日北海道厚生年金会館、15日群馬県民会館、17日新潟テルサ、19日静岡市民文化会館、22日栃木県総合文化センター、26日岩手県民会館、28日宮城県民会館、8月5日鹿児島市民文化ホール、7日福岡サンパレス、13日大阪城ホール、15日名古屋国際会議場センチュリーホール、19・20日日本武道館、26日高松市民会館、27日倉敷市民会館、29日松山市民会館、30日広島郵便貯金ホール、9月2日沖縄コンベンションセンター劇場まで21カ所22公演を駆け抜ける。今回のツアーでは6月21日にリリースされた約1年ぶりのニューアルバム『COSMOS』の楽曲を中心に構成されるが、ミドルテンポの楽曲が多いため会場でファンの大合唱が聴けるのは間違いないだろう。

72 浜田省吾

ニューアルバムのレコーディング中。一枚はオリジナルアルバムで11月上旬リリース予定。もう一枚は愛奴時代と5枚目のアルバム『君が人生の時…』までの中から選曲したセルフカバーアルバムで、来年の1月ごろリリース予定。若いころに作った楽曲は、今の彼が作る曲とはまた違った魅力を持っていて、それを今もう一度やってみようということになったらしい。過去の楽曲を現在の彼がどのように聴かせてくれるのか楽しみである。

73 浜田麻里

最新アルバム『PERSONA』よりシングルカットした「Antique」が好評。

60 DOG FIGHT

6月4日に行われた『佐久間サミット〜佐久間正英プロデュースライブ〜』では、新曲を二曲披露。この新曲は秋ごろに聴けるはず…!?

61 TOMOVSKY

8月31日東京日清パワーステーションにて、弾き語りライブを行う。先月のニュースだった自動車免許取得は断念して、秋にリリース予定の新作のデモテープ及びレコーディングをスタート。10月にはバンドスタイルでの全国ツアーも予定している。

62 DREAMS COME TRUE

全国ツアーが、7月24・25日横浜アリーナを皮切りに、同29・30日盛岡アイスアリーナ、8月7・8・10・11日福岡国際センター、9月3・4日真駒内アイスアリーナ、9・10・12・13日大阪城ホール、18・19・21・22日横浜アリーナ、10月2・3・5・6日名古屋レインボーホール、15・16日代々木競技場第一体育館他で行われる。

63 永井　隆

6月30日大阪ウォーホール、7月13日大阪ビーハウス、14日大阪グラン・カフェにてライブを行う。アルバムのレコーディングも続行中だ。

64 長渕　剛

『LIVE'96-KAZOKU-』もいよいよ終盤。6月29日岡山市総合文化体育館、7月2・3日日本武道館、6日福岡マリンメッセ、9日鹿児島アリーナ。

65 nuvo:gu

8月にツアーが予定されている。

66 NOKKO

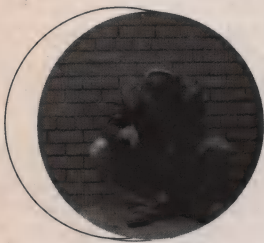
レコーディングが大詰め。そろそろ完成間近か!?

67 PERSONZ

10thアルバムのレコーディングを続けている。9月にシングル、10月にアルバムをリリース予定だ。

68 HYPERMANIA

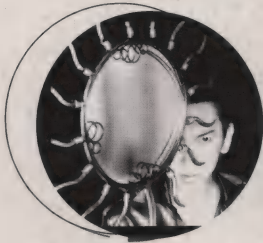
7月15日に2ndアルバム『Together along』をリリース。そのアルバムが先行発売されるクラブサーキットは、7月9日市川CLUB GIO、11日横浜7thアベニュー、12日熊谷VOGUE、14日渋谷エッグマンで行われる。ツアーは7月18日名古屋ハートランド、20日京都ミューズホール、21日DUKE高松、22日松山サロンキティ、23日高知キャラバンサライ、25日福岡DRUM Be-1、26日広島並木ジャンクション、28日大阪ロケッツ、8月9日札幌メッセホール、12日新潟O-DO。

artist news
featuring nice artists!!

cutup 85

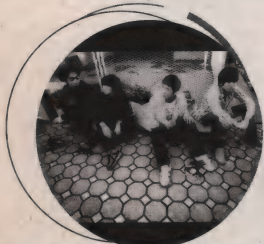
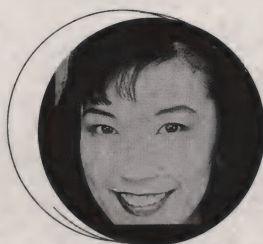
cutup 82

cutup 78

cutup 74

cutup 86

cutup 83

cutup 79

cutup 75

cutup 87

cutup 84

cutup 80

cutup 76

cutup 81

cutup 77

85 THE MAD CAPSULE MARKET'S

春のツアー終了後、レコーディングに突入した彼ら。6月にはロンドンにてミックスダウンを行うといったハードスケジュールだが、新作は今までのアルバムの中からの楽曲をピックアップし、それらを新録、リアレンジしたもの。音はまさしく今のマッドだ。単にベストアルバムとは呼べないこの作品は、8月21日にリリース。また、8月7日には、アルバム「4 PLUGS」の中から6曲を映像化したビデオクリップ集もリリースされる。

86 MANISH

3rdアルバム完成間近!

87 Mr.Children

6月24日にニューアルバム「深海」がリリースされた。全国ツアーは、8月24・25日横浜アリーナを皮切りにスタート。8月31日、9月1日三重サンアリーナ、5・6日名古屋レインボーホール、18・19・21・22日神戸ワールド記念ホール、27・28日・10月1・2・4・5日代々木第一体育館、9・10・12・13日福岡マリンメッセ、20・21・23・24・26・27日真駒内アイスアリーナ、11月2・3日大阪城ホール、9・10・12・13日仙台体育館、20・21・23・24日名古屋レインボーホール、12月11・12・14・15日広島グリーンアリーナ、20・21日横浜アリーナ、97年1月8・9・11・12日大阪城ホール、15・16日新潟産業振興センター、28・29・31日・2月1日浜松アリーナ。

82 BLANKEY JET CITY

ソロ活動が本格化。照井のJOE BROWNNは、7月3日シングル「GENUINE GUILTY」、17日にアルバム「ido-est」をリリースする。ライブは、7月23日岡山ペパーランド、24日福岡DRUM Be-1、26日名古屋クラブクアトロ、27日大阪クラブクアトロ、8月2日渋谷クラブクアトロ。浅井のSHERBETは、7月10日シングル「ゴースト」、24日アルバム「セキララ」をリリース。ライブは、7月29日大阪ウォーホール、30日名古屋ボトムライン、31日新宿リキッドルーム。中村のLove Shop ROSALIOSの展開は未定。8月末には、ソロ活動の集大成としてビデオがリリース予定で、この中ではLove Shop ROSALIOSも登場しそうだ。8月からは、ブランキーとして再始動。ロンドン、パリを含むEC TOURとロス、ニューヨークにてライブを行う予定。帰国後は、8月29日名古屋センチュリーホール「R&R JAPAN」(with ザ・ハイロウズ、ザ・ストリート・スライダーズ)に参加。9月1日には、日比谷野外音楽堂でのライブも決定している。

83 布袋寅泰

全国ツアーの仙台公演リハーサル中に骨折したが、6月4日の日本武道館より復帰。6月28日岩手県民会館、29日青森市民文化会館、7月13・14日NHKホールで元気な姿を見せる。

84 松任谷由実

7月15日に"荒井由実"名義で、人に提供したあの名曲「まちぶせ」を復活させる。

79 FEEL SO BAD

最新シングル「バリバリ最強No.1」が好リアクション中。メンバーはしばらくオフを取った後、次作のデモ作りとリハーサルに入る。

80 FIX

残念ながら解散が決定した。ギターのSHOJIは、結成したユニット"FAME"で6月にライブを行い、デビューへ向けて準備を進めている。

81 BLOODY IMITATION SOCIETY

7月8・9日新宿ロフト2DAYSで活動再開! その後は7月22日にクラブチッタ川崎「MORIYASU THE NOISE～BRING THE NOISE～」(with ヌンチャク、LAUGHIN'NOSE、WRESTLING CRIME MASTER、DOVE、BACK DROP BOMB、G×M×F、STATE CRAFT他)、8月2日下北沢シェルターのイベント(with KENZI&THE TRIPS、風来坊)に出演。夏から秋へとイベントへの参加を積極的に行い、バンドの動きも活発になっていくはずだ。

74 PAMELAH

引き続き、シングルのレコーディング中。リリースは7月下旬の予定。

75 B'z

「LIVE-GYM '96 Spirit LOOSE」も残すところ4本となったが、目下レコーディングが進行中だ。

76 PIZZICATO FIVE

特に決まった予定はなし!

77 BIG LIFE

残念ながら活動停止状態。

78 氷室京介

6月24日にニューシングル「STAY」をリリースした。秋ごろリリース予定のアルバムのレコーディングも続行中。

PORTABLE PLAYER

CUT UP 101

100 渡辺美里

シングル「My Love Your Love(ひとりしかいないあなたへ)」に続いて、7月15日にニューアルバム「Spirits」をリリース。全国ツアーは、7月12日松戸森のホール21、14日松本市文化会館、16・17日大阪フェスティバルホール、20日静岡市民文化会館、8月12日北海道厚生年金会館、16日宮城県民会館、17日岩手県民会館、26日倉敷厚生年金会館、27日広島厚生年金会館、9月1・2日名古屋国際会議場センチュリーホール、10日福岡サンパレス、11日長崎市公会堂、13日熊本市民会館、14日鹿児島市民文化ホール、20日浜松アクトシティ、22日京都会館、9月26・27日大阪フェスティバルホール。8月3日には11年連続の西武球場ライブが決定している。

101 WANDS

楽曲制作中。

97 LAUGHIN' NOSE

イベントに出演。7月22日川崎クラブチッタ「MORIYASU THE NOISE〜BRING THE NOISE〜」、28日R?hall「MOSH BOYZ」。

98 L'Arc〜en〜Ciel

7月8日シングル「風にきえないで」(c/w「I'm so happy」)をリリース。東名阪で行う「BIG CITY NIGHTS ROUND AROUND'96」は、8月26・27日日本武道館、9月1日名古屋市民会館、3・4日大阪厚生年金会館。8月31日には、彼らのアーティストブックが発売される。現在メンバーは次のアルバムに向けて曲作り中。新作を、楽しみに待とう。

99 LUNA SEA

まもなく夏のツアーがスタート。7月16・17日横浜アリーナ、23日広島サンプラザホール、26日名古屋レインボーホール、30・31日大阪城ホール、8月3・4日福岡国際センター、7・8日新潟産業センター、13・14日札幌月寒グリーンドーム、22・23日仙台市体育館、30・31日日本武道館。7月15日にはビデオ「LUNATIC TOKYO〜1995.12.23 TOKYO DOME」とシングル「IN SILENCE」をリリース。c/w曲「Ray」は新曲だ。

92 山岸潤史

6月末に再度渡米。年末までニューオリンズを拠点に活動する。7月は地元のインディアン・バンド、ワイルド・マグノリアスのレコーディングとツアーに参加の予定。

93 憂歌団

7月19日神戸チキンジョージ、20日宮崎県小林市文化会館、27日岐阜名宝村音楽祭でライブを行う。

94 LOUDNESS

高崎晃のソロアルバム「輪」が完成間近。発売は8月10日だ!

95 LA'CRYMA CHRISTI

7月22日に、1stミニアルバム「Warm Show」を、ニューアレンジ&レコーディングした「Dwellers of a Sandcastle」をリリース(初回3万枚には、豪華40Pブックレット付き)。ツアー「Home Sick Child」は、7月24日京都ミューズホール、7月28日横浜7thアベニュー、29日市川CLUB GIO、8月5日前橋club FLEEZ、6日名古屋ハートランド、9日金沢バンバンV4、16日福岡DRUM Be-1、18日広島ネオポリスホール、22日札幌メッセホール、25日新潟O-DO、27・28日大阪ミューズホール、9月4日渋谷オン・エア・ウエスト。

96 RUFFIANS

7月4日、8月30日大阪ファンダンゴ、8月22日名古屋今池ハックフィン、23日新宿リキッドルーム、24日三軒茶屋ヘブンス・ドアでライブを行う。

88 media youth

7月1日に2ndアルバム「SPIRAL COLORS」をリリース。8月22日には赤坂BLITZで「LIVE SPIRAL COLORS ACT ORANGE」と題したライブを行う。このライブに、アルバム封のアンケート用紙を持参した入場者には、もれなくスペシャルビデオがプレゼントされる。

89 modern grey

ラジオ番組「POWER ZZZ」(FM-FUJI・毎週月曜・24:00〜)、AIR-G「2500music powers」(毎週火曜・25:00〜)が好評オンエア中。9月にイベントに出演するとの情報が…。詳細はSWEET HEART(03-5443-8616)まで。

90 THE MODS

シングル「今夜決めよう」に続いて、7月21日にアルバム「ZA MOZZ」をリリース。6月30日に日比谷野外音楽堂でのライブが急遽決定! 6月21日で丸15周年を迎えた彼らの記念すべきライブになりそう。9月15日仙台電力ホールからは全国ツアーも決定。同17日札幌市民会館、21日福岡市民会館、23日宮崎県立芸術劇場、24日大阪サンケイホール、10月1日愛知勤労会館、2日岡山市民会館、8日渋谷公会堂。チケットは7月6日全国一斉発売だ。

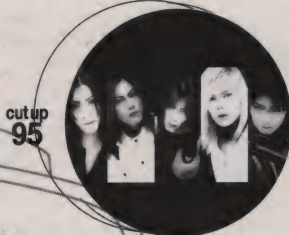
91 矢沢永吉

4月の公開レコーディングの模様を収めたビデオとLD「OPEN RECORDING GIG」と、ニューアルバム「MARIA」を、7月3日に発売。来月にはツアースケジュールも発表になりそうだ。

cutup 98

cutup 94

cutup 99

cutup 95

cutup 91

cutup 88

cutup 100

cutup 96

cutup 92

cutup 89

cutup 101

cutup 97

cutup 93

cutup 90

TOPICs
kyo

インタビュー・石田博嗣／撮影・高木昭仁
interviewer hiroshi ishida photographer akihito takagi

以前からずっと興味を引かれていたボーカリストがシーンに戻ってきた。彼が過去に在籍していたバンドはJロックシーンに大きな功績を残し、僕はそのころから彼の存在に一目置いていたのである。本人たちには不本意だったとは思うものの、そのバンドはいわゆる〝ビジュアル系〟と呼ばれる枠に押し込まれ、必要以上に〝着飾った〟部分が露出していたのは事実だ。しかし、シーンに復帰する彼はそれらを脱ぎ捨て、『strip』というタイトルをアルバムに掲げて、〝ロックボーカリストkyo〟としてソロデビューを果たした。そんな彼の言葉からは、ソロシンガーとしての「強い決意」と「失ってはいけない危機感」が感じられ、僕の関心がより一層深まったことは言うまでもない。

今のままで満足していたら3年後にはもういないだろう

●これまでバンドで活動していたのに、なぜソロアーティストとしてデビューしたのですか。

kyo(以下K)：ダイ・イン・クライズの解散というのは、それぞれのやりたいことが明確に見えてきて、そのまま続けても交じり合う部分が少ないからだったんですよ。だから次に自分がやる音楽を変える必要もなかったし、プロデューサーの菅原弘明さんとか、全面的に参加してくれた佐野昌樹君だとかのブレーンも見えてて、自分のやりたい音楽が作れることも見えていたし…。やっぱりバンドのメンバーを探すとなると、そう簡単に出会えないから時間がかかるし、そんなに休もうとは思ってませんでしたからね。それで、ソロとして踏み切った。

●やっぱりソロデビューというのは、自分の可能性にチャレンジする気持ちも強い?

K：ボーカリストという部分で、それはあると思います。アーティスト性というか、才能を開花させるのとはちょっと違うんじゃないかな。だから、とことん歌にこだわっていきたいし、最終的には声で気持ちを動かせられるようなボーカリストになっていきたいんですよ。そのためには、もっといろんなメロディーを歌いたいっていう単純な欲求もあるのでソロだったりするんですね。

●じゃあkyoさんの意識の中では、ソロアーティストじゃなくてソロシンガーなんですね。

K：そうですね。ただ「シンガーっていうんだったら、もっと歌をなんとかしなさい」って(笑)。昔はすごく〝アーティスト〟という言葉にこだわってましたけど、今はそれよりも〝ボーカリスト〟や〝シンガー〟という言葉にすごく引かれてます。将来的には全部自分の作品でアルバムを作りたいという欲求はありますよ。それにはやっぱり歌をもっともっと勉強して?ソングライティングの部分も…でも、あれは勘ですよね(笑)。そういう勘も、もっともっと磨いていきたい。

●そんなソロシンガーとしてデビューした96年4月24日(デビューシングルの発売日)は、kyoさんにとって特別な日になりました?

K：(笑)全然忘れてました。2月にレコーディングが終わってたし、3月にライブを3本やっちゃったじゃないですか。もう出てた気になってましたからね(笑)。僕、発売日に結構レコード店に見に行くんですよ。デランジェの時なんて、「DARLIN'」の発売日に見に行ったら店員にバレちゃって、サインさせられて、恥ずかしい思いをした(笑)。今回は「俺はとにかくいいものを作った」という自信があるから、細かいことなんて気にしなくなっているのかもしれませんね。

●もう三回目のメジャーデビューですしね。

K：とんでもない話ですよね(笑)。もうこれ以上ファンもスタッフも裏切れないという気持ちが強いし、後がないわけじゃないですか。解散がないんだし、引退しかないですからね。いい意味でお尻に火が付いていると言うか、このまま今のところで満足していたら3年後にはもういないだろうなと思う。そういう部分で、声を一発聴いただけで胸の中が鳴るようなボーカリストになりたいという大きな目標に向かって進んで行かないと怖いと思います。だから常に自分の中には危機感がありますよ。歌を歌うことに対してのあこがれが、高校生の時にライブハウスに出て、渋谷公会堂に44マグナムとか観に行って、「よし俺もいつかこういう所に」ってなった気持ちにすごく近い所に戻ってきてます。歌うことが自分にとって切り放せないものになっているんですよ。それがなくなった時の自分なんて想像出来ない。

●「歌いたい」と思えることって大事ですよね。CDを出したり、ライブできたりすることを当たり前に思ってしまうと、絶対にそんなことって思わなくなるでしょ。

K：CDを出せることに慣れたくない。やっぱりCDを作るってことはすごく大変なことだと思うし、ある意味〝商品〟となって市場に出るわけじゃないですか。それを待ってくれた人が手にした時に、重みがあるものとして常に残していかないと。そうじゃないと本当に張りぼてで終わってしまうし、マネキンになってしまう。裸になって、自分がきちんと血の通った人間なのかを確認したかった時期でもあるんだと思う。本当に〝強い歌〟を歌っていけるようになっていきたい。

●デランジェの名前が出ましたが、デランジェのフォロワーたちがメジャー進出してきていますよね。そんな自分たちの作った功績をどう思いますか。

K：あんまり実感しないんですけどね。やっぱり存在感はあったんだろうなと思うし、自分が胸張ってやってきたことに間違いはなかったんだと思います。今は自分がデランジェのファンですから。いつもお手本になっていますし、あのバンドの残した功績は大きいと思えるから、今頑張れているんじゃないかな。自分がもっともっと頑張ればダイ・イン・クライズも数年後にはそうなっていくと思うし、自分が残してきたものはさび付かせたくないですね。だからデランジェのころの話や、ダイ・イン・クライズのころの話を聞かれても全然イヤじゃないし、封印したい過去が一つもないのが自慢です。写真だけは載せてほしくないですけど。

「こういう歌を歌うんだ」というのを提示したかった

●前作の『異邦人(エイリアン)』はバンドをやっている中でのソロアルバムだったんで"ダイ・イン・クライズのkyoのソロアルバム"というものを気負っているような印象が強かったんですけど、今回はソロデビューアルバムのせいかサウンドに余裕のようなものを感じるんですよ。

K:それは、逆なんですよね。バンドやっている時の方が帰れる場所がありますから、趣味オンリーでいいんですよ。小学生が夏休みに書く絵日記じゃないけど、見てすごくきれいだと思ったものをそのまま絵に残すような感覚で作ってましたから、すごく気が楽だった。今回はもうこれしかないですから、いいプレッシャーになりましたね。ダイ・イン・クライズの解散の理由って言葉ではいろいろ言ってましたけど、このアルバムが一番の理由になるわけじゃないですか。だから「こういう歌を歌うんだ」というのを提示したかった。

●でも、歌がすごくリラックスしてますよ。

K:そうですね。歌入れの段階ではアルバムの全体像も見えているわけだし、選曲で煮詰まった分いいアルバムができたってところがあって、詞を書く時点ですごく気楽に書いたんですよ。歌入れの時に感情表現というよりは、きちんと詞の中に溶け込んで、目をつぶって歌うってことにこだわりましたね。そうすれば自然と曲の中に入っていけるというか、自分なりの風景の中に立てるというか、それで多分リラックスした感じに聴こえるんじゃないかな。

●前作と同様、作詞のクレジットが「kyo」と本名の「磯野宏」とに分かれてますよね。

K:本名の時というのは、よりプライベートなんですよ。だから詞を書いたときのシチュエーションの違いになるのかな。

●それは書いてる途中に、「今はkyoモードだ」とか意識しているんですか。

K:それは全く意識してないです。前回はクレジットを分けている意味合いが深かったんですけど、今回は割とその辺はそんなに深い意味はなかったりします。…本当に生活の部分でも「kyo」というのと「磯野宏」というのは、どんどん密着してきてるし、そういう部分での"ストリップ"でもあるわけですしね。もうちょっとカッコいい本名だったら、ここで本名でやって、ややこしくなかったんですけどね。

●今回のアルバムであえて気を付けた点ってありますか。

K:強いて気を付けたと言えば、流行歌を作るのはやめようということですね。ぶっちゃけた話しちゃえばヒットも欲しいですよ。でも「こういう曲がウケているから、そういう歌を歌ってヒットを出そう」という頭はサラサラなかった。「別に俺が歌わなくても他の人が歌えばいい」という歌は歌いたくない。自分なりのポップス性、自分なりのロックの感性というものので、より多くの人が受け止めてくれるような歌を歌いたいと思いましたね。ただ、その自分だけの歌とか、自分らしさというのはまだ明確には分かってないんですけどね。

●壁にぶつかったりとかは?

K:歌のテイクを録り始めた時にありましたね。「俺は歌しか出来ないから、歌をやるんだ」というつもりでソロになったんだけど、そう思っていた歌も「全然歌えていないじゃない。これはただの音符だよ」というテイクしか最初録れなくてね。

●感情が入らないとかで?

K:歌ってピッチ(音程)が合っていればいいというものじゃないでしょ。もっと揺れるものというか、そこまで行き着けなかった。すごく挫折感も味わいましたよ。ただ自分の中でも、プロデューサーの中でも毎回毎回ハードルを高くして行っていると思うんですよ。その自分の気持ちの中のハードルが結構高いところにあったから、今までだったら全然OKなんだけど、これからソロとして歌が立つアルバムを作んなきゃいけないところでは「これは歌じゃない」でしたね。

●それだけ苦労して出来たアルバムだから完成したときは…。

K:うれしかったですよ。しかも偶然なんですけど全部の作業が終わったのが誕生日の次の日だったんで、完成記念&誕生日パーティーというのをやってもらって、もうすごくはしゃいでしまった。

●バンドからソロになった人が「アルバムが完成してもバンドの時ように喜びを分かち合えない」と言っているのをよく聞くんですが、kyoさんはどうでした?

K:ああ、それは分かるなぁ。そういう寂しさはあるなぁ。その分、早くライブで歌って、たくさんの人たちと一緒にいい気持ちになって喜びを分かち合いたい。

パッションが爆発するようなコンサートになると思います

●ライブの話を聞きたいんですけど、これからは責任が全部自分にかかりますよね。プレッシャーはありますか。

K:ないですね。バックのメンバーがバンドで歌っているボーカリストというシチュエーションにしてくれますから。僕もバックバンドだと思ってませんし、メンバーもそんなつもりでやってないだろうし、恋愛関係に近い愛情がある。僕のことを愛してくれているというのがすごく分かるし、僕もみんなのことを愛している。本当に頼もしいメンバーですから不安はないですね。

●ソロアーティストのライブじゃなくて、kyoというバンドのライブだと。

K:それに近いですね。だからソロになった違いというのはピンスポの当たる数が増えたぐらい(笑)。唯一、バンドが悪くてもそれはただの言い訳にしかならないということだけは、肝に銘じてますね。頼もしいメンバーなんだけれど助けられちゃいけないなという気持ちで歌ってます。いい空気ですごく仲良くやれるんだけど、いい緊張感があって"仲良し音楽サークル"にはならない。

●本当はそこがプレッシャーになるんですけどね。

K:だろうね。でもプレッシャーには感じてない。肝に銘じているだけ。

●そんな頼もしいメンバーを率いて7月に行われるツアーに向けての意気込みを。

K:ツアーだと追っかけて来てくれる人がいるんで、「この日の夜は、この日にしかない」という気持ちをもっともっと深くして、その日の夜にしかないマジックを目指したいと思いますね。"ストリップ"なんてたいそうなタイトルのアルバムを作って自分の決意表明しているわけですから、それをライブで見せられないんだったら本物じゃないってことですから。かと言って気負ってないし、やりたくてしょうがないというテンションがずっと続いてますから、本当に期待してほしいな。僕もすごく自分自身に期待している部分が大きいから、「頑張ります」って言葉じゃ足りないぐらい意気込みがありますね。

●最後に、ライブに来てくれるお客さんへの期待ってありますか。

K:大阪ではMCの時の妙な突っ込みを期待していますね(笑)。"客に期待する"よりも"客が期待してくれていることを期待する"かな。すごいラフなコンサートが見られると思いますよ。ラフなんだけれどすごくメリハリがある。今って宗教くさいコンサートが多いじゃないですか。そうじゃなくてロック本来が持っているエネルギーというか、パッションが爆発するようなコンサートになると思いますね。

1st ALBUM
"strip" NOW ON SALE

LIVE SCHEDULE
～TOUR '96 "Lovetrap"～

7/15 名古屋ダイアモンドホール
7/16 大阪サンケイホール
7/18 福岡クロッシングホール
7/22 新潟フェイズ
7/24 札幌ペニーレーン24
7/26 仙台市青年文化センター
7/30 赤坂BLITZ

CASCADE

photographer MAKOTO KANEHARA
interviewer JUNKO YAMADA

デビューして半年を迎えたカスケード。東京ではライブチケットがソールドアウトになるほど急速に力をつけているが、大阪では今回が初ライブ。一度耳にすると頭を駆け回り続けるサウンド、感心してしまう言葉遊び的な詞、どこまで声が出るのか興味津々なボーカル、バラエティーに富んだ楽曲…それらがどう披露されるのか。そんな注目度の高いライブだったが、彼らはカスケードというバンドを存分に伝え、今の音楽シーンには希少な面白さを体験させてくれた。現在はまだキャラクター先行の感がぬぐえないが、彼らの音楽は思わずニヤッとさせてくれる個性をしっかりと持っている。聞きたいことがいっぱいだ。

●メジャーデビューして約半年ですけど、気持ちの上で何か変化ってありました?
Tama(Vo、以下T):極端な変化は別にないんですけどねえ。でも、頑張ってますよ(笑)。
Hiroshi(Ds、以下H):喜んでいただけるように(笑)。
●一生懸命突っ走ってるところだと。
T:突っ走る…、いい言葉なんですけどねえ(笑)。僕らはポワ〜ンって流されてる感じがしますね。川の流れに逆らってとかそういうのじゃなくて、波に乗ってユラユラと行って、着いた所が南の島だったらいいなあって。
●(笑)昨日は大阪で初のワンマンライブだったんで、観客には「どんなバンドなんだろう」って探りを入れるようなところがあったと思うんですよ。
Masashi(G、以下M):そうですね。そんな感じはしました。試しに来てるっていうか、「どんなバンドなのかな」という最初の感じですよね。それに僕らも探ってましたからね。弾きながらジーッと見たり(笑)。
Makko(B、以下MA):個人的には面白かったですけどね。やっぱりお客さんのリアクションが違うじゃないですか。だから余計に燃えたっていうか(笑)。何とかしてこの人達の手を挙げさせてやろうとか。だからちょっと度が過ぎちゃったんですけどね(笑)。
T:たまに後ろの方に気難しそうな人もいてはりましたけどね。でも、そういう人も実は僕らのこと好きなんですよ(笑)。
●昨日のライブでまず印象的だったのは、リズムがしっかりしてるってことなんですよ。独特なリズム感がカスケードの個性になってると思うんですけど、やっぱりリズムにはこだわりがあるんですか。
MA:リズムがカチッとした方が、バーンって行くじゃないですか。
M:カチッとしてると、そこでアクセントを付けられたりするし。それを持ってないとポヨ〜ンってなっちゃうからね。それは意識して練習してます。
●リズムがしっかりしてるから、何をやっても大丈夫っていうのはすごく感じました。やっぱり見かけによらずって言うと悪いですけど、練習はしてる?
H:基本的には嫌いなんですけどね。でも、やることはやらないとね。
●やっぱりうまくなりたいですか。
T:うまくなりたいって思ったことないって言うと変なんですけど、それを第一目標に置いてやってるわけでもないんですよね。まあどうしても「こういう曲やりたい、ああいう曲やりたい」ってなってくるじゃないですか。それをやるには、ある程度の演奏力が絶対に必要になってくるんで。だからそのためのものなんですよ。
M:だんだん課題が増えてきますからね。やっぱりやりたいものはカチッといきたいなっていうか。
●カスケードの曲って1曲1曲の個性がすごくはっきりしてますけど、曲はどういう風に生まれて来るんですか。
M:ああ、それは行き当たりばったりっていうのかなあ。例えば「カスケードにこういう曲がないからやろうかな」っていう時もありますし、「Aメロが来てBメロが来て」とか音楽的に考える時もありますね。社長気分っていうか、分野分野にある「こういう時はこういう作り方がいい」というのをトータル的にやっていくって感じ。一個一個を突き詰めていくと大変だし、ずっとそれやっていかなきゃいけないしね。
●Tamaくんは低い声から高い声までいろ

んな声が出せるボーカリストなんですけど、曲を作る時にその魅力を生かすことって考えます?

M:多少なりとも意識はしてると思いますよ。曲を作ってる人ってみんなそうだと思うんですけど、曲を考えてる時、Tamaちゃんの歌ってるのを想像してると出てくる音楽っていうのがあるんですよ。

●じゃあ、そうやって生まれた曲をTamaくんは自分なりに歌うという。

T:一番気持ちのいいね。

●声の使い分けっていうのは、自分の感覚で決めてるんですか。

T:う〜ん、それはすごく難しいとこなんですよね。別にめちゃくちゃ計算してやってるわけでもないんですけどね。何かねえ…ビビらせたいっていうか、「どこから声出してんねん」って言われるのが僕好きなんですよ(笑)。「ここで低いとこ歌ってんのに、次いきなりハイトーンになったらビビるかなあ」とか、それぐらいのもんなんですけどね。後はまあ、歌いやすさですね。だからもう感覚で(笑)。

●アレンジもその曲のその部分で一番カッコいいことをやってる印象が強くて、すごく耳に残るんですけど、それも直感的に詰め込んでるって感じ?

M:知らないうちに出来てるんですけどね(笑)。夜、気付かないうちに小人が靴作ってんのかなって感じ。メンバー四人の笑っちゃうことのツボが一緒だから、カッコ良いと思うツボとかも一緒なんだと思うんですよ。だから直感ですね。

T:伝え方もミュージシャン系のやりとりとかじゃないんですよ。みんなにそれぞれ抽象的なんですけどイメージがあって、何か伝わってるんですよね。例えば「Tamaちゃん違うんだよ。シャ〜ッとかってさ、空飛んでる感じ」とか(笑)。

M:それで分かるんですよ。

T:「ああ、OK!」って。

M:音楽的にどうのこうのなんていうのはあんまりね。不思議とね、例えば「湖の横を通り抜ける感じかなあ」とかって言うじゃないですか。それが伝わってるのか伝わってないのか分かんないんですけど(笑)、でも出来上がったら何かいいんですよね。

●出来たものを聴けば伝わってることが分かる。

M:伝わってるし、伝わってなかったとしてももっと良くなってる。

●カスケードって最初からアレンジもプロデュースも自分達なんですけど、そこにも自信やこだわりがあるんですか。

M:最終的には自分達が成長していきたいだけなんですよね。だから今の俺達が完ぺきだから、自信があるからやらせてって言うんじゃなくて、結局自分達もそういう部分で成長していきたいからで。あえて人に任せることになったとしても、それも自分達が成長していきたいっていう表れだと思うんです。

●自分達でやる上で頭に置いてることってあります?

T:それぞれの個性がそこに詰まってるかどうか。持ってきた自分のバックグラウンドとかをそのままやるんじゃなくて、自分達の人間性というフィルターを通してやるって感じ。そこに自分がいなければ、出てなければ作品じゃないと思いますからね。

M:もうカッコ良いかカッコ悪いか、イエスかノーかだけですよ。例えば四人の中で一人でもノーと思ってるならば、もうやりたくないですから。

●さっき普通のミュージシャンのやりとりとは違うって話でしたけど、バンドってメンバー間の摩擦でいい音楽が生まれるケースもありますよね。そういうのはカスケードには無縁ですか。

M:煮詰まったらいいのできないですよ…。「ベースラインこうじゃねえよ」とかなったら、絶対いいのできませんよ。

●(笑)じゃあ、カスケードが思ういい音楽を作る秘けつは何ですか。

T:やっぱり常に精神状態をニュートラルにすることですかね。

M:あと、よく話して、遊ぶこと。

●カスケードって仲良し四人組って感じですもんね。

T:友達がいないだけなんですけど(笑)。分かってくれるのはこの三人という。この前も久々に友達に会ったんですけどね、何かノリが違うって言うんですか。

H:これ言ったらウケるなって思うことも、メンバーの三人はウケてくれるけど他の人は全然ウケなかったり。

●でも、CDやライブでは一人ひとりが思いっきり主張してますよね。いい意味でライバルっていうか。

T:ライバル(笑)。そんなカッコいいもんじゃないですけどね。相乗効果なんでしょうね。

H:ライブでも一人がリハと違うことを絶対やるんですよ。そしたらみんながもっともっとすごいことになって(笑)。気が付いたらライブが終わってたりね。目とか合ってるんですけど、あれはアイコンタクトじゃないんですよ。何かやった後にMakkoと俺が「やったぜ!」って(笑)。

Ma:バカの相乗効果みたいなもんですよ(笑)。

●でも、それがプラスに行ってるから。昨日も後半すごかったし。

M:それがマイナスに行ってたらね、たぶん今こうしてお会いしてないと思いますよ。

(全員爆笑)

●カスケードって雑誌とかで見てると、今時のちょっと弱っちいお兄ちゃん達ってイメージがありますよね。でも、そのイメージと音楽のギャップがカスケードの魅力だったりもするんですけど。

M:みんなをビックリさせるとかって好きなんですよ。ギャップとかって結構好きですから。別に今それを作ってるってわけじゃないんですけど、そう思ってるから醸し出しているのかもしれませんね。見たまんま「ああ、この人はこういう音楽だ」って思われるのはイヤだし。

T:やっぱり分からないものが面白いじゃないですか。僕らも、付き合いは長いんですけど、お互いまだ分からないところもあるし。だからそれが面白いし、飽きないっていうのが第一条件っていうか、一緒にやってる一番の理由なんですけどね。

●サウンドも二枚のミニアルバム『VIVA!』と『beautiful human life』でそれぞれタイプが違うんですけど、これからもどんどん広げてカッコいいことをやっていくという感じ?

M:それはもうそうですね。やっぱり飽きるようなことはしたくないですし。いろいろやりたいんですよね。

●じゃあ最後に、今後音楽シーンでどんな存在になりたいですか。

T:それもあまり意識してませんねえ。〝井の中の蛙(かわず)大海を知らず〟じゃないんですけども、僕らは僕らで自分達の井戸の中を掘り下げていくっていうやり方でやっていければ。要するに、僕らって多分、周りに融合出来ないと思うんですよ。出来ないっていうのも変だけど、そんなにしたいとも思いませんしね。僕らは僕らでマイペースにやっていければいいなと思ってます。

1stビデオ『マカロニ』
NOW ON SALE

LIVE SCHEDULE

8月20・21日　赤坂BLITZ(ワンマン)
8月24日　名古屋商科大学内・ラグビー場(イベント)
8月30日　広島アステールプラザ(イベント)

ファンクラブ『ベリーロール』会員募集中

入会希望の方は、住所・氏名を明記し、80円切手を張った返信用封筒を同封の上、〒150　東京都渋谷区東3-25-10　T&Tビル5F　CASCADE「ベリーロール」入会希望係まで。

U.S.R.

マックでSWEET DAY
words by 三浦政二

マックで SWEET DAY 彼のセダンで
ドライブスルー Wow Yeah! EVERY FRIDAY

ワクワクするぜ　午後の推理
小説みたいに　出逢いがあるかも?

まれにみる偶然の例　起こりうるマジック
よそ行きのシューズで　マックで SWEET DAY

いきさつはドライブスルー　君とめぐり会うためには
行き先はドライブスルー　急げ急げドライブスルー

マックで SWEET DAY 彼のセダンがドライブスルー
会いに来る TODAY'S FRIDAY

ワクワクするわ　午後の陽気
奇跡みたいな　出逢いになるかも?

まれにみる空前のショー　起こりうるマジック
よそ見をしないで　スマイルで FREE WAY

いきさつはドライブスルー　君とめぐり会うために
行き先はドライブスルー　あさって　さそって　ドライブする

(CHORUS)マックで SWEET DAY

大胆不敵な破壊が産む、痛快なR&R!

「僕らって結構、何に関しても中間が好きなんですよ。間を取るのが好きっていうか。だから、このバンドでもメンバーそれぞれ好きなジャンルが違うから、混ぜて新しいものをやりたいっていうのがあるんです。U.S.R.はユナイテッド・ステイツ・オブ・ロックンロール(ロックンロール合衆国)という意味で、いろんなロックの良いところばかりを取るみたいな」(庄司昌史、Ds、以下S)

5月27日大阪クラブクアトロで観たU.S.R.のライブは、アメリカンハードロック的なカッコいいビートに、ブリティッシュロックを思わせるメロディーを乗せるという、ちょっと変わった感触を味わせながら元気いっぱいのロックンロールを聴かせていた。メンバーは三浦政二(Vo、以下M)、矢竹拓(G)、松本康(B、以下MA)と、庄司の四人。

「庄司はアメリカンロックが好きで、矢竹はブルースが好き、松本はプログレが好きで、僕はブリティッシュ・ポップが好きなんですよ」(M)

ヘタをするとまとまりのないサウンドになりそうだが、意外にも心地良いフィーリングを醸し出している。

「単純明快なハードロックとか、ブルースロックとかいうのとは、また違う。そこを◯と取られるか、×と取られるかは分からないですけど、逆にそこが狙いだったりする」(S)

アメリカとイギリスという対照的な音楽が混ざり合うことで生じるあいまいさをあえてバンドのカラーにしている彼ら。そこから生まれる音楽には、また新たな音楽ジャンルがひょっこり顔をのぞかせているようだ。

「これからは音楽ジャンルそのものが多様化していくと思うんですよ。今ってもうミクスチャーを越えた音楽が出てきてるでしょ。僕らはロックンロールが好きなんですけど、そのロックンロールも変わって行くことが必要だと思うし。昔のロックの要素を残しつつ、自分らの独自性を表現していくことが大切だと考えているんで、それをどこまで出していけるかがバンドのコンセプトでもあるんです。だからU.S.R.っていうブランドでとらえられるのが一番うれしい。U.S.R.イコール、カッコいいロックンロールって」(M)

曲は三浦がほぼ完成したデモテープを作ってくる。イギリスの音楽が好きな彼の原曲は、メンバーでスタジオに入って合わせることによってアメリカ的な要素がミックスされる。

「デモを作る段階で"僕が作ったらこうやけど、みんなでやったらこうなるやろな"って、ある程度計算するんですよ。だから"ギターは多分こう弾いてくれるだろう"って思ったら、そこの部分はわざと入れないで空けておくんです」(M)

軽快なビートをたたきつけるドラムと渇いた音で弾きまくるギターでアメリカのにおいを充満させ、滑らかなベースがそれに絡む。その上に、イギリスを感じさせるメロディーを漂わせ、U.S.R.サウンドを形成しているのだ。

「U.S.R.っていう工場があって、そこにみんなのいろんな部品を持って来て出来たものが、U.S.R.製のU.S.R.の曲なんですよ」(MA)

「ただ言えることは、僕らがどうあがいてもイギリス人にはなれないってこと。やっぱり日本のロックをやりたいんですよ。昔は歌詞を英語で作ってたんですけど、今は日本語にしてます。でも今度は"日本語をどうロックのリズムに乗せるのか"を考えないといけない。だから英語っぽく聴こえる日本語で、しかも意味がしっかり成り立つように気をつけてますね。それを伝える側に届くように分かりやすい歌詞で表現出来たら、独自の日本のロックが出来ていくんじゃないかなって」(M)

曲の持つノリを壊さないように乗せていく三浦の歌詞は、彼の普段の生活の中で頭に残ったことがらから生まれるという。それはメッセージのあるものや、ストーリー的なものと様々。その詞を彼が歌えばサウンドにより勢いとメリハリが付き、踊りだしたくなるほど痛快なロックンロールになるのだ。

何でも中間が好きという彼らは、音楽でそれを思い切り楽しんでいる。"もともとあるモノを破壊していくことがロックである"ことから考えると、彼らはアメリカとイギリスのロック自体を大胆不敵に破壊しているのかもしれない。そして、そこで再構築される音楽には、新たなパワーがいっぱい詰まっている。

(インタビュー・村田圭子　撮影・村元志野)

★彼らの1stアルバム「UNITED STATES OF R&R」を5名の方にプレゼント。(詳細はand so onをご覧下さい)

詞とサウンドの調和から奥深い感情が生まれる

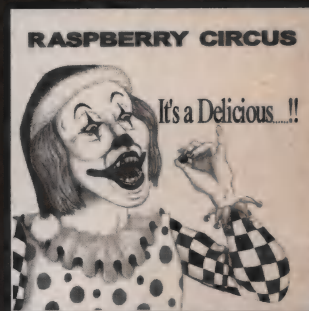
Dixi Emy

94年4月に岡山で結成されたディキシーエミー。平均年齢21・5歳という若い彼らは地元のライブハウス、ペパーランドを中心に活動しながら、広島、姫路、大阪へと出向きライブを行うという精力的なバンドだ。メンバーはTakashi(Vo)、aki(G)、Yuki(B)、N.O.V(Ds)の四人。彼らの音楽で、まず特筆すべき点は弱冠21歳のTakashiが表現する詞の世界だ。それは何十年も生きてきた人が様々な悲しみや喜びを経験したことで、にじみ出てくる奥深い感情を思わせ、年齢とのギャップを感じずにいられないほど。またその詞を歌う彼のボーカルは優しいメロディーに乗って、詞に込められた秘めた思いをさらけ出すようにひと言ひと言をかみしめながら歌う。

タイトなドラム、ソフトな音色で滑らかなベース、クリアでデリケートなギター、そして効果的に使われているシンセサイザーサウンドにより、繊細かつドラマチックに詞の持つイメージが広がっていく。「伝えたいことがあるから、それを音楽で表現している」、こんな感情が音と歌からひしひしと伝わってくるのだ。ただ、表現する上でのバンドの一体感がまだ不十分なので、バンドとして〝どう伝えたいか〟という意識をもっと高めてほしい。だがそれは、今後彼らが活動を続ける中で明確になれば、おのずと解消されていくことだろう。

★彼らのテープ(2曲入り)を5名の方にプレゼント。

Raspberry Circus

[It's a Delicious....!]

軽快なロックンロールビートと、はずむリズムギターに乗る流れるようなメロディーラインが快活で心地良い、ラズベリー・サーカスの1stミニアルバム『It's a Delicious....!』。ビートルズやグラムロックに影響を受けたという彼らのサウンドには、UKっぽいウエットな感が漂い、心に切なく響く優しさがあふれている。そこに、ボーカルHiroの自分をさらけ出すリアルな詞が重なり、聴く者の心に強烈なインパクトを与えるのだ。しかも、ひたむきな音楽に対する思いが切々と伝わってくる。

今回、このアルバムはザ・イエロー・モンキーがインディーズ時代に作品を発表したエンジンレーベルからのリリース。しかもプロデューサーを手掛けているのは、イエモンの廣瀬〝HEESEY〟洋一と、確かな目が彼らに注目している。

★このアルバムを5名の方にプレゼント!

覇叉羅

[爪〜NAIL〜]

重く激しいビートに絡むツインギター、その音の塊は聴く者の神経から正常さを奪ってしまうほどのすさまじさで迫ってくる。彼らの2ndアルバムは、前作のミニアルバムよりもさらに音圧が強化され、分厚い脳天直撃サウンドが目白押し。高速度で突っ走るスラッシュナンバーを始め、ジャジーなものや、プログレッシブなもの、そしてメロディアスなものまでバリエーションに富んだナンバーが収められ、しっかりとバンドのオリジナリティーを打ち出している。それは彼らの中に「どんな曲でも俺たちがやれば、覇叉羅になる」という芯(しん)があるからこそ出来るのだろう。

そのルックスから彼らが〝ビジュアル系〟にくくられることは間違いないが、そんな意味のない枠を打ち砕くほどのロックバンドとしてシーンを揺るがしてほしい。

★このアルバムを5名の方にプレゼント。

インディーズ情報

●I・Z・M
7月 7日 岡山ペパーランド
　 24日 大阪ブーミンホール
8月 3日 渋谷ネスト

●APRIL FOOL
※曲作りを中心とした充電期間に突入。なお、ベーシストが脱退したため、現在は"骨太ハードロックが好きな、バンド中心生活が出来るという20歳以上の加入者(男女不問)"を募集中。希望者はフールズ・プロジェクト06-320-8009まで。
※インターネット・ホームページを開設(http://www.bekkoame.or.jp/~kfujii/fools/)。

●CURIO
7月 7日 大阪アメリカ村三角公園
　 10日 大阪クラブクアトロ(ワンマン)
　 25日 渋谷オン・エア・イースト(イベント、要招待券)
8月 1日 原宿ルイード
※7月25日のイベントに関する問い合わせは、ディスクガレージ03-5704-3200まで。

●GLAD ALL OVER
7月 21日 新潟O-DO
　 22日 大阪ロケッツ
　 26日 京都ミューズホール
8月 5日 渋谷ネスト
　 12日 大阪クラブクアトロ
　 15日 福岡Be-1

●SAVOY TRUFFLE
7月 22日 大阪ミューズホール
8月 23日 東京四ツ谷フォーレバー

●SHADOW TRAP OF MIRRORS
7月 2日 大分TOP's
　 3日 博多Be-1
　 8日 京都ミューズホール
8月 12日 大阪クラブクアトロ
　 29日 福岡Be-1
※2ndミニアルバムが8月8日にリリース予定だ!

●SELAPHY
6月 28日 名古屋ELL
7月 23日 名古屋ELL(イベント)
8月 12日 渋谷ネスト
※7月23日のライブより4曲入り最新テープを発売!

●TAB
7月 17日 大阪二丁目劇場
　 21日 大阪ミューズホール
　 29日 大阪二丁目劇場
8月 27日 大阪ベイサイドジェニー

●Dixi Emy
6月 28日 大阪ギルド
7月 21日 大阪ギルド
　 22日 広島並木ジャンクション
　 28日 岡山ペパーランド
8月 1日 岡山ペパーランド
　 2日 岡山ペパーランド(イベント)
　 14日 岡山ペパーランド

●覇叉羅
6月 27日 目黒鹿鳴館
7月 18日 渋谷オン・エア・ウエスト(覇叉羅主催イベント)
　 21日 熊谷ヴォーグ
　 22日 新潟O-DO

●THE HARPER ST. BAND
6月 30日 大阪パンセホール
7月 8日 大阪ロケッツ
　 19日 京都ラグ
8月 4日 京都都雅都雅

●ぱるぼら
7月 12日 下北沢シェルター
　 13日 吉祥寺マンダラ
　 17日 大阪ファンダンゴ

●THE FILM
7月 26日 京都ミューズホール

●BOOBY TRAP SPEAKER
7月 27日 大阪ロケッツ(ワンマン)
※入場者にもれなくプレゼントがもらえる!

●THE PORT
7月 4日 大阪ファンダンゴ(withラフィアンズ)
8月 23日 大阪クラブクアトロ

●U.S.R.
7月 3日 京都ミューズホール
　 17日 大阪光明アムホール

●Raspberry Circus
6月 29日 渋谷ラ・ママ
※その後は充電期間に突入する。ライブ再開は9月ごろの予定。

●ここに登場しているバンドの中でAPRIL FOOL、GLAD ALL OVER、TAB、THE PORT、The Film、U.S.Rは、音源(テープ、またはCD)を下記のレコード店で店頭販売及び、通信販売しています。在庫の確認及び、通信販売方法などは各店へお問い合わせください。

JEEZ大阪心斎橋店 TEL 06-211-0063 FAX 06-211-9656
JEEZ京都北山店 TEL 075-702-6888 FAX 075-702-6999
JEEZ名古屋栄店 TEL 052-241-7676 FAX 052-241-7747

●プレゼント応募方法

官製ハガキの裏には聴いてみたいと思ったバンド名を1バンドと、あなたの住所・氏名・年齢、ハガキの表には「ジェイロックマガジン インディーズ・ジャンク・ボム プレゼント係」と明記の上、ジェイロックマガジン社宛に送ってください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。締め切りは7月26日(必着まで)。

とっても元気な関西クラブシーン

THE WIND FROM WEST

その2

関西ミュージック・シーンはあらゆるレベルで活性化してきている。例えば関西クラブシーンはここ数年、元気がいい。

クラブといえば、ダンスミュージック。今ならダンスミュージックといえば、avexや小室哲哉を思い浮かべる人が多いのだろう。それだけにダンス系は関東の流行というイメージが強い。しかし、関西クラブシーンはそれとは離れた位置で、独自に発展してきたものだ。

活躍するDJのパワーは桑原茂一ら関東の一線級と比べてもそん色はない。

今回は、わがジェイロックマガジンのカテゴリーからは少しはずれるが、関西発のクラブミュージックの元気なところを、ほんの少しだけお目にかけよう。

The Wind from West

グラン・カフェの舞台で活躍していたSUGAMIについては何度か取り上げたので記憶されている方も多かろう。最近の彼女、何をしているかというと、驚くことに松岡成久とユニットを組み、その名もGREEN FINGERとして初のミニアルバム（5曲入り）を出す。

ハスキーボイスでソウルっぽい彼女が、あの松岡と…。この男について説明しておこう。DJ.MATSUOKAと言えば、80年代後半からクラブシーンでは名の知れた存在だ。昨年、ソロアルバム「Hierophanie」を発表、ヒップホップやハウスで味付けられた、いわゆるアシッド・ジャズ的な展開で才能を見せつけている。その彼が、ここに来てSUGAMIの歌のアレンジャーとしてスタンダードな洋楽の再構築に挑んでいる。アルバム名も「TRY IT AGAIN」とはよく言ったもの。

一見ミスマッチかと思われた二人の組み合わせだが、なかなかどうして聴かせる内容に仕上がっている。今聴くと、ともすれば泥臭い原曲が、松岡の手によって切れ味鋭いスタイリッシュなサウンドに生まれ変わり、SUGAMIのノスタルジックな黒いノリのボーカルを楽器のように用いることで、逆にモダンな雰囲気を醸し出す。

中でもアルバム名にも引っかけているジャニス・ジョプリンの「TRY」は、ハスキーなSUGAMIの声の持ち味を生かし、ジャニスのカバーであることを明示しながらも、松岡のアングラっぽい演出で、ジャジーな味わいを出している。他にもジャングル風に味付けされたジミ・ヘンドリックスの「MAY THIS BE LOVE」（ギターのフレーズは全くない!!）やスライ＆ザ・ファミリーストーンの「IF YOU WANT ME STAY」など往年の名曲をハウス、レゲエ、ラテンファンクとどん欲なまでにエッセンスを取り込んで品よく消化している。

「TRY IT AGAIN」は7月15日発売で2千円（税込み）。タワーレコード他で入手できる。

もう一人紹介したいのが、奈良テレビをキー局に、関西6局ネットで今年4月から始まった音楽情報番組「YAH-MAN」、そのメインDJを務めるUJ（ユージェイ）だ。レゲエサウンドを駆使し、名高い大阪CLUB QOOでは金曜日のおなじみDJとして活躍中だが、昨年発売されたアルバム「LIVIN' LARGE! RIDIN' LARGE!」がその方面で支持され、人気急上昇中。大阪でレゲエが語られるとき、必ず引き合いに出されるのが、彼である。余談だが、彼は関西テレビの音楽クイズ番組「ROX」（別コラム参照）の司会も務めている。

＊上記アルバムについての問い合わせは、すべてスタイリングレコーズ（06-213-1881）まで。

SUGAMI

NARUHISA MATSUOKA

WEST

THE ROOTS OF ROCK

『NEO BLUES BATTLE Vol.2』の日程決まる

先月号でもお伝えした関西若手のブルースイベント『NEO BLUES BATTLE Vol.2』が9月7日、大阪メルパルクホールで行われることが決定した。出演はAMG(明石昌夫グループ)、ストーミー、春名俊希ら大阪グラン・カフェの常連アーティストほか。このうち、AMGの団篤史(G)とストーミーの二人が、8カ月ぶりのビッグイベントにかける意気込みをそれぞれ次のように語ってくれた。

団:「自分自身に対する課題はまだまだ山積みですが、それを一つ一つクリアしながら、その時持っている最高の自分が出せればいいっすね。きっと皆さんに楽しんでもらえるライブになると思います」

立原燎(ストーミーVo):「前回は大きな所が初めてということもあり、勢いだけで行ってしまったような気がする。今回はバンド自体がすごく成長しているので、きっといいライブが出来るんじゃないかな。自分自身が楽しみたいと思います」

MAKI(同G):「今からとってても楽しみにしています。その時の自分をギターで表現できたらうれしい」

『NEO BLUES BATTLE Vol.2』は、前売り3000円、当日3500円。開場16時、開演17時の予定。前売りは7月14日より各プレイガイドにて発売開始。問い合わせはブルージー(06-212-0660)まで。

ATSUSHI DAN

RYO TACHIHARA

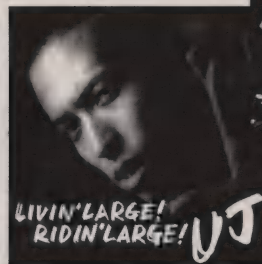
MAKI

君はもうROXを見たか?

関西在住のみんな、6月から関西テレビで放映を開始した新番組「ROX」(毎週土曜日、PM1:15〜)はもう見たかな。毎回一人のアーティストに焦点を当て、インタビューを基にクイズ形式で彼らのルーツや実像に迫っていくという、ちょっと変わった趣向の音楽番組だ。司会進行はRIKACOとUJ。本誌もスポンサーに加わり、問題づくりを手伝ったりしている。

第1回はなんと大黒摩季が姿を現し、NHKのアトランタオリンピック放送とのタイアップや弊社発行の単行本「TWO HALF」について、あるいは北海道から上京したときの話などを自身の言葉で語り、とても興味深かった。続いてシャ乱Q(6/8)、グレイ(6/15)、チューブ(6/22)が登場し、それぞれものすごーく濃い話が飛び出して好評のようだ。

今後もT-ボラン、ラルク・アン・シエルとそうそうたるアーティストが登場する予定なので、ジェイロック・マガジンのファンなら要チェック! ファンクラブでも聞けないような、アーティストの新しい一面を垣間見ることができるかも。

『Hierophanie』/ DJ.MATSUOKA

『LIVIN' LARGE! RIDIN' LARGE!』/ UJ

THE WIND FROM WEST

SUBculture

6th FILE

TEXT by Keiko Murata
PHOTO by Makoto Kanehara

音楽が、それぞれのアーティストの生き方、考え方を音というフィルターを通して伝えているものである以上（時としてそうでないものもあるが…）、彼らの人間性とその音楽を別ものとして考えることはできない。アーティストたちは日ごろ、音楽以外のどんなことに興味をひかれ、何を感じて、何を考えているのだろうか。このコーナーは、彼らの音楽に対するストレートな思いから、あえてポイントを少しはずし、それ以外の様々なモノやコトに託された強烈な「こだわり」や「思い」を、赤裸々に語ってもらうことで、その人間性を感じる場を提供したいと思う。ここに語られる心情も、彼らの心から生まれる音楽に触れる一つの貴重なチャンスであるに違いないのだ。

今回の登場はモダングレイのボーカリスト、大西貴美。彼には意外(?)な特技がある。それは指輪作り。彼はそのために道具を買いそろえ、家で職人と化す。彼がなぜ指輪を作ろうと思い立ち、実行するに至ったのか…。そのきっかけは、ほんのさ細な衝動にすぎないのだが、そこからは彼の音楽に対する思いとの共通点が見えてくる。

「指輪への興味はもう中学生ぐらいから持ってましたね。そのころの外国アーティストのロック兄ちゃんが指にいっぱい、バーッと付けてるのを見て『あー、すごいなー』って。『指輪って結構ファッショナブルでカッコいいものなんだな』って思ってね。で、指輪をはめるのが好きになって、当時は買ってはめてました。

なぜ自分で作るようになったのかって言うと、単純に僕の好きな指輪がなかった。女性用の指輪ってデザインが凝ってたりしてすごく素敵なんですよ。まあ、それを買えばいいんですけども、やっぱり男の指だから太くて入らない(笑)。『じゃあ、作っちゃえ』って。でも始めてまだ1年弱なんですよ。

僕は何でもそうなんですけど、何かを好きになったら人に教えてもらうのがイヤなんです。まず独学でやってみる。人に教えてもらうと結局、僕の中で純粋じゃなくなるから。それで本屋さんに行って、そういう本を買って…。またその本がすごいんですよ。よく後ろに"第何版発行"って書いてありますよね。それが三十何版ぐらいで、初版が20年ぐらい前なんです。そういうの平気で売ってる(笑)。だから技術的には変わってないんですよ。

指輪作るのって難しそうな気がするでしょ。でも結構、簡単。もちろん自分で作るとなると限界がありますけどね。一番シンプルな作り方は、銀の延べ板を買ってきて、ダイヤモンドのノコギリで好きな太さに削るんです。それをバーナーでガーッと軟らかくして、村の鍛冶屋さんみたいにカンカンカンカンって。で、水に入れてジュッて冷まして、またカンカンカンってね。その作業を家のベランダでやってます(笑)。ゴーッと音を立てて。外から見たら巨大なホタル族ですからね。指輪の形が出来たら今度は燃やした時に付いた炭を落とすために、専用の薬の中に入れてキレイにしてあげる。そこから削りの作業をするんです。だから、時間がかかる。

これは僕が作ったんですけど（指にはめているシンプルなリングを見せて）、こういう物が好きなんですね。いろいろくっ付けたゴテゴテの物も作りますけど、基本的にはシンプルな物が一番好き。でも、そうなると大切になってくるのが磨きの作業なんです。こういうのは指輪の形にするのに時間はかからないんですけど、磨きの部分で『ここまで磨いたら完成』っていうのがなくて、永遠に磨けるって感じだから、愛着があるんですよ。

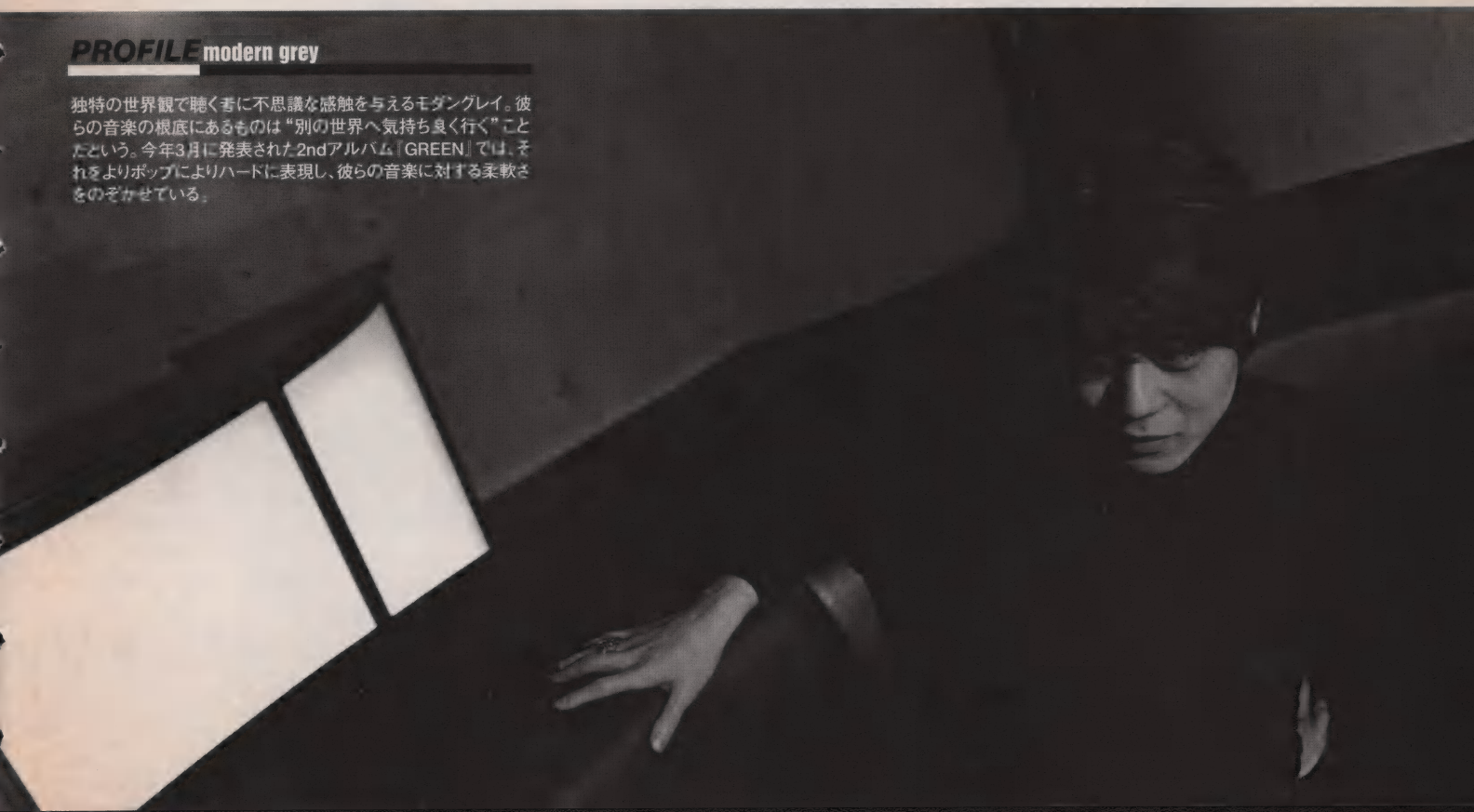
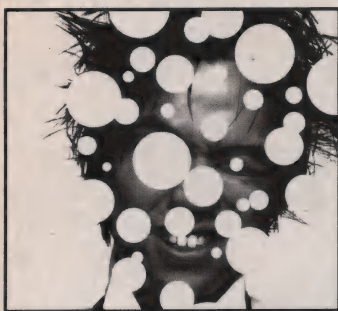
僕は何でもそうなんですけど一番面倒くさいことが好きだと思うんですね。だって、その面倒くさいことをやるからこそ完成するわけだし。そういう意味で指輪作りは、作ってる時が一番好きですね。まず道具が一番大きなポイントとしてあって、作る前の道具の用意に1時間ぐらいかかっちゃう。時間が制約されちゃうし、自分を『作るんだ』って追い込まないといけないんですよ。『そこまでして何でこんな事、一生懸命やってんだろう』って自分を振り返った時に、結局"自分は今どこにいるんだろう"とか"何のために生きてるんだろう"と再認識をするために必要なことなのかなって気がする。生きてるあかしっていうか…。音楽ももちろんそうなんですけど、それが僕の中で根本としてあるのかもしれない。

指輪を作った喜びと音楽が出来た喜びっていうのは、いい意味で一緒ですね。『あー、出来た～』っていう。ただ指輪は一人で作るもの。だから僕にとって指輪作りはソロ活動みたいなものですね(笑)」

modern grey=Takami Ohnishi

PROFILE modern grey

独特の世界観で聴く者に不思議な感触を与えるモダングレイ。彼らの音楽の根底にあるものは“別の世界へ気持ち良く行く”ことだという。今年3月に発表された2ndアルバム『GREEN』では、それをよりポップによりハードに表現し、彼らの音楽に対する柔軟さをのぞかせている。

D I S C R E V I E W

[奇麗になりたい]
宮本浩次

シングル「タイトでキュートなヒップがシュールなジョークとムードでテレフォンナンバー」で、さっそうと音楽シーンに飛び込んできた宮本浩次。ファンキーなビートに乗せてリズミカルに伸び伸び歌うラップ調のボーカルに思わず聴き入ってしまった人は少なくないだろう。このアルバムでは"僕はこういう曲が好き、でもこんな曲も好きなんだよね"と、どの曲もさらっと自分の色に染め、彼流のポップチューンを満載。それはバラエティーに富んだ楽曲を聴かせながら、自身のキャラクターを楽しんでいるという印象が強い。また、主人公はすべて自分というリアルな詞も押しつけにならず自然にその世界に入っていける。とりわけ冷め切った夫婦生活に不安を抱く人妻の心理状態を鋭く描写する詞(M-6)には驚いたが、この人妻も彼自身ということになるわけだから面白い。サウンドも詞も何でもあり的に収められた10曲は、いずれも彼のユニークな人柄を感じさせる。

(文・西郷メグ)

メジャー、インディーズシーンには膨大な数のアーティストが存在し、毎週のように音源が大量にリリースされている。その中からジェイロックマガジンで紹介できるのはわずか5枚。各スタッフがどんなところにインパクトを受け、そのアイテムを推薦しているのかが一目瞭然に分かるように6項目5段階のグラフを添付した。その独断と偏見に基づいた項目についての説明は以下の通りである。

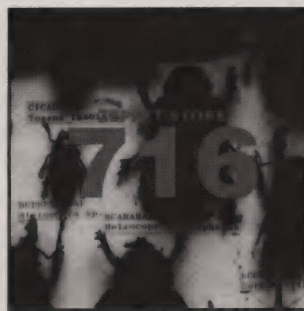
- ●ハード：重厚かつ強靭な迫力あるサウンド。
- ●ソフト：ポップ感覚を重視した軽快なサウンド。
- ●テクニック：テクニックを駆使したプレイが織り込まれている。
- ●フィーリング：テクニックを超越した感情的なプレイが織り込まれている。
- ●マニアック：表現したいと考える音楽を追究した深さ。
- ●キャッチー：不特定多数のリスナーに支持されやすい聴きやすさ。

[大人の気持ち]
PUGS

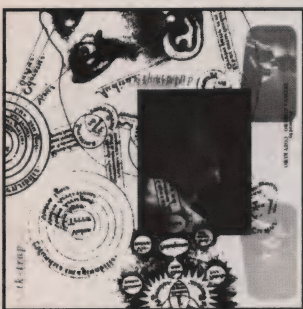
「音楽というものをもう一回、みんなで考えよう」。これは先月号でバクチクのギタリスト星野英彦が語った言葉だ。このアルバムを聴き終わって、まず彼のそんな言葉が思い出された。それは「若いリスナーを狙う」「何万枚売る」なんて邪心がなく、純粋に音楽を楽しんでいるアーティストの様子が伝わってきたからだ。

ホッピー神山、岡野ハジメ、デルジベットの吉田光といった毒気をプンプンにおわせる面々が、とにかく楽しく騒げることを第一に音楽を作っているバンド、パグス。現在のお子さま向けロックや使い捨てのヒットソングにはない、ロックが本来持つべきおう盛な雑食パワーをむき出しにし、シャンソンさえも取り込んでしまうのには圧倒させられる。Honey☆Kの大人の色気をまき散らすセクシーなボーカルと、破壊的なポップサウンドが心地良く、耳ではなく感性で楽しむ痛快無比のロックンロールは、一歩間違えれば集団マスターベーションにもなりそうだが、立派な作品として完成しているのはさすがベテラン。

(文・南出哉稔)

[716]
ZEPPET STORE

XジャパンのHIDEが、コレクトアルバム「LEMONed」を作るきっかけになったゼペット・ストア。彼らの作品を聴いたHIDEに「どうにかしなくちゃ」と思わせただけあって、独特のにおいと空気を持ち合わせたニュータイプのバンドだ。彼らの最大の魅力は、そのノイジーながらメロディアスなサウンドと、自然と耳に溶け込んでくる心地よく柔らかなボーカルという、相反した二つの絶妙なバランスにある。一度その音を聴けば、ボリュームをいっぱいにしてその中に身を沈めたい衝動に駆られるのは、私だけではないはずだ。

すでにアメリカやヨーロッパではかなりの注目を集めていて、本作もアメリカのインディーズレーベルからのリリース。日本には逆輸入という形で登場したが、彼らの音を聴いていると、日本にも世界に通用する音楽を生み出す土壌が確実に育まれつつあることを実感してワクワクする。今でこそ彼らにはHIDEという肩書が付いているが、それが通過点の一つとして語られるのは、それほど遠い日ではないだろう。

(文・やまだじゅんこ)

[tk-trap]
tk-trap

日本の音楽シーンにセンセーショナルなムーブメントを巻き起こし、ヒットチャートを独占するプロデューサー小室哲哉。そして、このアルバムのプロデュースにも彼の名と相棒の久保こーじの名前がクレジットされている。となると「女性ボーカルが憂いあるメロディーをハイトーンで歌うレイブサウンド」というものをパブロフの犬のように連想してしまうが、このtk-trapではそれとは対極にある少々マニアックなサウンドを披露。小室のルーツでもある、衰退してしまったプログレッシブロックを、彼の優れた感性によって現代版プログレッシブサウンドとして再構築しているのだ。女性ボーカルの代わりにサックスホーンやギターがセンチメンタルなメロディーを感情的に歌い上げ、生のバンドが壮大な楽曲をよりドラマチックに、スリリングに展開させていく。彼の天才的な音楽センスに驚嘆せずにはいられない。今までのような商業的サウンドを極めるのもいいが、今後はこういうサウンドでシーンを活性化してもらいたいものだ。

(文・樹音檸檬)

[PRESENT]
RAZZ MA TAZZ

「彼らしさが戻った!」、こんな言葉が私の頭に浮かぶ。メジャーに行ってしまうとインディーズ時代の音楽が形を変え、せっかくの個性が薄まってしまうケースはよくある。私は正直ラズマタズにそれを感じていた。だがこのアルバムは、私がインディーズバンドの彼らに対して抱いていた"心に飛び込んでくるひたむきさ"を、あのころよりさらに強いインパクトで思い出させてくれたのである。彼らの三枚目は、そんなワクワクするほど良質なポップナンバーが目白押し。タイトなビートに、アコースティックギターとエレキギターが絶妙なバランスで重なる肩の力が抜けたサウンドからは、表現したい素直な気持ちが、ひしひしと伝わってくる。彼らのプレイにあふれる感情と、阿久のボーカルが紡ぎだす切なさは、"そよ風のようにさわやかな"ロックに繊細さと同時に力強さを与えているのだ。

彼らはこれからもっと面白くなる、この音そんなことを私に確信させてくれる。

(文・村田圭子)

音楽がタイアップに引っ張られるのはごめんだ。

●タイアップを付けるということは、それだけ見ず知らずの人に聞いてもらえる分、価値があると思う。だからアーティスト側が（本人でなくてもスタッフも含めて）売りたいために付けるのは許せる。逆に有名なアーティストをもってくればドラマ・CM側の知名度を上げられるからと、全然つまらない合わせ方をすることもあり、それを許してしまうアーティストには怒りを感じることがある。理想は、もうこの曲以外タイアップを考えられない！　という感じに使われていることかな。　（神奈川・甲瀬・♀・22歳）

●宣伝効果抜群だし、普段あまり聴かないアーティストに出会うきっかけにもなるのでいいことだと思う。でも、ときどき無理矢理売れているアーティストの新曲を使ってるなと感じるものがあるのは残念。　（北海道・安孫子実奈・♀・17歳）

●個人的には好きではないけれど、やっぱりドラマやCMの音楽もいいものがいいに決まってる。ただ、タイアップアーティストが大体決まっていることや、変にバカ売れするのがおかしいと思う。TVで供給される音だけじゃなくて、自分で音を探すことも大切なのにね。　（島根・河村隆海・♀・19歳）

●いつも同じような人たちの曲だと「またか・・・」って思うけど、あまり知られていなかったり、久しぶりのアーティストだったりすると、「みんなに聞かれてよかったね」って感じと、耳慣れない曲なので得した気分。　（埼玉・佐藤佳子・♀・32歳）

●タイアップはとてもいいと思う。なぜなら自分の好きなアーティストの曲がCMに流れていると、いつもはつまらないCMの15秒間がとてもすてきな15秒間になる。　（熊本・いおり・♀・15歳）

●好きなアーティストの曲がよりたくさんの人の耳に入ったり、テレビでたくさん流れてたりするのはうれしい。「そんな売り方はキタナイ」とか言わずに、素直に喜んではどうか。

（青森・ごえもん・♀・18歳）

●色々なタイアップが付くのは、そのアーティストの曲を聴く機会が多くなるのでファンとしては喜んでいいのではないかと思うけど、そのためにたくさんの枚数が売れて、売れる基準とか変わってくるのは、元々のイメージが崩れたりして嫌だなと思う。私はルナシーのファンなのですが、今度初めてテレビドラマのテーマソングになったのです。うれしいような、それでいてルナシーのイメージが変わるのではないかと心配しています。今までノンタイアップでやって来たので、ちょっと複雑な気分になっている現状です。本人達にとっていい方向になればいいのですが。周りがどうであれ、ルナシーはルナシーなのでしょうけど

（福岡・亜希美のママ・♀・44歳）

●ルナシーの「IN SILENCE」、これTV主題歌ですよね。アルバムでもすごくきれいで好きな曲で、すっごくうれしかったです。でもイメージ的に、なんか不思議というか戸惑ってしまいました。大好きなんですけど、不思議と言うしかない。この「IN SILENCE」の採用に。　（長野・chie・♀・27歳）

●やっぱり少しショックです。今度シングルカットされるルナシーの「IN SILENCE」が、6月5日から始まる番組のイメージソングになるんです。聞き覚えのある声だと思ったら案の定・・・ショックでした。今までノンタイアップだったのに、ルナシーの曲がイメージソングになるなんて・・・、それを引き受けるなんて・・・。　（大阪・隆華・♀・16歳）

●タイアップって新人を売り出す手法としてはいいと思うんですが、このごろは逆に音楽を使い捨てにしているようであまり好ましくないです。CMやドラマの回転が速いから、曲も短期間だけ一気に盛り上がって、カラオケ使用頻度も上がり、画面から消えるころにはもうとっくに「新曲」ではなくなっているでしょう？　何だかなー。もっと大切にしてほしいなー。　（北海道・近藤靖子・♀・27歳）

●私は筋少とラウドネスが好きなんですが、このバンドにハマるきっかけになったのがタイアップなんですよ、実を言うと。筋少は某ゲームCMソングになった「バトル野郎」、ラウドネスはアニメ映画テーマソング「Gotta Fight」と「Odin」（もう10年以上も前か？）ですけど。でもこの3曲は、私の中でいまだに色あせていません。

（埼玉・鉄道少年の姉・♀・23歳）

●そのCDを売る立場にいるので、売れなければおまんま食い上げだし。ただ、アニメにはもっとそのアニメ独特の曲を作ってほしいなと思っています。子供がかわいそうですよね。でもこのままの状態がいつまでも続くとは思っていませんから。それを信じていたいと思っています。　（東京・椿・♀・23歳）

●何ではやりアーティストの曲ばかりにタイアップが付くのか。もちろん、ドラマやCM側、アーティスト側どちらにもメリットはあって相乗効果を狙っているのは分かっている。タイアップ自体は否定しない。でも、視聴率を上げるため、売れるためにお互いを利用し過ぎないでほしいというのが、今の正直な感想。あまりにもタイアップからヒットを生むという公式が成り立ち過ぎて、それをお互いに利用し過ぎている。カーペンターズや森田童子の曲がTVから流れてきた時は新鮮だった。トレンディードラマに人気アーティストの主題歌ばかり、セールスのための当たり前過ぎる組み合わせ、嫌気がさす。絶妙な組み合わせにさえ純粋に感動できず、商業的なにおいを感じてしまう今のタイアップ主義。このまま行くのは、ちょっとやばいんじゃないか。

（神奈川・中村彰宏・♂・19歳）

●今回のテーマは先月に引き続き、タイアップ（CMのイメージソング、テレビ番組の主題歌等として提携すること）について。疑問や否定的な意見も目に付いたけど、タイアップ自体が悪いというのではなく、その組み合わせや偏り、行き過ぎた商業主義的なにおいに納得がいかないだけなのだろう。良しあしはともかく、こういった風潮を変えていくのは、ユーザーがどう反応するかにかかっていることだけは事実。音楽がタイアップに引っ張られるなんてことだけにはしたくないね。

さて、次回からは新しいテーマ、「ビジュアルの変化について」。例えば最近、「ビジュアル系と呼ばれるアーティスト達のメイクやヘアスタイルが過激ではなくなってきたのはなぜか」とか「さみしい」という声が多く寄せられている。その一方で、やはりインディーズシーンでは、圧倒的にビジュアル系のバンドが目立っている。そんなビジュアルとその変化について、あなたの意見をお待ちしています。

press mania

say too much!!

単なる音楽ファンである僕は極度の音楽雑誌中毒。最近は、毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌（当然このJ-ROCK magazineも含む）の記事の数々や、雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、音楽メディアのあくなき挑戦に“全く勝手に”一喜一憂するのが妙に楽しい。さて、今月、僕の関心をひいた記事は…

●F誌のヴァレンタインD.C.のインタビュー。その中で、メンバーのビジュアルがナチュラルになりつつあった中、今回のツアーでJunが派手なビジュアルに戻ったことに対して、「体から自然に出てくるものがナチュラル」とken-ichiが語り、その言葉に妙に納得させられた。

僕達は「化粧が薄い」とか「飾りがない」ことをナチュラルだと思いがちだが、よくよく考えてみれば「髪を立て、派手なメイクでステージで暴れたい」と思っている人間が、バンドのイメージのために地味な格好でステージに立ったとしても、それは自然でも何でもない。"ナチュラル＝地味"ではなく、"ナチュラル＝体から自然に出てくるもの"という目でアーティストを見つめてみれば、「最近○○は変わってしまった」なんて悩みも解決するのではないだろうか。

●新作『96/69<地球あやうし!!>』がリリースされるため、各誌をにぎわせたコーネリアスこと小山田圭吾。

情報誌Dでは、新作の話題も絡めつつ彼の選んだ科学ものからアートものまで様々な10冊の本が紹介されていたが、その中には作品のジャケットの元ネタまであって面白い。彼自身も堂々と「そう、これをパクッたの」と言い切っていて、改めて新しいものや面白いものをどんどん取り入れていく彼の柔軟性に感心したし、それを素直に認めるカッコ良さを感じた。パクッたことを正直に言えないアーティストのみなさん！　彼の潔さを見習ってみてはどうですか？

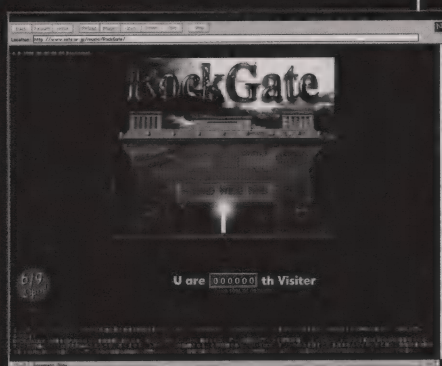
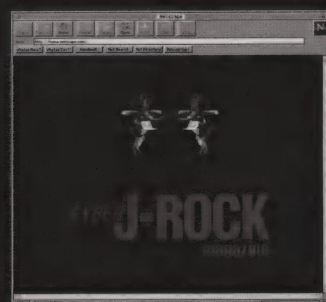
●「アーティストのことが簡単に分かる曲」という意味で「シングルは名刺代わり」という表現がよく使われる。しかし、O誌のザ・イエロー・モンキーのインタビューでは、ベースの廣瀬洋一が「（バンドの）ある一面を出していく事がシングルだ」と新曲「SPARK」について語っていた。これは前作「JAM」のヒットで、リスナーが期待しているのはお決まりの名刺的な曲ばかりではないことを実証したからこそ言えるのだろうが、これを行動に移せているアーティストはまだまだ少ない。頭の固い音楽シーンの風潮だろうか。

名刺は一枚もらえばそれで十分。次にもらうことがあるとすれば、何か変化があった時。ましてや僕達は千円も払ってわざわざもらうんだから、同じものを何回もくれるのだけは勘弁してほしい。

●C誌に掲載されたセックスピストルズの再結成記者会見。「オレ達の共通の目的はテメエの金だ」とか相変わらず飛ばしまくり、過激なイメージはあのころのまま。質問した記者を「ファック」呼ばわりするし、それでも記者はバンドが聞かれたくないポイントを容赦なく突いていく。これはお互いを人間と思っていては出来ないことだ。プロとして記者会見が演じられていて、そこには内容もなにもないが、やりとりにスリルがあってドキドキさせてくれる。何だかバカバカしくて愉快だ。

日本はどうも平均点を取るインタビューが多すぎて刺激に欠ける。月並みばかりより、たまには最低のクズにもお目にかかりたいっていうのは、過激思想だろうか？　Jロックシーンにも彼らの影響を受けたアーティストは多いだけに、この会見を読んで最低を楽しんだ人間もいるはず。今後のアーティストにも記者にも期待しているぞ。

末田 晃
Sueda Akira

CYBER J-ROCK magazine http://www.j-rock.com

ROCK GATE http://www.nets.or.jp/RockGate

6月9日より ROCK GATE START!!

インターネット上に、かねてより準備していたロック音楽ホームページ専門検索・評価サイト「ROCK GATE」が、6月9日からスタートしている（アドレスはhttp://www.nets.or.jp/RockGate）。もう見に行った人はいるかな?

すでに4月から展開している「CYBER J-ROCK magazine」（アドレスはhttp://www.j-rock.com）がジェイロックマガジンをベースにした邦楽ロック専門のオンライン・マガジンだとすると、こいつはロック音楽情報全般の水先案内人というところかな。「CYBER J-ROCK」とリンクしてるからよろしくね。

「ROCK GATE」の最大の特徴は案内に先立ってホームページを評価すること。ディスク・レビューのように6段階の評価軸でチャートにし、そのページの性格をあらわにしていく。定期的にネットサーフィンを行って再評価するので、「ROCK GATE」を訪れた人は、いつも最新のホームページの短評を参考に出来るというわけ。時間を有効に使いたければめぼしい評価のホームページに行き先を絞ればいいし、お暇なら「つまらない」と評価したホームページにあえて飛んでみるもよし。

今回のこのコーナーでは、邦楽ロックアーティストのホームページを「ROCK GATE」で評価したコメントの一部を引用して紹介してみたい。

（文・里居正裕）

サイトの評価指標（6項目、各5段階）

1 ビジュアル度・・・見せ方、デザインのうまさ
2 アーティスト入れ込み度・・・当該アーティストの関わり具合
3 マニアック度・・・内容のこだわり
4 テクニック・・・HTMLの制作技術
5 新鮮度・・・情報の更新速度
6 インタラクティブ度・・・会話性の有無

矢沢永吉

http://www.toshiba.co.jp/emi/yazawa/home_s.htm

（5/27サーフィン）

テレビであのアルビン・トフラーと対談している矢沢を見たときは、そのあまりのミスマッチに驚いた。ロッカーが学者とナニを語り合おうというの？　ってやっぱりインターネットっつうか通信がテーマだったのね。スポンサー付けて番組作る人たちが、普段トフラーなんか読まない層を引きつけるための苦肉の手段が「矢沢」なんだろか。その番組の流れなのか、4月10日、このサイトが登場したのだね。

けど矢沢サイトはすごかった。Shock Wave（注1）バージョンのホームページはデータが比較的軽い割には凝った作りで、日本の音楽サイトでは現時点でトップレベル。「YAZAWA」のロゴには三つのサウンドが仕掛けられていて、メニューにポイントを合わせると女性の声がガイドする。テレビ画面が中央左寄りにデザインされているが、その顔がメニューごとに変わる…。

よし、問題は中身じゃ。まずは矢沢本人のあいさつ。リアルオーディオで聞こえてくる矢沢のメッセージを聞けば、律儀な人なのかもしれない、と思えてくる。う！早くも新技術のQuick TimeVRが使われている。バイクに乗ったり、アコースティック・ギターを弾く矢沢の姿を360度自由な視点から見ることが出来る。「メイキング・オブ矢沢サイト」みたいなページでは、いかに矢沢がこのサイトに熱意を持って取り組んだかが、くどいくらいの「証拠写真」とともに掲げられている（笑）。先日話題になった矢沢の公開レコーディングの模様は、このサイトでリアルタイムに報道されていたようだ。4日間の密着レポートの内容はたわいのないテキストと変化の乏しい退屈なデジカメ映像だったが、やってることは可能性を感じさせる。「矢沢の顔スロットマシーン」みたいな動くゲームもある（矢沢だってこんな軽い遊びをやるんだというミョーな言い訳が笑えた）。矢沢の半生をつづる連載小説は2週間置きに追加される。ファン交流を目指したCGI（注2）なんかはまだ工事中だった。

矢沢永吉のキャラクターを前面に出し「今」を伝えるとともに、技術的にも高度な優れたサイトだ。レコード会社の作ったオフィシャル・サイトの多くが「とりあえず作ってみました」的な宣伝媒体であることを考えれば、出色のデキだと言える。ファンでなくとも楽しめるのがミソだね。ただ、スタッフとかずいぶんお金をかけていそうなので、これから先、まめに更新してくれるかどうか、気になるところ。

サザンオールスターズ

http://www.jvc-victor.co.jp/studio/sas/sasl.html

（5/24サーフィン）

4月1日に立ち上がったばかりのオフィシャルサイトらしい。Shock Waveのオープニング画面…ぎえー、データがでかい、重すぎる！　筆者の環境は28・8Kやで、無茶したらアカンわ。全表示されるまでメニューボタンすら押せないのは大きな欠陥。それでもどうにかダウンロード（注3）しました。桑田の声が出る隠しボタンがある。その割に退屈な画面で…「渚のシンドバッド」のリフレインが延々と続く。ムカムカ… 気を取り直してメニューに入ると、これがまた工事中ばかり。今の所あるのはサザンに関する基礎的なデータばかりで、これがどこからでも手に入りそうなつまらん情報ばっか。頑張ってるのはファンが作ってるとこだけ。

桑田、文句言うた方がええんとちゃうか！

エイプリル・フール

http://www.bekkoame.or.jp/~kfujii/fools

（5/24サーフィン）

大阪のインディーバンドが立ち上げたサイト。ちまたでまいているチラシなんかでもその存在を声高に宣伝している。インターネット上ならメジャーと勝負できる、と思ったかどうかは知らないが、ま、その行動力は認めてあげよう。手作りっぽいのに、なぜか思ったより内容が薄い。本人らが手がけているのかどうかは不明だが、バンドが結構いい音出しているだけに、期待して損した。リンク（注4）も薄いので、彼らを知らない人には何のメリットもない。ファンでここに乗ってくる人って実在するのだろうか。話題性以外のサイトの存在意義を問いたい。

Regular

グイーン

http://www.st.rim.or.jp/~freddie

（5/24サーフィン）

クイーンのコピーバンド、グイーンのホームページ。オープニングでいきなりShock Waveのエンドレス・アニメーションを見せる。わくわくして情報をたどっていくと…結局はバンドの活動紹介と予定だけやんけ。このバンドはかなり入れ込んで服装などもクイーンのコピーをしている。それだけに彼らの性生活がどうなっているのか興味がある（ウソ）。

ここに行ってもあまりお得感はありません。ただ、クイーン関係の情報サイトとリンクしており、クイーンの好きな人はここをベースにするといいかも。

フィッシュマンズ

http://fishmans.eccosys.co.jp:12345

（5/23サーフィン）

オフィシャルです。なんせいきなり事務所の社長のあいさつなんか入ってたりして。シャレでやっているようですが、減点ですね、ハイ。

Talker（注5）を使用して音声が聞けるらしい。プロフィールや音源紹介はそつなく型どおり。楽屋ニュースとか写真はいいけど、全体にテキストが少ないので興味半減。

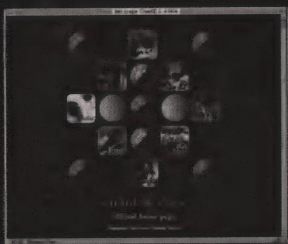
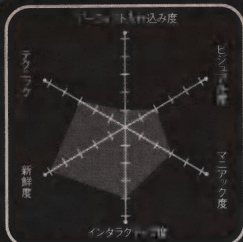
桑名正博

http://www.yo.rim.or.jp/~m-kuwana

（5/27サーフィン）

アーティスト本人によるサイトだが、ここは非常に個人的な色彩が強い。一応音楽サイトなんだけど、彼の率いる電動ブリキ商会の情報以外は音楽的ではない。家族紹介やオーストラリア旅行記など楽しそうにホームページづくりに取り組んでいる。リンクも音楽関係と言うより、個人的なつながりで張っているようだ。彼の交友関係やその広さがよく分かる。現在、大阪を拠点とする桑名にとって、これが強力な情報発信源であることも確かだが、一方、ファンから見れば、桑名のサイトがこういう形を取ることは不満があるかもしれない。筆者としては、彼自身の持つ音楽的コンテンツの質と量を考えれば、もっと音楽を語ってほしいと思う。

CHAGE & ASKA

http://www.fujiint.co.uk/FIP/CA

（5/27サーフィン）

ここは情報に関しては立ち上がったときから英語版だけ。海外の活動が成功しているアーティストらしい展開で、サンプルサウンドやムービーなど掲げられているが、特に動きのあるサイトではなく、今となっては平凡だ。しかし、ファンが集うBBS（注6）は活発で、1日15～25件の書き込みがある（日本語OK）。リアルタイムの投稿を受け付けているようなので、ここを出入りするファンの質は良いのでしょう。20日分くらいの書き込みが一挙にまとめて見られる。ただ、これだけの量になるとファン同士の会話の連続性が低い。チャゲアス本人らのキャラクターが全く見えてこないのもなんだね。

マイ・リトル・ラバー

http://www.oracion.co.jp/MLL

（5/27サーフィン）

かわいいけどあまり更新しないサイトです（笑）。プロフィールページにムービーなど積んでいるけど、もはや古くさい。メニューはそこそこ面白そう。例えば「マネジャーによる生のインサイド・レポート」なんていうから期待するが、中身はお寒い企画倒れの嵐。ましてそのハワイ・レポートは昨年8月、レコーディング・レポートは昨年9月のもの。それが最新。だれが読むか、そんなもん。小林武史はいろんなメディアをクロスオーバーに生きてきた名音楽プロデューサーだが、ホームページは壁にぶちあたっている。そのせいか、Voyager社のCD LINKとかいうソフトを使ってリトラバのCDをCD-ROMドライブでかけながら見る新システムを導入したらしいのだが、面倒で暇がなくてまだ試していない（すんまへんな、ビンボ暇なしですわ）。ソフトは無料でダウンロードできるようなので、だれか試してみてね。ひょっとするとそれを使えば面白いのかも。

佐野元春

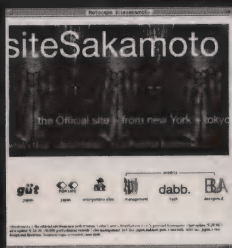
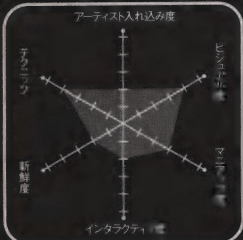
http://www1.sony.co.jp/MOTO

（5/28サーフィン）

もともとファンが構築し、それが公認サイトとなったらしい。それだけに佐野元春の熱心なファンが支えている印象が強い。長いキャリアを綿密にフォローすると共に、音声、映像も豊富に掲げる。中でもムービーは代表曲ごとに掲示していて充実。佐野が責任編集する雑誌「THIS」ともリンクし、過去の主要なインタビューを紹介している。ファンによるライブレポートは同じ会場を複数のライターが書いていて、比較すると面白い。情報更新も頻繁で、BBS的なファン交流は一種の社交場といった趣がある。ちょっと古い話だが、立ち上げ1周年の3月13日は彼の誕生日で、メッセージボードはお祝いで埋め尽くされたという。ええ話やねえ。佐野自身は登場しないけど…。

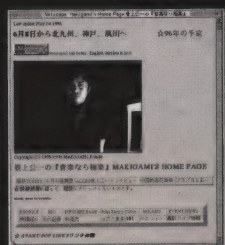
坂本龍一

http://www.kab.com/m/siteskmt

（5/27サーフィン）

技術的にさほど新しいものは感じられないけれど、ホームページのデザインは見事。河原の石ころをインデックスに見立て、空間を生かす見せ方はあか抜けた存在感がある。さすがは世界のサカモト。バイオグラフィー以外の記事は英語だが、多岐にわたる彼の活動が分野別にきちんと整理され、細かく紹介されている。スライド・ショー（注7）は見応えあり。難点は本人発信のコメントがなく、サイトの中でのアーティストの存在感が希薄なこと。ファンを突き放している。ま、「アホアホマン」をここでやるわけにはいかんだろうがねえ…。

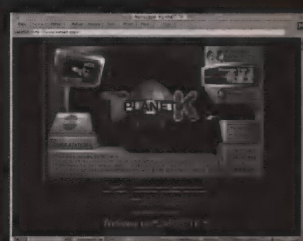
巻上公一

http://www.st.rim.or.jp/~makigami

（5/28サーフィン）

この人のマルチな才能ぶりがよく分かるサイト。ホームページでは自分の写真をコマ撮りアニメで動かし、そこに音源を隠している。彼の率いるバンド、ヒカシューや演劇の情報、よく分からない中国拳法とかトゥーバとか…フツーの人には奇妙に思えるであろう構成。加えて頻繁に書き換えるニューステロップがブラウザのフレームに表示される。この時点ではJASRACの古賀財団問題に触れ、意見を述べたりしている。

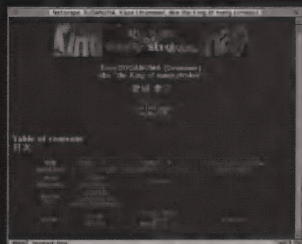
小室哲哉

http://www.komuro.com

（5/29サーフィン）

ご存じ小室哲哉のサイト。彼のプロデュースワークのすべてが分かる。もっとも、丁寧に作られているとは言え、新鮮なオリジナル情報は薄く、プロモーションの一環としか思えない。TWIN VQやShock Waveを取り入れたり（ダンスっぽい音をバックにメニューが踊ってるだけだけど）、カラオケ・エンジン（注8）のソフトとか売ってたり、技術的には新しいことをやっているから、ま、イメージ戦略通りなんだろう。ホームページでは自分が発信してると記してあるが、だったらもうちょっと突っ込んだ内部情報が出てこないもんかね。小室のキャラクターが全く感じられない、レコード屋の立て看板のような存在。

増田俊郎

http://www.threeweb.ad.jp/˜septblue

（5/29サーフィン）

僕は406番目のビジターだった（笑）。アーティストとしての活動が、詳しく紹介されているけど、表現が日誌的な、私小説的なサイト。柳ジョージや憂歌団らとの作品を通じての交流。根がブルースなのでしょう、凝った仕掛けとか、動画とか音声とか、そんなものとは無縁だけど、生身の人間のシャイな心がちらちらと見え隠れする。割と好きです、こういうの。昨年、病気で入院なさってたとか。療養でハワイにサーフィンとか。そんな出来事が、彼自身の表現でつづられている。生き様を一つ、見せてくれる。

菅沼孝三

http://www.gardencity.or.jp/˜kozo

（5/29サーフィン）

フラジャイルのドラマー…なんだけど、本当にいろいろな人のサポートをやっているので、ジャンル分けのしにくい人です。こないだ大阪に遊びに来た明石昌夫さんが「彼は便利のいいサイトを自分でやってるよ」と言ってたので、さっそく見に行った。なるほど、個人的スケジュールが月日毎にびっしりと書き込まれている。ブッキングしやすいわけなんだ。手数王と呼ばれるほどのタイトなプレイは定評があり、ロックアーティストからも多くの声がかかるようだ。例えばローリー寺西のレコーディングなどの予定が見られる。つまり、彼のサイトから、他のアーティストの予定が推測できるというわけ。

あと趣味の熱帯魚のページなんかもあり、自分で育て増やした魚を売ってたりする（笑）。

Get It On!! Rock Gate!

ザ・ブーム

http://www1.sony.co.jp/InfoPlaza/SME/Music/Info/Boom

（5/29サーフィン）

5月はブラジルツアーのレポートが注目だった。同行スタッフが書いているらしいが、結構読める内容になっている。現地での交流やコンサートの模様が、生き生きと描写されている。凝った仕掛けは何もないが、オフィシャル・ホームページとしては基本的なブームの情報はきちんと押さえてあるし、その音楽的ルーツも明らかにしているので及第点には達している。

余談だが、ソニー・ミュージック・エンターテイメントのサイトは多くのアーティスト情報が掲げられているものの、大半がおざなりなスケジュール情報程度にとどまっている。それらの中にあっては佐野元春のホームページ同様、気を吐いていると言える。

渡辺香津美

http://www.gardencity.or.jp/˜kazumi

（5/29サーフィン）

この人をロックギタリストというのは気が引ける。でも、そんな活動をした時期もあったから、ここでも紹介しておこう。ジャズ界では知らない人はもぐりだろうが、若いロックファンの認識は「あのおじさんだれ？」なのである。ナベサダやヨースケの名前を出しても同じだろう。嘆かわしい。それはともあれ、カズミはちゃんと我々のために発信してくれているのである。今のところ音源提供などは準備中だが、彼の活動歴は詳しく載っている。ニュースは自身で書いており、最近のニューヨーク滞在レポなんかは興味津々。山下洋輔と共に伝説のギタリスト、レス・ポール（推定80歳！）のステージに乱入した模様などが記録されている。

カヒミ・カリイ、コーネリアス（TRATTORIA）

http://www2.eccosys.co.jp/˜kawakazu

（5/29サーフィン）

これはTRATTORIAレコードのサイトだが、彼らの情報がぶら下がっている。特にコーネリアスは、小山田圭吾がそれなりに参加していて、彼の普段のノリが伝わる（相変わらず無愛想なくらいマイペースなのだが）。雑誌「GIGS」の企画でコーネリアス・オリジナルのギターづくりに取り組んだ模様をレポートしている。カヒミ・カリイは「遊びの部屋」を持っていて、そのフロントページの彼女の写真にいろいろ隠しボタンがあり、中指立てた彼女が現れたり、情報ページにリンクしたりする。残念ながら情報ページはほとんど工事中だった。遊びの要素をふんだんに盛り込んだ個性的なサイトだが、アーティストの情報源としては不満が残る。

（注1）Shock Wave　ホームページ上で動画を見るためのソフト
（注2）CGI　参加者の入力した文章を指定の場所に転送する仕掛け
（注3）ダウンロード　ホームページ上にあるデータを電話線を通して自分のコンピューターに取り出すこと
（注4）リンク　一つのホームページから他のホームページへ一瞬にして移動できる仕掛け
（注5）Talker　ホームページ上で音声を聞くためのソフト
（注6）BBS　電子掲示板のこと
（注7）スライドショー　写真や絵を次々と見せる仕掛け
（注8）カラオケエンジン　小室氏のホームページには彼の作品の演奏データが置いてあり、それを利用者が各自でダウンロードして自分のパソコンで再生、カラオケを楽しめるというソフトウェア

J-ROCK TRIBUNE

August Vol. 15

illustration : Mori Mitsuo

voice

メンバー100点、ファン マイナス100点で0点のライブ

4月26日大阪厚生年金会館で行われたL'Arc~en~CielのLIVEは、私にとって最低だった。その理由は7月号のラルクの記事でも触れていたが、「Wind of Gold」の時に無神経な人が発した言葉のせいだ。「L'Arc~en~Cielの夕日を見てください…」。静かにhydeが言うと照明が落ち、バックのスクリーンには真っ赤な夕日が映しだされた。切なくもの悲しいギターの音色に息を殺して耳を傾けていた時のこと。「hyde君結婚してー」…。

会場は一瞬にして失笑の渦となり、私は血の気が引くのを感じた。人間限度を越えた怒りを感じると、昇る前に血が引くのだ。はっきり言って、叫んだ奴のところまで行って、首根っこ捕まえて「今すぐメンバーとファンにあやまれっ!!」と怒鳴ってやりたかった。最高の演出を用意してくれたメンバーやスタッフ、そして純粋に楽曲の世界を楽しもうとしているファンに対して、絶対に許されないことをしたのだから。

私は、その後のライブをどうしても楽しむことが出来なかった。もちろんメンバーには何の落ち度もない。演奏や歌は最高のクオリティーだったと思う。けれど、私もライブとはアーティストと観客によって作られるものだと思っているので、今回のライブはメンバー100点、ファンマイナス100点の0点。結局最低のライブになってしまった。本当に悔しい。と言うか、情けなかった…。同じファンとして恥ずかしい。楽しみ方は自由だ。けれど、それは最低限のマナーの上に成り立っているというのを忘れてはいけないと思う。

［兵庫・高津英恵・♀・19歳］

voice

音楽を聴くということ

私はWANDSのファンです。6月号に「B'zやWANDSはさわやか熱血系バンドに見える」というのがありましたが、「さわやか熱血系」とは何ですか。ちょっとムカッとしました。まあ、「誤解を解きましょう」ともあったので、理解しようとして下さってるのは分かるのですが、はっきり言って「さわやか熱血系」とは誤解でも何でもなく、ただの偏見です。ファンから見れば。それに、B'zとWANDSは全く別のスタイルを持っているのです。多分、B'zファンもWANDSファンも、そう思うのではないでしょうか。最近のWANDSの曲は、はっきり言ってさわやかなんかじゃありません。重くズシッとくる歌詞やサウンドもたくさんあります。私にはサウンドのことはうまく言えないけど、けっして軽く流れるだけの音楽ではありません。歌詞は今の世の中の矛盾みたいな事とか、孤独なものや、心の奥でひそかに燃えるような思いなどなど。

とにかくCDを聴けば分かります。昔のWANDSとは曲の方向がだいぶ違ってきました。だけど彼らの思い、音へのこだわり、音楽やプレイすることへの愛情などは、何一つ変わっていません。周りには「今WANDSって売れてないじゃん」とか言うヤツもいます。だけどそういうヤツらは、周りに流されて音楽をはやりでとらえているだけで、音楽の素晴らしさが分からないだけ。本当の音楽を求める人になら、WANDSを愛することが出来ると私は思います。メンバーは、「売れるだけの音楽は違う」とか、「売れるためだけに音楽をやるのは違う」と、発言しています。そういう生き方などに私はすごく共感できます。だから、「さわやか熱血系バンド」とかいうように見られると、すごく悲しいです。だから一度、最近の曲を聴いてみて下さい。

「BUCK-TICKはどう思うか」とありましたが、私はずっと前から彼らは本物だ!と思ってたし、曲もカッコいいと思う。カッコいいだけですませるのではないけど、他に何とも言えないので。映像とか見ててもその曲のイメージというか、世界観のようなもの、すごく出てるなあっていつも思います。「見えないものを見ようとする誤解、すべて誤解だ」でしたっけ。あの映像を初めて目にしたときには思わず見入ってしまったし、今でも見る度にいいなあと思います。「鼓動」ってありますよね。あれを見たときもすごく感動できるっていうか、胸の奥へ入ってくるものがありました。

私の母はこれを見て「また変なのが出てきた」とか言ってたけど、その時は思わず「偏見でアーティストをけなすな」と怒りを感じましたよ。私たちの年代においてもそうだと思うんだけど、見かけがちょっと違うからってこの人たちはこうだと決めつけたり、自分の好きなアーティストの曲以外聴かないとか、音を聴かずに顔でファンやってる人とか、曲だけ聴いてアーティストのこだわりを知ろうとしないとか、そういうのって違いますよね？　自分の好みだけにとらわれず、何でも聴くぞという気持ちで、耳と心をよーく開いて、歌、音、アーティスト、その人たちの生き方、考え方、すべてを受け入れようという姿勢が、私たちリスナーにあるべきだと思います。そうやって良い音楽に触れて、初めて心にはまる音楽や人達が見つけられるのではないでしょうか。ちなみに私の心にハマったアーティストは、WANDS、L'Arc~en~Ciel、外国ではMR.BIGです。おススメです。みんなで良い音楽を共感していきましょう。

［愛媛・ペンネームえみ・♀・16歳］

●黒夢の撮影&インタビュー当日、清春はかなりの頭痛に悩まされていたようで、最初はちょっとご機嫌ナナメの様子。しかし撮影が進むにつれて回復し、合間にはホワイトボードにスタイリストさんとお互いの似顔絵を書いたりして、和やかな雰囲気が流れた。本誌スタッフはそれをポラロイドカメラで撮っておこうとしたのだが、あいにくフィルム切れ…。残念ながら、お見せすることは出来ない。

●kyoのインタビュー時、レコード会社の人にサンプルCDをもらったが、本人はまだもらってなかったらしく「ルパンしに行こう!」とひと言。すかさずマネージャーのY氏が、「盗みに行こうってことです」と解説を付けたが、kyoはお構いなく「"ルパン参上"と残しておく」と続ける。彼は、経歴やイメージとは裏腹な楽しく明るいキャラクターで、思わずルパンの格好をしたkyoの姿を想像してしまった。

●最近「ライブレポートにプレイリストが載っていない」という意見がたまに届くが、どうしてそんなことになっているのか。それは本誌の発売日に理由がある。つまり発売日にはまだツアーが終了しておらず、プレイリストが掲載されてしまっては、これからライブに行く人の楽しみを奪うことになり、まるで最初にタネ明かしをしていることになるのだ。これはアーティストもとても気にしていることで、ライブを完全に楽しんでもらいたいというプロ意識の表れだろう。本誌もその気持ちは十分に分かるし、ライターも大変だがライブの感動を少しでも伝えたいと努力している。読者にもそんなアーティストの気持ちを分かってもらいたい。

●イギリスのX JAPANファンからバックナンバー96年5月号の申し込みが航空便で届いた。英語でサラサラと書かれた手紙を読むのはちょっと苦労を要したが、封筒や便せんに張られたシールには"X"の文字が大きくプリントされていて、何だかほほ笑ましい。遠く離れた海外にも彼らの新作を待っている人達が、そしてジェイロックマガジンの読者がいると思うと胸が熱くなる。

●CASCADEの取材はライブ翌日の朝10時から。疲れているメンバーが起きてくれるかハラハラしたが、本当に眠そうな顔をしながら全員集合してくれてちょっと感動した。だがインタビュー前半はみんなボソボソ話し、某メンバーは鼻水がたれていても気づかないほどで(鼻ピアスのせいかもしれない)、何だかかわいそうになった。ようやく話が盛り上がってきたころ時間になってしまったが、彼らは新幹線に乗る時間が迫ってることさえ分かってなくて「ああ、ここは大阪だったんだあ」とひと言。次は、ゆっくりと時間を取って話をしたい。

voice

今、自分が思う事

音楽雑誌や周囲のアーティストへの評価や意見を見たり聞いたりすると、多種多様な意見が飛び交っている。あの人達は好きだ嫌いだというのが結構多い。人間は様々な人がいて、一人ひとり個性があるため自分も共感出来るという意見や、それは違うだろうという反論など数え上げたらキリがない。自分もL'Arc~en~Cielというアーティストが好きで、その人達の個性や人柄、音楽性、音楽に対しての考え方について共感を得たため好きになった。人にどのアーティストのどんな所がいいのかと聞かれたら、きちんとどこがいいのか述べることも出来るし、その人が自分の好きなアーティストを好きであれ嫌いであれ、きちんとした理由付きの評価なら自分自身も納得がいくのでうなずける。

しかし、中にはどうしても納得出来ない意見がある。その意見とは、その人達の名前を聞いたり、写真を見ただけで、「この人達は絶対こうだと思うから嫌いだ。あなたは一体この人達のどこがいいの、やめた方が絶対にいい」ということを言う人がいることだ。そういう意見はすごく腹が立つし、絶対許せない評価の仕方だと思う。たとえ自分の友人がそんなことを言ったとしても、許せない行為だ。でも悲しいことに、昔の自分には少しそういう傾向があったと思う。自分自身それが情けなくて悔しい。だから昔はロックには無縁の人間だった。髪を立てて、男性が化粧をするという行為が考えられない。むしろ怖いとまで思っていたほどだった。そんな自分を変えてくれたのは、中学の時の友人がふとしたことでX JAPANに興味を持ったことから始まった。その人もX JAPANを知るまでは見た目で判断していたらしいが、音や内面的なことを知ってからは、X JAPANに対する考え方が変わったと言った。その後友人にX JAPANのアルバムを借りて聴いてみたら、友人の言った通り、外見ではなく人間は内面的な考えを分かってからその人に対し判断するものだと知って、今までの自分がどれだけ心の狭い人間だったのかというのを痛感した。昔の自分がバカらしく思えてならなかった。そう思い直した2年後ほどに、L'Arc~en~Cielというバンドに出会った。彼らを好きな理由として、歌はもちろん好きだが、何よりも影響を受けたのは、雑誌の中で彼らが言っていた音楽に対する考え方や、キャラクター的なものだった。彼らは、自分にロックミュージシャンは怖い人達や暗いイメージの人達ではなくその反対で、逆に純粋かつまじめな人達だと教えてくれた。それからの自分は、ロックミュージシャンに対しての考え方が変わっていった。今はロック無しの生活が逆に考えられなくなったほどだ。確かに、見た目だけでロックを判断すると、訳の分からない歌かもしれない。でもその詞からは、とても壮大な風景が頭の中でイメージ出来る。もし自分が絵が上手ならば、そのイメージをスケッチブックのキャンバスに自らの手で描いてみたいと思うほど、壮大なイメージが広がってゆく。その興奮を覚えてしまった今では、ロックは自分にとって欠かせないものになっていた。前にtetsuさんが、「美形バンドとは得なものか」という質問に対し、「得というより、顔は知っているが音楽自体は聴いたことがないという人がいたりするため、音楽できちんとバンドが評価されていない」と言っていたし、違うインタビューではhydeさんが「イメージだけで、この人達はこういう感じの人達だと決めつけられてしまった」と言っていた。これは本人達にとって、一番悔しい評価のされ方だったと思う。もし自分がその立場だったら、同じ考えを持ったと思った。今、見た目だけでロックを嫌いだと思った人でも、音楽を聴いてみるとイメージが変わる人は絶対いると思う。人間はその人の外見より、性格や感性などの内面性を知ってから反論や意見、評価や批判を述べるべきだと思う。大人だろうが子供だろうが、このことは共通して言える意見だと思う。だから自分は誇りを持って、ロックは好きで、中でもL'Arc～en～Cielが好きだと胸を張って言える。

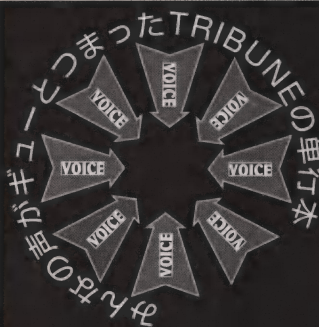
[秋田・ペンネーム ドラQ・♀・?歳]

voice

ライブ中の掟

4月に初めてB'zのライブに行ってきた。もう、すごく良かった。二人とも豆粒のように小さかったけど、それでも一体感を感じられて、すごくぜいたくで幸せな気分になれた。が、一つだけ残念なことがあった。

MCの時に「コール」が止まず、稲葉さんに「人の話を聞くように」と言われてしまったこと。皆結構笑ってたけど、「まあ、たいした話してないから、別にいいんだけど」とまで言わせて、何とも思わないのだろうか。あと、松本さんのギターソロの時に、いきなり世間話をし出した声のでかい女2人組。「おいおい、何しに来たんだよ」と言いたくなってくる。オバタリアンよりも迷惑だ。「人が話(だけじゃないけど)をしてる時は静かに聞く」。そんな当たり前のことがライブ中に出来ない人がたくさんいる。静かな時に限って、いつもコールする人がいるのが分かる。曲の合間とかなら全然いいけど、MCの真っ最中に言うようなバカ(6月号のJ-ROCKの掟にもあったが、そんなヤツはファンとは言わん)は、はっきり言って来ないでほしい。そんなことを本気で思うのは私だけだろうか。でも実際に、ファンの態度が悪いという理由でライブに行くのをやめた人もいる。一部の自分勝手な人のせいで、本当に音楽を愛している人が行かなくなってしまったら、ライブ自体が悪いものになってしまう。私は約3年前からB'zのファンだったが、ライブに行く心構えがなかなか出来ず、2度もライブツアーをパスしてしまった。今考えると、ものすごくもったいないと思うけど、突っ走って迷惑をかけるようなことをしなかった分、良かったと思う。まあ、私ほど気を使わなくったっていいけど、これを読んだ人は少し考えてほしい。アーティスト自身、ライブ中ただ暴れまくってるわけじゃないんだから、ファンもただ騒ぎまくってるだけじゃなくて、少しでも「楽しいライブ」になるように心がけてほしい。ライブというのは、アーティストとスタッフ、そして私達ファンが作るものだから。

[東京・ペンネーム ザ・ルーズな女・♀・15歳]

7月号のTRIBUNEにひと言!

●VOICEの「親を非難する前に」という意見、私も大賛成です。たかが両親二人さえも納得させられないような情熱なら、そんなものたいしたことないですね。いつまでも人のせいにして、責任をなすりつけてても、自分が育たないだけだと思うんです。逃げても甘えても苦しいのは自分一人ですよね。
(東京・椿・♀・23歳)

●同人誌について書いてありましたね。確かに内容がイッちゃってる物もありますが、それは作った人の汗と涙の結晶であって、作者が満足しているわけですからそれでいいのです。だれにも文句を言う権利はないと思います。「アーティスト本人に見せられるか」というのも、別に本人に見せるために書いてんじゃないんだから、いいと思います。私も書いているので、正しいファンのあり方じゃないとまで言われるとちょっと…。嫌なら読まなければいいのではないでしょうか。少なくとも私はそう思います。
(新潟・杉・♀・15歳)

●石川のきのこさんは、まるでライブをやらないとアーティストじゃないみたいな言い方してますけど、それは違うと思います。売るためにテレビや雑誌ばかりに出るとか、売れ線狙いだとか、どうしてすぐに「金」に結びつけようとするのか。はっきり言ってそんなやつ、音楽を聴く資格はないと思う。アーティストによって音楽の聴かせ方が違うだけだから、そんな偏見だけでアーティストを悪く言うのはやめてほしい。
(北海道・山口陽弘・♂・20歳)

●「打ち込み音楽に感動出来ない」という、かまちさん。確かにコンピューターを使った音楽は、一見人間味がないように聴こえますが、ちゃんと心があるんです。よく聴き込んでいないのに「似たり寄ったりの曲」だと思ってしまっていませんか？　私は純バンドの音が好きですが、打ち込みも好きです。SOFT BALLETを聴いてみてください。心があります。(東京・Papillon・♀・16歳)

●兵庫のsleepingさんへ。私は幻覚アレルギーの追っかけをしています。ホテル、打ち上げ、メンバーが行く所どこへでも追っかけます。追っかけてる以上、だれかに迷惑はかけてると思います。だけど常識は守るように心がけています。追っかけは追っかけなりにちゃんと考えて行動しています。少なくとも幻覚アレルギーのファンは、みんな常識ある人です。
(大阪・ｶｼﾞkunLoveLove・♀・19歳)

●私としては、ロックにしてもポップにしても、聴いてみて良いなと思えばそれで満足できると思うの。プロデューサーの名前で売れてるアーティストでも、聴いてみて良いと思えばそれでいいのでは？　アーティストの名前よりも何よりも、まず大切なのは「音」だと思いますけど?!(えらそうなこと言ってる私の一番好きなアーティストはB'z)。頼りになるのは自分の耳ですね。(大分・語部孝・♀・18歳)

●10代のロックファン層にひと言。「もっといろんな音楽聴いてみてもいいんじゃない?」。1アーティストに固定するんじゃなくて、他のアーティストの音楽も幅広く取り入れていけば、もっと大好きになるかもよ。だまされたと思って、聴いてみて!
(滋賀・愛LOVE露九・♀・22歳)

●B'zの新曲の「Real Thing Shakes」を聴いて、コシを抜かしそうになった。稲葉さんの声と松本さんの曲が泣けてくるほどいいんだぁー。みなさん、500円なんで買って聴いてみて下さい。海外進出も夢じゃないぞー。(兵庫・B'zが命より大事・♀・14歳)

●こないだ東京に黒夢のライブに行った帰りに、原宿の竹下通りを歩いていたら、(海賊写真やけど) RYUICHIの写真指さして「あったあった!!」って言ってる推定年齢5歳の男の子がいた。「LUNA SEA好きなん?」って聞いたら「うん!」って言ってた…。なんかすごいうれしかった…。でも海賊写真はやめとけよ。
(京都・桐原1号・♀・19歳)

●スタンディングのライブについて思うことです。何人かグループで来る子たち、だれか1人が先に行っといて前の方をキープする。そして他の子たちが後から割り込んで、前の方に入ってくる。それってズルイと思います。最初からその場所にいる他の人たちがかわいそうです。自分のことだけでなく、他人のことも考えてほしいです。(埼玉・しぶざる・♀・17歳)

●僕はWANDSが好きです。でも最近WANDSのファンが減ってきているように感じます。だからロックの話をしていてもWANDSが出て来ないので、何か物足りなさを感じています。しかし、家に帰って曲を聴くと、しみじみ「いいなー」と感じます。いつかクラスの半数の人に聴いてもらえるよう努力しています。
(愛知・窪田稔也・♂・15歳)

●L'Arc～en～Cielに会えて、本当に人生観変わった気がする。人をこんなに好きになるなんて初めてのことだし、同じ空間に住んでると思うとドキドキでたまらなくなる。コンサートなどで会う時なんて、もう倒れちゃうくらいうれしくてうれしくて。日本人で良かったですね。皆さん。(宮城・L'Ar～can・♀・14歳)

●RYUICHIさんを大好きになってまだ2カ月の私。LUNA SEAの詞は私には難しすぎて、理解できませんが、聴いているとすごく自分に素直になれるんです。なぜかは分からないけど…。RYUICHIさんの声は私の心に絡み付いてくる。こんなアーティストに会ったのは初めて。今の私にはとっても必要な人がRYUICHIさんです。大好きです。
(北海道・BLUE・♀・15歳)

●最近、武道館ライブの価値が下がってきてるように思える。別に「やるな」と言ってるわけじゃないけど、客がそんなに入るわけじゃないのに、簡単に2DAYSとかやってしまうのはどうかと思うんです。やっぱ、動員に合わせて会場は大きくしていくんだし、そのバンドの成長も分かると思います。今年の夏に、最愛のバンド、L'Arc～en～Cielも武道館2DAYSをやりますが、それは当然だと思う。去年の360度客席の武道館ライブはファンにとっても、メンバーにとっても、素晴らしいライブだったし、そんな感動できるライブが出来るようになってから、武道館をやってほしい。注目を集めるために武道館を利用するな!　…武道館はそんなに甘くないと改めて感じます。
(静岡・宝井秀架・♀・15歳)

●最近ずっと行きたかったライブに行った。会場に着いたとたん、異様な感じだった。ライブが始まるまで居心地が悪くて仕方なかった。でもライブが始まって、みんな同じなんだナって少し安心した…。だけど、叫ぶ、わめくがこんなにすごいのか、耳が痛くなるほどだった。叫ぶことは一体何の表れなのかナ？　人を不快にさせてまでするイミが分からない。
(神奈川・美夜・♀・21歳)

●ライブに行く前と、行った後で自分の好きな曲が変わってることってありませんか(あんまり好きじゃなかった曲が好きになったとか)。ライブってやっぱりそのアーティストの曲に対する思い入れとかが伝わってくるから、それに影響されて曲の好き嫌いが変わってしまいます。(兵庫・ニーナ・♀・17歳)

●J-ROCKに載っているアーティストと、SMAP、V6などの人たちは、どう違うの？　と聞かれ、頭の中では分かってるのに、友達に言い表せない。同じメンバーの人が、作詞作曲するのがアーティストで、他の人がV6の曲を作ったりするのがアイドルとかなんでしょうか?(東京・星野さんLove・♀・13歳)

●4/30、THE MAD CAPSULE MARKET'Sのライブに行った。ただやみくもに暴れる人、ただ馬鹿みたいに頭を振り続ける人、ただひたすら飛んで警備員に連れていかれる人、いろんな人がいた。それらのほとんどは、周囲に人がいることを忘れていた。ノリ方は自由だし、夢中になるのも分かる。でも、この中に音や声を聴きに来た人は、果たして何人いたのかなぁ。音がクリアーで細かいハットの音までキレイに聴けたんだヨ。MADの客は、最近すごくレベルが下がったヨ。ヤダナァ…。
(神奈川・大滝ようこ・♀・26歳)

chatter BOX

●『STYLE』は何回聴いても、インタビューを繰り返し読んでも、それでも意味が分からない。マジで深くて、七変化のアルバム。『MOTHER』が怪物だったら、『STYLE』はUFOですか？（長野・chie・♀・27歳）

●6月号のchatter boxに載っていた雑魚さん。私はそんなにファン歴の長くないB'zファンですが、「さわやか熱血系」には、ちょっと苦笑いしてしまいました。でも、BUCK-TICKのファンの人から見るとそうかもしれません。私はB-Tを初めて見たのが「唄」の時で、「すごくマニアックなバンド」と思いました。独自の世界があって、たった10秒くらいしか見てないのにすごくインパクトが強くて…。客観的に無理に見る必要はないのではないでしょうか。周りを気にしなくても自分の大切なモノがそこにあれば、それでいいのではないでしょうか。（長野・UNREAL・♀・15歳）

●私は不思議に思ってることが一つあります。ロックとかに限らないけど、みんな赤い髪や黄色い髪をしてるけど、スンゲーきれいですよね。染めたり抜いたりしたら傷むっていうけど…。サラサラのストレート…あこがれやなあ…。つやがほしいよ〜。hydeさん、私のあこがれの髪質です。
（京都・正木さやか・♀・16歳）

●友達が言ってたんですけど、「音楽雑誌を読んでいると、毎月いろんなアーティストやバンドがデビューしたり、アルバムやシングルをリリースしてるけど、私達が聴くのはホンのわずかだし、ヒットチャートも変化がない。面白くないよね」、この言葉を聞いて納得しちゃったし、もっといろいろ聴かなければいけないなと思ってしまいました。（岩手・Ciel・♀・21歳）

●祝!! 背表紙。よく私の書くことがこの雑誌に変化をもたらしている…。もしや私が裏の編集長?!
（新潟・桜彰・♀・15歳）

●B'z大好き!! この間初めてライブに行って、ますます好きになりました。前から男性ファンが多いことは知っていたけど、本当に圧倒されました。「松本さん愛してる〜っっ!!」の男性の声には、思わず「私も〜っっ!!」と叫びたくなりました。これからもずぅ〜っとB'z大好きでいます。（愛知・せっさん・♀・13歳）

●化粧をやめたり、髪を切ったりしただけでファンをやめて、他のバンドに目移りしてしまう子へ。確かにだれのファンになろうと自由だけど、そういう子達が「とりあえず化粧して髪を染めれば多少のファンが付く」と勘違いするアホバンドを増やすんだと思います。
（静岡・ｴﾘｯｸ・♀・27歳）

●6月号の『J-ROCKの掟』を読んで、はっきり言ってすごく考えさせられました。そのアーティストが好きで好きでたまらなくなり、守らなければならないことが守れなくなり（周りが見えなくなり…）、してはいけないことまでしてしまう。そしていろいろな人に迷惑をかけてしまう。最近、特に目につきますね。同じファンとしては、こういう人達は恥ずかしい。ファンならもっと別の方法でサポートするべきではないかと思う。
（岡山・小椋由起子・♀・21歳）

●最近B'zのライブに、病気になったり修学旅行と重なったりとで、全く行ってない。そういうのってすごくストレス溜まるんだけど、「会いたい!」って気持ちを抑えて待ってる時間も結構いいもんだ。
（秋田・TOKI・♀・15歳）

●ライブに行くと自分の感情がモロに出てくる。泣いたり、笑ったり。トリハダとかよく立つし、緊張してお腹痛くなるし、ドキドキして爆発寸前。そしてだれよりも声を出そうとする。いつも過ごしている（普通に生活している）時は、どこかで感情を抑えて息苦しい時がある（仕事だからしょうがないけど）。だからこそ、高校生の中に混じってでも、自分の中の純粋な部分を探しに、確認しにライブに行く。若いねって言われるけど、今しかないからね。（高知・笹岡加奈・♀・23歳）

●"売るための音楽"とか"カラオケのための音楽"とか、最近のリスナーはそういうことにはスルドクなってますね。そんな見方をしてたら、アーティストのメッセージをまっすぐ受け止められなくなるんじゃないかなあ、いつか…。（京都・武田直子・♀・17歳）

●この前行ったライブでものすごくムカついたのは、テレビの撮影の人たち。ステージの前を右に行ったり左に行ったり、急に何かの上に乗ったり…。もううっとおしいし、目ざわりだし、自分達はテレビ撮ってるんだって感じで、全然その後ろにいる客の迷惑なんか考えてなかった。そりゃテレビに出るのってすごいことなのかもしれないけど、私達だってお金払って見に行ってるんだからね。あと、通路に座ってる警備の兄ちゃん達！　「何だ、こいつら」って冷めた顔して見るんじゃない!!　ちゃんとマナー守るから、アーティストと私達だけでライブやらせてほしいな。
（神奈川・ﾁｷﾝ・♀・17歳）

●チケットが高いという意見に賛成。しかも、ツアーグッズも高いと思う。海賊ものの10倍ぐらいすることもある。著作権とかの問題もあるのだろうけど、この値段の差では金のない女子高生なら海賊ものを買ってしまうと思う。（埼玉・愛・♀・16歳）

●「私、洋楽しか聴かないからあ〜」とか言う人、腹立つ。"洋楽"って言うと、それだけでカッコいいと思ってる。邦楽も聴いてみなさい。
（石川・ﾃﾉﾒﾉﾝ坂井・♀・15歳）

●シングルやアルバムを発表する間隔が長い人もいれば、次から次へと発表するアーティストもいる。そのサイクルは様々なのだろうけど、私は一日も早く氷室京介の楽曲が聴きたい。このなかなか発表されない曲を待ち、コンサートを待つのはとても辛い…。
（埼玉・ｱﾘｽﾝ・♀・38歳）

●私の学校は今中間テストの真っ最中です。私のテスト勉強のBGMはGLAYです。何か、自分の好きな音楽を聴きながらだと、幸せな気分で出来るのでこれはオススメです。でも、なかなか集中出来ないという弱点も…。夏のGLAYのライブに向けて、勉強頑張るぞー！　その前にチケット取らな…。
（三重・TAMA・♀・14歳）

●B'zのライブに一人で行った。友達にそう言うと「えーさみしい。一人じゃねー」と答えられた。でも、ライブって別に一人でも楽しい。好きでもないような人を誘っていくより、アーティストと正面で気持ちをぶつけ合いたい。（鳥取・藤沢るな・♀・17歳）

●街行く"アムラー"が安室奈美恵のライブに行ったら、やっぱりコスプレと呼ばれるのだろうか…??
（埼玉・ﾓｶ・♀・16歳）

●ライブでしつこいダフ屋に会いました。しかも「ライブ見ないで帰れ!　チケット売れ!」と言うんです。私はめちゃくちゃ腹が立ちました。私がどれだけこのバンドが大好きで、どれだけ応援していて、どれだけこの日を楽しみにしているかも知らないで、「帰れ!」はホント、ムカつきました。それからチケット売ったヤツ（←あえてヤツと呼びます）。余分にチケット買うなよ! ここに来れなかった人がたくさんいるのに。おまえら、ふざけんな!!（怒）（北海道・Sachiko・♀・19歳）

●ある本に、「X JAPANの完全限定版CDの未開封の品12000円で売ります」というのが、いくつか載っていた。ぼくはそれを見て超ムカついた。未開封というのは、そのCDを聴いていないということだ。限定版が都会では手に入りにくいのをいいことに、聴きもしないCDを買って、人に高く売り、金をもうけるというのは、そのCDをほしくても買えなかった人達のことを考えると、最低の行為だ。みんな限定版のCDがほしくても、こういう人達から売ってもらわないように。島根県みたいな人口の少ない所だったら簡単に手に入るから。（島根・樹・♂・14歳）

●YOSHIKIが順調に回復してると聞いて、ホッとしてる。アルバムはそんなに急がないでいいよ!　やっぱり五人の笑顔をちゃんとした形で見たいから。みんな笑顔で年末ドームで会おうね!　また五人とファンで、X JAPANの伝説を作ろうぜ!
（東京・大魔人5人組・♂・19歳）

●4月26日のラルクのライブ行きました。すごくhydeのMCも面白くて、メンバーのみんなも最後の一曲まで元気いっぱいで良かったです…が、7月号の記事にもあったように、あんないい曲をぶち壊すようなことはヤメてください。Kenchanのギターが笑い声で聴こえんかったよ（3Fだったので）。ラルクファンとして残念です。今後はきちんと聴いてください。メンバーに対してとっても失礼だとは思わないの?　毎回毎回っっ!!（和歌山・隆弥剣・♀・21歳）

●この間Eins:Vierのライブを地元大阪まで見に行きました。全然東京のノリと違ってカルチャーショックになりました…。でもEinsのパワーによって後半自分なりに楽しめました。ありがとう。大阪でのライブの方が何となく楽しく思えたのは私だけ?
（千葉・YUKKO・♀・22歳）

●よく「○○のファンって年齢層低いじゃん」というような理由で、まるでそのアーティストのファンに混じるのは恥ずかしいみたいな考え方をしている人がいる。そういう人はライブに何を見に来てるの?　年齢層を調べに来てるんじゃないよ!　今の十代の子達のセンスが良くなってるんだと考えたほうがいいんじゃない?　私達二十代も十代のファンを快く引き受けます。でも、ライブ中のぬいぐるみ、ボンボン、うちわは×!! かなり迷惑ですから。（静岡・K.T・♀・23歳）

●うちの高校のほとんどの先生は、軽音をつぶそうとしている。話の分かる「今の時代の音楽の中心はROCKだ!」がログセの顧問のおじいちゃん先生にぜひ頑張ってほしい。（栃木・馨子・♀・15歳）

●このごろLUNA SEAのファンだという友達が増えてきてて、とてもうれしいんだけど、ここに問題が生じる。「SLAVEのくせにコスプレしないの?　黒服も着ないの?　え〜!?　信じられない」と言われた。SLAVEの皆さんに聞きたい。「SLAVEって何なの?!」。私は悔しくて情けなくて…。
（北海道・HARU・♀・16歳）

●私はビジュアル系のあるバンドが大好きなんだけど、すごく化粧が濃い人たちで、結構「キモチ悪い」とか言われてるんだけど、私としてはどんな格好をしてもいいって思います。ビジュアル系のバンドの人達って、なんかだんだん最近メイクしなくなってきて、すごくさみしいし悲しい。でも、メイクを落とすってことは「売れる」ってことに比例してる（この前LUNA SEAの真矢さんがノーメイクでお笑い番組に出てて、すごくショックだった）。メイクした方がキレイだし、カッコいいって思うのはおかしいことですか?　絶対メイクした方がいいのに…!
（京都・ちゃんぽくん・♀・13歳）

●SIAM SHADEの「TIME'S」を買いに行った時、店員が「TIME'S」をたくさん持ってて、「それ下さい」って言ったら、「あっ、売れないから処分しようと思ってたの」って言われてさ。すっげー頭きたから、「TIME'S」20枚全部と、ALBUM3枚買って来てやった。お陰で、うちのクラスにSIAMのファンが増えたよ。はっきり言ってあの時、「店員、お前いつか刺されるゾ」と思ったね。SIAM SHADEのファンをナメるなよ!
（長野・NATINのｱｸｾﾙ・♀・17歳）

●チャートのことで、J-ROCK magazineをいっぱい買う人がいるって読んだけど、それは仕方ないと思う。だってその人はアーティストが好きでたまらないからこそやってるんだし、やっぱり好きなバンドが1位になったらうれしいんだから…。でも10冊はねぇ…と思います。（埼玉・マサミのハナピー・♀・16歳）

J-ROCK Original Chart

top 10

Rank	Artist	Votes
1st	B'z	2091 votes
2nd	LUNA SEA	1941 votes
3rd	WANDS	1834 votes
4th	BUCK-TICK	1803 votes
5th	L'Arc~en~Ciel	1719 votes
6th	X JAPAN	1698 votes
7th	氷室京介	1667 votes
8th	GLAY	1663 votes
9th	T-BOLAN	1364 votes
10th	Eins:Vier	1151 votes

本誌6月号アンケートハガキによる読者投票と全国32局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」の月間総合順位を集計し、6月度のジェイロックマガジンオリジナルチャートをお届けする。次回締め切りは7月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートにセレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント!

Rank	Artist	Votes
11	黒夢	1146 votes
12	THE YELLOW MONKEY	925 votes
13	DEEN	907 votes
14	ZARD	861 votes
15	CRAZE	849 votes
16	筋肉少女帯	836 votes
17	SIAM SHADE	828 votes
18	大黒摩季	785 votes
19	DER ZIBET	683 votes
20	FEEL SO BAD	666 votes
21	布袋寅泰	651 votes
22	modern grey	617 votes
23	THE STREET BEATS	602 votes
24	ZYYG	536 votes
25	JUDY AND MARY	438 votes
26	Valentine D.C.	364 votes
27	MANISH	359 votes
28	BLANKEY JET CITY	335 votes
29	甲斐よしひろ	327 votes
30	BLOODY IMITATION SOCIETY	324 votes
31	奥田民生	313 votes
32	PAMELAH	300 votes
33	THE MAD CAPSULE MARKET'S	266 votes
34	D.T.R	257 votes
35	GARGOYLE	245 votes
36	栗林誠一郎	220 votes
37	TWINZER	219 votes
38	佐野元春	194 votes
39	media youth	193 votes
40	DEEP	181 votes
41	SPITZ	176 votes
42	Mr.Children	151 votes
43	PERSONZ	150 votes
44	JUN SKY WALKER(S)	147 votes
45	DOG FIGHT	143 votes
46	SUPER JUNKY MONKEY	140 votes
47	FIX	139 votes
48	近藤房之助	124 votes
49	斉藤和義	118 votes
50	CHARA	111 votes

J-ROCK

4月27日から5月26日の間に寄せられたアンケートハガキを基にチャートを作成した各パート別のランキング。お目当てのアーティストは入っているだろうか？

Guitarist 20

1st 松本孝弘 B'z
2nd INORAN LUNA SEA
3rd 柴崎浩 WANDS
4th SUGIZO LUNA SEA
5th HIDE X JAPAN

6	ken	[L'Arc~en~Ciel]
7	HISASHI	[GLAY]
8	今井寿	[BUCK-TICK]
9	五味孝氏	[T-BOLAN]
10	布袋寅泰	
11	PATA	[X JAPAN]
12	Yoshitsugu	[Eins:Vier]
13	星野英彦	[BUCK-TICK]
14	DAITA	[SIAM SHADE]
15	TAKURO	[GLAY]
16	菊地英昭	[THE YELLOW MONKEY]
17	瀧川一郎	[CRAZE]
18	田川伸治	[DEEN]
19	橘高文彦	[筋肉少女帯]
20	倉田冬樹	[FEEL SO BAD]

Vocalist 20

1st 稲葉浩志 B'z
2nd RYUICHI LUNA SEA
3rd hyde L'Arc~en~Ciel
4th 上杉昇 WANDS
5th TOSHI X JAPAN

6	櫻井敦司	[BUCK-TICK]
7	清春	[黒夢]
8	TERU	[GLAY]
9	森友嵐士	[T-BOLAN]
10	氷室京介	
11	Hirofumi	[Eins:Vier]
12	吉井和哉	[THE YELLOW MONKEY]
13	CHACK	[SIAM SHADE]
14	池森秀一	[DEEN]
15	大槻ケンヂ	[筋肉少女帯]
16	坂井泉水	[ZARD]
17	ISSAY	[DER ZIBET]
18	大黒摩季	
19	甲斐よしひろ	
20	ken-ichi	[Valentaine D.C.]

Bassist 20

1st J LUNA SEA
2nd 明石昌夫 AMG
3rd tetsu L'Arc~en~Ciel
4th 人時 黒夢
5th JIRO GLAY

6	HEATH	[X JAPAN]
7	上野博文	[T-BOLAN]
7	樋口豊	[BUCK-TICK]
9	Lüna	[Eins:Vier]
10	恩田快人	[JUDY AND MARY]
11	沢田大司	[D.T.R]
12	廣瀬洋一	[THE YELLOW MONKEY]
12	NATIN	[SIAM SHADE]
14	内田雄一郎	[筋肉少女帯]
14	飯田成一	[CRAZE]
16	HAL	[DER ZIBET]
17	大橋雅人	[FEEL SO BAD]
18	TOSHI	[GARGOYLE]
18	栗林誠一郎	
18	TAKESHI"¥"UEDA	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]

Drummer 20

1st 真矢 LUNA SEA
2nd YOSHIKI X JAPAN
3rd 青木和義 T-BOLAN
4th sakura L'Arc~en~Ciel
5th ヤガミトール BUCK-TICK

6	宇津本直紀	[DEEN]
7	菊地英二	[THE YELLOW MONKEY]
7	JUNJI	[SIAM SHADE]
9	菊地哲	[CRAZE]
10	Atsuhito	[Eins:Vier]
11	太田明	[筋肉少女帯]
12	MAYUMI	[DER ZIBET]
12	五十嵐公太	[JUDY AND MARY]
14	山口"PON"昌人	[FEEL SO BAD]
14	樋口宗孝	[SLY]
16	KATSUJI	[GARGOYLE]
17	中村達也	[BLANKEY JET CITY]
18	藤本健一	[ZYYG]
18	MOTOKATSU	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]
18	藤田勉	[PERSONZ]

Another Player 5

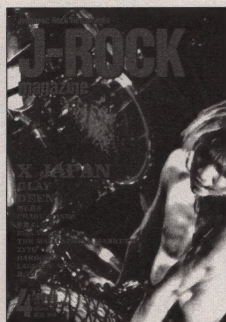
1st 木村真也 on KEYBOARDS WANDS
2nd 坂本龍一 on KEYBOARDS
3rd 山根公路 on KEYBOARDS DEEN
4th 妹尾隆一郎 on BLUES HARP
5th 西本麻里 on KEYBOARDS MANISH

1995.11月号~

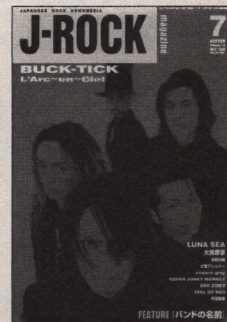
筋肉少女帯 /SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW/ nuvo:gu / TOMOVSKY / J-ROCK GUITARIST特集

L'Arc~en~Ciel / 大槻ケンヂ / 忌野清志郎 / Eins:Vier / BIG LIFE / ハイパーマニア / BLOODY IMITATION SOCIETY / THE HARPER ST. BAND / VISUAL WORK SHOCK

1996.1月号~

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE & ASKA / Chap Chimes / PIZZICATO FIVE / FIX / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE / BEST ALBUM特集

X JAPAN / GLAY / DEEN / 明石昌夫 / CHAGE & ASKA / 甲斐よしひろ / Eins:Vier / THE MAD CAPSULE MARKET'S / ZYYG / GARGOYLE / LAUGHIN' NOSE / 真心ブラザーズ / ALBUM CREDIT特集

GLAY / X JAPAN / 筋肉少女帯 / TWINZER / TOMOVSKY / 尾崎豊 / 甲斐よしひろ / 佐野元春 / 音楽雑誌用語マニュアル

LUNA SEA / B'z / 黒夢 / JUDY AND MARY / 布袋寅泰 / SIAM SHADE / Eins:Vier / 筋肉少女帯 / 斉藤和義 / L'Arc~en~Ciel / J-ROCKの掟

BUCK-TICK / L'Arc~en~Ciel / 大黒摩季 / LUNA SEA / 斉藤和義 / 幻覚アレルギー / modern grey / SUPER JUNKY MONKEY / DER ZIBET / FEEL SO BAD / 明石昌夫 / 布袋寅泰 / バンドの名前

上記以外は売り切れです。詳しいお求め方法は下記をご覧ください。

定期購読&バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項(郵便番号・住所・氏名・電話番号)を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。半年間(6冊)、2700円(税・送料込み)でお届けします。

■「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧の上、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。お届けするまで約2~3週間かかります。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて切手または小為替で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、95年11~96年5月号は1冊300円、96年6月号以降は1冊400円です。(売り切れもあるのでご注意下さい)

◇送料は、1冊160円、2冊220円、3~5冊600円、6~12冊850円です。

◇希望する号数(必ず何年何月号かを記入)・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇書店でも注文によりお求めになれます。

ロック音楽ROOTS・J-ROCK ARTIST BEST 50

■TV音楽番組「ロック音楽ROOTS」(J-ROCK magazine提供、全国31局ネット)では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。官製ハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「ロック音楽ROOTS」係宛までお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」は、全国32局ネットで放映中の音楽番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」に協力しています。この番組は、新譜の売り上げチャートではなく、皆さんの投票によって決まるアーティストの人気ランキングを、毎回発表していく番組です。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「J-ROCK ARTIST BEST 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

大 募 集

■J-ROCK magazineの「INDIES JUNK BOMB」コーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーズのバンドやソロアーティストを紹介しています。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

■J-ROCK magazineでは、新企画『PLAYERS FILE』を構想中。この企画は毎月1アーティスト(バンドの場合はその中の一人)に注目し、編集部や読者でそのアーティストを追求しようというものです。そこで今月もアーティストに対する読者の意見を大募集! 「この人こそは…」と自分が思うアーティストの作詞や作曲、プレイやステージングなどに対しての具体的な意見を送って下さい! 「○○という曲のこの音、この演奏がスキ」「○○という曲を聴いて、考えが変わった」という素直な意見から、「○○という曲のあの部分は一体どうやって弾いているのか。歌っているのか」などの疑問までアーティストに対するものなら何でもOK。投稿の際は、ペンネームを希望する人も、必ず住所・氏名・年齢を書いて下さい。

■「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「ネタ」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、VOICEというコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どのようなスタイルでもOK。このページ下のあて先まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券(3000円分)を差し上げます。

【投稿規定】

◇文字数:1600字程度まで。 ◇原稿用紙での投稿を基本としますが、フロッピーディスク(MS-DOSファイル)、FAXでも構いません。 ◇ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

■視覚的表現から音楽へのこだわりを伝えたいというカメラマン、イラストレーター、芸術家(平面・立体)の持ち込み歓迎します。事前に電話連絡の上、編集部まで作品をご持参ください。

次 号 予 告

J-ROCK magazine 96年9月号は、7月27日発売。

登場予定アーティストは、B'z/黒夢/ザ・ハイロウズ/斉藤和義/ZARD/Eins:Vier/FAME/ 他。

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部 〒542 大阪市中央区西心斎橋 2-17-8 MACビル8F TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1761

MODS HOUSE

KBS京都

ロックの今を見たい!

それなら、

この番組は、視聴者からのハガキ・街頭アンケート・J-ROCK magazineの読者人気アンケートを総合的に集計し、毎週番組独自のJ-ROCK ARTISTのベスト50をいち早く紹介すると共に、ARTISTの最近の活動状況をお知らせする視聴者と一体型の音楽情報番組です。4月から番組名が[J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50]から[J-ROCK ARTIST BEST 50]に変わりました。

J-ROCK ARTIST BEST 50

ロックの礎(いしずえ)を知りたい!

だったら、

すべてのROCK音楽の原点である「ブルーズ」。数年前から関西を中心にブルーズのムーブメントが全国に広がってきています。この番組は、「ブルーズ」から始まりすべての音楽へ広がっていく「音楽ルーツ」を深く探り音楽の素晴らしさ・楽しさを全国へ発信する番組です。

ロック音楽 ROOTS

J-ROCK ARTIST BEST 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30~	テレビ新潟	金	26:25~
岐阜放送	土	23:30~	テレビ愛媛	木	24:50~
びわ湖放送	金	22:25~	長崎文化放送	金	24:25~
三重テレビ	金	17:15~	熊本朝日放送	日	24:00~
奈良テレビ	土	23:30~	仙台放送	火	24:10~
サンテレビジョン	木	08:00~	テレビ静岡	金	25:05~
テレビ和歌山	金	17:00~	福島テレビ	木	24:50~
岩手めんこいテレビ	水	25:00~	北陸朝日放送	日	24:25~
秋田朝日放送	日	23:55~	山口放送	土	25:25~
群馬テレビ	木	23:45~	日本海テレビ	木	24:45~
北日本放送	日	24:45~	沖縄テレビ	木	25:45~
テレビ埼玉	金	23:30~	高知放送	水	24:45~
千葉テレビ	金	23:30~	テレビ神奈川	日	23:30~
長野朝日放送	日	23:55~	青森放送	金	25:15~
鹿児島読売テレビ	土	25:35~	大分朝日放送	土	25:55~
広島テレビ	水	25:15~	札幌テレビ	火	25:40~

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00~	長野朝日放送	日	24:25~
岐阜放送	土	24:00~	テレビ新潟	月	25:35~
びわ湖放送	金	24:30~	テレビ愛媛	月	25:20~
三重テレビ	火	24:35~	長崎文化放送	土	25:30~
奈良テレビ	土	24:00~	熊本朝日放送	土	24:30~
サンテレビジョン	金	24:30~	青森テレビ	日	24:35~
テレビ和歌山	土	24:10~	テレビユー山形	日	25:15~
岩手めんこいテレビ	木	25:00~	テレビ山梨	火	24:35~
秋田朝日放送	土	24:40~	テレビ高知	土	25:26~
群馬テレビ	土	24:00~	大分放送	月	24:30~
北日本放送	金	25:15~	琉球放送	日	24:50~
テレビ埼玉	金	24:00~	日本海テレビ	金	25:15~
千葉テレビ	日	23:30~	南日本放送	月	25:00~
静岡第一テレビ	月	25:00~	札幌テレビ	日	25:15~
テレビ金沢	日	25:15~	福井放送	火	25:15~
山口放送	土	25:55~			